

I S ~一人の転生者、  
報われる日は来るの  
か？

姫百合 柊

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

出来が悪い。

それだけの理由で家族には疎まれ、少年の頑張りを認めてくれる人は誰ひとりも居なかった。

転生しIS学園へ来た少年。だがそこでも少年を待っていたのは厳しいものだった。彼の努力は認められる日はくるのか？

初投稿。処女作なのでどうか温かい目で見てやってください。

感想大歓迎ですが作者のメンタルはところてんです。

よろしくお願いします。

※ご指摘を受け、物語上で齟齬が発生すると思い、閑話・設定を消去致しました。ご了承ください。

# 目次

プロローグ | 1

第一話・「山田先生と二人で……」

5

第二話・回想、IS学園入学 | 10

第三話・回想、IS搭乗不可 | 25

第四話・回想、セシリア戦 | 36

第五話・IS訓練 | 58

閑話・蠢く | 74

第六話・休日、傷 | 80

第七話・相談、激突 | 93

閑話・保健室の会話と闇の中の少女の語

り | 122

閑話・男同士の対決、VS織斑一夏

131

独白・少年と少女、子供達 | 136

第八話・突然の操縦者 | 140

第九話・紹介とお昼どき | 145

第十話・タッグと不穏な音 | 164

閑話・if story 【俯瞰視点のパ

ララックス】 | 175

第十一話・ウオーター・リリー社と同居人

そしてメイドさん | 180

第十二話・タッグマッチ戦、一回戦

200

1056 隊風見鶏少尉様、リクエスト閑

話・喫茶店〔クローバー〕	213	第二十話・買い物。——胎動。	345
竜羽さんリクエエストコラボ閑話・I S 竜		第二十一話・臨海学校	354
討伐部隊	229	第二十二話・旅館にて、束の間の	
第十三話・タッグマッチ戦一回戦②	246	第二十三話・邂逅し、再会する二人	370
第十四話・戦いの後、2回戦目	260	三周年記念閑話・冬とお鍋	379
第十五話 乱入機（らんにようしや）	270	第二十四話・二人の距離、未開花の蕾	387
第十六話 V T S（ヴァルキリートレー		394	
システム）	278	特別閑話・温泉旅館と月	402
第十七話・暗闇から光へ	293	第二十五話・ミッシヨンブリーフィング	
第十八話・気持ちの行方	321		
第十九話・レゾナンス	334	第二十六話・理解の涙	418
			413



# プロローグ

少年が居たのはただ真つ白い空間だった。

「……………うん？……………何処だ、ここ？」

なんだここ？俺寝たはずだよな？……………えーじゃあ夢？ここ夢？えっらいリアルな夢だな。

少年が私案に暮れている最中、ふと気配を感じその方へ向くと人が立っていた。

「…ん？…なんだじいさんか」

目の前に居たのはいかにも物腰の柔らかかそうなおじいさんだった。

「…中身の無い反応じゃのお」

「そんなこと言われましてもねえ…」

と言つて肩をすくめた。

「……………」

「……………」

二人ともしばし無言。その場に静寂だけが流れた。

最初に口を開いたのはおじいさんの方だった。

「お主の表情が変わらないのは何か訳があるのかの？」

少年がピクリと反応した。

おじいさんが少年に聞いたのはそんなことだった。普通ならなぜそんなことを？と思うかもしれないがこの少年は今の今まで全くと言っていいほどに無表情なのだ。

少年はしばらく何かを考えていたがやがて、ポツポツと話始めた。

「……俺は今まで文字どおり歯を食い縛って生きてきたんだ」

「俺は何をするにしても要領が悪くってさ……物を覚えるのだから人の何十倍も頑張らなきゃいけないかったんだ」

「子供の頃からだだったからその頃から必死だったよ。初めは親も褒めてくれたよ……頑張ってた偉いねって、でも初めだけだった。中学になったときは何でこんなことができないのって叱られたよ。出来てたと思ったんだけどなあ……」

「中学後半になってからは何も言われなくなつた。顔を合わせただけで嫌な顔をされるようになったな。親にそんなことされるとは思ってたからシヨックだったよ」

少年は自嘲気味に語り、おじいさんはただ黙ってそれを聞いていた。

「その頃からかな、俺が笑ったり出来なくなつてることに気がついたのは。楽しいことは無かつたよ、辛かつただけだった、でもやるしかなかった。だから……」

少年が喋っている最中におじいさんが『もうよい』と言って少年の言葉を止めた。



「……その歳で随分と無理をさせたのお」

と言つておじいさんが髪を撫でてきた。

「……じいさん、俺はもう子供じゃないんだが」

「ワシから見たらまだまだ若僧じゃわ」

「まあ、神サマから見たらそれでしようね」

「む、なんじゃ氣付いておつたのか？」

「ええ。だつて完全に真つ白い空間ですよ？そんなもの現代にはありませんし……まあ俗に言うテンプレつてやつですよ」

「なるほどのお、最近は全く動じない輩が多くてつまらんかったのはそういう訳じやつたのか」

おじいさんはふむふむと頷いていた。

「あ、と言うことは俺は死んだんですか？」

「そういうことになるのお。ちなみに死因は過労と心臓発作発作じゃ」

「ええー……」

少年とおじいさんがそんな話をしていると少年の体が透け始めていた。

「!？」

さすがに驚く少年。意味が分からないと思っておじいさんの方を向く。するとおじい

さんはその意図が伝わったのか説明してくれた。

「それはもうすぐ違う世界へ転生すると言う合図みたいなものじゃ」

「え？転生ですか？まだ何処に行くとか決めてないんですが？普通は貴方が決めるのではっ。」

おじいさんは俺の問いに首を横に振って答えた。

「ワシはただの案内役みたいなものなので決めるのはワシよりもさらに格上の神なのじゃ。大丈夫、心配せんでいいぞ。お主に合った世界に連れて行ってもらえるからの」

俺はなるほどと頷く。

俺の体がほとんど消えかかっていたときおじいさんがあつ、と思ひ出したかのように言ってきた。

「お主にワシからのささやかな贈り物がある。一つは行ってみたらわかるからの。二つ目はすぐではないが必ず役立つはずじゃ」

そう言ったあとおじいさんは『達者での』と言った。

それに俺は笑顔が分からない笑みを浮かべ、消えていった。

少年が消えた後、誰に言うまでもなく一人眩いた。

「あの少年ならきつと大丈夫じゃろう。頑張るのじゃ、挫けてはいかんぞ」

そう言って彼は何処かへ消えた。

## 第一話・「山田先生と二人で……」

インフィニット・ストラトス、通称：I.S。無限の成層圏などと呼ばれている兵器だ。本来は宇宙空間を想定して作られた代物だがI.Sは特殊なエネルギーバリアで操縦者の全身を覆う。なので宇宙空間でも大丈夫だという訳だ。他にも生命維持など様々な補助があり、操縦者の体調を常時ベストコンディションにしてくれるという。

I.Sって便利だなあってしみじみと思うわ。うんうん。

「あのーな、長崎くーん……き、聞いていますかー？」

と少々おどおどとした様子で訪ねてくる人物が一人。

「……はっ！ああ、すいません山田先生。少し考えごとをしていて。ではでは続きお願いします。」

この先生。本名、山田真耶。俺達のクラスの副担なのだがとても親身になって授業を教えてくれる。分からないところがあつて、聞きに行ったりしたときもとても分かりやすく解説してくれる。

ほんとなんでこの人先生なんだろうなあ。先生じゃなかったらもう、すぐ惚れてたし、告白してめっちゃあたふたして振られたのになあ……。え？振られること前提!?

……まあいい。

でもなーこの人可愛いんだよなあ。本当に年上？って疑問がいつつも湧くわ。

とまた考えごと（ボーツとしてるだけ）をしていたら、山田先生が若干涙目で聞いてきた。

「な、長崎君、あ、あのー、な、長崎くーん？」

「…あつ、ああ本当にすいませんー！山田先生。」

内心めちやくちや申し訳ない気持ちで一杯だが、顔には出さない。

「こ、今度はちやんと聞いて下さいね？お、お願いですよ？」

涙目＋若干俯きながら言う山田先生。………あ、これダメだわ。顔に出さないの無理。俺の良心が潰れそうだ。今すぐ土下座したら許してくれるだろうか？とりあえず了解の旨を伝える。

「わ、わかりましたからそんな涙目にならんで下さい。…んんっ！続きをお願いします。」

山田先生は仕切り直すように咳払いをしたあと説明に戻った。俺は今度こそその説明を聞く。

「あ、は、はい！ではですね、コホン。ISにはもうひとつ大事なことがあります。それはISには私たち人と同じように意識があるという………」

そんな感じに山田先生のありがたい補習は夕暮れ時まで続いた。

「しかし、長崎君はすごいですねえ」

山田先生の補習を終え、帰り支度をしていると不意に山田先生が呟いた。

「えっと、何がですか？自分は何もすごい事はしていませんが？」

「補習ですよ、補習。入学してからほぼ毎日受けているじゃないですか」

「ああ、そのことですか？自分は物覚え悪いんで人よりももつとやらないと覚えられないですよ。」

そう言つて司は苦笑いを浮かべた。その表情を山田先生は何も言わずに見つめていた。

互いに沈黙。その空気に耐えきれずに司が口を開く。

「えっと、山田先生こそ迷惑じゃないですか？こんなに毎日放課後付き合ってもらつたりして」

司は何気に気になっていたことを質問した。司はIS学園に入学してからほぼ毎日、山田先生に授業の分からない所などを聞きに行つたりしているのからだ。

「え？迷惑なんて思つていませんよ？長崎君の頑張りを見て凄いなと思ひますし、なにより教えががありますから私も楽しいですよ？」

即答。何の迷いなく山田先生はそう言った。

そう言われて司は何も言えなかった。何よりもただ嬉しかったのだ。

司の前に居た世界では自分に教えることを楽しいなどと言ってくれた人は一人も居なかった。日が経つにつれ、面倒臭いという表情がでていたのだ。まあ毎日だったら誰でもそうなるだろう。だが、この山田先生だけは違った。自分に教えることを楽しいと言ってくれたのだ。

「？ 長崎君？ どうかしりましたか？」

突然固まってしまった司を見て、山田先生が尋ねる。

「……っ、ああ、すいません山田先生、またボーツとしていました。では今日もありがとうございます。またお願いします」

「はい、また分からないところがあつたらいつでも聞きに来てくださいね」

そう山田先生に言つて司は寮に戻る。

余談だが、この帰り際、司がとても嬉しそうにしていたのは言うまでもない。司とすれ違った女子数人はのちにこう語る。

「なんか……凄いいのを見たなつて」

「普段はあんまり笑つたりしない長崎君が笑つてた！ 良い！ 良く良い！！」

「ギャップ萌え？つてやつだよね〜」

「その日はとても良く眠れました」

「なんか、その顔見ただけで疲れが吹き飛んだ気がしました」

以外に本人の知らない所で話題になっていたりしたのである。

## 第二話・回想、IS学園入学

山田先生との補習を終え、自室に戻ってきた司はそのままベットに沈んだ。夕食までにはまだ時間があり、仮眠でも取ろうと目を瞑る。

しかし、中々眠れない。すぐに眠れると思ったのだが…思ったよりも先ほどのことで気持ちが高まったりしているのだろうか？

しばらく目を瞑っていたら、つい数ヶ月前のドタバタしていた頃を思い出した。



『世界初の男性IS操縦者現る』と新聞やらテレビやらで連日伝えられているニュースだ。

初めはマジか…と驚きはしたが別に自分には関係ないことなのでまあいいやと思っていた。

しかし、そこからが大変だった。世界中では男が乗れたんなら他の奴も乗れんじやねーの？と言うことで一斉に男子にISの試験が行われた。

試験と言ってもISにただ触るだけなのですぐに終わる。結果は案の定、他の男子に



には無理だった。——俺を除いて。

俺はI Sに触れたくなかった。なぜなら予感と言うか確信めいたものがあつたからだ。それは……神様の言つてたご褒美つてこれのことじゃね？と。一つ目は確かに嬉しかった。固まっていた顔が戻つたのだから。あれ？じゃあもうひとつつてなんだ？と思つていたのである。

なのでI Sに触る時も隠れてやり過ぎしたりしていたのだが、関係者の奴が目敏く俺を発見しやがつたのである。

そこからはいつらと俺の鬼ごっこだった。俺が逃げ、そいつらが追っかけてくる。なんとか1、2カ月逃げきつていた俺を誰か褒めてくれ。

ただ家にまで来た時はさすがに逃げようが無かつたのでおとなしくした。それでI Sに触り、動かせてしまいめでたく、はい入学である。俺の受験勉強の日々を返してくれとそのときばかりは本気で思った。

時期的に変な時に入学なのでぼつちかなあと気分鬱気味になりながら指定された時間にI S学園に来て見ると俺の他にもう二人、人がいたのである。びつくりだ。

簡潔に織斑千冬という先生に紹介があるまで待つてると言われた。うん、待つてるのは良いんだ。ただ……スゲー気まずい。無言。ただただ無言。銀髪の眼帯着ける人なんて腕組んで目瞑つてらっしやるし……なんか隣にいる金髪の男子に限ってはちらち

から見られてるし。なに？顔になんかついてる？

「ええとですね、今日は転校生を紹介します！しかも三名です！」

と中から：確か山田真耶と言う先生の前振りか聞こえた。……やつとこの気まずいという名の重力空間から抜け出せる。

司がそんな風に思っていると中の女子の声が大音量で聴こえてきた。

「「えええええっ!?!」」

「うおっ!?!」

いきなりのことだったので思わずビククリしてしまった司。他の二人は特に反応はなかった。

え？なんで今ので驚かないの？こいつら、心臓鉄板でできてんの？うおおお!?!めっちゃ恥ずかしい!!穴があつたら入りたい、入りたいよ母さん!!

全力でポーカーフェイスを作り、顔には一切出さないが内心では悶えていたのだ。た。

金髪の人が教室に入ったので俺もそれに続く。俺の後に銀髪の人が続いた。

先程まで騒がしかったクラスが今は静かだ。そりやそうだ。この教室にはさつき先生が言っていた転校生がいるんだから。それも男子が二人も。

クラスメイトから浴びる視線、視線、視線！先生、体に穴が空きそうです………あー  
なんか、お腹痛くなってきたな。保健室行っちゃだめかな？

伝わるはずはないがそんなことを思いながら織斑先生を見た。すると二割増しの鋭い眼光が返ってきた。………マジっすか、織斑先生。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不馴れなことが多いかと思いますが、みなさんよろしく願います」

………あれ？男子にしては声が高いような……まあいい考えるのは後にしよう。今はこっちだ、こっち。

といつの間にか金髪の男子の自己紹介が終わった。

しかし、緊張するな……頼む俺の口よ！しっかり動いてくれっ！

「あ、長崎 司と言います。生まれも育ちも純日本人です。この環境にとっても戸惑っています。みなさんと仲良くできたら幸いです。どうぞよろしく願います」

ふう、良かった嘯まずに言えたぞ。

「お、男……？」

「はい？」

誰かが漏らした呟きにデュノアが反応する。

「きゅ………」

「え？」

あ、これアカン。そう思い両手で耳を塞ぐ。

「きやあああつ!?!」

クラスに響き渡る女子の歓喜の大声援。

「二人！男子が二人」

「しかもうちのクラスに！」

「神様からのご褒美かしら！」

キャーキャーと騒ぐ女子一同。織斑先生は鬱陶しそうにしていて、山田先生はあたふたしている。いや、先生なんだから止めてくれよ。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介は終わってませんから〜！」

と山田先生が言い、なんとか生徒達を抑える。

そうまだ一人だけ自己紹介をしていないやつがいる。それが隣の銀髪の眼帯娘だ。

教室に入つて来てから一言も喋っていない。気まずい？気まずいのかしら？あーその気持ちわかるよ。自分の前の奴が何かしら面白いこと言ったりしてそこで笑いが起こったりすると、自分は何も面白いことできないから場がしらけるんだよな。本当なんなのあれ？

「……はあ、挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

司が過去の体験を思い出していると、ため息混じりに織斑先生が紹介を促す。それにラウラと呼ばれた少女はキツチリと返事をする。

「ここでは織斑先生だ。もう教官ではないし、お前はここの生徒だ」

「了解しました」

そう言つてその少女はいかにも軍人らしい姿勢で自己紹介を始めた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

ラウラ・ボーデヴィツヒと言つた少女が発したのはその一言だけだった。

「あ……あの、い、以上……ですか？」

場の空気に耐えきれなくなった山田先生が口を開く。

「以上だ」

山田先生の質問にバツサリと切つて返すボーデヴィツヒ。いや、もうちよつと喋ろよ。山田先生泣きそうじゃないか。ハイハイ、言葉のキャッチボール。そう心の中で手を叩く司。

ふとボーデヴィツヒが何かを見つけ、そこにツカツカと向かい、目的の所で止まった。すると手を挙げ、その手を振り下ろした。

バシンッ！

教室に良い音が響いた。案の定クラスメイトがポカンとしている。俺だって、隣のデユノアだってしている。

殴られたもとい平手打ちされたのは世界で初めて男でISを動かした、織斑一夏だった。

「私は認めない。お前があの人弟であるなど、認めるものか」

一夏の存在自体を否定するボーデヴィツヒ。いきなりのことについていけなかった一夏だったが思考が追い付き言葉を出す。

「いきなり何しやがる！」

「ふん……」

一夏は反論はしたがボーデヴィツヒはまったく意に介した様子はなく、手近にあった椅子に座り目を瞑り、他を寄せ付けない雰囲気を出す。

「あー……ではHRを終わる。この後はすぐにISの訓練だ。第二グラウンドに来るように、解散！」

織斑先生がその空気を取っ払うように次の行動を促す。

これが司がIS学園に来るまでの、来てからの経緯である。

◆◆◆

「一夏あああ!!」

馬鹿デカイ声量で目が覚める司。反射的に時計を確認する。

「時刻は……18時45分か。食堂はまだ空いてないな」

時間を確認し、騒いでいる廊下へ顔を出す。当然と言えば当然なのだが寮にいる殆どの生徒が何事かと顔を出している。

「一夏! どういうことだ!? 何故私と訓練をしないのだ!」

「一夏あ! どういうことよ!? 私と訓練しなさいよ!」

……え? なに? 修羅場? 三角関係? え? どゆこと?

端的に言つて織斑が……えーつと、名前……なまえ。……たしか、モップと鈴(すず)みたいな名前だった気がする。あ……ダメだ思い出せねえ。

司が彼女らの名前について考えていると一夏が司に気付き、箒達を通り抜け早足で近づいてきた。

「つ、司! ち、ちよつと助けてくれ!」

とほぼ同時に司の背後に回る一夏。寮生徒の視線が一夏と司に向けられる。

「見て見て、織斑君だ」

「司君もいる」

「あ! 司君の部屋そこだったんだ! 良いこと知っちゃったなく♪」

……oh、折角今まで誰にも気付かれなかったのに。何か言つてやろうと思い、血涙

を流す勢いで織斑を見た。がすぐにそんな気は失せた。だって——顔真つ青なんだから！まあ一人は真剣、一人は腕部のISを部分展開して迫って来ているからな。誰だって真つ青になるわな。俺だってなると思う。

鬼みたいに怒っている女子二人が近づいて来る。

「一夏！理由を言え！理由を!!」

「教えなさいよ!!」

織斑に言っているはずなんだが、織斑は俺の背後にいる訳で、なんでか俺が言われているみたいになっている。なにこれ？なんで俺、こんな目に合ってるの!?マジで!

「……織斑、説明してくれ。全くわからん」

「あ、ああ。シャルは知ってるよな?」

「ああ、転校生のデユノアだろ?知ってるがデユノアがどうかしたのか?」

つか織斑さんもう転校生のことを名前で呼んでるんですか?ハンパないっす。……あ、そう言えば俺も司って呼ばれてたわ。

「それが千冬姉に面倒見てやれって頼まれたんだよ。それで施設とか案内したら、箒と鈴が来てさっきの状況。シャルは帰らせた後だったけどさ」

なるほど全くわからん。つか俺は何も頼まれてないんだけど……織斑先生エ……

「じゃあ、その二人が言ってた訓練ってやつは?」



「それは俺が三人に教えてもらってることだよ。最初は箒に教えてもらってただけだよ、いつの間にかセシリアや鈴まで教えてくれることになったんだ」

ほー、そりやまたすごいな。専用機持ち二人のレクチャーなんてそうそう受られないぞ。貴重な体験だ、うんうん。

「その三人には、デュノアを案内するから今日訓練できないとか言ったのか?」

「……………あ」

「……………おい、まさか言っていないとか言わないでくれよ」

とそんなことを口にしたが織斑の顔を見て、言っていないんだろうなあと思う司であった。

「……………めん司。言ってなかった」

内心やっぱりと思うが声には出さない。

「それは俺に言うんじゃないやなく三人に言ってくれ……………」

と小さくぼやく司。

そろそろ痺れを切らす頃だろうなと思い、二人の方へ顔を向ける。するとなんでか物凄くむすつとしていているというか明らかに私、不機嫌ですよ?というのが顔にでている。

……………なんで?

「と言う訳らしいんだが?お二人さん」

司の言葉に答えたのは箒だった。

「私は一夏と話をしているのだ。出来損ないは口を出さないでくれ」

この一言で司は固まった。シヨックという訳ではない、いや少しシヨックだがそれよりも目の前の女の子がそんな出来損ないなどと言うような雰囲気的女子に見えなかつたため、驚いてしまったのだ。

「そうよ、私は一夏と話してんの。あんたは引つ込んでて」

箒に続いて鈴も司を邪魔だと言う。

つか、お前らさっきの説明ガン無視ですかそうですか。俺のすり減った精神を返してくれよ。……………嫉妬？え、嫉妬なの？一夏が構ってくれないからつての嫉妬か!?

「箒！鈴！お前らちよつと言い……………」

「いい、止せ織斑」

織斑の言葉を途中で止める。

「でも、司の……」

「俺のために怒ろうとしてくれたのは嬉しいよ。だけと篠ノ之や嵐の言った通り出来損ないには変わりないさ。それは戦ったお前もわかるだろ？それに多分オルコットだつてそう思ってるだろ」

確か、こいつらの苗字つて篠ノ之と嵐だったはず。と今更ながらに思い出す司。

だつ、誰も名前について突っ込んで来ないから合ってるよな?と内心はドキドキしていた。

「……………」

悔しそうな顔をしている一夏を見て司は、やっぱりこいつ良い奴だなと思う。

少しの間沈黙が流れたが、司が口を開く。

「篠ノ之、お前刑法、銃砲刀剣類所持等取締法つまり銃刀法違反って知ってるか?」

「な、なんだ突然」

いきなり法だの取り締まりだのと口に出されて少々たじろぐ筈。

「いいから、知ってる?」

「あ、ああ。知っているとも」

「そうか」

短く返事をして、次は鈴の方へ向く。

「嵐、知ってるか?」

「なによ」

「I Sの展開って校内じゃ禁止されてるんだぞ?」

「だからなんなのよ!」

少しイラついているのか語尾が荒い。

俺は、二人の後ろにいる人物に目でどうぞと促す。

「ほう、嵐……お前は学園で禁止されていることをだからで片付けるのか。そうかそうか」

織斑先生降臨!!とまあそんな風にかっこよく登場した先生。二人は肩をビクンと震わせた、特に嵐の方は。そして二人揃って恐る恐ると言った体で後ろを振り向く。

織斑先生が寮にやって来て黄色い声援が起こらなかつたのは寮の皆が空気を呼んでくれたからだろう。ありがとう皆。

「ち、千冬ね……いて」

「織斑先生だ」

千冬姉と呼ぼうとした一夏をポスツと叩く織斑先生。

「さて、嵐。一回目とは言えIS武装展開、本来なら嚴重注意なのだが…反省文提出で見逃してやる。職員室に来るように」

「……………はい」

鈴は力なく項垂れた。

「それから篠ノ之」

「は、はい!?!」

「お前も反省文提出だ。嵐と職員室に来い」

「……………はい」

「ふむ、不満そうな顔だな？良いだろう、答えてやる。長崎の言っていた9条、要は銃刀法だな。お前はそれに違反していると言っているんだ。家が道場だからとか剣道をやっているからなどで持ち歩かれては堪らん。今のお前がそれだ」

とそこまで言いい拍置いてから確認するように、わかつたな？と口にした。それに箒はただ黙って頷いた。

そして件の二人が職員室に行った後、織斑先生が去り際に『勤勉だな』とただ一言呟いてその場を後にしていった。

一夏には聴こえていなかったようだが司には聞こえた。

褒められる。褒められたら嬉しいが、司は褒められたことがまず無いと言つてもいい。せめてあるとしたら山田先生にくらいだが。それが一日に二回も、司はこの上なく不思議で嬉しい気分だった。

◆◆◆

その後、司は食堂で夕飯を食べていたが、とても幸せそうな表情だったという。

余談だが、この時の表情で話題が一気に広まったのは言うまでもない。

「司があんな顔できるなんて、びっくりした」

「夜は少食って決めてたけど」飯2杯食べちゃいました」

「なんか、もう……カロリーなんてどうでもよくなってきた」

「ナガキの顔見てたらーこっちまで幸せな気持ちになったよ」

女子間では密かに写真の売買が行われていたり、したとかしなかつたとか。

## 第三話・回想、I S 搭乗不可

朝4時30分。薄暗くまだ誰も寝ている時間だが一人、起きている人物がいる。

「…はあっ……………はあっ、はあっ……………」

その人物が動くのと同じくして金属が少し擦れ合っている音と地面を踏むたびにガシヤンといかにも重そうな音が聴こえてくる。

「…はあ、はあ……………とう、着。やっぱり、キツいな……………」

着いたのはI S 格納庫。纏っていた訓練機件専用機の打鉄を解除し所定の位置に戻す。

「ふうー…いつもありがとな打鉄」

そう一言掛け、今来た道を今度は生身で戻る。戻っている最中ふと思ったことを呟く。

「しかし、よくまあ打鉄やらEOSやら、貸してくれたよなあ…まあ、打鉄は俺の専用機だから仕方ないとしてもまさかEOSまでとは…さすがにあれは驚いたな」

EOS（イオス）、正式名称（エクステンデッド・オペレーション・シーカー）国連製

造のワードスーツ。何故俺がそんな物のことを知っているのかと言うと、山田先生が教えてくれたのだ。

補習を受けてる時に打鉄のことやリヴァイブなどのことを聞いていたらそう言えば、  
と言いつつ説明してくれた。なんか以外に熱心に説明してくれたが、可愛かった。すこ  
く。

ちなみにEOS、打鉄は俺がそれを纏って走っている。動力補佐無しで。

いやー重いなんのって。打鉄はなんとかいけるが、EOSは無理だった。歩くの  
だけで精一杯。外したら歩いたけなのに筋肉ぶるぶるいつてるんだぜ？しかもその後  
授業だから大変だった。織斑先生に寝るなって叩かれたよ。

そんなことを思っていると目の前に寮が見えてきた。残り少しなので全力で走る。

走り終わり、しばらく息を整えてから自室に戻る。

こんな早朝に出たり入ったりを繰り返しては普通はルームメイトに迷惑なのだが幸  
い、司は一人部屋なので問題はない。

時刻は6時。まだまだ余裕なのでゆっくりと支度をやる。支度をしている最中、不意  
に昨日の言葉が頭をよぎった。

「…出来損ない、か。そう言えば、久しぶりに言われたな」

出来損ない、この世界に来る前は散々言われた言葉だった。しかし、こつちの世界で



は前ほどではないが言われなくなった。

父親は俺のことを嫌っていたが母親は俺の頑張りを見守っていてくれたし、学校では少なかったが応援してくれた奴もいた。

しかし今度は前世の記憶が頭をよぎった。

『長崎、お前は どうしてこんな問題もわからないんだ？』

『長崎君ってさー、いっつも勉強してるよね。ガリ勉っていうかなんか気持ち悪くない？』

『あんだ、どうしてそんな風に育っちゃったんだらうね』

俺を哀れんだ目で見る教師。クラスでコソコソと陰口を言う女子達。俺を否定するような物言いの母。

胃が締め付けられるように痛かった。

「…………ぐつ…………ゲホ、ゲホツ…はあ、はあ…………」

吐いてしまわないようになんとか耐える。だがこんな体調で授業を受けたとしても身にならない。なので最悪休むことになってしまふのだが、生憎とまだ時間はある。なので少しでも寝て体調の回復に努めようとした司。

このとき睡眠が出来たのは少しの救いかも知れない。



「……え、専用機、ですか？」

入学して最初の放課後、織斑先生に呼び出され職員室に来ていた。

「そうだ。一年とは言え男子のIS操縦者はお前と私の弟しか居らんからな。特例として専用機を持つことになっている」

「は、はあ……あれ？それって大丈夫なんですか？」

「何がだ？」

たしか今日やってた授業でえーつと…あつ。

「確か、ISって467機しか無いんじゃないですか？」

「ああ、正確にはコアがだがな。男が動かせるのは謎だから、データが欲しいと言うことだそうだ」

「なるほど」

やったよ山田先生！俺覚えてたよ!!と心の中でガッツポーズ。

「織斑の専用機はもうあるからな、長崎の専用機だけだ。どこの社も是非と言っていたが流石に一週間は無理だったようだ」

え？無理だったの。じゃあなんで俺呼ばれたの!?!しかも一週間って短つ!?

「だがウオーター・リリー社は一週間で作って来たそうだ」

織斑先生が説明しているとき、肩をポンポンと叩かれたのでそちらを向く。

人指し指と俺の頬が当たる。なのでその手の人につつかれた形になる。

突然のことに困惑する司とため息を吐く織斑先生。

「いやー成功、成功。どう、ビックリした？」

「え？いや、まあ、はい」

「…あー、長崎、この人がお前の専用機を作った人だ」

「え!!」

「どうもどうも、ウオーター・リリー社社長の水面 睡蓮（みなも すいれん）です」

社長の水面睡蓮さんと言うのは女の人だった。大体160cmくらいの身長がある。

ただ司が気になったのはその人の表情だ。つねに笑っているというか微笑んでいる。

前世ではそんな人は居なかったのでよくわからないと言った気持ちになる司。

しかし、相手が挨拶をしたのだからこちらも挨拶をしなければと思うくらいには思考

は回復していた。

「あ、ああ…ど、どうもご丁寧に。自分は長崎司と言います。よろしく願います社長

………つて社長!!」

訂正、まだ回復していなかったようだ。

「あははっ!うんうん良い反応だよ。やっぱりそうでなくちやねえ」

「…んんっ!あー水面さん、早く本題に入って頂きたい」

織斑先生が少し面倒臭気に言つて、水面さんがはいと返事をして眼鏡を掛けた。すると雰囲気ガラリと変わった。

「コホンッ！先程紹介しましたが改めまして、私がウォーター・リリー社社長の水面睡蓮と言います。本日は私共の製作したISに乗って頂くことになりましたが宜しいですか？」

いきなりの変わりようにただ頷くことしか出来ない司。それを了承と取り、恐縮ですと言つて話を進めていく水面さん。

ええ！? なんなのこの人、眼鏡掛けただけであそこまで雰囲気変わるか!? 普通。

例えるなら、優しそうで朗らかな人が眼鏡を掛けただけで凜としたバリバリ仕事出来ますよと言う人になったのだ。

「私共の製作したISは高速機動、高火力を主に製作しました。スラスタの数は4門でありながらも燃費が良く、拡張領域は最大で31器もの武装が収納できます」

ただ31器ではなく35器にしたかったのですが私共の技術では35器が限界でしたと付け加えた。

ISに関しては素人なのでただ頷くことしか出来ない。たんたんと言話が進んで行く。それで俺と水面さん、織斑先生は第二訓練アリーナへ来ていた。

「それでは長崎さんはこのISに乗って頂きます」

そう言うって見せてくれたI Sは、黒を基調とした機体だった。形は打鉄とラファールを混ぜた感じだ。でもそれでいて他の専用機などよりもスリム。

「……かつけえ」

「ふふつ、気にいって頂けてなによりです。では、どうぞ」

思わず漏らしてしまった眩きに喜色満面と言った風に答える水面さん。やはり嬉しいのだろう。

乗るように促されその機体に乗る司。

「——これは？」

「ん？どうしたんだい」

「あ、いや、すいません水面さん。この機体、動かせないみたいです」

「えつと……どういうことですか？」

よくわからないと言った風な水面さん。

「あの、乗った瞬間にこのI Sが色んなことを教えてくれたんですが、でもまだ貴方は駄目だよってこのI Sが」

「I Sが持ち主に……語り掛けた？……てか私達の徹夜の日々があ！」

項垂れる水面さん。てかキャラが崩れた!?

「I S 適性値はどうだ？長崎」

今まで黙って見ていた織斑先生が不意に口を開いた。

「ええ、それなんですが『F』なんですよ」

「え、Fう!?!」

いきなり反応する水面さん。確かにI S 適性が『F』なのは意外だろう。意外と言うより異常だろうと思う。

何故俺がこの専用機に乗れなかったのか、思い当たる節がある。それは俺が転生者だと言うことだ。元々この世界の人間ではないのにこっちに転生した。それだけでも十分イレギュラーな存在だ。なのにI S に乗れるように神様が強引に書き替えたのだ。I S の方も不快極まりないだろう。専用機も乗れなくて当然だ。

「……………」一応確認しておくけど、打鉄には乗れるんだよね？」

「はい、乗れます。というか打鉄にしか乗れないんですが…………」

「……………はい？」

おおふ、水面さんがポカンとしてらっしやる。

「ええつと、なんでか解らないんですが最初に触ったI S しか動かせなかったんです。他の打鉄も動かさそうとして見たんですが動かなくて……………」

「……………」

俺の言葉を聞いて水面さんは何か眩きながら考えこんでしまった。

や、ヤバイ失望させてしまっただろうか!?……いや、まあ当然か。折角専用機作つたのに、それが乗れませんか?ってなつたんだ。落胆して当然だろう。あー、なんかスゲー申し訳ねえな。

司が悩んでいると水面が突然、良しと言つて手をパンと叩いた。

「……うん、だいたい纏まつた。あーコホントッ!長崎司さん、我々の会社と契約して頂けませんか?」

「はい?……えっと、何故ですか?あなた方の製作した専用機を動かせなかつたんですよ。それで何故、俺に契約を薦めるんですか?」

至極疑問だった。普通なら俺みたいな奴に契約を薦めないはずだ、それなのに水面さんは契約してくれるか?と言つた。何故?打鉄しか動かせない奴と契約してメリツトはあるのだろうか?!

「うん、そうだね。専用機を動かせなかつたのは流石にビックリしちゃつたよ。でも打鉄が動かせるなら私たちも展開武装を提供することが出来るよ。元にした機体に打鉄も入っているからね。そして何より良い宣伝になる。君も凄いいけど私たちの武器もスゴいってね」

「……良いんですか?俺で」

気になったことを質問する。いくら利害が一致すると言っても限度があるはずだ。今回はそれを上回っている。

「ん？もしかして動かせなかつたの気にしてる？いやー気にしないで気にしないで。この子も、まだ駄目って言ったんでしょ？なら完全に乗れないって訳じゃないんだからそんなに気落ちしなくてもいいよ。IS適性が上がったら乗れるようになるだろうし、それにこの機体、〔黒牡丹（くろぼたん）も君の為に作った機体だ。なら君に乗ってもらったほうがこの子も喜ぶはずさ」

「……………」

何と言えば良いかわからなかった。今までは、失望させてしまうことが多かった。それでも良いと言ってくれた人なんて居なかった。でも目の前の人は良いと言ってくれた。こんな俺でも。ならそれに応えたいと強く思った。

「……………こんな俺で良ければ、是非」

「うん。契約成立だ。宜しく頼むよ、長崎君」

そう言つて手を差し出してきた。俺はその手を握つた。少し震えていたかもしれない。い。

長崎を帰らした後、織斑千冬と水面睡蓮は話をしていた。



「良かったのです？長崎で。あなた方の社なら他にもできるのでは？」

「そうかもしれないね。でも私個人であの子に興味がでてきたんだよねえ。——さ  
ん、貴女に言われていなくても私は彼と契約しましたよ」

呟いた最後の言葉は千冬に届いたかわからない。

「……そうですか、ではまた後日に」

「ええ、わかりました」

あつそうだと言つて足を止め、こちらに歩を向ける水面。

「あの子を認めてやつてください。過去に何があつたかはわかりませんが少々自分を否定しすぎている節がある気がしますから」

そう言つて歩いて行つてしまつた。

あの子、それは長崎のことだろうと千冬は思った。

「ふつ、そんなこと分かつているさ」

ふつと笑い誰に聞かせるもなく一人呟いた。

## 第四話・回想、セシリア戦

翌日、俺はまた織斑先生に呼び出されていた。

「……は？ 試合、ですか？」

「そうだ」

「何故、ですか？」

いきなり試合しろなんて言われても困る。俺の場合文字どおり死合いになりそうで怖い。

「私たち教師の間で話題に挙がってな、そう言えば長崎の実力はどの程度のものなのか、と」

内心、マジかよと思う司だった。

「急な転校生がなんせ3人も来たからな、こつちもその対応に追われていたんだ。いつもなら実施している対教師の実力試験も時間がなくて出来なくてな。無理に時間を作れないでもないが、仕事が多くてな……」

「あ、あはは……」

こめかみを押さえる織斑先生にどう反応していいか分からず苦笑いする司。

取り合えず、お仕事ご苦労様ですと労いの言葉を言ったら、ああと返事が返ってきた。「…あれ？ですが織斑先生。何故俺だけなんですか？他の転校生、デュノアにボーデヴィツヒも俺と同じ時期に入って来たんですよ？」

不意に疑問に思ったことを言う。おかしい話だ、話題になるのが俺だけなんて。普通、話題になるのは織斑のことだろ？いや、違うか…違うな、うん。

「ああ、そのことか。自己紹介の時に言っていなかったがデュノア、ボーデヴィツヒの兩名は代表候補生だ。だから、取り合えず実力は申し分ないと言うことになった。それで転校生の中で実力がわからないのは長崎、お前だけだ」

大体予想はついていたが、まさか本当に代表候補生だったとは。2人とも専用機持ちか…マジかよ。

「ん？あまり驚いていないな」

「あ、いえ…授業の時にデュノアはなんか訓練機以外の機体に乗っていたなあと思って思い出してまして、それに代表候補生ならあの操縦の上手さも納得できますから。ボーデヴィツヒについては知らないと言うか分かりませんが」

つか、ウチのクラスって専用機持ち多いよなあ…4人もいるんだよなあ、はあ。

司が小さくため息を吐いたら、職員室の扉が開いた。現れたのは紙の山を抱え、若干フラフラしている山田先生とこつちも紙の山を抱えている織斑が入ってきた。

「織斑君、わざわざすみません、ありがとうございます」

と山田先生は頭を下げた。紙の山を抱えたまま。

当然、紙は重力に逆らえる筈もなく大半が床に散乱した。

山田先生はあわわわつと言った風で急いで拾いにかかる。織斑は抱えていた紙を手近な机に置き、拾うのを手伝う。しかし量が半端じゃなく多い。2人では大変だろうと思ひ、俺は織斑先生に断りを入れ拾いに行く。

「手伝います、山田先生」

「あ、あ、ありがとうございます……」

うん、少し涙目だ。何だろう、いつも思うんだがこの人本当に歳上なんだろうか？ S学園の制服着てもバレないんじゃないかね？マジで。

司が山田先生について考えていると織斑が司に気づいた。

「うん？司？なにやってるんだ？こんなところで」

「紙拾ってたんだ」

「……いや、そうじゃなくてだな」

「ん？ああ、織斑先生に呼び出されたんだよ」

「千冬姉に？」

「……いつ織斑先生のこと千冬姉って呼ぶよな、注意されてんのに。まあ兄弟だから定着

してしまっているっていうのもあるが、ちよつとばかし、治らなすぎじゃありませんかね？あなた。

そのとき、後ろからカツカツと足音が聴こえた。ああ、織斑終わったなと思った。そしてその足音の主は織斑の後ろに行つて止まり、織斑の名前を呼んだ。

名前を呼ばれたことで振り返るとそこには手があつた。デコピンの形をした。

「織斑先生だ、馬鹿者」

そう言つて織斑先生は弟の額に撃鉄を落とした。デコピンの筈なのに鈍い音がした。

「~~~~っ!」

あまりの痛さに声も出でない織斑。横から、∴力を込めすぎたなと聞こえた。

「お、織斑君！だ、大丈夫ですか!?!もう、織斑先生もやり過ぎですよー!」

山田先生が初めて怒つたのを見たかもしれない、だがそこには恐いという感情は無く、見ているものを和ませる感じがする。なんか擬音で表すならポワポワだ。

ふと気になったので織斑先生の方を見てみると、若干織斑先生の表情がいつもより穏やかだ。山田先生恐るべし。すげえな、山田先生みたいな人が世界中に居たら戦争なくなるんじゃないやねえか？

司も山田先生で和んでいるとやつと回復した織斑が尋ねてきた。

「∴お、織斑先生、司と何を？」

話していた内容が気になるのか、織斑先生に尋ねる。それに、ふむと考えてから答えた。

「ちようどいい、織斑。長崎と試合しろ」

「え？」

二つの声が重なる。一夏の方は訳がわからずつと言った風で司の方は何故織斑となのかといった風で。

「長崎の実力を測る為だ。織斑、お前はオルコット、凰などと試合をして大体の力量は分かっているし、自分でも分かるだろう？だが長崎の実力はこちらでも分からんし、自分でも分かっている。それでは危険と判断したからだ」

いきなり試合しろと言われて何考えて要るのかな？と思つてたけどそんな事考えていたんですか、織斑先生！

それに、と織斑先生は付け足した。

「専用機を持つていて、訓練時間も長崎よりはあるが、もしかしたら…ということもあるかも知れんだろう？」

ニツと笑う織斑先生。それが様になっていてかつこいい。

それにうつと言葉を詰まらせる織斑。それから考えこんでいて、しばらくしたらよしやる、頑張ります！と意気込んでいた。

やる気十分な織斑。あーそんなやる気出さなくて良いのよ？言っとくけど俺機体、打鉄だからね？負けるよ？完璧に。

「そうだな、あとはどうするか。……織斑、オルコット、凰とどちらが戦いずらかった？」「え？えーと、セシリアはビットを避けるのは大変だったけど戦っているうちに癖が見つかっていったし、鈴の龍咆は見えなかったからなんもできなかつたらか……どちらかと言えば鈴、かな？」

なんかぶつぶつ呟いていたけど鈴って奴になった。誰？

「そうか。……よし、オルコットに明日、模擬試験だと伝えてくれ」

織斑先生の言葉に驚愕する司。

あ、明日う!?ちよつと待つてください織斑先生！俺なんも準備できて……つて打鉄だから準備もなんもねえか。うん、この後少しIS動かそう。せめて操作くらいまともにしたい。

分かりましたと言つて職員室を出る織斑。俺もその後が続こうとしたら織斑先生に止められた。

「いきなり決めてしまつて悪い。お前の意見も聞けばよかつたな、すまん」  
止められたから何話されるのかと思つたら謝られた。

「え？……いや、なんで織斑先生が謝っているんですか。むしろ、こつちとしては実力が分かりますし感謝しています。それにクラスメイトの実力とか判らないんで先生に選んで貰っても一向に構いませんよ。……というか織斑と戦うのは分かったんですが、何故オルコツトなんですか？」

これは本音だ。まあ俺の実力などたかが知れているが、どのくらい自分が出来るのか知っておいて損はないと思う。

しかし何故オルコツトなのだろうか？……つか、オルコツトって誰？ここで名前を出されたってことは結構実力がある奴ってことだろ？うーむ………あつ！もしかしていつも一夏さんって言うてる金髪縦ロールの奴か？そうだよな。他に専用機持ちの奴居ないし、授業で名前呼ばれたの織斑、セシリア、デュノア、ボーデヴィツヒだけだったし。その中で該当するのはその容姿の人しかないな。

「何故オルコツト、か。長崎、お前が一番戦いたくないと思う相手は誰だ？」  
「え？出来れば全員戦いたくないんですが……。俺にとつては全員脅威ですし」

これも本音である。だって皆専用機持つてるし、IS搭乗時間も他より圧倒的に多い。さつき実力がどうのつて言ったが俺、勝てるわけないと思う。絶対ボロ負けする。そんな自信しかない！

と司がそんなことを意気込んで？いると織斑先生がため息を吐き、口を開いた。



「……オルコットにした理由だがな、お前にはデュノア、ボーデヴィツヒ、風の相手はただ荷が重いと思つてな。ああ、オルコットも十分強いがまだムラが在りすぎる、そこを突ければお前でも勝機はあると踏んだからだ」

そこまで考えてくれていたことに驚く司。正直、弟が言ったからそれで良いか、みたいな軽い感じだと思つていた。いや別にそれでも良かったんだが、まさかそこまで考えてくれていたとは……なんでこの人彼氏いないんだ？ものすげえ出来る人なのに。あれか？出来すぎる女は嫌いってか？意味がわからん。

「……はあ、いや、正直そこまで考えていてくれると思つていなかったので何も言えないです」

言葉に詰まったが返答する。流石にそう思われたのは不満だったのか、少し顔をしかめて返した。

「あのな長崎、私達は教師だ。私達が生徒のことを考えてやらずに誰が学校という組織の中で考えてやると言うんだ？」

また言葉に詰まった。前世でここまで真剣に生徒のことを考えていた先生は居ただろうか？いや、居なかった。

「…そう、ですね。すいません。まあ…ボロ負けしないようには頑張ります」

「ん？勝ちます、とは言わんのか？」

「いやだって、まだI Sの操縦すら苦勞してるんですよ？そんな俺がどう足掻いても専用機持ちや代表候補生の人には勝てませんって」

苦笑いする司にそうかと返す織斑先生。

「まあ、何にせよ明日は頑張れよ」

初めて応援というのをされた。むず痒く、照れ臭くはあるが悪くないと思った。

職員室を出た後、司は少しでも操縦がマシになるように訓練場へと向かった。

◆◆◆

次の日、俺はオルコットさんと戦った。

結果は当然負けた。

◆◆◆

あー、この時が来ちゃったか。あの後打鉄で訓練したがやつぱり一日やそこらで上達しないなあ。

俺は自分の専用機でもある打鉄に今日は頑張ろうぜと一言言ってから機体に乗った。

「司、頑張れよ」

「…ああ、取り合えずはな」

あの、織斑さん。あなたなんでこつちに居るんですかね？普通オルコットの場所じゃありませんかね？見てくれよ、オルコットさんもうアリーナに出てるし、銃口こつちに

向けてんだせ？絶対怒ってるよ。なに？、もしかしてあいつも織斑のこと好きなの？織斑さんモテすぎでしょ？つか、気付けよ！

「……………」

「……………」

司と織斑が話していると司のことをじっと見つめている人物が二人。

恐え！何なの、あの二人!?なんでこっち見てんの!?つか誰だよ！

何故あの二人がこちらを見ているのか、そしてその二人の名前を思い出そうとしていて、織斑の言葉が耳に入っていなかった。

頭の中でぐるぐると名前を思い出していると小さく金属が擦れる音が聞こえ、なんだと思い、そちらを向いた。

向いたと同時に金属が弾かれたような音がした。は？と思ったがすぐにその正体が分かった。

俺を睨んでいた片方のポニーテールのやつがどこから取り出したかわからない真剣で俺に斬りかかっていた。もう一方のツインテールの方はおそらくISであろう武装を両肩部に展開している。きゅ、球体。え…何あれ。あれ飛ばして来んの？なんか面白いな。……つか、こいつも専用機持ちか？ホントに多くない？専用機。どうなってるの？

気になったので織斑の方を見てみた。織斑は訳が分からないと言った表情では……？と言っていたが一番訳が分からないのは俺だ。何故こんな名前も知らん女子に斬り掛かられなきやならないんだ？

「……貴様、一夏を無視するとはどういうことだ！」

はい？……ああ、確かに織斑がなんか話してたけど、俺別に無視していたわけじゃないんだが……まあ結果的に無視しているという形になってしまったけどさ。真剣で斬りかかって来なくても良いんじゃないですかね？………エネルギーが減ってるうう！?ちよつ、まっ、回避回避!!

「くっ、貴様避けるな！」

「……無理言わないでくださいよ、エネルギー減ってるんで。あと織斑、ボーとしてしまっ  
ていてな話が聞こえて来なかったんだ、不快な思いをさせたかもしれない、すまん」

「い、いや、気にしていないぞ。と、とうか箒！やめろっつて！」

「一夏っ！何故止める？こいつはお前を無視したんだぞ！」

おいしい!?俺の話聞いてなかったのかよ!?

「無視したわけじゃないって！ただ少し聞こえていなかったただけなんだって！」

「それでも——」

と箒が声を発した瞬間、それに被せるように鈴が続けた。

「それでも——私はアンタが気に入らないのよ！」

なにそれ、理不尽。

言い終わつた瞬間、両肩部の球体、「龍砲」が爆ぜた。

不可視の砲撃、それが「龍砲」なのだ。司は為す術もなくアリーナに吹っ飛ばされた。それに驚いたのはセシリアだった。当然だろう、いつ来るのかと待つていたら吹っ飛んで来たのだ。そりゃ驚く。

「ゲホッ・ゲホッ……あーくそつ、気に入らないだけつて理不尽だな。まあ…理不尽には馴れてるが……あゝつ、エネルギーがむつちや減つてる…うう、マジか」

なんか泣きたいです。

「だ、大丈夫ですか？」

司の様子を心配してか、セシリアが声を掛けてきた。

今はその思いやりだけで泣けそうです、オルコットさん。

「あーはい、大丈夫です。エネルギーが減るというアクシデントがありました。問題はないはず。さて、では始めましょうか」

そう言い、刀を構える。

セシリア side

私はいまBピットにいます、織斑先生と二人で。ここに居ないというとは一夏さんは

長崎という人の所へ行つたのでしよう。少し理不尽だとは思いますが、腹が立ちます。そりやあ同じ男の人だからというのもありますけど応援くらいには来て下さつても良いんじゃないの？

セシリアが少しの不満を溢していると千冬が話かけて来た。

「おい、オルコット」

「は、はい！」

急に名前を呼ばれ、戸惑うも返事をする。

「お前の目から見て、司はどう写る？やはりただの男か？」

質問の意味が判らず考えていたが、代表決定戦の時に男を馬鹿にする発言をしたことを思い出した。一夏と戦い、男性も悪い人ばかりではないと気付かされた。全てではないがやはり男性でも良い人はいるのだと思うこともあった。

では長崎という男はどうか？長崎についてセシリアはこう思っていた。

「悪い人ではないと思いましたが。ですが、ひとつ気になったことが……」

「ふむ、気になったことは？」

「……彼はそこに居るのにどこか遠くの存在のようを感じることはありません。気になつたのはそれですわ」

セシリアと長崎は話したことがない。では何故彼女がそんなことを思ったのか？そ

れはセシリアが長崎のことをよく観察していたのだ。一夏のおかげで男性の見方が変わった。私は変な先入観を持っていたんだと思った。そこから人をよく観察するようになった。分かっていると思うが勿論ストーカー見たいなことをやっているわけではない。

「…なるほどな。オルコット、あいつに足りない物はなんだと思う?」

「た、足りない物…ですか? うーん……分かりませんわ」

「(こ)数日、奴を見てきて私は自信だと思うんだ」

「自信…ですか? しかし何故今そんなことを」

「あいつのポテンシャルは決して低くない。だがどこかで自分は出来ないと思い込んでしまっている」

なるほどと不思議と納得した。そう言えば彼の訓練を見たことがあった。彼の操縦は決して上手いと言えるものではなかったがどこか安定していると思っていた。理由はそう言うことか。

「だからこの試合で少しはと思ったんだかな、こっちに火を着けてしまったか」

「そんな話を聞いて、やる気が出るのも当然ですわ」

アリーナに出ようとすると、織斑先生が言葉を掛けてきた。

「しつかり頼むぞ、オルコット」

「候補生ですが、代表候補生として、わたくしは長崎さんと戦いますわ！」  
織斑千冬にそう宣言し、飛び立った。

アリーナに出たセシリアは少しも油断しないようにスターライトmkⅢを構え、集中する。

しかし、待っていても司が来ない。少し遅すぎじやありませんの？とセシリアが思った瞬間、司のいるはずのピットから砲撃が飛んできた。

「っ?!」

何だと思い、体を緊張させたが、飛んできた物はセシリアには当たらずその手前で落ちた。その飛んできた物をよく見てみると司だった。

長崎が溢した声はほぼ聞こえなかったが聞こえた所もあった。それがセシリアに疑問を抱かせた。

理不尽に、馴れている——と言うのは一体？

「さあ、始めましょうか」

考えている暇もなく、試合が始まった。疑問を隅に置き、今は長崎に集中する。

セシリア side out



まず、先手を打ったのはセシリアだった。2機のピットを飛ばし、スターライトで射



撃。

スターライトによる射撃を少し喰らいながらなんとか避ける。身体ごと。

「……貴方、加速装置（スラスター）を使わないのですの？」

「……加速装置ってどうやって使うんです？ 使い方知らないんですけど……」

ええ、習っていませんからね！ 人力で動かすしかありませんでしたよ？ 何か？

でもこれ体力消耗が半端じゃない。もう体力がヤバイ、キツイ。

つか絶対オルコットさん呆れると思うわ。だってさつきから何もして来ないもん。

殺ろうと思えば殺れたのにさ。

と不意に通信回路に接続された。なんだと思ったが相手はオルコットさんだった。

「長崎さん、要はイメージです。ISは操縦者がこうしたいと思い描いたことをやってくれます。だから、わたしくし達はISにそのきっかけをイメージとして送るんです。それが正確なら、応えてくれる筈ですわ」

呆れられて、なんか言ってるのかなと思ったら親切に操縦方法を教えてくれた。：

何故？ 裏がありそうで怖いなあ…。

「あ、はい、ありがとうございます」

取り合えずそう返す。そして教えられた通り、やりたい事をイメージとして思い浮かべる。すると…。

「うおっ！浮いた！飛んでる！」

機体が浮かび、上昇した。

空を飛ぶって言うのは気持ち良い物だと感じた。今まで行つたことの無い場所から世界を見て、やっぱり世界は広いと再認識させられた。

地上にいた頃よりも空に近づいたが天にはまだ遠い。

この場所は不思議と居心地が良かった。どこに居ても不安しかなかったあの世界、しかしそれは、この世界にしてみれば些細なことなのかもしれない。

それを知って逆に安心した。自分はまだ大丈夫なんだと感じた。

打鉄に触れる。人のような温もりはない。しかし、そこにはしっかりと形がある。人のように喋れないがそこにあるということに司は安堵した。

打鉄に勝とうぜ、と呟いた。答えは返つてこない。だがそれに応えてくれたような気がした。

「ふふっ、良い顔になりましたね。では、改めて、始めますわ！」

言うと同時にビット4機を射出し、司の周りに展開させる。続けてスターライトによる射撃。

司はこれを避けるが背後にあつた2機のビットの攻撃をもろに受けてしまう。

空中ディスプレイに表示された数字を見て舌打ちをする。

「やっぱり、あの時のワケわからん攻撃が不味かったか」

甲龍による砲撃によって、実質4割近くのエネルギーを削られ、装甲を破損。それに加え、セシリアのビットの攻撃をもろに受け、もうほとんどエネルギーは無いに等しかった。

「正直厳しいが…やるしかないか」

織斑先生の言っていたオルコットさんに勝てる勝機の一つのは全く分からないままだが、迷ってる時間とエネルギーは無え！

あの銃器が射撃出来ない圈内まで近づいて、ビットによる攻撃が届ききる前に近接ブレード【葵】を当てる。それには少しの隙が必要なのだがそれについては考えがある。

セシリアが自身に照準を合わせたとき、ここだと思ひ拡張領域（バススロット）をオープンし、打鉄装備アサルトライフル【焰備】を取り出す。狙っている隙はないので、ただばら蒔く。数発の弾が運良くセシリアの元へ向かう。

まさか射撃武器を使うとは予想していなかったのかセシリアは体勢を崩し、被弾。チャンスと思ひ一気に近づく。

「しまっ……」

「もらっ……」

セシリアの懐まで近づいてブレードを振りかぶる。

斬りかかろうとした瞬間、機体がガクツと下がり、紙一重でセシリアに攻撃は届かなかった。

次いでディスプレイにその状態が表示される。

『出力低下、左翼スラスタ破損。出力不足』

「マジか……」

背後から鈍い衝撃が走った。

「がっ!!」

それはセシリアのビットによる攻撃。セシリア自身は司から距離をとっていた。

だが、司はもうエネルギーが無いのか地面に向かって落ちていった。

セシリアは司が地面に落ちきる前に掴み、そのままゆっくりと下降。

「まさか射撃武器を使うとは予想外でしたわ。あそこでスラスタが故障していなければ間違いなく攻撃はわたくしに届いていたでしょう」

司の意識がもったのはそこまでだった。

「でもまあ良く戦ったと思いますよ？長崎さん。……織斑先生、確かに貴女のおっしゃった通りでしたわ」

セシリア漏らした言の葉は司には届いていなかった。

その後、司が目覚めたのはそれからしばらくしてから、日が傾きかけているときだった。

大体、自分が負けたのだと分かっていたがそのことを織斑に聞いた。言いずらそうな顔をしていたが負けたのだと教えてくれた。

言いずらそうにしていたのは俺を氣遣っていたと信じたい。

そして、機体の状態を聞いた。そしてら破損はしているが飛行や戦闘には問題はないそうだと言っていたらしいと返ってきた。

良かったと思った。壊れていたらどうしようかと不安があつたが杞憂に終わったようだ。

そしてもうひとつだけ気になったことを尋ねた。それはオルコットさんのことだ。俺が気を失なう前なんか言っていたはずなのだが思い出せない。

「うん？セシリア？うーん、そう言えばこっちのピットに司を連れてきてくれた時、いつもより表情が険しかったような…」

マジかー。まあ、当たり前か。自分は専用機なのに相手は打鉄、怒って当然だろうと思う。ただ…やっぱりちよつとへこむわ。

「次は俺の番か。…今度は司が勝つかもな？」

話題を変えるようにそう織斑が言った。

「おいおい、気休めは止してくれ。俺は多分、お前には勝てない」  
「いや、でも……」

織斑の言葉の途中に『ただ』と被せる。

「ただ、負ける気では挑まないさ。やるからには勝ちたいしな」

「……ああ、頑張ろうぜ、お互い」

そう言つて織斑はニツと笑つた。こつちはそうだなと返事をする。

「そうだ、鈴にやられた所、大丈夫だったか？」

「ああ、体に異常は無かった。が、エネルギーが大幅に減つたな」

それに織斑は『ごめん』と頭を下げ謝る。

「いや、織斑は悪くないだろ。実際お前がやった訳じゃないんだから」

「いや、それでも俺にとつては鈴や箒は大切な人だからさ、悪く思つてほしくないんだ。

自分勝手つてのは分かつてるけどごめん！」

他人のために頭を下げれるというのは正直、凄いことだと思う。俺には出来ないことだ。

「分かつた。大丈夫だ、実を言うとあんま気にしていなかつたしな」

「そ、そうなのか？でもあの後、ちゃんと二人に言つたから大丈夫だ」

ナニを言つたんだ？なんか、そのことでまた何かありそうで怖いんだが……。

司がそう思っていると横の一夏が声をあげた。なんだと思い再びそちらを向く。

「そ、そう言えば千ふ……織斑先生に来るように言われてたんだっ！またな司。明日、頑張ろうな!!」

急いで駆け出していくのを手を振って見送る。

一人になった部屋でポツリと呟く。

「——織斑 一夏、か」



スツと目が覚める。寝る前までであった怠惰感は幾分マシになった。

現在時刻は8:00。体調は完璧とは言えないが授業に出れない訳ではない。

少し早すぎる気もするが、身支度を整え、教室に向かう。

## 第五話・I S 訓練

昨日は体調が優れなかったが今日は、もう日課になりつつあるランニングが出来るまで回復していた。

が、その時間はいつもよりも遅い。やはりまだ完全には治っていないようだ。朝6時半。普通の人なら十分に早いのだが司はこれに自身の打鉄を纏って走っているからどうしても音が出てしまう。なので、今日は打鉄を纏っていない。

「……はあつ、はあつ、はあつ」

自然と足が向いてしまったI S格納庫。いつもここに来て居たので習慣かなと思う。とくに用事はないが打鉄の様子を見ようと中へ入った。

「……あれ？」

疑問の声をあげたのは格納庫に人が居たからである。まだ朝の6時半ぐらいだというのにその少女はディスプレイと自分の専用機らしき物とにらめっこをしていた。

人が居て、少々驚きはしたが、打鉄の元へ向かう。

「……………うん。大丈夫だな。…ごめんな、今日走ってやれなくて」



そしてこれも日課になりつつある。I Sに喋り掛けることだ。山田先生に教わったことで、人の意思のようなものがあるならこつちの声は聴こえているんじゃないかと思ひ、始めた。まあ、I Sの返答はないし、話かけても来ないけど……誰でも無視されるのはキツイいな……。

ふと視線を感じた。そちらを見てみると先程の少女がこちらを見ていた。

な、何だろうか。俺あの子知らないんだが。……あつ、もしかしてさっきの言葉聞かれちゃった？は、恥ずかしい!?

取り合えず、挨拶もかねて誤魔化す様にして、お辞儀をした。すると向こうもペコツと頭を下げ、再びディスプレイとにらめっこをし始めた。

うーん、やっぱり知らない人だな。つか、水色の髪つてスゴい色だな。染めたんだろ  
うか？だとしたら似合っていたな。

そんなことを思いながら寮へと帰って行った。



「これでHRを終わる。二組と合同でI S模擬戦闘を行うため、各人は着替えて第二アリーナに集合しろ。では解散!」

そう言つて行動を促す、織斑先生。皆素早く動いている。それもそうだ。HR終了から授業開始まで約10分しかないからである。その中でも特に早く動いているのは俺、

織斑、デユノアの三名である。

「司、シャルル、早く！」

「…わかつてる」

「…?。どうしてこんなに急いでいるの?」

マジか、コイツ。織斑先生の授業に遅れるというのがどれほどのものか分かってないのか? 確かコイツも見ていた筈なんだが…。

一夏が一度、授業に遅れて来たことがあった。そのとき、よく織斑先生に指名されていた。9割くらいやられてたな、あれは。しかも出来なかつたら、密かに織斑先生こめかみ押さえてたな…。そして、たんだんと眉間のシワが深くなつていくもんだつたら、皆無駄に緊張してた。山田先生に至つては半泣きだつたな。

それから、皆は授業に遅れないように気を付けている。織斑先生の授業だと特に。

あと、俺達が急いでいる理由はもう一つある。それは……。

「ああ! 居たぞお!」

「目標発見! 捕まえろお!」

「囲め、囲め!!」

このように、雪崩のように毎回先輩方が待ち構えているのだ。

「つ、司。不味い、囲まれた」

織斑が若干青い顔をしている。やっぱりお前も恐ろしいんだな、織斑先生のあの雰囲気だ。

前後を先輩方に囲まれ、行き場無しの状態。詰んだろ、これ。

ふと織斑の腕、ガントレットに目がいった。そうだ！これなら行ける。

「織斑」

「ど、どうした、司？」

焦っている織斑に耳打ちをする。この状況を打開する案を伝えるためだ。

「……。分かった。やるぞ、司」

「ああ、頼む」

織斑に伝えたことは、デュノアを抱え、窓から飛び降り、専用機を展開してくれと言ったものだ。もちろん俺もそれに捕まる。

「シャルル！」

「え？……きやあ!？」

一夏がシャルルを抱き抱えたことで周りから一部声援が挙がる。

きやあ？……なんか、おかしい。違和感がない気がする。って今そんなこと思ってる暇はない。

織斑とデュノアが窓から飛び降り、俺もその後が続く。辺りからあつと言う声が挙が

るが気にしちゃいられない。

そのあと織斑が加速推進翼（スラスタ）を部分展開し、織斑に捕まった。落下することなく無事に地面に着地。

「ふう、なんとか切り抜けたな……つて後何分だ?」

「あー……あと4分だ」

「ま、不味い! 早く行かないと!」

「織斑、俺は格納庫に行くから早くデユノアを連れて行け」

「格納庫? 何でだ?」

「まあ、俺の機体があるんだよ」

「そう言えばそうだったな。じゃあ俺達は先に行くけど、司も遅れないようにな!」

「…努力はしよう」

そうして織斑はデユノアの手を引いて走っていった。……間に合うかなあ、俺。

格納庫までそれなりの早さで走り、打鉄の所に向かう。自身の専用機の前まで行き、  
呟く。

「よし、行くか…打鉄」

打鉄に一声かけ、搭乗。時間は……あと30秒。ま、不味い!

加速推進翼をすぐさま展開させてアリーナへ急ぐ。

突然だが、司の左目は死角である。目に傷を負い光を奪われてしまった。司はその傷を隠すために髪を長くしているのだ。だから、左方向から飛来物が飛んでくるのに反応が出来なかった。

「ああああーっ！ど、どいてくださいいっ!!」

大声をあげ、誰かが突っ込んでくる。すぐにI Sが警告『左舷、機体急速接近』と告げてくれたが間に合わず衝突してしまう。

「……ふぐっ！」

I Sに守られているとはいえ、衝撃が来るときは来る。ほぼ不意打ちみたいなものだったから防御すらできていない。

「あわわわっ」

ぶつかつた衝撃で意識が暗転しかかっているせいも全く状況は分からないが、墜落していると言うのは何となくわかる。

この状態で地面に叩き付けられるのは流石に危険だと思い、飛んできた生徒？をギョツと掴み、加速推進翼を噴かして落下スピードを減速させるように試みる。

その結果、なんとか地面すれすれで止まった。飛んできた人は無事かと腕の方へ目をやる。そこには俺が抱き締めるようにしてその人を掴んでいた。急いで手を離す。

「うおっ……っ……はあっ、はあっ……ゲホッ、ゲホッ！」

いつの間にか息が切れていた。心臓もバクバクしている。そんな様子を心配してか声がかげられた。

「だ、大丈夫ですか!?!長崎君!」

声の主 or 飛んできた機体と言うのは山田先生だった。

「わ、私のせいで、長崎君を危険な目に、ほ、本当にすいません!」

山田先生が頭を下げ、謝ってきた。心なしかいつもより山田先生が小さく見えた。というか、顔に近い。山田先生はまだ俺の上に乗ったまままだ。

「あ……いや、気にしないで下さい。結果的に山田先生も無事だったので良かったです。それよりもこの状況はどうすれば……」

先程のアクシデントよりもこちらの対処の方が俺には難関だ。どうすれば良いんだ?  
?

「この状況?」

なんのことも分かっていない山田先生だったがしばらくしているとボツと顔から火が出たように紅くなり、飛び跳ねるようにして立ち上がった。

「こ、これはですね!べ、別に故意にやった訳ではありませんよっ!わ、私は先生なんですから、生徒をそんな目で見たりなんかしていません!」

顔を真っ赤にしてするそう言う山田先生。何だろう、ここまでの反応されてしまうと

こっちが照れてしまう。

「わ、分かりましたから取り合えず落ち着いて下さい、山田先生」

「は、はい！」

と山田先生が自分を落ち着かせる為だろうか深呼吸を始めた。そして山田先生が深呼吸をしているとき、チャイムが鳴り終った音が聴こえた。

「チャ、チャイム……鳴り終つ……遅刻」

今は違う意味で心臓がバクバクしている。どうしよう、織斑先生の授業で遅刻してしまった。

目に見えて落ち込んでいるのが分かったのか山田先生が慰めてくれた。

「だ、大丈夫ですよ！長崎君は先生を助けてくれたんですから、私から織斑先生に事情を話しますから、い、一緒に行こう？ね？」

「……はい」

山田先生が俺の手を掴んで、アリーナへ急いだ。

◆◆◆

山田先生は司の手を掴んだままアリーナ上空へ来ていた。

「さあ、後もう少しですね」

「そうですね。……あの、山田先生」

「?。なんですか?」

俺はさつきから気になっていたことを聞く。

「あの、なんで手を握っているんでしようか?」

そう言われて山田先生は自分の手を見る。そこにはしつかりと司の手を握っていた。

「~~~~つ!!」

先程よりも顔を真っ赤にする山田先生。それもそうだろう、女尊男否の世界になつてから異性と手すら繋いだことがないのだから。

そして自分のしたことに気付き、パニックに陥る山田先生。手を離すのではなくさらにきつく握り、なぜか加速推進翼を作動させる。

「~~~~つ?!」

「なんつ……」

アリーナ中央へ向け、ほぼ墜落しているように進む。この間でも山田先生は手を離してくれない。

再び警告がディスプレイに表示される。

『直進先に人物あり。対象：織斑一夏』

ディスプレイに表示されたことに驚き、進行方向を見る。確かに織斑つぽいやつがいる。しかもたぶんだが白式を展開していない。まずいと思い、自分が出せる限りの声量



で叫び、その後から山田先生も続けた。

「織斑あ！そこどけえ！」

「織斑君！危ないです！」

盛大な音がして、地面にぶつかつた。

「……………ぐっ！……………いつてえ……………」

今度は地面に叩き付けられ、着地のダメージがあり、あまり動けそうにない。手を握られてはいる感触があるので山田先生も無事だろうが問題は織斑だ。俺は山田先生と織斑を探すべく首を動かした。

心配していたが案外あっさり見つかり、俺の右側に織斑と山田先生はいた。織斑が押し倒す形になっていて、片手は山田先生の乳房を掴んでいると言う光景だったが。

「……………何やってんだ？織斑」

思わずそう聞いてしまう。不慮の事故なんだろうが、どうしてそうなってしまったのか問いたい。

しかも、早く離れば良いのに胸を鷲づかみしたまま固まっている。山田先生も口をパクパクさせながら動かない。たぶん緊張しすぎて理解が追いつかないのだろう。というか心なしか、さつきよりも手をつかむ力が強くなっている気がする。

とそんなことを考えているときいきなり警告音がなり、詳細が表示された。

『右舷、熱源反応を確認。危険』

右側には今、織斑と山田先生がいる。痛む身体をなんとか起こして二人の前に出る。そして両肩部の楯を前方へ展開。それに腕を重ねるように交差させた時に衝撃が来た。俺が防御したことによりレーザー光は拡散し霧散していった。この感じは良く知っている。散々喰らったものだからな。これはB Tレーザーによる攻撃、つまりオルコットさんだ。

「……はっ！わたくしっしたら、つい……だ、大丈夫ですか!?長崎さん、一夏さん、山田先生」

はっとなつて申し訳なさそうにしながらこちらに駆け寄つて来るオルコットさん。あの正確さで無意識だったんだらうか?俺居なかったら織斑の頭直撃だったぞ。恋する乙女って怖えな……。つか織斑の奴まだ固まってんだけど。いい加減回復しろよ。

そう思い織斑を蹴ろうとしたとき、ガシーンと何かか連結する音と怒号が聴こえた。「あんたはいつまでそうしてんのよ!」

2組の凰が怒鳴りながら織斑目掛けて青龍刀を二つくっ付けたような武器をブーメランみたいに投擲。流石に硬直は解けたのか織斑が山田先生を起こしてその攻撃から逃れようとする。が一步遅く、織斑がその攻撃に当たり思わず転倒。

俺はもう動けなかったがオルコットさんが手を借してくれてなんとか回避できた。

風の放った青龍刀がブーメランのごとく再び織斑達の所に戻ってくる。が二人に当たりはせず、ドンツドンツ!と二発の銃声が響き、弾かれた。

やったのはなんと山田先生だった。今度は山田先生が上になっているがそこから少し上体を起こしただけで狙撃したのだ。その顔にいつものような雰囲気はなく、凜としている。

その光景に少々面食らってしまったが俺だけでなくクラスメイトや織斑にオルコツトさん、鳳だつてポカンとしている。それを見越してか織斑先生が補足をいれてくる。

「山田先生はこう見えて元代表候補生だからな。今の射撃くらい造作もない」  
「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

ずれた眼鏡を両手で治して起き上がる山田先生。パツといつもの雰囲気に戻っているが頬が少し紅い。織斑先生に誉められたことが嬉しかったのだろうか？

「そうだな…オルコツト、鳳、前に出ろ」

何故わたくしまで?!と言っていたオルコツトさんだったがそれに従った。鳳も何か言いたそうだったが何も言わず行動した。

「お前らには二対一で山田先生と模擬戦闘を行ってもらおう」

「え?二対一で、ですか?」

先程の射撃の腕前を見て実力は分かっていたが思わず聞き返してしまう鈴。

「ああ、そうだ。なに心配するな、今のお前ならすぐに負ける。では山田先生お願いします」

織斑先生にそう言われ、緊張気味に『はい』答えた山田先生。そして負けると言われ、ムツとした二人は気合い充分とばかりに宣言する。

「負けませんわ!」

「やってやろうじゃないの!」

二人が飛翔し、そのあとに山田先生も続いた。

「い、行きます!」

声聞こえいつもの山田先生だったが、その顔は先程のように凜としたものだった。

「では、はじめ!」

織斑先生の号令で戦闘が始まった。戦闘といってもほぼ一方的なもので山田先生が勝利した。ビット、衝撃砲が悉くかわされ、成すすべなく山田先生が投擲したグレネードの爆発に巻き込まれ落下。そこでストツプが入り、織斑先生が終わりだと告げ終了となった。

「さて、これで諸君らにも教員の實力は理解できただろう? 以後は敬意を持って接するように」

その後、専用機持ちごとでグループになって自習することになった。

織斑とデユノアのグループで一悶着あったようだが織斑先生が直々に訓練していた。南無。

そんな光景を横目で見ていたが、前を向く。他のグループはワイワイとやっているのに対し、未だに誰一人として喋っていないボーデヴィツヒさんのグループ。

無言で順番づつにI Sに搭乗させ操縦させている。き、気まずい。正直、そう思う。それは司だけではないらしくこのグループの女の子達は少し俯いて押し黙っている。

気まずい空気の中、俺の番が来た。正直どうしていいか分からないが、前の子と同じようにする。

「……………長崎、と言ったな？」

乗ろうとしていた時にずっと無言だったボーデヴィツヒさんが話しかけてきた。

「…名前は合ってますが、えっと、何か？」

何故俺に話しかけて来たんだろうか？織斑と話せばいいのに。過去だかに何か織斑と因縁があるんだろう？

「お前の試合を見た」

まっすぐと目を見て言われた。そして目を見て始めて気が付いた。この少女の目はとても澄んでいる。澄んでいるがどこか翳りがある。

俺はこの目をよく知っている。だってこの目は――。

「……お…試合ですか？見ていてもつまらなかつたでしょう？無様に負けてしまいましたから」

漏れかけた言葉をぐつと抑え、言葉を続ける。

「いや、そんなことはない。良い試合だった」

「お世辞はいいですよ。している方もされてる方も辛いだけです。それに本人が無様だと言うんですから他の人の目にもそう写ってますよ」

いつもなら生返事のように返答するのに少しムツとして答えてしまった。何故だ？

「他の者からはそう写ったかもしれん、だが私はそう思う」

「………そうですか」

そこで会話が途切れる。だがラウラがポツリと呟いた。

「お前は————いる。お前の目を見ていと過去の私を思い出す。————と

呼ばれていたあの頃を」

「………え？」

それきりボーデヴィツヒさんは喋らず、ISの指導に戻った。俺もそれに従う。

ボーデヴィツヒさんの呟いた言の葉はとても小さく聞こえなかつた所もあつたが聞こえた所もあつた。そのことが司の頭の中にポツリと残った。

「……落ちこぼれて、一体………」

授業が終わり、自室に戻ってもそのことが頭から離れなかった。

## 閑話・蠢く

薄暗い部屋に人影が二つ。

「それで今日はどうしたのですか？まあ貴女がいきなり、やって来るなんてもう慣れましたが」

「やだなく人と会うのに理由なんている？親友なら尚更だよ」

親友という言葉に反応し、聞き返す。

「私たちは親友でしたっけ？前は知り合いみたいなこと言ってますでしたか？」

「あれ？そうだっけ、まあ細かいことはいいのだよ、みーちゃん」

「みーちゃん？すーちゃんって言ってませんでしたか？この前」

「あれ？そうだっけ？まあ、いいじゃないじゃない。なんか語呂が悪かった感じだったし、それにみーちゃんの方がなんか可愛いじゃない」

そう言つてケラケラと笑う彼女。

ため息と少し呆れ顔になつて、それに返す。

「私もそうですが、貴女を見ていると自分はまだまだって感じますよ。あつ、別に悪い意味



ではないですよ」

手を振って悪気がないことを示す。

「そんなの分かつてるって。でも、みーちゃんの言わんとしていることも分かるけどね」

「……………」

そう言われ、ただでさえ薄暗い部屋なのに顔に掛かる陰が濃くなった。

「ただ私はみーちゃんのそこが気に入っているんだけどね。初めてだよ、自分のような人を見つけたのは。嬉しかったなく」

ニパツと笑う彼女。それに『…そうですか』と呟き、弱く笑った。

「ごめんね、嫌な事思い出させて」

そう言って、彼女の肩にそつと触れる。

「いいえ……でも、ありがとう」

彼女の顔に先程までの陰は無かった。

◇◇◇◆

「あ！そう言えば、どうだった？彼に会ってみて」

彼、それはあの子のことだろうと思った。

「そうですね、貴女の思っていた通りの子でした。ただ、あの子の目は私よりも暗かつ

た。負っているものは同じか私よりも多いと思います。それよりも何故貴女はあの子  
のことを？ご存知だったのですか？」

「ん？うん、知ってるよ〜というかあつちは私のこと知らないと思うなく」

「それはどういう…」

意味がわからず思わず聞き返す。

「だって、顔を合わせた訳じゃなくてただ見てただけだもん。いや〜衛星をハッキング  
して世界各地を観察していたんだけどさ、たまたまその子が映ったんだよね。衝撃的  
だったよ、なんせ数十人に殴られたり蹴られたりしていたんだからさ」

言葉が出なかった。まさに絶句。そんな目も覆いたくなるような体験をして、何故外  
れなかったのか驚愕した。

「そんな行為が終わった後、ぐったりとしていた彼が体を、手足を動かしてゆっくりと起  
き上がったんだ。その時、彼の顔を見たよ。ひどい表情だった。」

いつもは語尾を伸ばして話しているが今はしていない。そして声のトーンが普段か  
らは想像も出来ないくらい低い。やはり彼女も思う所があるのだろう。

「……その、表情とは？」

狂気か憎しみか、悲しみか痛みかまたは絶望か、顔に浮かぶであろう表情がいくつも  
頭をよぎった。

「何もしていなかった。普通、顔に浮かぶであろう表情と呼ばれる物がまるで無いかのように無表情だったよ。どこか諦めた顔をしてるようにも見えた。…まるで『がらんどう』のようだったよ」

その時のことを思い出したのか手を握り締めていた。

「壮絶……ですね」

「うん、十歳くらいの子がしていい体験じゃないね」

それから暫く沈黙が流れた。だがそれを破ったのは先程の人物だった。

「…だからこそ、私たち大人がしつかりやって行かなくちゃいけないんだよね」

「…そうですね。…そう言えば、貴女の親友、あの人は凄い人ですね。全部見透かされているような気分になる。あの人とはいつ頃？」

「気まずい為か、あつと思ひ出したかのように話題を変える。」

先程まで暗かった表情がパツと明るい物に戻る。

「うんうん、凄いでしょく私の親友は。あ！もちろんみーちゃんも親友だよ。うーん、いつ頃、かあ…小学生の時からかな」

少し意外だと思った。中学もしくは高校生くらいからと思っていたがまさかそんなに早かったとは。

「意外く？私もね初めは友達になる気は一切無かったよ。道場によく来ていたけどね。」

その時は他人にはまったくもって興味がなかったし、話どころか目も合わせなかったくらいだもん。でもね：彼女が私を叱ってくれたんだ。それじゃ、お前が駄目になるって言つて。親にも叱れたことがなかったし初めての経験だったよ。でも、嬉しかったな、私を見てくれる人が居るって思った。そこからかな、彼女と一緒にいるようになったのは」

昔を懐かしむように語っていることが雰囲気で分かった。

「…昔も今も変わってないんですね、彼女は」

「…うん」

その時、携帯の着信音が流れた。

「ん!?このメロディーは!」

素早く携帯を取り出し、相手が誰なのか確認する。すると顔が喜色で溢れていた。相手が誰なのか何となく察しがついた。

「妹さんですか?」

「そうだよ。いや、初めてじゃないかな、私に架けて来るの」

「そうなんですか、では折角の記念を邪魔するのも嫌ですし、お開きにしますか」

そう言つて眼鏡を外して彼女に尋ねる。

「もうちょっと話していたかったんだけど…まあ、仕方ない。バイバイ、みーちゃ

ん、また近いうちに」

「うん、じゃあね、たーちゃん。またね。」

別れの挨拶が終わり、薄暗い部屋での会話が消えた。あるのはただ静寂だけだった。

## 第六話・休日、傷

ボーデヴィツヒさんが言っていた落ちこぼれという言葉が妙に頭に残り、司はほぼ眠れないでいた。眠れても見るのは悪夢ばかり。

その中でも特に良く見るのは左目の傷のことだ。左のこめかみからの酷い裂けたような切り傷。目を縦に走る鋭い切り傷。これは司が幼少期から中学に至って付けられた傷である。

俺は幼少の頃から父親に好かれていなかった。母親は俺のことを嫌っておらず寧ろ好いてくれていたが、それが返ってまずかった。母親は俺のことを嫌っておらず寧ろ

父はそれが気に入らなかつたのか母の見えないところ、居ない時に殴ったり蹴ったりしてくるようになった。ある日、俺は酒ビンで左のこめかみあたりを殴られた。割れたビンでも殴ってきて、傷は深く酷い物になった。出血も酷く、帰って来た母は大慌てだったらしい。近所の人から聞いたのはあんな声を初めて聞いたと言っていた。その時は傷だけで、まだ目も見えていた。

だがそこからだ。俺の目が見えなくなることが起こったのは。

その事件が起こってから父と母は離婚。当然と言うか俺は母に引き取られた。父にもう息子と私に近づかないという誓約書まで書かせて離婚したらしい。その頃はまだ小学3、4くらいだったから流されるままに母に付いて行つた。それから数年たつて、中学に上がる頃には何となく理解していたし、母にも私とお父さんは離婚して、その傷はお父さんに付けられた傷だよ、と聞かされた。別に傷のことはどうでもよかつた。あつても無くても俺に優しくしてくれるのは母だけだつたし、早く大人になつて母に楽をさせたかつた。だがそんな俺の前に再びあの男が現れた。

学校からの帰り道、誰かか後を付けて来ているというのが分かつた。その頃は少々敏感になつていたし、何よりヒタヒタと妙な足音が聴こえていたからだ。気になつて後ろをチラリと見た。そこには40代後半くらいの男が居て、靴は無く裸足。息が荒く、髪がボサボサ、髭も手入れをしていなく伸び放題。衣服は所々ほつれていた。手には包丁、オマケに目が血走つていた。その格好にビクリとしたが、自分には関係がないと思ひ、無視した。しかしその男はいつまでも自分の後を付けて来る。試しに曲がつて見ても付いて来る。なので家には帰らないようにして、遠回りをした。そして決して悟られないように追いつかれないように注意して移動をしていた。またチラリと後ろを見た。すると男が何か口をパクパクとさせていることに初めて気が付いた。初めはただの呼

吸だろうと思った。だが偶然か必然かその男が口に行っていることが分かった。いや、分かってしまった。その瞬間、ドクンと心臓が跳ねた。『おまえのせいで』そう男は口に行っていたのだ。ついて来ている男は父だ。そう分かった瞬間、足に根が生えてしまったように動かなくなった。体が震え、呼吸が乱れる。ヒタヒタと後ろから足音が聞こえ、首をなんとか動かし、後ろを見る。そうして見えたのは父が包丁を振りかぶっている姿だった。その時その動きが遅く感じられ、ここで何かしなければ自分は死ぬんだと思った。強く、動けと念じた。体は動かなかったが、代わりに足の力がふっと抜け体が前のめりに倒れた。そのおかげでその凶刃の致命傷は避けることが出来たが、切っ先が左目を縦断したのだ。それで左目はもう使い物にならなくなった。

父と傷のトラウマ、受けた傷の痛みから意識を手放した。そして目が醒めたら病院のベットで寝ている、父が捕まったことを知った。母さんにめちやくちや怒られて、その後抱き締められた。こんなことになって正直、申し訳ないと感じた。おかしいかもしれないが入院費のこともそうだ。そのことも含め、母さんにもう一度ゴメンと言った。母さんは『司が生きててくれて良かった』と言ってくれた。本気で心配をかけてしまったと心から反省した。入院費のことはあなたが心配することじゃないわよと言って、手をとりに乗せて撫でてくれた。そして入院費のことは誰かが負担してくれたのだと言った。誰かとは誰と聞いたなら知らないと言っていた。名前も言わずお金だけを置いて去って



しまったらしい。入院中に受付さんや看護婦さんにその人のことを聞いてみたら、その人は変わった格好をしていたそうだ。

見ず知らずの人に親切に出来るというのはどういう心持ちなんだろうか。例え、誰かが血を流していても俺には怖くてそんなことは出来ないと思う。ただその人には会って、ちゃんとお礼が言いたいと思った。

◆◆◆

「……………う……………」

目が醒め、またあの夢だと思った。しかしここ数日の夢と違うのは入院のところだ。いつもは気を失って目が醒めていた。

「……………そう言えば、そうだったな。……………何処に居んのかなあ」

思い出すようにそう呟いた。

「……………母さん、俺、すっかりやってるよ」

不思議と気分は全く悪くなかった。

◆◆◆

「…だいたい遅く起きちゃったな」

時刻は7時18分。しかも今日は土曜日だ。十分早いと言えば早い。

「うーん、走るの……………食べてからで良いか」

予定が決まりベットから降り、キッチンへ向かう。途中で異変に気が付く。

「……………何でベットから手が出てんだ？」

おかしい。確かに俺の部屋に寝られる所は二つあるが、俺はルームメイトはいない。しかもちゃんとドアに鍵を掛ける。……………あれ？昨日掛けたっけか？…まずいな、忘れてたかもしれない。つか思い出せない。

司は別のところに行きかけた思考を無理やり持つて来させた。そして司は恐る恐るその毛布を掴みめくつた。

「……………むにゃむにゃ……………すーすー」

とても安らかに眠っている女の子がいた。その顔を見てしまったら何だが起こすが申し訳なくなつてしまい、毛布を掛け直した。

「…まあ、布団は使つていない方だから別に良いか」

そう言つて朝食作りに取りかかった。休日も食堂は開いているのだが土日は自分で作ると決めているのだ。メニューはご飯に味噌汁、焼き鮭と漬け物。その動作は手慣れたものでテキパキと作つていく。

その匂いに誘われたのかペタペタとした足音がキッチンに近づいて来た。

「……………ん〜…なんか良い匂いがする〜。かんちゃんつて料理出来たっけ〜？」

まだ眠いのか目を擦りながらそう聞いてきた少女。名前から察するにかんちゃんつ

てのはこの子のルームメイトだろ？つかなんて俺の部屋に居たんだけ……おっと、まずは挨拶だな。

「おはよう」

「おはよう……つてあれ？かんちゃんじゃなくなっただけ。なんで？」

な、なつきー？名前なのか？それ。えーとこの子の名前は確か……。

「のほほんさん、でしたよね？」

正直名前ではないと思うがこの名前？しか知らない。

「そうだよ。布仏本音、16さい」

なるほど、本名は布仏本音さんというのか覚えておこう。と言うか歳はいう必要あったのか？

「えー布仏さんはどうして俺の部屋に？」

「うーん、分かんない。気が付いたらここにいたよ。確か……お花を摘みにを行くこうとしていたよ。うーん、分かんない。気が付いたらここにいたよ。確か……お花を摘みにを行くこうとしていたよ。うーん、分かんない。気が付いたらここにいたよ。確か……お花を摘みにを行くこうとしていたよ。」

うーんと唸って腕を組む動作をする布仏さん。

お、お花を摘みに？表現を濁しているがしつかりその内容がわかってしまった。何だか聞いたこつちが恥ずかしくなってしまう考えないようにしようと思った。……と言うか気が付いたらってそれは大丈夫なんだろうか。俺の所に運良くたどり着けたから

良かったものの。いや、良くはないが……。少し布仏さんのことが心配になって来ていると『ぐうぐう』つとお腹が鳴る音が聞こえた。俺ではないので、もしやと思いい布仏さんの方を見る。するとお腹を押さえ、視線を下に向けていた。若干だが頬が赤くなっている気がする。

「……朝食、食べますか？」

「……いいの？」

そう言つて顔を上げる。

「ええ、少し多めに作りましたから布仏さんが食べても問題ないですよ」

「じゃあ、食べる。ありがとね、なつきー。えへへ♪」

布仏さんの顔が花が咲いたようにパツと笑顔になった。感情が豊かな人だなと思つた。戻つたとはいえ自分はこのままで感情を顔に出せない。少し良いなと思つたがその事よりも、目の前の布仏さんの笑顔を見られて良かったと感じてしまった。ただ純粹に笑う人を見たのは母さんの他には初めてな気がする。水面さんは純粹ではあつたけど何かありそうな気がするし、織斑は……。あんま見ないな。うん。つか、あんまり接点が無い気がする。まあ……いいだろ。今は食事だ。

「では、食べましょうか」

「うん！手伝うよ」

布仏さんが食器出しなどを手伝ってくれたが、ご飯を装う茶碗が一つしか無かったので布仏さんに使わせようとしたら、私が使うのは流石に悪いよと言いつ俺に使わせようとしたのだ。そこから誰が使うか話し合いになったのだが布仏さんが唐突に切り出した。

「おにぎり！おにぎりにしようよ〜なつきー」

「おにぎり？」

「うん、おにぎり。それなら私もなつきーも茶碗を使わなくて問題解決だよ〜」

確かに、おにぎりなら皿に並べて置けばいいし、茶碗も使わなくていい。

「じゃあ、おにぎりにしますか」

「うん！手伝う手伝う〜！」

……手伝うと張り切っているのだがどうしても布仏さんが料理を作れる人に見えない。失礼だが。

「…あの、おにぎり作れます？」

「失礼なく！私だっておにぎりくらいちゃんど作れるよ〜！」

と言っていたので取り合えずそのまま作り始めたのだが、まあ結果は予想通りだった。

手を濡らさずに作り始めて手にご飯がついて握れず、熱がついていた。手を水で冷やしてあげて、水で手を濡らした方が作りやすいですよと言ったら、今度は濡らし過ぎてお

にぎりがべちやべちやになった。しゅんとしていたが、俺がまず作りますので一緒に作りましょうと言って一緒に作った。途中こうした方が良くないなど解説を入れたが、その度ふんふんと布仏さんが頷いていた。作り終わる頃にはちゃんとした形に作れるようになっていた。

その後布仏さんとご飯を食べた。味噌汁などちゃんと出来ているか不安になったが美味しいと言ってくれてホッとした。こうして誰かと食べるのは随分と久しぶりな気がする。自分の作ったものを美味しいと言って食べてくれたのは嬉しかった。布仏さんがありがとうと言っていたが自分も聞こえないように布仏さんにありがとうと言った。

◇◇◇◇◇

食後、お茶を布仏さんと飲んでいたら、突然私の部屋にも来ないか?と誘われた。その提案は嬉しかったが女の子の部屋に入る気になれず断らせてもらった。まあ、ルームメイトの人にも悪いなと思ったのもあるが。

布仏さんとしばらく話して一通り話終えた後、布仏さんは帰って行った。ドアまで見送ったのだが真向かいの部屋が布仏さん達の部屋だと知ったときは思わず驚いた。

布仏さんを見送り一息つく。考えてみれば久しぶりにあれだけ喋ったかもしれない。話易かったと言えば話易かった。布仏さんのあの雰囲気のおかげかも知れない。その

後、少しいい気分で走りに向かった。



日が暮れるまで走ったり、空手の練習に費やした。走ることはもちろん毎日やっている。しかし空手の練習は休日ぐらいしか時間が無いので走ることより多く時間を取っている。休日しかやらないのは、まあ、人目に付きたく無いというのもある。それから空手と言っても型や技を練習しているだけに過ぎず、実戦ではまず使えないだろうと思う。そしてそれらのメニューが終わったら必ず打鉄の所へ行く。格納庫で打鉄に乗って動作確認や傍で瞑想をするようになった。少しでも長く打鉄と居られたらと思つて始めたことだ。まあ、打鉄がどう思っているかは分からないが。

日が暮れたので自室に戻った。シャワーで汗を洗い流し、着替えてストレッチをする。体が硬いと怪我也多くなると聞いたことがあったので走った後は欠かさずするようになってきているのだ。

司がストレッチをしているとドアがドンドンと強く叩かれた。出るか出ないか少し戸惑ったが取り合えず出てみることにした。ドアを開け、出てみるとそこには織斑がいた。だがいつものような雰囲気はなく、真剣さが感じられた。

「……織斑か。どうした？」

取り合えず率直に用件だけを尋ねる。

「司……ちよつと俺の部屋に来てくれ」

「ここでは駄目な話なのか？」

織斑が頷き、声量を落として言う。

「ああ、実はシャルのことでちよつと……」

「デュノアの？」

俺がそう聞くと頷いた。ちなみに言っておくと、俺たちが転校して来たときに織斑のところ引越した。篠ノ之さんがデュノアと入れ替わったそう。その時一悶着あったらしいが俺は知らない。それで織斑とデュノアは相部屋に。俺にもルームメイトの相談が来ていたが一人部屋が良いと言ってなんとかそうしてもらったのだ。山田先生には感謝です。

「……わかった。今行く、ちよつと待ってくれ」

部屋に戻り電気などを消して、織斑の元へ向かう。ドアに鍵を掛けて織斑と移動する。織斑の部屋にはすぐ着いたのだが少し変だと思った。自分の部屋なのにすぐ入ろうとせず、ドアをノックして自分の名前を言ってから入る。どう考えても不自然だ。そう思ったが何も言わず織斑の後に続いて入る。

部屋に入ると見るとデュノアは毛布にくるまってゴホゴホ言っていた。わざとらしく。



「?。デユノアはどうしたんだ?風邪か?」

「いや、風邪では、ないんだが……」

どうにも歯切れが悪い。言葉に詰まっている織斑。一体何なんだと思い、織斑に俺を連れてきた理由を問うことにした。

「まあ、風邪かどうかはこの際、置いておこう。織斑、話つて言うのは何だ?」

「ああ、さつき言つたけどシャルのことなんだ。司にも相談したくてさ」

デユノアのことで俺に相談?なんでいちいち俺に言うんだ?いつも一緒にいる女の子達に言えばいいんじゃないだろうか?

「別に相談なら俺じゃなくてもいいんじゃないか?いつも一緒にいる女の子の方が相談しやすいだろう?」

「いや……あいつらに言うのはちよつと不味いと言うか……言わずらいと言うか……兎に角、司にしか今のところ言えないことなんだ。同じ男として……」

「そ、そうか……それで、デユノアのことを話すのに肝心の本人があれじゃ分からんから、どうにかしてくれ」

そう、デユノアはこの暑いなかでも一向に毛布の中から出てこようとしない。織斑がデユノアの所まで行き、何か耳打ちをした。その時、デユノアの毛布が動いたので何かしらの反応はしたんだろうが、全く分らない。え?つか、お前俺に相談したいって

言ってて耳打ちするんですか？俺帰っていいかな？

「司。実は——」

織斑が顔をこちらに向け、先程と同じように真剣な雰囲気漂わせて切り出した。

お前が話すんかい。え？そこはデユノアだろ？

「シヤルは女の子だったんだ」

「……………は？」

織斑が言ったのはある意味とんでもないような事だった。

## 第七話・相談、激突

織斑がよく分からないことをカミングアウトした。…あの、さっきの真剣さを返して下さい。

「……………織斑、お前ふざけてないか？ふざけているなら俺は帰るぞ」

まだストレッチが終わってなかったし、しかもIS纏って動いていたりしたから疲れたんだよな。早く夕飯食べて寝たいし。そして、デュノアが本当に女だしたらそんな重要なこと何で俺に言うのか、理由が分からなかった。

「司！俺は真剣だつて！ふざけてなんかない。シャルは本当に女の子なんだよ！」

少々声を荒げて話す織斑。うーん、まあ確かに嘘をついているようには見えないけど…本当、何で俺に相談したんだろうか。謎だ。

「…なあ織斑。仮にデュノアが女だとして何で俺に言ったんだ？悪いが俺に相談したところで何もしてやれないぞ」

「なっ!?なんでだよ、司！」

驚愕をあらわにする織斑。…そんなに驚くことか？

「いや、だつてな？俺はデユノアをどうこう出来る力を持っている訳じゃないし、織斑、お前がそこまですて助けたいと思つている理由も知らん訳だしな」

「……………俺は」

一夏が暫く考え込んで、何か言いかけた所でストップをかける。

「いや、言わなくていい。たとえ、理由を聞いたとしても答えは同じだと思ふしな」

「何でだよ司！友達が困つていたら助けるのが本当の友達つて奴だろ!? シャルと俺は友達じゃないつて言うのかよ!!」

「別にそう言う訳じゃない。言い方が悪かつたな。……………まあ俺が言いたいの、俺に言うよりお前のお姉さんに言つたほうが良いんじゃないかってことだ」

暫く言い淀んでいた一夏だったが、ゆっくり口を開く。

「……………千冬姉には…」

「心配を掛けたくないつてか？まあそうだろうな。この学園の先生つてことは生徒の安全、そして操作技術・技量の向上のためにやらなきゃいけない事が山ほどあるだろうからな。その気持ちは分かるさ。だが仮にデユノアが本当に女だったとしたら、それは俺たちが口を出して良い話じゃない。そう言う国のゴタゴタは先生とか大人に任せておけばいいんだよ。俺達は何にも出来ないんだからな…」

項垂れていた織斑が不思議そうな面持ちで聞いてくる。

「……国のゴタゴタって…司、シャルの男装の件はデュノア社が関係してると知ってたのか？」

「ん？何の話だ？」

本当にこいつは何を言っているんだ？デュノアの男装の事情？俺が知るわけないだろう。

「シャルが男装しなくちゃならかったのはフランスのデュノア社社長、シャルの父親に強制されたことだって……」

「いや、知るわけないだろう。俺がそう思ったのはデュノアが代表候補生だからそう思っただけだ。候補生と言えど国で選ばれているからな。…ああ、もちろん実力でだ。だからデュノアが女だとしたら、何かの形で国が絡んでいるはずだと思ったから俺は何も出来ないと言ったんだが……父親がな……」

ある意味驚愕した内容だった。デュノアの過去、それは父親に良いように使われているというものだった。

父親に奪われた時間がある。酷く自分と似たものを感じた。そしてそれよりも自分とは違うという矛盾も感じた。

「シャルって、代表候補生だったのか？」

「…うん。別に隠していたわけじゃ無いんだけど、言う機会が無くて……でも何で君は知ってたの？」

織斑とデュノアの視線が俺に注がれる。

「あー、入学して2、3日したら織斑とオルコットさんが俺と模擬戦するみたいなことになってただろ？その時織斑先生に呼ばれててな、聞かされたのはその時だ」

デュノアは頷いていたし、織斑はあく成る程だからあの時と言っていた。ふう、もういいだろうか。

「まあ、そう言う訳だ、じゃあな」

言って帰ろうとしたが織斑に慌てて止められた。

「ちよつ、ちよつと待ってて司。まだ話は終わってない！」

まだあるのか？もう話すことは何も無いんだが。

「いや、俺の話は終わった。あとはデュノア個人の問題だ。大体その男装の発端が父親にあるならそれは家族の問題だろ？それこそ他人が口を出していい内容じゃない。」

織斑の手を払って、言い聞かせるように喋る司。それはまるで自分にも言っているように。

「それとな織斑、他人の過去に踏み込んで良い時といけない時ぐらい分かるはずだ。デュノアの過去はまさにそれだ。確かに辛いときに手を貸してやりたくなるのも分か

るさ。たが自分の問題は自分が決着を着けなきゃならねえ時もあるんだ。その時に前は力を貸してやればいい。だがその判断はデユノアに決めさせろ。間違ってもお前がその判断に口を出すな」

織斑は何も言えずに固まっついて、俺はチラリとデユノアのほうを見た。表情は影に隠れて見えなかったがどんな表情をしているかわかった。まあ、あれだけ織斑が言っ自分は何もなかったんだ、浮かんでいるのはきつと、失望とかそんな表情だろうと思っった。

「……………せっかく相談してくれたのに悪いな。変なことばかり言っちゃまって。まあ、俺の言葉は流してくれて良い。俺はこのことは誰にも言わないから安心してくれ。ただ織斑、お前の姉さんには相談してみろよ。……………じゃ」

返答も聞かずに部屋を出た。何も喋らず自分の部屋に戻る。

「……………なに偉そうに言っつてんだかな。決着着けねえといけないのは自分の方だつてのにな……………」

思わず渴いた笑いが出た。

「……………行かなきゃな……………墓参り」

何かを決めるように、そう呟き、自室へと戻って行った。



次の日、朝起きて一番最初に思ったことは昨日の織斑とデュノアのことだ。話も碌に聞かず、押し付けるようにして出てきてしまった。やってしまったと盛大に後悔した。自分でもなぜあんなに言ったのか分からない。いや織斑が何故一番に俺に相談してきた方がわからないが今はそれはどうでもいい。まあ、信頼してくれたんだらうと言うことにしよう。

だが、それがあの結果だ。結局俺は信頼して相談してくれたであらう織斑を裏切ってしまったことになる。

「……………はあ、何やってんだらうな俺。最近こんなんばつかりだ」

また気分が憂鬱になった。自分が招いたことなのでさらに質が悪い。

「……………午後くらいに織斑のそこ行つて謝るか……………謝つてどうにかなる問題じゃないだらうけど」

謝つて、デュノアの問題を後で織斑と一緒に考えようと思い、日課のランニングの為にベツトから降りた。その時、何かが足に当たりドササツと崩れる音がした。何だと思ひ音のした方を見ると積み重なったノートが崩れていた。中身が見えるように崩れているのもあり、書かれている内容が何なのか分かる。

そのノートに書かれていることはISについての基本知識や各機体の特徴、打鉄の事などが細かく書かれていた。また、あるノートには上から下までビツシリと字が書かれ



ているものもある。その中から一冊を手取る。

「これ、授業でやった所だな。……駄目だ、覚えられてねえや……。後でもつかい復習しないと……あ、そう言えば昨日ノート切らしたんだ。また買わなきゃな」

よく見ると司の机の下には積み重なったノートが大量に置いてある。机の下の空間は殆どノートによつて場所を取られているほどだ。

とそんなことを言いながら司はランニングの為に部屋をあとにした。



適度に汗をかいた後、格納庫には行かず職員室に行った。IS・アリーナ使用許可を先生に貰いに行くためだ。

時刻は8時。この時間帯なら誰か先生がいるだろうと思つたからである。朝早くにアリーナに行けば誰とも合わないだろうし、周りも気にしないで済む。それに前、射撃練習していて、たまたま装備一覧を見ていたら、「超長距離射撃兵装装備「撃墜（げきつ）い」」という覧があつた。

え？何これ……兵装？兵装つてことは……戦争とかに……？ヤバイな、日本。

まあ、兎に角、気になつてそれを選択してみたら、戦車砲みたくにでかく長い砲身。それにグリップとトリガー。胴体に弾薬カートリッジと排莖部分だけを着けただけの簡素な作り。衝撃吸収ゴムの塊でできたストックを着けてても殆ど衝撃を殺せない程

の反動。そして弾が2発しかないし、当然のことだが連射なんか出来ない。だが威力は絶大。

まあそんなことなんか知らずに、アサルトライフル【焰備】の感覚で撃つたら大変なことになった。まず肩が脱臼しかけた。そして射撃位置からだいたい1mくらい吹っ飛ばされた。

着弾場所を見ると、的から大きくズレていたし、当たったであろうアリーナの壁が大きく壊れていた。あと音も凄かった。まさに爆音と言ってもいい。その音のせいでアリーナにいた人ほぼ全員が俺に視線を向けていた。

気まずくなりその日の訓練はそれで終わりにした。だが、脱臼しかけた肩が痛くて堪らなかった。相当痛そうな顔をしていたのだろう、たまたま会った山田先生にすぐに心配された。

「…あ、長崎君、いつも…ってどうしたんですか!？」

「……ああ、山田先生、どうも。いや、先程までI訓練をしていたんですが、見たことない装備があつたので試しに撃ってみたら肩を痛めてしまつて……」

「見たことない装備?」

首をコテンと傾けたせいで眼鏡が少しズレてしまつた山田先生。

「はい、【超長距離射撃兵装装備『撃墜(げきつい)』】って名前なんですけど……」

「……………え？長崎君あれを使っただんですか？あれは反動がとても強い物ですから、大丈夫でしたか!？」

名前を聞くなり顔が驚きと言った表情になり、体の確認のためかポンポンと叩いてくる。

「え？ちよつ…山田先…!!?？」

肩を叩かれた時、体の中に電撃が通ったような激痛が走り、痛みで言いかけていた言葉が引つ込んだ。

「あ…す、すいません…」

俺の反応が反応だったのでシユンとしてしまった山田先生。なんだろう、山田先生見たら微妙に痛みが和らいだ俺はおかしいのだろうか。

「……………えつと、山田先生、保健室ってどこでしたっけ？」

今だに場所を覚えていない俺エ……。正直恥ずかしい質問である。

「えつと、ここからですと、その角を左に曲がって、2番目の角を右に行けば保健室ですが、心配なので私もついていきます！」

山田先生が優しくすぎて俺涙出てきそう。痛みなのか分からないけど……。取り合えず山田先生と一緒に保健室へ。というか俺保健室入るの初めてだな。

その後、保健室の先生に見せたらやはり脱臼だった。だが重症では無かったらしく、

外れかけた関節を戻してもらったが2、3日固定して絶対無理に動かさないことと言われた。まあ、確かに癖になっても困るので言われた通りにした。そして3日後くらいにもう一度先生の所に行ったら右肩関節部分に注射された。音も無くいきなり注射されたので驚いて飛び退いてしまった。と言っても注射された後だったので意味は無かったが。その中身を聞いたが教えてくれなかった。未認可のよく分からない薬でないことを信じたい。ナノマシンとかそんなのであつてほしい。

それから注射をのおかげか、驚くほど痛みは引き、3日ほどしたら肩も普通に動かせるようになった。



ということがあつたからな、あれを撃つときは気を付けないと。そんなことを思いながら職員室に入った。中には山田先生を含み、数人の先生しか居なかった。まあ休日だしそんなものだろうと思つたが織斑先生が居なかつたのが意外だと思つた。織斑先生は休日でも学校にいるような気がしていたんだが……うーむ、違つたようだ。取り合えずそのことは置いておいて山田先生に声をかける。

「山田先生」

「あ、長崎君おはようございます。早いですね」

「おはようございます。早くに目が醒めちゃいまして。どうせならISの訓練でもと思

いましてね。あの、アリーナと打鉄の使用許可をもらっても良いですか？」

「はい、構いませんよ。ちよつと待って下さいね」

— そう言つて山田先生はパタパタと机に向かつていった。そして紙を手にして戻つて来た。

「はい、こつちが貸し出し用紙です。それからアリーナは第三アリーナを使用してください」

山田先生から紙をもらい、スラスラと書いていく。もう慣れたものだ。しかし、第三アリーナか…格納庫から近いな。山田先生が氣遣つてくれたんだろうか？だとしたら嬉しいな。

「……つと、書けました。それと第三アリーナですね、ありがとうございます」

「はい、確かに受け取りました。……あのく長崎君」

俺が書いた紙を受け取つた後、山田先生が尋ねてきた。

「はい？なんですか？」

「長崎君のIS、打鉄ですが一時専用機にすることは出来ますよ？初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）を行えば、待機形態にした打鉄でもアクセサリー状態になりますから。でも本当にやらなくていいんですか？長崎君なら特別に学園が許可を出しているんですが……」

「いえ、打鉄の貸し出しを最優先で廻してくれただけで十分ですし、俺に打鉄の『初期化』と『最適化』をするってなると何か、皆に悪い気がしまして、俺にするくらいならもつと他の人達でもいいんじゃないかと思ってしまうんですよね」

俺の説明を受け、しばし呆ける山田先生。だがその後フツと笑って、そうですかと言った。

職員室を出るときに山田先生に頑張ってくださいいねと言われた。何かやる気が出たわ。



第三アリーナまで着いた俺は早速、『撃墜（げきつい）』の射撃練習をする。

朝の静寂な空気の中、誰も居ないアリーナに大砲のような破裂音が約10秒間隔で一発、二発と木霊した。

撃ち終わりと同時に空葉莢が排莢（リジエクト）され地面に落ちる。

「…っふうっ…っ…いってー」

息を大きく吐き出す。いつの間にか息を止めてしまったようだ。

先程のはISを展開させて、加速推進翼（スラストー）を起動させていたから衝撃は初めの頃ほどとはいかないが、まだまだ凄く痛い。一日に何発も撃てないなと思い、的を見る。

「……外れてるな、見事に」

弾は的から大きく上にズレていた。まあ、撃った時あんだだけ銃身が上に反ればそうなるかと思っただが……これだと実戦で使い物にならないな。どうしようか？と司が考えていると誰かが近づいて来た。

「大きい音がしたので誰が何をやっているのかと思いましたが、長崎さんでしたの？」

「あれ？オルコツトさん、おはようございます」

なんとオルコツトさんが話しかけて来た。試合後から普通に話したりしているんだが、いやまあ俺からは喋らず織斑に促されてからだ。取り合えず、挨拶は大事だよな、うん。

「ええ、おはようですわ。お早いですね？」

「ええ、何か目が醒めちやいまして、どうせなら練習をと思ひまして。そういうオルコツトさんも早いですね？まだ8時ですよ？」

「わたくしは休日はいつもこの時間帯にはISを動かしているんですわ。ところで、先程の音はいったい……」

音の正体が気になるのか聞いてきた。でも隠すほどのことではないので教える。

「これです。この【撃墜(げきつい)】っていうので練習していたんです。といっても、的には全然当たりませんでした」

ついつと視線をそちらへ向ける。続けてセシリアも顔を向ける。

「……見事に上に外れていますわね」

オルコットさんの言葉に思わず苦笑した。それからオルコットさんは何か考え込んでしまったので、再度射撃の練習をする。

空になった弾薬カートリッジを交換して、薬室に装填する。しかし、落ちている薬莖を見てみて、でかいなと思う。マジで戦車砲使つてんじゃないだろうか？

そしてまた、先程と同じように撃つが同じように外れてしまう。……何故だ？うーんと悩んでいるとオルコットさんが声をかけてきた。

「……射撃を見て思ったことなのですが、貴方のIS、反動相殺装置ついていますの？」「え？反動相殺、ですか？」

分からないと言った風で返す。それが伝わったのか、そうですと言って説明してくれた。

「実弾兵器には反動がありますよね？簡単に言えばそれを軽くしてくれる機能のことですわ。わたくしのブルー・ティアーズはレーザーやビット等を扱うBT兵器ですから反動はあまりありませんが一応付いているんです。打鉄にも確か付いていたと思うのですが……」



メニュー開いて、それを確認する。

「……………ありますね。OFFになってますが」

まあ、授業で銃を撃つ訓練なんてやってないんだよね。だから付いてなかったのかな？しかしこんな便利なものがあるんだったらもつと早く教えて貰いたかったわ。

「……………わたくしはそんな状態である時、長崎さんの攻撃を喰らってしまったんですの、なんだが複雑ですわ」

なんだがオルコットさんがボソボソ言ってる。え？何？俺何かしましたか？

「……………んんっ！ですが、これで反動はいくらか良くなる筈ですわ」

確かにそうだと思います、反動抑制装置をONにして撃つてみることにする。

「……………ふうー……………」

見られているせいなのか若干緊張する。深呼吸を数回繰り返してから撃つ。

一発、二発とまた、けたたましい音が響く。撃つて見て感じたのは、確かに前よりも反動は少なく撃ちやすいと感じた。的はどうなったと思いき前を見る。

「……………的に、当たって、る？」

ど真ん中とはいかないが、的には当たっていた。それが何故か妙に嬉しかった。

「今度はちゃんと当たっていますわね」

「はい！オルコットさんのおかげです。ありがとうございます」

「ふふつ、何だかこちらまで嬉しくなりますわね」

そう言つて微笑む姿はお世辞無しで美人だと思つた。織斑め、何で気付かないんだ？

「はあ、オルコツトさんも大変ですね」

「？。何がですか？」

「いや、織斑のこと好きなんですよね？あいつは全く好意に気が付かないから、好きになつた人は苦勞するなと思ひまして」

「なつ……す、好きつて、わたくしが一夏さんをですか!？」

顔をすつごく真つ赤にして話すオルコツトさん。正直その反応だけで、ああ織斑のこ  
と好きなんだなと分かります、はい。

「はい。違うんですか？」

「……………いつから気が付いていましたの？」

顔を下に向け、小さい声で聞いてきた。

「えー、織斑のこと好きなんだなと思つたのは最近ですね。初めのうちは、織斑に対してやけにスキンシップ多いなど、まあそれが外国なりの表現なんだなと思つていました。ですが、他にも織斑のこと好きな女の子いますよね？」

「……………ええ、箒さんと鈴さんですわ。他にもいるかと思ひますがわたくしが知つてい  
るのは主にこのお二方かと」

普通に喋っているが顔が紅い。まあ、自分の好きな人が他人にバレるって恥ずかしいよね？俺は知らんが。

「オルコットさんが篠ノ之さんと凰さんと、何て言うのかな…張り合ってる？内に、ああそんなんだなと思いましたね。篠ノ之さんと凰さんの場合は露骨過ぎてすぐ分かりました」

「……あ……………う……………」

顔を先程よりも真っ赤にして、口をパクパクさせている。相当恥ずかしかったんだろう。

「あ、いや、別に織斑に言うとかしないので安心してください。ただまあ、頑張ってくださいね」

「え、ええ。ありがとうございますわ。そ、そちらも訓練頑張ってくださいー！」

脱兎の如くと言った感じで、オルコットさんも自分の訓練に行ってしまった。何か、またやつちまった感があるなと思った。ふと時計を見て、あと少ししたら織斑のところに行くかと決めた。

◇◇◆◇◇◇

二発撃ち終え、一息付く。周りを見ると空葉がたくさん転がっていた。

「……………あれ？俺こんなに撃ったっけ？」

時刻を確認し、驚く。現時刻15:25分。前に確認した時間から約3時間ほど経っていたのだ。

「……どうしよう。今から行ったとしても織斑、部屋にいるかな?」

行くか行くまいか悩んでいると後ろから声をかけられる。声の主は、布仏本音（のほとけほんね）さんと相川清香（あいかわきよか）さん、鷹月静寐（たかつきしずね）さんである。

「あれ? なつきーだ。 やっほ」

「本当だ! 長崎君だ! ど、どうしよう、私話すの初めてだよ!」

「わ、私も初めてだよ! だ、だつて長崎君、何となく雰囲気か怖いとか何て言うか……」

「えく? そんなことないよ。 なつきーは私と一緒にご飯作ってくれたよ」

それを聞いて二人に激震が走る。

「……なん……だと! 一緒にご飯を作る、と言うことは」

「すでに、長崎君の部屋に入っていると言うことに……」

「本音、恐ろしい子!」

あの、コントみたいなことやってるけど丸聞こえだからね? そんなに距離ないからね?  
?

「あー、一応言つて起きますけど、布仏さんは寝ぼけて間違えて俺の部屋に入ってしまった

たからでして、ご飯を作ったのは布仏さんがお腹を鳴らしたらですよ？」

「わく！なんで言っちゃうの？なつきー。恥ずかしいよー！」

「なんだー」

「やっぱり、本音は本音かー」

二人とも何かほっこりしている。まあ分からなくもない。自分も長い袖を振り回してポカポカしてくる布仏さんをみて何かほっこりするからな。

それから布仏さんを宥め、問う。

「ここに居るってことは訓練しに着たってことだと思いますが訓練機は……」

三人とも訓練機には乗っていない。ちなみに俺は布仏さんに叩かれる前に降りた。

「そこにあるよ」

と指差したのは入り口付近。確かにISが二つある。あれ？二つ？

「二つしかないんですが……布仏さんと相川さん、鷹月さんのうち、誰が乗るんですか？」

とそちらに顔を向けると、二人は驚いた顔をしていた。ヤバイ、名前間違っていたか？

「…私達の名前、覚えててくれたの？」

「え？あ、はい。クラスメイトの名前は覚えるようにはしているんですが苦手で、お二人

とも合っていましたか？」

「は、はい！合ってます！」

「う、うん。合ってます」

良かった、間違っていない良かったようだ。

「それで、乗る人は？」

布仏さんと相川さんが手を上げる。

「訓練機の順番がやつと私達に回って来たんだよ」

「うーん、私はあと二人か一人だった気がするな」

え!?それって…もしかして鷹月さんが今日訓練出来ないのって俺のせいか?………

うん、俺のせいだわ。

「……すいません、鷹月さん。鷹月さんが今日訓練機乗れなかったの俺のせいかも知れ

ないです」

そう言つて頭を下げる。そしたら慌てながら良いよ良いよと言つてくれた。ううむ、

罪悪感がハンパじゃない。

「…あつ!でしたら俺の機体に乗ってください。三人で来たのに一人だけ乗れないつても嫌だったでしょうし、俺は少し休憩しようとしていたので、どうぞ使ってください」

「え!?!いいの!?!」

「なにー！静寂だけずるいぞー！」

「そうだ、そうだ」

「フフフ、これは私に与えられた特権よ！」

何か、微笑ましいくらい仲が良いな。その光景を見守っていたら、爆音と土煙が上がった。土煙が晴れ、その方向を見てみると近くにオルコットさんに嵐さんが居た。

どういう状況か分からないが流れ弾が来たらヤバイので、急いで打鉄に乗って三人を俺の後ろに來させる。これでまあ、三人の盾にくらいはなるだろ。

よくオルコットさんと嵐さんの方を見て見ると、二人とも上を見ている。何だと思  
い、俺もそちらを見る。肉眼でははつきりと顔までは分からないが、あの黒い機体には  
見覚えがある。

「……あれは、ボーデヴィツヒさんか？」

ハイパーセンサーを使い、確認。うん、確かにボーデヴィツヒさんだ。と言うことは  
さっきの音はボーデヴィツヒさんがオルコットさんと嵐さんに向けてやったこと  
になるな。

だが、それでもここが危ないということに変わりはないので、布仏さん、相川さん、鷹  
月さんの三人を急いで避難させることにする。

「三人とも、俺の I S に掴まってください。距離があるとは言え、流れ弾の危険がありますから早く」

「う、うん」

相川さん、鷹月さんが俺の両腕に、布仏さんは肩車。……あれ？おかしくね？

「……布仏さん、何で肩車？」

「だって私の掴まる場所がないよ〜！」

ま、まあこの際しようがない。

「しっかり掴まっていてください！」

そう言っつて、加速推進翼（スラスト）展開させる。速く動いてしまうと三人の体に負荷がかかってしまうので速すぎず、かといって遅すぎたら危ないのでしっかり移動しないとイケない。俺が動いたのとほぼ同時に戦闘が始まった。後ろから激しい音が聞こえる。

怖いがこの三人の方が怖いに決まっている。I S を纏っておらず生身で戦闘に巻き込まれかけているのだ。恐怖は俺の比ではないだろう。

「……大丈夫だ、絶対」

無意識の内に声が出ていて、両腕に少し力が入る。俺なりに彼女達を励まそうとしたんだろうか？絶対なんてあり得ないが、少しでも彼女達の気が紛れてくれればいいと



思った。

チラリと相川さん、鷹月さんに視線を向ける。すると二人ともこちらを見ていて、視線が合ったとき力強く頷いた。布仏さんは頭上から頑張つて、なつきーと言つてくれた。

励ますつもりが逆に励まされちゃったなど内心そう思い、不思議と怖いとは思わなくなつた。

◇◇◇◇◇

三人を入り口付近、訓練機のところまで運ぶ。ここなら流れ弾が飛んでくる確率は低いだろうし、二人にはISに乗ってもらえば、取り合えずは安全だろう。いざとなつたらISの絶対防衛がある。

ハイパーセンサーであちらの様子を確認する。ボーデヴィツヒさんは無傷、オルコツトさんと凰さんは満身創痕といった感じだった。

「……………専用機持ち二人がかりであれつて、どんだけボーデヴィツヒさん強いんだよ」  
自分が加勢しに行つてもやられることが目に見えているがやらない訳にもいかない。どうしようか考えていたら足に何か当たった感触がした。見てみると、それは空葉莢だった。

「……。そうだ、あれなら……」

あれなら、少しくらい気を逸らすことが可能なんじゃないかと思った。別段、ボーデヴィツヒさんに攻撃を当てるつもりはない。どうか当たらないだろう。

すぐに『長距離射撃兵装装備〔撃墜（げきつい）〕をメニュー覧から呼び出す。布仏さん達がいるところでは撃てないので移動する。後ろから危ないよと声を掛けられたが大丈夫と言つて移動。といつても4〜5メートル離れたただけだ。

「よし……………頼むぞ、〔撃墜〕」

息を止め、体の揺れを少なくする。心臓が少しうるさく感じた。

一発目——

大砲のような音とともに一発目の弾丸が発射。放たれた弾丸は狙い通り、手前の地面に着弾、土と煙を巻き上げた。ボーデヴィツヒさんの姿が見えなくなってしまったが、気を惹くには十分だ。

暫くして土煙が晴れかかってきて、もう一度撃とうとした時に警告音と表示。

『自機、敵にロックオン中。警告。攻撃弾道、左斜め方向、前方警戒』

警告とほとんど同じタイミングで煙の中から攻撃が来た。

「なっ……………ぐう!？」

完全には避けしきれず、左腕に衝撃が来た。腕がもつていかれそうになるような衝撃と反動で吹き飛ばされた。

そのとき手に持っていた【撃墜】のトリガーを偶然引いてしまった。弾丸の行き先は分からない。

吹き飛ばされ、地面を数回転がり痛みで少し意識が朦朧としていたが、顔を前に向けるとき驚愕で意識がはつきりと戻った。

偶然撃った弾は、ボーデヴィツヒさんのところにいった。喰らえばただでは済まないが、ボーデヴィツヒさんは喰らっていないかった。

「……止まって、る？」

片手を前に出し、そこから膜のようなものが形成され、手前で弾丸が止まっていた。

「……ふむ、停止結界を使っても腕が少し痺れたな。まともに喰らえばヤバかったかも知れん」

誰に言うまでもなくそう呟き、開放通信（オープン・チャンネル）に接続。

いきなり誰かから通信が入った。何とか了承ボタンを押す。すると驚くことに通信してきたのはボーデヴィツヒさんだった。

『驚いたぞ、長崎。まさかお前が助けに入るとはな』

地面に伏してしる体を起こして、なんとか声を出す。

『……ええ、一応……友達の大切な仲間らしいですからね。本人が居ないんじや、俺がやるしかないなと思っただけですよ』

『…………ふっ』

それにただ鼻を鳴らして答えただけだった。

『仲間か…………くだらないな。かつては私もそんなものがあると思っていたよ。…………だが、そんなものはまやかしだと知った、いや思い知らされた』

声のトーンが低くなり、顔を伏せた。ボーデヴィツヒさんも過去になにかあったのだと思つた。

『まさに、地獄の底にいた。だがそんな私を教官は救つてくれた。また私に光を見せてくれた』

教官、誰のことか容易に分かった。織斑先生のことだ。

『憧れたよ、あの人の強さに。どうすればあそこまで強くなれるのか、考えた。力だ！力があればいいと思つた。圧倒的なまでの力があれば、また教官と同じ所に私は立つことができる！』

語尾が強くなつていき、最後にはほぼ叫ぶように言っていた。だが、そのような力強い言葉を聴いても、司はただ空しいと思つただけだった。

『…………力は確かに大切だ。…………力が無ければ何も守れないから、何も示すことが出来ないから』

体の痛みを忘れて、ただ真つ直ぐにボーデヴィツヒさんを見て、言葉を紡ぐ。

『……力を手にしたとしても、使い方を間違えればそれは力とは呼ばない。ただの暴力だ』

過去の光景がフラッシュバックする。それを振り払うようにキツく目を閉じ、またゆつくりと開いた。

「……………」

「……………」

互いに視線が交差、沈黙がその場を支配する。誰も喋らない。

しかし沈黙は銃弾の音とともに破られた。

「——!?……………ちっ!」

動いたのはラウラだった。いきなり警告音とデイスプレイに横方向からの攻撃と表示された。驚きはしたが冷静に攻撃方向に向けて『停止結界』を発動させる。

「…雑魚が次から次へと」

ボーデヴィツヒさんが視線を向けた先に、司も視線を向けた。

「……………織斑、デユノア…」

デユノアが銃を二丁構え、織斑が白式を纏い、一振りの刀を展開していた。

助けに来たのか、騒ぎを聞きつけたのか、どちらにしろ今は助かった。あの空気の中で戦いたくなかったから。

織斑から通信が入った。なんだと思い、出てみる。

『司！大丈夫か!?』

通信を入れた途端にでかい声で喋られたので耳が痛かった。

『…あ、ああ、俺は大丈夫だがオルコットさんと凰さんが大丈夫じゃないかもしれない』  
『なっ?!……くそっ!あいつ』

女の子のことをあいつって、やつぱり怒ってるな。いや、そりや怒るか。

『ああ、いやISがあるから命に別状があるってほどじゃない。まあ、なんだ…助かったよ、織斑。デュノアにもそう伝えてくれ』

『—!。へへっ、気にすんなって友達だろ』

そんな会話をしてそこから早かった。織斑が瞬時加速（イグニツション・ブースト）をしてボーデヴィツヒさんに突っ込む。しかしバリアのようなもので止められる。が、すかさずデュノアが銃火器で援護。

ボーデヴィツヒさんが銃弾を避けるためにかざしていた手を離れた。

すると織斑にかかっていたバリアのような拘束が解けた。織斑はすぐさま瞬時加速（イグニツション・ブースト）をし、ボーデヴィツヒさんの背後に回り込んで二人を回収する。

「一夏！二人は大丈夫?」

「ああ、大丈夫みたいだ。機体の損傷は結構あるし、気は失ってるけど無事だ」  
織斑達の戦闘をただ見ていることしか出来ない。やはり専用機持ちの戦いはレベルが違うなと感じた。

その戦いを見ていたら、ふとボーデヴィツヒさんとまた、視線が交差した。

「……………飽きたな」

動きを止め、何かを口にしたボーデヴィツヒさん。ここからじゃ聞こえない。

「……………なに？」

「興が冷めた。織斑一夏、続きはトーナメントでだ。…………長崎もな」

織斑達に何かを言い、ISを解除してスタスタと歩いて行つた。

織斑とデュノアもIS無しのボーデヴィツヒさんを襲う訳にも行かず、何か不満と言つた顔をしながらこちらに向かつて来る。後ろから声がしたので振り返つて見ると、布仏さん達もこちらに来ていた。

ほつと一息ついた途端に体に痛みが走つた。特に酷いのはボーデヴィツヒさんの攻撃を喰らつてしまった左腕だった。

「……………ぐっ…………腕、折れてるかも……………」

地面に倒れ、気を失つた。

## 閑話・保健室の会話と闇の中の少女の語り

この会話は司が保健室の先生に注射を射たれた後の話である。

ソフィア・ガーネット・パヴレッツカ（ソフィア・G・パヴレッツカ）。それが私の名前だ。もともとロシアで研究員として働いていたが、医師免許や教員免許も持っていて、軍医として働いていたこともあってか3年前にこの学園に着任した。今は保健医として働いている。

「ソフィア先生！聞いていますか？」

突然だが私は今、怒られている。目の前にいる人は山田真耶先生。普段おっとりしていて、とても大人には見えないがしつかりしている女性だ。こういう人物が怒ったりすると恐ろしいと感じると思ったのだが、山田先生は別らしい。

「ええ、しつかりと聞いていますよ山田先生。長崎君の話でしよう？」

「はい、そうです。先程話をしたのですが、よく分からない物を注射されたと言っていました。何を注射したんですか？」

「ただの栄養剤ですよ」



そう言って笑って誤魔化す。だが山田先生はじいっと見つめてくる。あまりにも  
だったので私が折れた。

「……いや、すいません。栄養剤ではないです」

「……やっぱりですか。それで、何を注射したんですか？」

聞いた話、私は患者にどうも過保護と言うかやり過ぎてしまいうらしい。

つい先日、足を擦りむいた女の子がいた。普通ならば消毒してガーゼか絆創膏を貼れ  
ばいいらしいのだが、私は消毒して、私の作った傷口に塗るクリームを付け、ナノマシ  
ンを薄い透明なフィルムにしたシートをはり、そこからガーゼもしくは絆創膏を被せ  
る。それをすると傷の治りも早く、瘡蓋（かさぶた）の過程を飛ばして治り、傷痕がまっ  
たくと言っていいほどに無くなるから喜んでくれるのだが、他の先生達のやり方を見て  
いたら自分のやり方がまったく違うと言うことに気が付いた。

「私が作った、自然治癒力を高めるナノマシンを長崎君の肩から直接注射したんです」  
「だ…大丈夫なんですか？それって」

予想外の答えだったのだろう。少し顔を青くする山田先生。まあ、当然の反応だ。

「ええ、毒物ではないのでまったく問題はないです。肩に注射したナノマシンも血中を  
通って全身に運ばれます。ただし数週間程度で自然分解しますので安全ですよ」

これは本当だ。現に私の体で一度試したのだから、断言できる。

山田先生はほっとしたような表情をした。

ただ、と私は付け足した。

「ただ、そのナノマシンの治癒の限界を超えてしまつたら危ないです。ナノマシンが周りの細胞まで巻き込んでその細胞を殺してしまうという可能性がありますから」

実験体（マウス）にも打ち込んで、どこまでが限界なのか試したことがある。個々によつて差はあったが大体、体の一部欠損や深い切り傷、体に穴が空かない限り殆どが治ることが分かった。

「大丈夫ですよ、山田先生。普通の高校生はそんな重度の怪我なんて負いませんから。しかもここはＩＳ学園。ここほど安全なところはないですよ」

山田先生はそ、そうですね!?!うん!と何やら大きめな声で言っていたがバツチリと聞こえている。そのあとハツ!書類が!?!と云つて足早に出ていつてしまった。

部屋が静かになり一息つく。

「……普通の高校生か」

言葉を反復して、思い出す。長崎司という子のことを。

女の子はよく保健室に来るが二人しか居ない男の子はまったくといっていいほどこない。いや、先程一人来たが。肩が痛いと言う理由で。見てみると肩が脱臼しかけていたのだ。もう少しで完全に外れるというところまで来ていた。これは少々まずいなと

思い、そつとナノマシンを注射したんだが彼は注射の存在に気付くとバツと飛び退いてしまった。注射が嫌いだったのか？と思っただが、知らぬ間に注射されるのは怖いだろうと思ひ、少し申し訳ないと思つた。

しかし、私は見た。飛び退いた瞬間翻つた衣服から見えた肌。痣や擦りむいたような傷、何かで切つたような傷痕がたくさんあつた。ん？と目を疑つたが気のせいだろうと思ひ、考えないようにしていたが、やはりあれは錯覚などではない。何故と疑問に思つた。何故十六歳そこらの少年の体にあのような傷があるのか。だが暫く考えたところで答えなど出るはずもなかつた。



少女は闇の中にいた。闇から産まれたと言つてもいいだろう。

闇しか知らず、闇と常に一緒だつた。だがそんな彼女にも部隊の仲間というものがない。辛い訓練に共に耐えた、仲間と呼べるものが。

だが、ISの運用が本格化してきた頃、その被害は私にも降りかかつて来た。

ISの適性を上げるために目にナノマシンを移植。それは疑似ハイパーセンサーと呼ぶべきものでISを装備しなくとも、動体視力、反射神経を爆発的に向上させるものだ。

私はそれに適応出来なかった。：いや、出来なかった訳ではない。その大き過ぎる能力を私は使いこなせなかった。それに体がついて行けず、私の軍の成績は最悪だった。それから私に待っていたのは、部隊員からの嘲笑と侮蔑そして『出来損ない』という烙印だった。まさに地獄だった。その頃の私は何を考えて生きていたのか、何故生きていたのかさえ分からない。ただただ何も考えていなかったんだと思う。

だが、そんなとき教官が私の前に現れた。教官は光を見せてくれた。あの人の言った通りの訓練をしたら、今までが嘘のように感じられた。嘲笑や侮蔑ももう気にならなくなった。ずっと煩わしかった『瞳』も使いこなせるようになった。軍のIS部隊としても私は一番になった。今の私があるのは全部教官のおかげだ。

その頃から強く思った。あの人の側にいたい。憧れもした。あの強さに。

私は意を決して教官にどうしてそこまで強いのか？どうすれば強くなれるのかと聞いてみたことがある。教官は弟から強さというのは何なのかを教えられることがあるといて、優しく微笑んで自らの弟のことを話した。そんな顔で笑う教官を見たとき、胸がチクリと痛んだ。

その分らない感情はやがて、憎しみへと変わった。教官にそんな顔をさせる弟とやらが気に入らなかった。なによりも教官の経歴に傷をつけたことが気にいらなかった。だがこんな私にもカミサマとやらはチャンスを与えてくれた。

教官の弟、織斑一夏が世界初の男性IS操縦者として現れたのだ。私はすぐさま入学手続きをした。だが私のIS〔シユヴァルツェア・レーゲン（黒い雨）〕はまだ完全に調整ができていなかった。発表された段階では調整が完全になるまではあと少しというところだった。だがらあのような中途半端な時期に転入するしかなかった。

だが私の他にも転入生が二人いた。驚いたことに二人とも男だということだ。しかしどうでもよかった。私がここに来た理由は教官にまた指導してもらうため、教官の弟である織斑一夏を倒す為である。

教官はあの頃と変わっていない。私が憧れたあの頃のままだ。しかし織斑一夏。教官の弟だというのにその腑抜けた表情。ますます気に入らん。そして気がついたら私は織斑一夏に平手を喰らわせていた。教官の前でという気持ちもあつたが少しスツとしました。

それから数日後、転入生の一人、長崎司という男が模擬戦をすると小耳に挟んだ。正直どうでもよかったが織斑一夏とも戦うらしいので奴の実力を知るには丁度いいと思いい見に行つた。

見に行つて思ったことは長崎司というやつは何故専用機を使わないのかということだった。いくらコアが貴重だといっても女にしか乗れないISに男が乗れたのだ。男がISに乗る。それだけでも十分にデータはとれるが専用機ならなおさらだ。専用機

を提供しない企業などないはずだが……と思っていたら試合が始まった。

試合が終わり、結果は長崎司が負けた。当然と言えば当然だろう。専用機と訓練機だ。勝敗は見えていた。しかし私は目が離せなかった。織斑一夏の戦いではなく長崎司にである。

戦い方は素人丸出しのお粗末なものだったが決して諦めず、常に勝とうと模索して動いていた。そんな奴を見ていて不思議と昔の自分を思い出した。自分はあそこまで必死になったことはあつただろうか？

いや、あることはある。だがそれは教官が来てからだ。教官が来る以前の私はどうだった？どこかで諦めてしまっていたのではないか？もしあの時教官が来てくれなかったら……とそこまで考えて私はその事を考えるのをやめた。

それから奴のことが妙に気になっていった。そして合同演習のときに話しかけた。顔を見たとき初めて分かったことがある。それは目だ。奴の目は澄んではいる、だが奥の方が濁っていたのだ。私は鏡を見るということをほとんどしないからあの時や今の自分の目など知らないがきつとこのようになっていっているんだと感じた。

こいつは何を経験してきたのか？もしかしたら私と同じような経験があるのではないかとも思った。そのことを聞こうとしたが何故だが口が動かなかった。代わりに出てきたのは試合のことだった。

いい試合だと思ったのは紛れもなく私の本心だ。少なからず私はその試合から目が離せなかった訳だしいい試合と呼ぶに相応しいだろう。

長崎からは一瞬、言い淀んでから答えが返ってきた。ん？と思ったが気にすることはなく、少しの間だか会話が続いた。会話の最後で私は自分のこと少し長崎に呟いていた。何故奴に話したのか今でも分からない。

それから数日経った休日、私は二人の専用機持ちちに戦闘を吹っ掛けた。理由は単純、織斑一夏を誘き寄せるためだ。しかし、奴が来る前に教員に止めに入られるか、教官に止められるかも知れないのでちょっとした賭けのようなものだった。

だが止めに入ったのは長崎だった。止めに入ったのは友達だから、仲間だからと言う理由だった。

正直、私はもう仲間というのは信じられなかった。信じれるのは自分だけだ。長崎の言葉を聞いて少し感情が爆発した。また奴に私のことを話してしまったのだ。教官のこと、力のこと。

そして長崎から返ってきた答えは、力は扱いきれなければそれはただの暴君にしかないと言うことだった。そうなのだろうか。力とは示してこそ価値があるものだ。それを振るわなければ何も無いのと同じではないのか。

私が長崎の目を見て、奴が私の目を見る。ただただ沈黙が流れた。だがそれは織斑一

夏、シャルル・デユノアの乱入で破られた。

このまま戦つてもよかつたのだが気分がのらなかつた。長崎と話しているうちに興が削がれてしまったんだと思う。織斑一夏には続きはトーナメントでということと言つた。長崎にも。

正直、奴とはあまり戦いたくない。技量・力量とも私の方が上だが勝てるという明確な想像があまり浮かんで来ないのだ。

そんなことを思い、考えながら私は自室に戻つて行つた。



## 閑話・男同士の対決、VS織斑一夏

オルコツトさんとの模擬戦が終わった翌日、俺は再びアリーナへ来ていた。

何故かって？そりゃあ織斑と対決することになっていたからだ。ぶつちやけ正直勝てる気がしないが、無様に負ける気などはさらさら無い。

ちなみに織斑もアリーナへ出ていて、対面でにらみ合っている。まだ試合開始の合図が出ていないからでもある。

すると、織斑から開放通信（オープンチャンネル）が送られてきた。

『司、機体の調子はどうだ？』

『ああ、問題はない。元々損傷はほぼしていなかったしな、相当オルコツトさんが手加減してくれていたんだと思うよ』

まあ、機体を直したのは俺ではなく先生方や先輩方が直してくれたんだがな。先輩方なんかは嬉々としてやってくれたぞ、何故か。

織斑に文字通り身に染みて代表候補生の強さが分かったと言ったら苦笑された。

『さて、司。全力で来い！俺も全力で行く！』

『言われなくても分かっているよ。じゃあ…』

そこまで言って試合開始のブザーが鳴った。

『行くぞ!!』

◆◆◆

やはり初動が速かったのは一夏だった。司は少し出遅れた形になる。一夏は雪片をエネルギーブレード状にはせずに、突っ込んで行く。

「はああああ!!」

「……ちっ!」

織斑の攻撃をなんとかかわすが打鉄の加速推進翼（スラスト）ではすぐに追い付かれてしまうので、拡張領域（バススロット）からアサルトライフル【焰備】を取りだし乱射する。別段当たらなくてもいい、牽制くらいになれば儲けものだ。

だが織斑は比較的弾幕の薄いところへ掻い潜ってすぐに追い付いてきた。思わず舌打ちが出る。

そしてそのままのスピードで雪片をエネルギーブレード状にし、横に薙ぐ。

一太刀でもシールドエネルギーをこっそりともっていかれるので咄嗟に持っていた【焰備】を斬撃の進行方向に重なるように上へかち上げる。パチンと【焰備】から火花が散った。

「ぐっ……ぐっ」

数秒間だけ雪片は止まったが呆気なく「焔備」を切り裂いてしまい、そのせいで肩部の盾に鋒（きつきき）が当たってしまった。

『…お前の雪片（それ）本当に反則臭えな。鋼鉄の塊を普通に斬るって、どうなってるんだよ』

『俺のこれは千冬姉からの貰い物みたいなものなんだけどな。うーんと、自分のシールドエネルギーをそのまま攻撃力に昇華して相手の防御を打ち消す。俺もよく分かんないんだが、防御無効化攻撃ってやつだな』

だから、さっきの銃も斬れたんじゃないか？と言っていた。

『……そうか。わざわざご丁寧にありがとよっ！』

加速推進翼で織斑に一気に近づき、腰の近接ブレード「葵」を抜刀する。対して一夏も雪片式型で迎え打つ。

◇◇◇◇◇◇◇◇

暫くは斬る、かわす、受ける、受け流すといった具合の試合が続いた。

《織斑一夏・シールドエネルギー残量：292》

《長崎司・シールドエネルギー残量：96》

良い試合だったと言えるがやはり機体スペックの差、操縦者の操縦技術が数段階上を行っていたという所だろう。

「はあ、はあ、はあ」

「ぜえ…ぜえ…ぜえ…」

どちらも疲労があつたが司の方が一夏よりも明らかに疲れていた。

「……………くそ…勝てないまでも、もうちよつと行けると思つたんだが…やつぱり無理だつたか……………」

そう呟き、悔しいと思つた。今まで悔しいと思つたことなんていくらでもあつた。いつも思つていたのは自責の念と他への劣等感、そして悔しさ。だが今は不思議と心が晴れやかだ。こんな感情があるなんて知らなかつた。

「……………ふふつ……………なんか、良いな…これ」

何故か勝手に頬が綻んでしまう。口の端から言の葉が漏れた。

すると、織斑から開放通信が入ってきた。

『……………司…お前もそんな風に笑うんだな。…あつ、いやつ、別に悪い意味じゃないんだけどさ。ほら、司つてさIS学園来てから俺、笑つたりしているところとか見たことなかつたからさ。でも、今日司のそんな顔が見られて良かったよ』

こつちから織斑の顔は鮮明に見えていないが声が若干弾んでいたので嬉しそうなのだと言ふことが分かる。

『……………まあ、それは織斑、お前のお陰でもあるんだがな』

『—！。へへへっ』

『…なんだか照れ臭いな。再開するか』

『おう！』



その後も戦ったが、次第に織斑に追い込まれていき、隙を付かれ、ブレードの攻撃を受けて俺は敗北した。

## 独白・少年と少女、子供達

一人の少女の両隣に数人の男女がいた。歳はバラバラで妙齡の女人や高齡のおじいさん、温和そうなおばあさん、凜々しい成年。その後ろにもまだ小さい少女や少年と言えらくらいの歳の子供がたくさんいた。

日本人だと一目でわかる子供達もいたが、日本人ではない少年や少女も数人いた。そしてその大人、子供達の対面に居る少年の両隣には一組の男女がいた。

大人達の表情は嬉しそうだったが、対して子供達の反応はそうでもないようだった。心配そうにしている者、少年の顔をじつと見つめている者、涙目になっている者までいる。

少女が前に出てくると同じく少年も前に出てきた。どちらとも表情に変化がないが、瞳の中は寂しそうにしていた。

少年は子供達、男女問わず皆と仲が良かった。

少女の方も子供達、男女問わず仲が良かったが特に仲が良かったのは少女に取ってこの少年だろう。

殆どの時間を一緒に過ごし、大人達からは兄弟みたいねと言われ、子供達からはお兄ちゃん・お姉ちゃんと呼ばれていた。

今日が少年にとって、少女達との別れの日だった。旅立つのだ、お世話になったここを。

少年が手を引かれて踵を反そうとしたとき、少女に呼び止められた。

少年は振り返り、少女は少年と二言、三言話しをした。そして少女と少年は約束を結んだ。

二人はその約束を必ず守ると言った。

そして少女は少年の左手首にカラフルとは言えないがよく出来た贈り物を結んだ。

その後自分の右手首にもその少年と同じものを結んだ。

少女からの贈り物があり、子供達からの贈り物もあった。

少年は子供達からそれを受けとり、大事そうに胸に抱いた。

そして少年は手を引かれ、少女は背中を優しく押されながら、二人は別れた。

ただ、少女、子供達、大人達は少年が見えなくなるまである者は手を振り、ある者は瞬きをせず少年達を見つめていた。

少年が見えなくなつてから子供達は落ち込んだり、泣いたりしている者がたくさんいた。ただ少女だけはずっと少年が消えた方を見ていた。

一人が少女の頭をポンポンと叩き、一人が頭をくしゃくしゃと撫で、二人が少女の両手を握り、子供達が少女の背中を押した。

少女は暫く泣いた。それは別れた哀しみゆえだったのか、皆の優しさで泣いたのか知る者は少女しかない。

その数週間後、少年と同じように少女もそこを旅立った。

今では少年と少女のように新たなお兄ちゃん、お姉ちゃんが皆を纏めている。

少女と少年が居たそこは今だ残っている。いつも子供達の元気な声や大人、子供の笑い声が聞こえてくる。

新たな子供達を迎えるため、旅立った子供達が遠慮なくまた来れるようにとの思いで。

少女が少年にあげたのはミサンガ。切れると願いが叶うとされている御守り。

子供達が少年にあげたのは押し花。四つ葉のクローバーの葉だ。



（『また会えて、今まで見たいに仲良く出来ますように。——くんが幸せになりますように』）

（『いつか必ず会えますように。——ちゃんが幸せで、元気でいますように』）

## 第八話・突然の操縦者

暗闇からゆっくりと意識が浮かんでいく。何か夢のような夢でないようなものをみた気がする。だがそれは意識が浮かび上がったときには何を見たのか忘れてしまった。

目を開いた時、見たのは茜色に染まった天井だった。

「……………(こ)は…」

何処なんだろう？ そう思わずには要られなかった。まだ頭の思考回路が追い付いていないが、自分が横になっていることは何となくわかった。

「おや、目が醒めたかい？」

横から声が飛んできたので顔をそちらに向ける。そこには先週お世話になった保健室の先生、ソフィア先生が業務用の椅子に腰かけてこちらを見ていた。

「……………ソフィア先生…痛っ！……………」

そう言つて体を起こそうとするが、腕に鈍い痛みが走り起き上がれなかった。よくよく見てみると首から三角巾が下がっていて、そこに腕を固定させられていた。

包帯を巻きやすくするためにブイレザーが脱がされていて、ソフィア先生を見ると

枕元にブレイザーが綺麗に畳んで置いてあったのを視界におさめていた。

「ふむ、やはりまだ腕は痛むかね？」

「え？……あ、はい」

「まあ、骨に罅（ひび）が入っただけだから安静にしていればすぐに治るさ」

「すぐ治る？あれ、罅ってそんなすぐ治ったっけか？おかしい……俺の辞書には書いてないよ、そんなこと。」

「……いや、まああの砲撃かすって罅だけですんだのはある意味幸運なのかもしれない。思いっきり折れたと思っていたしな。」

「……は、はあ……」

「その様子だと覚えていないのかい？……では君はボーデヴィツヒ君の攻撃で腕に罅が入った、という所までは覚えているかい？」

「そこは覚えているというかそこしか覚えていないというか罅入ったことは知らなかった訳だが、取り合えず頷く。」

「それから君を抱えて大慌てと言った様子で織斑君達が駆け込んで来て私が君を見ていた、という所かな？……ああちなみにだけど織斑君達はアリーナの件や訓練機の使用書類の書き物があってね、教員の方に連れて行かれたよ」

「……ああ、そうだったんですか。何か申し訳ないことしちゃったなあ……。先生にも手間

かけさせてしまって、すいません」

ただでさえ仕事が多いはずなのに俺がここに居るつてことは帰る時間がさらに遅くなることになってしまう。申し訳ねえな、本当。

織斑達にもまた迷惑をかけてしまった。後で謝っておこう。

「よい……しよつ……いててつ……」

「ん？別に無理に起き上がることはないぞ？無理して治りが遅くなったりしたら本末転倒だからな。さすがの私も骨に付ける薬はないんだ。まだ、ゆっくりしているといい」  
え？何、骨に付ける薬は……それ以外はあるのかな？いや、何にしてもこれ以上迷惑をかけるわけにはいかない。

「……いやもう大丈夫だと思うので帰ります。本当にヤバくなったら、また来ますので」

「……そうかい？うーん、そう言うなら無理には止めないが何か異常があればすぐに来てくれ。出来る限り優先して診るよ」

ありがたいなあと思いつながら保健室を出ようとした、その時ソフィアが思い出したように、そう言えば……と呟いて司に告げた。

「そう言えば、新しい男性操縦者が見つかったそうだよ。私が教えなくても明日の朝には知ることになるだろうが、知っておいたほうがいいだろう？」

「え？見つかつたんですか？」

そんな風に言つたが別段不思議ではなかつた。女性しか動かせないにしても絶対ではないはずだから。つか、俺 I S のことよく知らないんだよな。授業で習つたと言つても詳しく分からないし……うーん勉強し直すかな。

「うん、今朝突然ね。なんでも専用機をもう持つているらしい。教員に聞いたんだがね、以外に強かつたらしいよ」

「………凄いですね。なんて言いますか、色々」と

俺なんかとは天地との差だな。まあ当たり前か……これはきつと顔まで良いに違いない。

「………ただ私は家柄的に好きにはなれないだろうがね」

ボソツとソフィアは呟いた。

「え？先生、なにか言いましたか？」

「ん、いやなんでもないよ。君はもう帰るのかい？」

「あー、はい、帰ろうと思います」

「うん、またね。引き止めてしまつてすまない」

『はい、また』と言つて保健室を後にした。因みにブレイザーはちゃんと回収した。



「……うーん、三人目の男か……どんな奴だ？」

司は若干いつもより慌ただしい先生達を視界に収めながら、話題の転入生のことを考える。

「……こんな中途半端な時期に入って来るのか。……いや、まあ俺も人のこと言えないけどさ……しかし、何で今なんだ？ I S の搭乗試験はもうとづくに終わっていただろうに……」

少し引つ掛かりを覚えながら司は自室へ戻って行く。

件の I S 男性操縦者が I S 学園に来たのはタッグマッチ戦まであと 2 週間前のことだった。

## 第九話・紹介とお昼どき

翌日、クラスの話題はやはり件のＩＳ操縦者のことでもちきりだった。

だが俺はそのＩＳ操縦者のことを全く知らない訳で、詳しく織斑に聞こうとしてもデュノアと話してるし、どうしたものかね？

「なつきーおはよく。ねえねえ、知ってるー？新しく男性の操縦者が来るんだよー」

司がそんなことを考えていた時のほほんさんが話し掛けてきた。

「え？あ、おはようございませす布仏さん。はい知っていますよ。ただどんな人が来るのか分からないんですけどね」

そう言つて苦笑したら、私もだよーとにぱーと笑つた。

何だろ、優しい気持ちになる笑みだな。

すると、布仏さんと一緒にいた谷本療子さんが口を開いた。

「え？長崎君も知らなかったの？てつきりこの子だけかと…」

「えー、ゆっこ失礼だよー。なつきーに」

「……………え？…」

「いやいや、テレビとか見ませんし、確かにそういうのに疎いなんていう自覚はあるので気にしないでください、谷本さん」

なんか逆にこつちが気まづくなってしまった。

「…あ、そうだなつきー。腕大丈夫だった？」

気を利かせてなのか、素なのか分からないが布仏さんが別の話題を振った。

「何？何の話」

「うんとねえ、なつきーが私とあつきー（相川清香）としずしず（鷹月静寐）を守ってくれたんだよー。えへへへ、なつきーの肩車高かったなー」

「一体どういう状況だったのよ…」

その時のことを思い出してから、布仏さんは長く垂れた袖で口元とを隠しながら笑い、谷本さんはそんな状況が分からず困惑していた。

あの時か、俺も必死だったからな。……今思えばまずい事したかもしれん。女の子に肩車だもんな……。

「なにになに？何の話」

「本音、どうしたの？」

そう言いながら会話に入ってきたのは、この話の中心の相川清香さんと鷹月静寐さんだ。もちろん布仏さんもだが。



「なつきーが私たちを助けてくれたことだよー」

「あー、あの事か。いきなりの事だったよね」

と相川さんが言い、鷹月さんがそれに続いた。

「うん、だからビツクリしたし、怖かったよ」

布仏さんはうんうんと頷き、谷本さんはうーんと唸っていた。

ちなみに昨日保健室から帰った後、織斑達に会った。そこで、織斑や布仏さん達に『迷惑をかけた』ということを伝え謝った。すると織斑達は慌てながら『気にしなくていいよ』と言ってくれた。安心してまくりだったね。なに言われるか内心ビクビクしてたから。あ、後、織斑はちゃん姉さんにデュノアの事を言ったみたいだった。なんでも薄々疑問には思っていたがそこまで手が回らなかったらしい。デュノアはデュノアでこちらに残りたい、織斑達と一緒にいたいと言ったららしい。『いいんじゃないか?』と言ったら『それだけ?』と言って驚いていた。いや、俺の方が驚きつすわー、織斑さん。つか、デュノアは何か手でもあのかね?残るつつつても事が事だからな……うーん。デュノアが今後普通に生活したいんなら、案としてはデュノア社を追い込む又は潰すか、か?……だがこれが本当にデュノアの為になるのか?と言われれば何とも言えないな。最終的に本人が決める事だし、かと言って話を聞いちゃまったから放つとく訳にもなあ……。

俺が考え込んでいたら話はいつの間にか女の子達のトークが繰り広げられていた。完璧に入り込めない……というか入っちゃまずい気がしたので、織斑先生達が来るまでボーツとしてた。

そういえば、昨日痛かった腕が今朝起きたら痛みが少なくなっていたのはどういうことかしら？麻痺でもしたのかねえ。

「……あ、あの長崎さん？」

「オルコットさん？どうしました」

ん？オルコットさんが話しかけて来たぞ。しかもなんかおずおずといった感じだし、どしたんだろ。

「あの、先ほどの話は本当でした？」

「先ほど？」

「ええ、腕を怪我なされたとか」

ありや、聞こえていたか。まあ、案外席が近いから当然か。

「ええ、まあそうですけど、軽症なので大丈夫ですよ」

「……ほつ、それは良かったですわ、安心しました。しかし、わたくし達の戦いに巻き込んでしまい、尚且つ助けてもらったなんて、本当になんてお礼を言ったら良いか……」

「いえいえ、本当に気にしないでください。助けたと言っても織斑達が来てくれなかつ

たら俺の方がボロボロになっていたでしょうし、助けるつもりが俺の方が怪我を負ったんですからお礼なんかいいですよ。俺よりオルコットさん達の方こそ大丈夫ですか？何か保健室にいたらしいですけど……」

そう、昨日俺が起きるちよつと前までオルコットさんと凰さんは保健室にいたらしい。そうソフィア先生に聞いた。

「ええ、わたくし達は怪我を殆ど負っていませんわ。怪我といったら、この子（ブルー・ティアーズ）の装甲がある程度壊されてしまったくらいですし、鈴さんもそのようだと聞きましたわ。壊されたと言っても、タックマツチ戦に支障は出ない範囲ですし、良かったですわ。ありがとうございます、長崎さん」

そう言ってくれたオルコットさんなんだが、俺は特に感謝されるようなことをしたのか？うーん……。

「いや、まあ…俺にお礼をするなら、織斑にどんどんアタックして下さいよ？オルコットさん。俺は応援してますから」

「なっ……あ……う。わ、わかりましたわ、長崎さんがそこまでいうのなら、そうしてあげますわ」

そう言った途端、顔を朱に染めて口ごもりながら返答するオルコットさん。わっかかりやすい反応してるなあ……。

「あと、タッグマッチ戦お互いに頑張りましょうね」

と切り出して、話題をタックマッチ戦のことについて話す。すると先程まで朱に染めていた顔を、凜として返す。

「ええ、そうですね。……ところで長崎さんはパートナーは決まったんですの？」

「いや、まだですね。どうしようかなって悩んじゃって……：オルコットさんは決まったんですか？」

「はい、わたくしは鈴さんと」

『ああ、なるほど。仲良いですもんね』といったら微妙な顔をしていた。

そこから話がどう織斑にアプローチするかという話題になり、最終的に“料理を作る”ということになった。なんでもオルコットさんは前にも織斑の為に弁当を作って、食べてもらって評価は良かったらしい。

そして、折角なので、昼に織斑達と屋上で食べるので来ないかと誘われた。うーん、弁当は作って来ていないんだが……あ、そうだ。どうせならあれを試食して貰うか。感想聞きたいし。

「お邪魔にならないければ、是非」

最近は学食ばかり行っていたから、たまには違ってもいいかもしれない。

「ええ、わたくしは構いませんよ。長崎さんの感想もぜひ聞かせて頂きたいですわ」

昼食を一緒に食べることが決まった後、話題は転入生のことになった。

「そう言えば、また男性の操縦者がくるらしいですね」

「ええ、そのようですね。一夏さんにデユノアさん、長崎さんの他に四人目の操縦者。

しかもそれが【鷺ノ宮】だなんて……」

「鷺ノ宮……？」

名前、なんだろうが……知らんな。オルコットさんが知っているんだから有名なんだろうが……いや俺が無知なだけか。そうだな、うん。

「そうですね、簡単に説明致しますと【三大財閥】の一つとさせて頂ければいいですわ。その財閥にはIS企業も傘下に入っている者は少なくないと言われていますの。一番上から『鷺ノ宮（わしのみや）』、次に『朱鷺ノ宮（ときのみや）』、そして最後に『鷺ノ宮（さぎのみや）』という風になっています」

『鷺ノ宮』が生み出し、抱える資産は膨大で世界でも知られています。なので企業側もそこから資金提供されているところもあるとか、ですわね。それに『鷺ノ宮』と『朱鷺ノ宮』は今時珍しく、男女の経営で成り立っている所ですの。今は女性が主体となっているところが多いんですが、その二家は女尊男卑とはほぼ関係ない、というらしいですわよ」

「……なるほど、女尊男卑なんてする必要がないからなのか、ただ単純に男女の仲が良い

からだけなのか……」

それと、と言つてオルコットさんは続けた。

『鷺ノ宮』ですが、あそこは二家と違い、ほぼ男子だけで経営しているそうです。今は女性が強いので、男性だけというのは珍しいんです。そういう意味からも『鷺ノ宮』は有名なんですわ」

ふむ、なるほど……そういうことだったのか。ん？つてことはむつちやすごい奴が来たつてことか。

「つてことは、結構凄い奴が来たつてことですかね？」

「そうなりますわね」

へえ、と関心しながら話はまた違う方へ変わつていった。

「そう言えばオルコットさんは織斑に何のお弁当作つたんですか？」

「サンドイッチを作りましたの」

「へえー、よく料理は作るんですか？」

失礼だが、完璧にお嬢様にしか見えないオルコットさんが今まで料理を作つてきたとは思えない。

「いえ、全くしてきませんでしたの。はあ、チエルシーによく言われていましたのに、わ

たくしには関係のないことだと思っておりました……うーん、今思えばきちんと聞いておくべきでしたわ。……し、しかし一夏さんはおいしいと言ってくれましたし……案外いけるのかもしれないわね……」

ん？んー？最後の方は何かにもよると言っていて聞こえずらかったな。しかし全く料理を練習したことがないのに上手い……だと。すげえな、俺なんて初めの頃はレシピ通りに作っても何か変な味になっていたりで苦労したもんだ。

そんなこんなで、『お昼休みが待ち遠しいですわ』と言いながら自分の席にオルコットさんは戻って行った。

恋してるなあ、オルコットさん。

先生が来るまで何もやることが無くなったのでまたポーツと外の景色を眺めていたら突然、ガララツという音を立てて扉が開けられた。先生来たか？と思いい視線を向けるとボーデヴィツヒさんだった。スタスタとこちらまで歩いて来て、隣の席に腰を降ろした。

ちなみにだが俺の席は窓側の一番最後の席。そしてボーデヴィツヒさんが俺の隣という事になる。

初め頃はこうしたもんかと若干怯えていたが、特に何も無かった。別段ボーデヴィツヒさんは何もして来ず、腕を組んで目を瞑っているのがデフォだから。今日もそうだと

うと思つたが……何か視線を感じる。……えつ、と思ひチラリと隣に視線を向けてみた。  
「……………」

何か……………ボーデヴィツヒさんがこつち見てる。話し掛けるでもなく、ただこちらを見てくるつて案外来るものがあるな（精神的に）。

横からの視線が耐えられなくなり、ボーデヴィツヒさんの方を向いたら、極々自然にスツと何事も無かつたかのように前を向いていた。

……………何なんだ？ 一体、うーむ、分からん。

暫くの間、自分はもしかしたらボーデヴィツヒさんに何かしていたのでは？ という思考に陥っていたが、織斑先生と山田先生が来たので中断した。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございませす、皆さん」

ガラツと扉が開き、先生が教室に入つて来たのと同時にすつと教室が静かになり、立っていた生徒は早足で席へ着席する。すげえ。

「あー、お前達も知つているだろうが、今日から転入生が来る。織斑、デユノア、長崎、お前達三人でフォローしてやつてくれ」

「え……ちふつ……織斑先生シャルは……………」

え？ 馬鹿なのかアイツは？ 何で自分から墓穴掘ろうとしてんだよ！ 何口走ろうとし



てんのか知らんがまずいだろ。

織斑先生が弟に普段の二割増しにキツくなつた眼光で見据え、咄嗟に俺が咳払いして注意を促す。

デユノアを見てみるが：ダメだ固まつてる。

意識をデユノアから織斑へ向ける。つ：伝わったか？喋るなという意図が、というか伝わっていてくれ。

「……い、いえ、何でもありません」

ほつ、良かった。伝わったか：チラツと織斑先生を見てみると、ふつと短く息を吐いていた。

つか、咳払いした時に周囲の視線がこちらに一気に来たから恥ずかしかったぜ。

「あー……五月蠅いから騒ぐなよ？おい鷺ノ宮、入つて来て良いぞ」

織斑先生に促され、教室にひとりの男が入ってきた。迷いなく歩き、教卓の横で止まり、こちらを向く。それだけの動作だけでも何故か様になっていて、女性陣からは『ほう』と息が漏れていた。

ほー、さすがだな。何か歩き方まで品があるように見える。しかも顔のパーツが整つてるなあ。髪は鬱陶しくない黒の短髪。背は俺や織斑と一緒にぐらいか。うんと、まあ要するにイケメンが来たわけですよ。イケメンが。

「えっと…鷺ノ宮一樹（さぎのみやいつき）と言います。この環境に少しでも早く馴染めるように頑張りたいと思います。どうかよろしくお願いします」

……思ったよりも普通の挨拶だな。何か家の紹介でもすんのかと思っていたが、しなかつたし。

だが、周りでは囁き程度だが声が飛び交っている。『やっぱり』とか『うーん、イケメン』とかの声が聞こえた。

「あー、静かにしろ騒ぐな。鷺ノ宮お前は空いてる席に座ってもらおう」

おー、やっぱり空いてる席にか。だとするとボーデヴィツヒさんの隣辺りかな？

ちなみにだが、織斑とデュノアが一番前で何で俺が窓側の最後の席かと言うと、簡単に言えば空いてたから。織斑は始めっからあの席だったけど、デュノアは俺達と同じで後ろになる筈だったんだが、デュノアが座っている席にいた女の子が物凄い勢いで『私の席にどうぞ』と。結局その勢いに負け、デュノアは今の席に。俺にも『織斑君の隣に』というのもあったが逆にこっちが説得し、俺は今の席へ。……ボーデヴィツヒさんは迷い無く座ってたな。織斑をぶつ叩いてからすつと現在の席に。うん、スゴかつたわ。

「はい、分かりました」

そう言つて俺の予想通り、ボーデヴィツヒさんの隣へ。

「えーつと、ラウラ・ボーデヴィツヒさん、だっけ？宜しく」

にこやかにそう言って、手を差し出す鷺ノ宮。握手？何、お前本当に日本人なの？初対面の人にいきなり握手って、中々出来るもんじゃないぞ。

何気に俺の隣で繰り広げられている事なので、気になってしまう。

「……………」

特に、今だ無言のボーデヴィツヒさんがどんな反応をするのかが気になる。ついつと顔をそちらへ向けて様子を窺う。

「……………え、えつと……………」

おつと、鷺ノ宮が困惑してるな。まあ、困惑くらいするわな、挨拶したのに今だ返しが無いんだから……………ん？今、チラッとボーデヴィツヒさんがこつちを見たようなの……………。

「……………よろしく」

長い、無言の後握手はしなかったが、小さくそう呟いた。

「うん、宜しく」

おおう、ボーデヴィツヒさんが挨拶を。……………やべ、何か感動した。

そこからは普通に授業が始まった。ISの訓練は今日は無く、座学だけだ。先生に強いつつと言わした奴の機体がどんなもんか見て見たかったんだが、しようがないか。



授業中、山田先生が鷺ノ宮に当てたりしてのだが、すらすら答えていた。す、すげえ、俺あんま理解出来て無かったのに。

そんなこんなで午前の授業が終わった。オルコットさんは織斑にも説明してくれた見たいで、一緒に行こうぜと言ってくれたが、あれを取りに一旦寮に戻らなくてはならないので先に行ってもらった。鷺ノ宮も誘っていたが、お弁当を持ってきていないと断られていた。

さて、俺も行くとするか。

◇ ◆ ◆ ◆ ◇

何気に屋上に来るのは初めてな気がする。こんな風になってんのか：以外に広いんだな。

「…………つ、司来たか」

織斑の声が聞こえたと思い、そちらを見てみるとオルコットさんがBLTベールを勧めているところだった。オルコットさんの顔はニコニコしているのに織斑の顔は引きつっているように見えた。いや、織斑の周りにいる篠ノ之さんや鳳さんまで何か引きつってる。デユノアは何かよくわかってない顔だ。

「……………どした？そんな顔して」

「い、いや…なんでもないぞ」

いや、何でもないような顔してねえから。

司がそのことを深く聞こうとしたとき、鈴が不適に笑った。

「長崎、だっけ？まあいいじゃない。あんたもセシリアのサンドイッチ食べて見なさいよ。美味しいから」

「ちよつ、鈴？」

「ん？別に俺は構わないけど、オルコットさんは織斑に食べさせようとしていたんじゃないんですか」

なんかめつちや、ニヤニヤしてる鳳さんを気にしつつ、聞いてみた。

「そうですが、まだありますわ。長崎さん、どうぞ」

オルコットさんからも美味しくそうなベーグルを一つもらい、『頂きます』と言ってからかじる。

「……………（咀嚼中）」

「お味はどうですか？」

「…つ、司？」

あー、なるほど。そういう訳で織斑達の顔が引きつってたんだな。結論から言つて、凄く辛い。そして後からくる苦味が何とも言えないことになっていた。

ただ食べられなくはない。子供の頃なんてよくコゲの塊みたいなもの食べてたし。いやー料理なんて作ったことないはずなのに、『お兄ちゃんの為に作る』って言われたときは嬉しかったな。密かに泣いてたしね俺。

あの頃を思い出すな。この頃バタバタしてて中々行けなかったんだよな。元気にしてるかな？

しかし、オルコットさん料理作れなかったんだな。いや、作れてはいるけど……何か味より見た目が大事って感じがする。たが、好きな人の為に頑張っているというのは伝わってくる。オルコットさんにもらったベーグルを食べ終え、口を開いた。

「……俺は好きですよ。何か、色んなものが感じられる味ですし」

「そうですか、良かったですわ！さきつ、一夏さんどうぞ」

俺の反応を嬉しそうにし、織斑に再度勧めた。そんなやり取りを横目に鳳さんが声のトーンを下げて話しかけて来た。

「あんだ、味覚大丈夫なの？あれを美味しいなんて言うなんて」

失礼な、俺の味覚は正常だよ。

「確かに凄い味でしたが、世の中には味だけが全てではないんですよ」

「ふーん、そんな物かしら？わたしには分かんないわね」

あり？確か、鳳さんも織斑のこと好きだったよな？

「まあ、鳳さんが織斑の為にお弁当作ってくるのと大体一緒ですよ」

「……は……」

サラツと言ったことに、鳳さんは以外にも食い付いてきた。スルーされるだろくらいの感じで言っただが、効果的面だったな。

「……あ、これ良かったら食べてください」

何か言つて来そうな鳳さんを遮るように言葉を発する。

俺が持つてきたのは、クッキー。渡すためにたくさん作つてたんだが、俺だけじゃ味の基準が分からんから、どうせなら織斑達に評価してもらおうと思つたから。クッキーを見てみんな驚いた顔をしていた。何？以外か、俺が料理してちや。

「……これ、あんたが作つたの？」

「そうですけど……」

信じられないのかそう聞いてきた鳳さん。

「す、すげえな司。俺こんなん作れないぞ」

「そうか？クッキーなんて生地焼いて終わりだろ？」

たぶん、小分けにしているでそれで綺麗に見えたりしているんだろ。味とかは普通だ。

「……美味しい」

「美味しいですわ!」

「……悔しいけど美味しいわね」

「本当だ、美味しいね」

「司、のほほんさんから聞いてたけど本当に料理できたんだな」

篠ノ之さん、オルコットさん、鳳さん、デュノアに織斑が美味しいと言ってくれた。う

む、これで渡せるな。

「まあ、自分が困らないぐらいには出来るな」

「へえ……」

……織斑よ、美味しいのは分かったからお前は、ベーグルを食えよ。

そんなことがあったが織斑はちゃんと完食した。まあ若干顔が青くなってるが…。

というか、自分のクッキー食べてたら、先ず鳳さんから作り方教えてって言われたし、

そしてオルコットさん、篠ノ之さんも言ってきた。断る必要も無かったので、『今度教え

ますよ』と言った。

織斑を介抱したり、料理についてオルコットさんと話していたら、鐘が鳴った。授業

まで少ししか時間がないので急いで戻った。

午後の授業もI Sの基礎知識についてやった。俺は分かるところがあつたり、分から

なかつたりしていたが、鷲ノ宮はきちんと分かっているみたいだ。織斑は…大体俺と同



じかな？

そんな感じで、鷺ノ宮一樹がやって来た初日の授業が終了した。

## 第十話・タツグと不穏な音

鷺ノ宮が来た日の放課後、俺は山田先生との補習終わりに、タツグのパートナーはどうするのか、と部屋割りについて聞かれた。

あ、因みにタツグについて基本誰とでも組んで良いらしいが、専用機持ち同士が組むと他の実力があまり分からなくなるから、専用機持ち同士がパートナーの場合はエネルギーを3割減らして戦うらしい。

パートナーについては正直決まっていけない。だからもういつそのことランダムに決められるので良いかな？と思っている。

部屋割りについては鷺ノ宮のことだ。簡単に言えば、同部屋になってしまうが構わないか？とのことだった。一人部屋でなくなってしまうのか、と名残惜しいものがあつたが、首を縦に振った。

いや、だってさいつも山田先生の顔を見ているからか山田先生若干疲れが顔に出ているような気がするんだよね。そんな状態で『嫌です』なんて言えないじゃん？実際同部屋で構いませんって言ったらほっとされたし。

そんな山田先生を見ていたからかつかい言葉が漏れてしまった。

「山田先生、ちゃんと寝ていますか？」

「は、はい？」

「あ、いえ、何か疲れているようでしたので……」

いや、本当。いつもの山田先生より何か元気がないような気が……。

「疲れがないと言えば嘘になりますが、先生このくらいは慣れつこなのでへっちゃらですよ。私よりも長崎君の方が寝ていますか？ 目元に薄っすらとですが隈がありますよ」

うえ?! マジか、気づかんかった。

「まあ、寝ていると言えば寝ている方なので大丈夫ですよ」

どっちもどっちですね、はい。……何か、いつも放課後補習という名で山田先生に聞きに行つて教えてもらつたりしているから、なんか罪悪感つぼいのが……。

「あの山田先生、何かですね……目の疲れを取るには温タオルで温めるとか、ぐっすり眠るには適度な運動をしたほうが良いらしいですよ」

「え? そ、そんなんですか?」

つい口に出してしまった。山田先生の疲れた姿を見ていたらついね。

……そう言えば、と今の山田先生を見ていたらふと思ひ出したことがあった。

真綾（まあや）という女の子が山田先生に似ているということだ。外見はあまり似ていないと思うが眼鏡を掛けていて、髪が長い。身長は160cmくらい。引つ込み思案な

せいか頼まれても断れないから、いつも無理をしていた気がする。俺も一緒に手伝っていたらいつの間にか『司お兄ちゃん』と呼ばれていたっけ？懐かしいなあ…そっから皆俺のことを『お兄ちゃん』と呼ぶようになったんだよな。

……つと、いかんいかん話が脱線してしまうところだった。

「まあ、気が向いたらでいいので試してみてくださいください」

「いえ、せっかく長崎君が教えてくれたんですから今日やりますよ。…えつと、運動と目に温タオルでしたっけ？」

「はい、そうですね。運動と言ってもそんな激しく動かなくても良いらしいので軽いジョギングくらいで大丈夫かと」

「そうなんですか？良かったです、先生運動はあまり得意ではないほうなので」

「そうか？少なくとも俺の中では山田先生はしつかりとした先生だ。運動だって不得意とは思えない。」

「誰にだって得手不得手はありますから、俺だってありますし。というか山田先生は運動が不得意、ですか？俺にはそうは感じませんが…ISの操縦もやっぱり上手いですし、授業で見せていただいた瞬間加速（イグニッション・ブースト）中急上昇からの急降下ストップも完璧でしたし、瞬間加速（イグニッション・ブースト）を左右一回ずつ展開してからその勢いを殺さずに急上昇も凄かったですし、それから……」

「わ、分かりました！分かりましたからも、もうそれ以上は……は、恥ずかしいです」  
顔を真っ赤にして止めにかかった山田先生、そこまで言って少し俯いてしまつてい  
た。

「……………えっと、なんの話をしてたんでしたっけ？」

「あ、は、はい。えっと……………部屋割りのことです」

なんの気概もなく生活出来ていたんだが、それももう終わりか……。そう思うと何だが  
惜しいな。

「そうですね、一人部屋なので相部屋は問題ないですね。ただ一人部屋に慣れてしまつ  
たので惜しいと言えば惜しいですね」

「そ、そうですね……あ、あの、無理には言いませんよ！嫌だったら言つていいですよ！」  
山田先生がそう言つて、ぐっと近づいてくる。いくら身長差があるとは言え、圧され  
てしまった。というか前屈みというか殆ど抱き着いているような感じだったのである。  
触れてはいないが。

「いや、あの、本当に大丈夫ですから。山田先生、自分は問題ありませんから」

そう言つて山田先生の両肩を掴み、すつと元の位置へ移動させた。

「そ、そうですね……………」

俺の行動で我に返り、何とか言葉を絞り出してから、ボツと顔が紅くなり俯いたまま

になつてしまった。俺自身もどうすれば良いのか分からず固まつてしまつていた。

◇◇ ◆◆ ◆◆ ◆◆

そこから5分か10分位固まつていたが、鐘の音で我に返つた。見ると山田先生も同じだつた。

何だか何とも言えない雰囲気だったので、その空気を振り払うように山田先生に別れを言つて踵を返した。すると山田先生が呼び掛けてきた。

「……………あ、長崎君」

「?。はい?」

「その左腕の……………ブレスレット…ですか?切れかかっていますよ」

ブレスレット?……………ああ、これのことか。そう思い左腕をチラリと見た、そして山田先生の前に左腕を捲つて見せた。

「……………これは……………良く出来ていますね。ミサングですか?」

「そうです。貰つたんですよ、子供の頃に。……………俺の大切な物の一つなんです」  
 そう言つて笑つたら、山田先生も微笑んでくれた。

◇◇ ◆◆ ◆◆ ◆◆

あの後山田先生と別れ、自室に向かつていた。散らかつてはいないが何となく綺麗に

はしておこうと思ったからだ。

暫く歩いていたら前方の方に変な突起物を見つけた。立ち止まって何かと目を凝らしたが、どうせ織斑がまた何かやらかしたんだろうと思った。

しかし、よくよく思い返して見れば、織斑の部屋はもう過ぎてしまったはずだ。ではあれは何だ？と不思議に思う。確かめる為に少し早足になる。

「……………」

突起物の前まで来たとき俺は言葉が出てこなかった。それは扉から出ていた。いや、出ていたと言うよりは刺さっていたと言う表現が正しい。

武骨なデザインの手紙。サバイバルナイフと呼ばれる代物が手紙と共に扉に縫いつけられていた。しかも俺の部屋に。

「……………は？……」

たつぷりと間を空けて出てきた言葉はそれだけだった。あまりの出来事に言葉が出てこない。

取り合えずこのままではまずい気がしたので、中に持って行こうとしたが、中々に深く刺さっていて抜くのになんか少し手間取った。

部屋に入ったとき何か違和感を感じた。その違和感が何なのかと首を廻らせてみた。すると使っていない方のベットにでかい段ボールやバックなどの荷物が置いてあるの

を見つけた。

「……………なんだこりあ……」

荷物の数が2、3個だったが、段ボールが大きかった。通常の段ボールよりも一メートルほど。

驚きはしたものの他人の荷物を漁るような失礼なこととはしない。すつと思考を切り替えて、先程の手紙を読みに掛かる。

手荷物をベツトに置き、一応ナイフを金庫にいれておく。鍵+暗証番号付きの金庫だからそう容易には空けられないはずだ。

ナイフは端の方に刺さっていたため、手紙を読むのには支障はない。

「……………」

手紙を読んで驚いた。まさかと思ひ二度見したが内容は同じだった。

「……………ボーデヴィツヒさんが何で俺とタッグを？」

思ったことがつい口から漏れてしまった。だってそうだろう？失礼かも知れないがボーデヴィツヒさんだぞ？……………うむ、以外だ。

『私とタッグを組まないか？』

《Laura Bodewig》



手紙にはそう書かれていた。名前が途中までしか分かんなかったが、英語では無くドイツ語なのに気が付き何とか読めた。幼い頃ちよつとした事情でドイツ語勉強したんだが、やっぱりもう殆ど覚えていなかった。

「…うーん、ボーデヴィツヒさんは何で俺にタッグ申請を？他にも良い人はいると思うんだけどなあ」

ボーデヴィツヒさんとのパートナーが嫌だと言うわけではない。ただ俺にタッグを申し込もうと何故思ったのか。理由が見当たらないのだ。

しかし別に断る理由もないし、パートナーをどうするかで悩んでいたのも事実なのでパートナーになってくれるならこちらとしても嬉しい限りだ。明日にでも了解との旨を伝えるとしよう。

そう思った俺は少しでも操縦が上手くなるように、訓練機を申請しに職員室へ向かった。

司が出ていった部屋で、段ボールがガサリとひとりでに音をたてた。



ラウラ・side in

今日の私は少しおかしい気がする。何かおかしいのかはつきりとは分からないがいつもの私とは違うような、そんな漠然とした感じだ。

ふと少し前に書いた手紙に視線を落とす。

『私とタッグを組まないか？』

《Laura Bodewig》『』

この手紙は、長崎司宛だ。手紙を書いたのは何となくで特に深い意味は無い。

日本語には慣れたつもりだったが、癖が出て名前をドイツ語で書いてしまった。書き直してもいいが、何だがそれはそれで気が進まなかった。

学年別トーナメントというのは二人一組で出るもので、パートナーが決まらずとも試合前にパートナーがいらない者同士が組み合わされる。別段誰がパートナーになっても構わんが何となく長崎にしようと思いついた。奴と一度試合したときに撃ってきたあの砲撃、止められはしたものの受けていればダメージは大きいものだったろう予測できるからだ。それに他の者よりも積極的に練を積んでいるから他の奴よりもやり易いのではないかと思つたからだ。

…しかし、よく考えてみれば誰かに手紙を書いて出す、というのは初めてかもしれない。

「……………考えないようにするか」

考えたら何か余計なことまで……………そう言えばクラリツサが何かそれっぽい事を言っていた気がする。

「……………まあ、いい。さっさと行くか」

少し考えたが出てこなかったので、思考を切って教室へ向かう。

◇◇ ◆◆ ◆◆ ◆◆

教室に入り、席に座った時ふと長崎をチラリと見た。その時手紙を部屋に忘れてしまったことに気が付き、『むう』と思い長崎から視線を外して考える。

昼に部屋に戻り、長崎に渡せばいいか。うむ、そうしよう。

だが昼に姿が無かったので結局放課後になってしまった。しかも今は放課後で長崎は副担任と話している。

そこでふと奴に直接渡す必要はあるのかと思いついた。

……………無いな。しかし何故私がいけることで頭を悩まさなければならぬのか。考えたら腹が立ってきたのでぶつけるとしよう。

しかしながら私は長崎の部屋を知らない。織斑一夏の奴の場所なら知っているのだが……………。

知らなかったので教官に聞いた。特に何も聞いて来なかったが少し頬が緩んでいた

ような……。

教官に教えて頂いた通りの部屋に着いた。そこで私は手紙と持ってきたナイフを扉へ叩き付ける。

自分の思った通りの場所に綺麗に刺さったので幾分スツとした気分になり、私はその場を後にした。

ラウラ・side out

## 閑話・if story 【俯瞰視点のパララックス】

「……お兄ちゃん」

そうたどたどしく呼ばれ、後ろを振り向く。振り向いた先には女の子がいた。

銀色に輝く髪を腰辺りまで伸ばし、女の子には似つかわしくない眼帯をしている女の子。

「——ん？どうした、ラウラ」

この子はラウラ。年は8歳で2年前、クリスとマリアナが連れてきた子だ。

ドイツという国に行った時に偶然見つけて保護したらしい。ボロボロで目は生気が無かったが今ではちゃんと表情も感情も出てる普通の女の子だ。ただ、やはりまだこちらの言葉は難しいらしい。

「——ユウスケ、ユウコ、呼んでた。……ご飯、だつて」

「そっか、じゃあ皆も呼びに行こっか。ラウラ、ほら」

差し出されたその掌を私は見つめる。



私はラウラ。ドイツで自我呆然としていた所をクリスさん、マリアナさんに拾われた。

私はISの為に生まれてきて、適合率向上のために左目にナノマシンを埋め込まれた。しかし私は適合出来なかった。正確には高すぎる能力に身体がついていけなかった。

私のいた部隊では『出来損ない』とされ、私はさ迷っていた。そんな所を私はクリスさん、マリアナさんに拾われたんだ。

私はラウラ。クリスおじさんとマリアナおばさんにそう名付けられた。私が片目のことを言ったらそのように決まった。意味は『勝利』。私のこの目に私が負けないようにとの意味が込められている。

奇しくもドイツに居たときに名付けられた名前と同じだが私はこの名前が好きになった。前までは冷たいままだったが、今は名前を呼ばれると温かくなる。

この人達はとても優しい。言葉は分からないが、こんな私とでもとても仲良くしてくれる。

「おーい、ラウラ。聞いてるか？」

『ラウラ』、そんな単語が聞こえてきて私はハツとする。

「——す、すみま…せん」

「ああ、いや、怒っては……」

「ほら、なにやっつてんのよ優助！ラウラちゃん怯えちゃつてるじゃない！」

「怯えてねえし、そう思っつてんのはお前だけだからな！過保護か?！」

「過保護よ！私はここの皆に過保護だからね——」

私は今、言葉の勉強をしている。教えてくれていたのはユウスケさん。ユウコさんも補足で分からない所を教えてくれる。

この人達もとても優しい。どんなに遅く、出来なくても教え、導いてくれる。

必要最低限、本当に必要なときにしか怒らない。ドイツに居たときは常に怒られていたが、私はこの人達の優しさに救われている。



『ラウラ、ここは慣れたかい?』

—そう私の耳に私の国だった言葉が入ってくる。聞いてくるのはクリスおじさん。私を助けてくれた人の一人だ。傍らでマリアナおばさんも聞いている。

『うん。皆優しい人達だなんて。楽しいよ』

『そうかそうか』と言って嬉しそうにクリスおじさん、マリアナおばさんは微笑んでくれた。

今の私があるのは実際この人達のお陰なのだ。この人達が嬉しいのならば私だって嬉しい。なので私も二人につられて微笑んだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ここにはお兄ちゃんがいる。私の本当のお兄ちゃんではないけれど、皆にとつてのお兄ちゃんなので私のお兄ちゃんでもある。

とても優しい人だ。私と同じ年だけども少しだけ年上なのではと思う。

それとお姉ちゃんもいる。黒髪で目付きは鋭く、口もあまり良くはないけどとても優しい人だ。

だけど口が悪いけどいつも私たちのことを心配してくれている。少しだけ自分の心に不器用なだけなのだ。

私はここでたくさんの物を貰った。私が大人になっても返していけるか分からないほどのものをもらったが、今はまだこの瞬間（とき）を刻み付けておきたい。だからま



だ、もう少しだけ、考えるのは後にしよう。

「——ほら、ラウラ行こう？」

彼はそう言って手を出してくる。

「——うん、行こう……司、お兄ちゃん」

彼と手を繋いで一緒に皆がいる建物へ入って行った。

# 第十一話・ウォーター・リリー社と同居人そしてメイドさん

あれから、訓練しようとしていたが訓練機が全て貸し出されていたので諦め、体力作りに励むことにした。EOS『イオス』(Extended・Operation・Seeker)は誰も使っていないだったので使わせてもらえた。

しかしこの時間帯EOSを纏って走ると視線が痛いので格納庫の中で手足を動かす訓練をすることにした。

格納庫に行くと水色をした髪の女の生徒が中を覗いていた。

何やってんだ?と思ったが気にしないことにして通りすぎた。通りすぎたとき目が合った気がしたのでお辞儀もしておいた。



中に入ると先ほど格納庫を覗いていた人と同じような髪色をした女の子がいた。

姉妹かなと思ったが何やら熱心に空中ディスプレイに打ち込んだり確認したりして

いる。邪魔しては悪いなと思い、音をたてないようにEOSを動かした。

片手を水平に移動させてそこから上へゆっくり上げる。その時足もゆっくり動かし体重移動させる。八極拳？もしくは太極拳の要領なのだが詳しくは知らないのを見よう見まねが付く。

しかしこれが地味にきつい。ゆっくり動く分、負荷がかかる。只でさえ重いEOSなのだから負荷は半端ではない。だが何事にも慣れというものがある。初めの頃に比べれば幾らか慣れたと言える。

そこからEOSを降り、ついでに空手の型も練習した。激しい音をたててはダメなのでこつちもゆっくり動いたが、良い経験になったと思う。

「……………ふー……………」

疲れたので一息つく。やったことがない練習だったので大分息が上がっていた。

ふとディスプレイを叩く電子音が聞こえなかったので視線を水色の髪の子へ向けると視線がかち合った。すぐに反らされたがチラチラとこちらを見てくる気配がある。……邪魔しちやったかな？

そう思ったので、暫く息を整えてから格納庫を出た。出た時まだ覗いている女生徒がいた。ストーカーか？と思ったが中に居るのは同じ髪色の女の子だけだ。心配している

のだろうと思いきや、勝手に自室へ戻った。

◇◇ ◆◆ ◆◆ ◆◆

簪 side in

私の名前は更識簪（さらしき かんざし）。ISの授業が終わると私は何時も格納庫（ごうこ）に来ていた。私の専用機を作る為に。

「……………はあ……」

今日も私は格納庫に来ていた。先程から調整・確認中だった「マルチ・ロックオン・システム」の簡易試験を行っていたのだが、やはり四八基すべてを独立で稼働させることが出来ないでいる。

さつきから…いやここ最近ずっと、私はこの「マルチ・ロックオン・システム」の開発を行っていた。いい線どころか「まったく」だった。それどころか私には出来ないのでは？という思いまで浮上してくる。同時に私を縛り付ける言葉まで聴こえて来そうで私は慌てて頭を振った。

「……………あれ？」

そこで気が付いた。私以外の誰かが居ることに。彼女…いや彼は打鉄を纏い、体を動かしていた。私に気を使っていたのだろうか？音をほとんどだしてない。

しかし、ただ体を動かしているだけなのに何故か見入ってしまった。

特別な動きはしていないと思う、だけど『綺麗』だとそう私は思った。彼がこちらを見ただけで慌てて目を逸らす。

その後もチラリと彼を見たが息を整えたら出て行ってしまった。彼は一体誰だったのだろうか？そんな疑問が残った。

「……本音なら、知ってるかなあ」

ポツリと呟いた言葉はそのまま空気に溶けていった。

簪 side out

◆◆◆◆◆

部屋に戻って来たのは良いが、扉の傷が気になる。……まあ応急処置として同色のテープを貼り付けてカモフラージュをする。うん、いいだろ。

そして自室へ戻った時俺は戦慄した。空きのベットの段ボールが動いていたのだ。いや動いているのを見たわけではなく、初めて見た場所から明らかにずれているのだ。

中に鷲ノ宮の奴が入って動かしたと言う線もあるが入って来るときちゃんど鍵が掛かっていたし、何よりも問題の段ボール以外変化がない。

一応無くなっているものがないか確認したが、何も無くなっていなかった。

………謎だ。というか不気味だ。どうすんだよ、学食行こうとしてたのに行く気無

くしちやつたじゃないか。

「……はあ。何か作るか」

怖くて部屋を開けられん。その日は、軽く夕食を作って食べた。

そのあとは久しぶりにドイツ語を見たので何となく調べて勉強していた。



翌日特別何もなかった。いや……あるにはあった。

昨日作っておいて朝に食べようとしていた汗物とかが無くなっていた。あとなんかベットのシーツとかがピチツと綺麗にされていた。お…俺の寝ている間に一体何が？

気になる所ではあるが俺は「ウォーター・リリー (Water・lily) 社」社長、水面さんに呼ばれていた為、特に何も出来ない。また何かあったら先生に相談しよう。水面さんに呼ばれた理由は新しい装備が出来上がったから試して見て欲しいのとらしい。

朝から呼ばれたので授業は出れない。従ってボーデヴィツヒさんにも今日の内に手紙の返事を出せるかわからんだ。

どうしようかと悩みながら学校を後にした。あ、ちなみに「ウォーター・リリー社」の

場所まで社員かな？何かでつかい車で送ってもらった。あんな車初めて乗ったぜ。



結局昨日一日は会社にいた。試作機の扱いに夢中になってしまっていて、すっかり夜になってしまっていたのだ。

それから水面さんたちのご厚意で応接室に泊まらせてもらった。ありがたい、ありがたい。

まあ、一日ずつといわかつたことは俺に刀はあまり向いていないってことかな。

「部屋ありがとうございました。学校ももう始まってしまっているのでそろそろ帰りますね」

「うんうん、全然オツケーだよー。部屋余ってるし、何ならまだ泊まってもオツケーだよー」

いやいや、さすがにそれはいかんでしょ、と思っていたのだが反対どころか賛成の意見があがった。

「おう、泊まってけ泊まってけ。そのほうがこいつらも喜ぶぞお」

この人は三木 大葉（みき おおば）さん。昨日はもう二人いたのだが見送りには三人でじゃんけんして三木さんになった。三木さんはウォーター・リリー社の社員の一人であり、開発者の一人でもある。作業服でボサボサの髪、無精髭も生えているが優しい人である。そして二人の子持ちだ。結婚はしていたが別れたらしい。

そして当時どちらかと言えば懐いていた三木さんについて行ったそうさ。今では俺の子だ、とか豪語している。

「司兄い、もう行つちやうの？せつかく会えたのに……」

「……つか兄ちゃん……泊まっていけない？」

女の子の藍(らん)に男の子の彼方(かなた)。年は共に14歳。俺の幼い頃の知り合いの内の二人だ。

藍は茶色っぽい黒髪をポニーテールにし、こちらも作業服を着ている。性格は明るい子で人懐っこい。

彼方は少々髪が長めだが所々びよんびよんはねている。性格はあまり喋るのは得意ではないが責任感が強く、思いやりもある子だ。彼方も作業服を着ている。二人は三木さんのIS整備を手伝っているんだそうさ。

まさか二人と再会するとは思っても見なかったため大変にテンションが上がってしまった。

「うーん、さすがに泊まりは……出来ないかなあ、ごめんな？……あ、そうさ水面さん、近々学年別トーナメントをやるのはしつていますよね？」

「うん、知ってるよ〜」

「それに藍と彼方も連れて行ってくれないでしょうか？」



「うんうん、全然オツケーだよー。というか全員で行く予定だったけどねー。せつかく司君が出るんだものー応援しなくっちゃね？」

ほう、よかった。これで無理とか言われたらどうしようかと思つたぜ。まあ水面さんが『無理』つていうのが想像出来んな。そして試作機がどんなもんかというのも兼ねているんだろう。

「……ねえ、つか兄い。皆も来れるの？」

俺の服の裾を引つ張りながら彼方がそう尋ねてきた。

「うーん……どうなんだろ？呼びたいけど無理なんじゃないかな。それとまだ俺がIS操縦者になつたこと言つてないし」

「そっか残念だな……でもつか兄いには会えるから仕方ないかあ……」

彼方は少し残念そうにそう呟いた。隣にいた藍も残念そうにしている。

「……そうだな、近々帰ろうかと思つていたから一緒に行くか？」

そう言つたら、二人とも顔を見合わせ同時に『行く!!』と嬉しそうにそう口にした。

「……あつ……すいません三木さん、勝手に決めてしまつて……」

「おう、気にするな。藍と彼方があそこまで嬉しそうにしているんだ、俺も嬉しいんだぜ？俺のことは気にせず行つて来るといい」

『はい、ありがとうございます』と三木さんに言い、そこから暫く水面さん達と話してか

らりりー社を後にした。



時刻は現在八時。授業までまだ少しだけ時間があるので支度をするために自室に戻った。

そして戻ったのを若干後悔した。

「——一樹様、早く支度をして頂けなければ授業に遅れてしまいますよ？それに長崎様もいつお戻りになられるかわかりませんので早く起きてください」

自分の部屋から女の人の声がしたのだ。思わず番号を確認したがあつてる。思考は混乱の極みに達していたが、誰か確認のためにそつと覗く。

メイド服を着た美人さんがいた。先程の声はこの人か。

金髪がキラキラと輝いていてオルコツトさんとはまた違った綺麗さがある。

「……………あと、5分」

対するは、ベットに顔を埋めてぐったりとしついている奴だった。

……………誰？鷺ノ宮の奴がこの部屋に来るつってたけどあんな布団の上で全力で脱力

してる奴なんて知らねえぞ？

「まったく、いつも言っています。公の場でないときにだらけ過ぎです。……あら？

これはお恥ずかしい所を、おはようございます長崎様」

たぶん…鷺ノ宮に怒っていたメイドさんが俺に気付き、自然な動作で頭を下げてきた。

「あ、はい。おはようございます」

「今、一樹様のお支度を終わらせますのでご心配はなさらずに。あ、それとお味噌汁大変美味しかったです」

「……え？あの、もしかして昨日味噌汁が無くなっていたのって、貴女が食べたんですか？」

「はい、そうですよ」

これで昨日の犯人が分かったが、まだ気になることがあった。

「……あの、どこにいたんですか？鍵は掛けていた筈なんです」

そう、鍵は掛けていたのだ。朝はしっかりと鍵は掛かっていたし……。

「ああ、そのことでしたら、ほらあちらに？」

手をスツと移動させ俺も顔をそちらに移動させる。そこには一段と大きかった段

ボールが……つて、え？

「……だ、段ボールですか？」

「はい、わたくしそちらに入っております。わたくしそう言った術も心得ておりますので」

そう言った術って何!?!……はっ!?!困った時の織斑先生だ。そう想い体を反転させバツと駆け出した。

取り合えず職員室を目指し、織斑先生に会えたのだが廊下を走るなど怒られた

「それで何の用だ？」

「い、いやそれがですね、俺の部屋は鷲ノ宮の奴と同部屋じゃないですか？」

「ああ」

「それなのに今朝部屋を見たら金髪の女の人がいたんですよ、メイド服の」

「……………金髪のメイドかは知らんが、鷲ノ宮がここに来るときに親御さんから連絡があつてな。『一人使用人を送る』だそうさ。何でも私生活はだらしがないんだそうだが……」

あつ、じゃあそれだわ。すんげえだらつとしてたもん。

「はい、だらしないですね自分もびつくりしましたよ」

「そうですね、一樹様は私生活では力を抜いて生活しておりますね。まあ今までの反

動で御座いましょうか？」

ん、今の声は？と想い振り返る。すると件のメイドさんがいた。

「どうもお初にお目にかかります、織斑千冬様。そして先程はご迷惑をお掛けしました、長崎司様」

声の主は先程、俺の部屋にいたメイドさんだった。

は、早い。というか何で俺の場所が分かったんだ？

「……ブランケットさん、昨日は何処に？」

織斑先生はこめかみを押さえ、ブランケットさんとやらに聞いた。

「昨日は、一樹様のお荷物の中に、強いては長崎様の部屋にありましたね」

その答えを聞いた途端、『はあ』とため息が聞こえた。

「そういう行為は止めて頂きたい。今回は仕方ないとしても次回はないですよ。それに貴女がここに居るのは特例でと言うことなのでそれはお忘れなく」

「ふむ、それは鷺ノ宮様から詳しくお聞きになったと言うことですね？」

「そういうことになります。ただ、今だに信じられませんかね」

「そう言うのであればお見えになりますか？まだ、くたつとしていますよ」

「いや、そこはもう長崎との共同部屋ですから、私の了承だけでは行けませんね」

マシンガントークとはこの事かと会話について行けずにいたら、織斑先生に話をふら

れた。

「長崎、帰ってきたばかりですまないがお前の部屋にお邪魔してもいいか？」

「あ、はい。構いませんが……あの、そちらの方は一体誰なんですか」

疑問に思っていたことを織斑先生に聞くと、先生は目で紹介を促した。

「おや、これはこれとはんだ失礼を。わたくし一樹様のお世話をさせて頂いております、

セシリー・ブランケットと申します。長崎様どうぞよろしくお願ひします」

そう言つてスカートの両裾を摘み、頭を下げた挨拶をした。

自然な流れるような動作だったのでみいつてしまった。ハツとしてこちらも挨拶を

返す。

「……えつと、長崎司です。よろしくお願ひします、ブランケットさん」

「わたくしことでしたらどうぞ気軽にセシリーとでもお呼びください」

「いえいえ、さすがにそれは……ブランケットさんが精一杯です」

初めて会つた人、それも女の人ならとくに呼び捨てなんて出来ない。何か、失礼にあたりそうで。というか女の人にこんなこと思うなんてちよつとあれだがブランケットさんつて絶対年上だよな？対応が年上にしか見えない……。

そんな心境を知つてか知らずかブランケットさんは『あらあら』と微笑んでいた。



部屋に戻るとやはりと言うか、鷺ノ宮がベットでつぶれていた。

「……………これは」

ああ、織斑先生がびっくりしている。口を少し開けて、目も少しだけ見開いている。こんな表情は初めて見たな。普段が凜としているだけあって中々にレアな表情だな。

まあ、普通びつくりするよね。初めに会った人が完璧な感じの人で家柄も確りしているのに実は素の顔がこんなにだらつとしていているなんて知ったら。

「……………うん……………ああ……………お、織斑先生!?!お、おはようございます!」

うおう、寝惚け眼(まなこ)から織斑先生を見つけた瞬間、即飛び起きたよ。ただ悲しいかな、寝癖と格好で台無しになつてる。

「あ、ああ、おはよう」

ほら見る。織斑先生がまだ面食らつていそ。それだけ衝撃的だったんだな。まあ俺もだが……………。

「ちよつ…ちよつとセシリー、もうこんな時間じゃないか!なんで早く起こしてくれないのさ!?!」

「わたくしはいつものように何回もお呼びになりました。しかし『まだ…』や『あとちよつと…』と時間を先延ばしにしたのは一樹様でございます」

うつと言葉に詰まり、こちらを見る鷺ノ宮。いや、こつちを見られてもなあ。

「長崎君も何か言ってやってくれ!というか起こしてくれたってよかったじゃないかっ」

「お、おう。何かすまん」

あれ?何で俺怒られてんだ、おかしくね?

「……長崎と鷺ノ宮、あとブランケットさんは放課後私の所に来てください。ちよつと話し合いますよう」

「取り合えずブランケットさんは用務員としてこの学園に来たということになっていきますので、今日からお願いします。詳しくは轡木 十蔵(くつわき じゅうぞう)さんに聞いてください。長崎と鷺ノ宮、もう少しで授業だ、早くしろよ」

最後に織斑先生は『朝からすまん』と言って去って行った。まあ、なんだ、俺も早く準備しよう。



朝、ボーデヴィツヒさんが教室に来たとき、俺は前の手紙の返事を言った。答えは『YES』。是非一緒にタッグで頑張りましょう、と言うことだ。

反応は『ああ』とか『よろしく』とかしか返ってこなかったがその後に行った授業で、



ペアを組んで模擬試合をやつて見たのだが中々に動いているようだ。よかった。

『今日は無理ですが、明日、放課後練習しませんか?』とボーデヴィツヒさんに頼んだ。練習は出来る限り一緒にやりたいし、織斑に勝ちたいしな。まあ俺ではなくボーデヴィツヒさんにかやるのだが。

暫く無言でいたため、無理かな?と思つたが『そうだな、よろしく頼む』と言つたのでこちらこそと返した。

織斑の奴と戦う前に負けたら話しにならないので、というかボーデヴィツヒさんに申し訳ないので頑張ろうと思う。



そして放課後、織斑先生に呼び出されておこなつた話し合いは、鷺ノ宮についてだった。

『プライベートまでとやかく言うつもりはないが、せめて起きれるようになれ』とのお言葉をもらつていた。

そして俺は、鷺ノ宮を起こさなくてはならなくなつた。ブランケットさんが男子の部屋を歩き来しているのはどうなんだ?ということになり、そこで同部屋の俺に任せられました。

俺が平日、ブランケットさんが休日というローテーションで。

まあ、早起きなのでまったく問題ないがちゃんと起こせるのか?…不安になってきた。

と言うことで話し合いは以上と言うことになった。

◇◇◇◇◇◇◆

ラウラ side in

今朝、長崎の奴が声を掛けて来た。なんだと思っていると前に奴に送った返事の返答だった。

朝に言う必要はないだろうと思っただし何とも律儀な奴だとも思った。

私がタッグ申請書のことを口にするると長崎は『もう書いた』と口にして私のであろう紙を出してきた。

心のどこかで断られるか?と思っていたのは杞憂に終わったようだ。

授業でペアを組んで模擬試合をする授業があつたが、長崎の奴は初めてにしては中々に動いていた。

授業が終わった時に長崎が『放課後も練習しないか?』と言われた時はキョトンとしてしまったが良いことだと思う。なので頼んでおいた。

どんな訓練にしようか、少しだけ楽しみだ。

ラウラ side out

◇◇◆◆◇◇◇◇

気がつけばあつという間に学年別トーナメントの日まで過ぎていた。濃い数日間だったと思うし、楽しかったなとも思う。

放課後練習は大変だったが実に実になった。ボーデヴィツヒさんにたくさん教わることもあつた。しかしボーデヴィツヒさんは嫌な顔せず教えてくれた。

自分のためにも、ボーデヴィツヒさんの為にも頑張ろうと思う。

◇◇◆◆◇◇◆◆

長崎の奴の練習に付き合っていて分かったことがある。

奴は要領が良いとは言えないが、よく聞き、聞いたこと素直に取り込み自分で何回も反復させているということだ。

何かひとつをやり通すこと。私にはそれが出来ていただろうか？

私は織斑教官に強くしてもらい、織斑教官に憧れてここまで来た。

いつか強さとは何か、織斑教官に聞いたことがあつた。

『教官はどうしてそこまで強いのですか？どうすれば強くなれますか？』

今ですら強さとは分からないのに昔の私はそんなことを聞いた。

教官はしばし考えてから、『私には弟がいる』と口にした。

私は驚いた。教官に弟がいることよりも、教官が浮かべた表情にだ。私が見たことのない優しい顔をしていた。

『弟……ですか』

返す言葉はそれだけで精一杯だった。

『ああ、あいつを、一夏の奴を見ているとわかるときがある。強さとはどういうものなのか、その先に何があるのかをな』

『よく……わかりません』

わからなかったのは私が未熟だったからだろうか？

『わからないなら、今はまだそれでいいさ。お前ならきつと意味が分かる時が来る。……ふむ、そうだな、いつか日本に来ることがあるなら一夏の奴に会ってみるといい』

その後にも会話はあつたはずだろうが、何故だか忘れてしまった。教官と過ごした日々は忘れていなというのに。

教官が浮かべた優しい笑みとどこか気恥ずかしそうな表情。一夏という男は教官にそんな表情をさせる。

私は教官にそんな顔を向けられたことが合っただろうか？ふとなんだかモヤモヤと

した気持ちになった。これは何なのだろう。

教官はなぜそいつだけにそんな顔を向けるのか。なんだか無性に腹が立った。

私は、織斑一夏が――。

## 第十二話・タツグマツチ戦、一回戦

今、俺とボーデヴィツヒさんは第二アリーナで待機していた。何故か、それは当然このあと試合だからだ。

「……長崎、お前は何故左目を隠している？」

なんと気になしに言ったのだろう。だが俺としては対応に困るものだった。そう言え、ボーデヴィツヒさんも左目に眼帯をしているな。

「……切るのが面倒になつてきているんですね。まあ長くても問題ないですし、このままでいいかなと思つてまして」

そんな回答を返したら『そうか』とボーデヴィツヒさんが言った所でちようどアナウンスが鳴った。

『それでは始まりました、学年別トーナメント。第一回戦、選手の皆さんはアリーナに出てください』

「さあ、行きましようか」

「ああ」



「まさか、一回戦で戦うことになるとは思いませんでした」

「そうだな、おれもびつくりしたよ」

一回戦の相手は鷺ノ宮、篠ノ之ペアとだった。

「……………」

「……………」

ボーデヴィツヒさんと篠ノ之さんは互いに無言、つか目を閉じている。

二人に向けていた視線を再び鷺ノ宮に向ける。思えば奴の機体を見たのはこれが初めてだった。

ベース機体は「R・リヴァイブ」。それにアメリカの「フアング・クエイク」を足している機体だという。

機体名は「レフィール・リノ」。和名は『換装』。

近・中・遠距離、どの距離も対応でき、それを可能にしているのが『高速切替（ラビッツ・スイッチ）』だ。「R・リヴァイブ」の性能をフルで生かした機体なんだそう。死角はほぼ無いだろう。

だが、俺も新装備がある。少なくともやられるだけでは終わらないだろう。

「では、お手柔らかに頼みます」

「そうだな、絶対に負けんが」

というか、負けられない。

そう言つて両者構える。篠ノ之さんとボーデヴィツヒさんは既に臨戦体勢だ。

カウン트가空中ディスプレイに表示される。

3、2、1――。

試合開始を告げるブザーが鳴つた。

それと同時にボーデヴィツヒさんは6本のワイヤーブレードを射出、推進機（ブースター）で鷲ノ宮へ向かつて行つた。

対する鷲ノ宮も、『高速切替（ラビット・スイッチ）』で迎撃準備。篠ノ之さんと共闘の形を取つてアサルトライフル「レッド・バレット」を右手に、連装ショットガン「レイン・オブ・サタデイ」を左手に構える。

篠ノ之さんは腰を落とし、推進機を準備。近接ブレード【葵】は両手で持ち正眼の構えでいつでも斬りかかれる体勢だ。

対する俺は試合開始のブザーと共に後退した。理由は自身の新武装にあつた。

一つは展開に時間が掛かること。

『Lotus（蓮）・・・稼働率37%』



『Narcissus（水仙） …… Nanomachine …… 生産率28%』

そしてもうひとつ、それは――。

一樹がラウラのワイヤーブレードの半分を撃ち落とし、そこからラウラ本人に向けて弾幕を展開した。右手にはいつの間にか「レイン・オブ・サタデー」が握られており、両の手が連装ショットガンになっている。火力、範囲ともに高い組み合わせになる。

ラウラも「AIC（アクティブ・イナーシヨナル・キャンセラー）」を展開しようとしたが、すんでの所で間に合わないと悟る。

それは――相手の度肝を抜くため。

『「Lotus …… 稼働率100%」 …… やつとか――「蓮」、行け』

電子音声が稼働率が100%になったことを告げる。それを合図として肩部シールドに鱗のように付いていた薄クリーム色の何かが司の言葉によって一気に周囲に展開した。

そのあと直ぐにその各々が小さな固まりとなってラウラに殺到した。



来るであろう衝撃にラウラは身を固まらせ、備えた。しかし、衝撃は来ずおかしな音、例えるなら花卉から花びらを引きちぎったような音がしたただけだった。

何だと思いい閉じていた目を開ける。

「……花……？」

種類は何かはわからないが確かに花卉と呼ばれるものが私の周りに展開している。薄いクリーム色をしているそれ、その数は数十に昇る。

司の新装備の一つ、それは名前を「大天輪・蓮」。打鉄の強化パッケージにも分類される。

『対B.T・銃火器兵器』をコンセプトに置かれた防御専門のパックだ。任意でしか動かすことができないがそこはISならではのセンサーがある。

先程の数十の花々は「大輪」と呼ばれ、大きさは10〜20cmほど。それはコンセプトの通りB.T・銃火器兵器の攻撃を通さない。

他にも「天輪」、「大天輪」があり、大きさ・防御力が高くなっていく使用だ。

「……あれを防ぐのかー、火薬とか弾頭とか変えてもらって出来る限り速度に重点を置いたものなんだけどな」

防がれるとは思っていなかったのか驚きで少し目を見開いていた。

「……長崎か、なるほど、なっ！」

ラウラの呆けていた時間は数瞬。即座に切り替えて、ラウラは一樹に向かってレーゲンのレールカノンの照準を合わせ、射つ。当然のように避けられると分かっているの間髪入れずに連射する。

一樹も伊達に専用機を持っている訳ではない。直ぐに切り替えたが遅く、レールカノンの重々しい銃声を聞いた所であった。

避けるために推進機を右側に展開、稼働して動いたが遅かった為左腕に若干被弾。残りは何とか回避したが持つていかれたエネルギーが以外と大きかった。

「……くう、やりますね。ですが今度はこちらの番です。篠ノ之さん援護します、先陣を斬ってください」

「了解した。……ふっ！」

箒は動いた。眼前の敵に向かって。

箒にも負けられない訳がある。この試合に優勝して、一夏と付き合うのだ、ということ。

しかし何故かあらぬ尾ひれが付いていて、優勝したら一夏、長崎、鷲ノ宮のいずれかに告白出来るという物になっていたためにながなんでも勝ちたかった。

ラウラもラウラでただで近づかせる訳がない。ワイヤーブレードを射出し、箒に追従させる。

だがそれを一樹は「レッド・バレット」、「レイン・オブ・サタデイ」で撃ち落とす。ラウラは舌打ちを一つつき、箒に向かって「A I C」を掛ける。

「……!?。な、何!？」

驚異にもならないそれを止め、ほぼ零距离からレールカノンを撃つために照準を合わせる。

「お前は、ここで脱落だ。——墮ちろ」

レーゲンは火花をあげた。

しかし撃った瞬間に体が真横にずれるほどの衝撃が襲って来た。正確にいうのならばレールカノンの砲身に攻撃が当たったせいで照準が狂い、弾は箒には当たらなかった。

「…ちつ、鷺ノ宮（やつ）か。」

「これはタッグマッチですよ？ボーデヴィツヒさん」

やつ、一樹の方をラウラは見る。その手には身の丈以上のランスと呼ばれる代物を握っていた。

あれ、もしくは別の代物で砲身を撃つたことに間違いはないが、そのランスにも警戒をしたほうが良いなど、気を引き締めた。

そんな所に一樹はその巨大な代物を持って突っ込んで来た。



「なんとか、篠ノ之さんに攻撃をさせないことに成功しましたが当たって良かったですね。試作段階とはいえさすが。……まあ欠点を挙げるのでしたら些か反動が強すぎる、というところでしょうか？」

『経験が無さすぎて17年……ん？26年？よく分からなくなってきたなあ。早く馴染まないとなあ。……特にこの身体だよ。なんで……』という呟きを溢して、個人間秘匿回線（プライベート・チャンネル）を開いていたことを思い出し焦った。が篠ノ之さんはそれどころではなかったらしく聞こえていなそうだった。

一先ずほつと胸を撫で下ろし、ボーデヴィツヒさんを見る。

攻撃を当てたことにより「AIC」が解かれてくれればと思っていたが甘かったらしい。篠ノ之さんは今だに固定された空間に囚われたままだ。

ラウラのレールカノンに攻撃を当てたのはこのランスだ。司に新装備があったよう

に一樹にも会社から渡されていたものがあつた。

名を「フラツカー・デイルド・ガル」。より正確に言うならば、「爆裂式円筒（シリンダー）ランス」。和名は『ウミネコ』。

白を基調とし、先端は紅い。先程はこの先端を飛ばして攻撃したのだ。発射時の音が妙に高音の猫鳴きのように聞こえることからこの名がついた。

円錐状になっているランスの根元の内部がシリンダーになっており、弾（先端）の補充・装填はそこで行われる。

内部の火薬を爆発させて先端を飛ばす。簡単に言えばこういうわけだが普通のランスとしても十分に活用出来る。

もちろん、先端は飛ばしたら再装填されるが大きさが大ききだけに弾数は三発だけしか入らない。

——残り、後2発。

そんな風に思いながら、突進していったら、耳に声が届いた。

「——知ってるよ、だから俺がいるんだ」

ランスでの突進が下からの剣での切り上げによって掬い上げられた。



『【Narcissus . . . Nanomachine . . . 生産率100%】』  
 —来たか—

司の新装備二つ目、それは名前を【薄・水仙（うすら・すいせん）】。日本刀のような外見に刀身が淡く発光し蒼い色をしている。

水を模したナノマシンが柄で生成され、それが刀身にいくことで蒼くなっている。さらに、そのナノマシン自体が弱い電力を持っていてパチパチと帯電している。なので斬りつけたと同時に水が弾け、内包されていた雷が相手の動きを少し遅らせる働きをする。

このナノマシンにはリミッターが掛けられており、リミッターを外せば【帯電】ではなく【常電】として雷がむき出しになる。この状態で斬れば相手の動きは100%阻害される。しかしこの状態にすることでリスクもある。

【常電】が強すぎる。内包されている雷が強く、下手をしたら操縦者にも被害が及ぶということ。それと自分にも。

「——知ってるよ、だから俺がいるんだ」

そうこれはタッグ戦だ。そんなことは言われなくても分かっている。だが全部が全

部パートナーを見る何てことは出来ないだろう。

だから俺は持ちつ持たれつの関係で行こうと決めた。ボーデヴィツヒさんには何も言っていないが、攻撃の大部分を任せ、俺は大部分で支援、防御にまわるといふ役割だ。勿論、俺も攻撃するが。

先程のボーデヴィツヒさんに行った攻撃、遠巻きに見えてわかったのが鷲ノ宮の持つているあれは遠距離にも届くということだった。なるほどと思い、推進機を加速。一気に近づき、しかし鷲ノ宮の持つている武器と合わせるようにして【薄・水仙】を掬い上げた。

鉄と鉄をぶつけたような甲高い音が鳴った。そして司の剣線には刀身に纏っていたナノマシンが衝撃で弾け、周囲に散った。パチパチと帯電していて火花と光でそれが花のように見えて綺麗だった。

持つていた武器の上昇に伴って鷲ノ宮の体も浮いた。そして、そのがら空きになった胴体に追撃。

掬い上げた刀の勢いをそのまま回転へと昇華し、遠心力と共に斬撃の威力を上げる。

このまま一太刀浴びせられるかと思ったが甘く、鷲ノ宮はその巨大な武器を即座に収納して代わりに近接ブレード【ブレット・スライサー】を取り出し、それで受けた。

分はこちらのほうにあり、鷲ノ宮を吹き飛ばしたがそれだけでダメージは無し。



「……ふう、まさかあれを上げてこちらが飛ばされるとは思いませんでしたよ。力強いですね」

「はあ、はあ……まあな。つか俺もビックリした。さっきの防がれるなんて思わなかった」  
司の方が先に息があがっていた。体力面で比べたら司の方が多いのだが、自分の他にもうひとり一緒に戦う者がいることと授業の比にならない程の視線に晒され、司の精神的ストレスが高まってしまっていたのだ。

無論、司の意思とは関係なく無自覚、無意識にだが。

「（俺じゃあ鷲ノ宮の相手は無理だな。なら——）」

司は今の位置から180°。旋回し推進機を展開。つまり後方にいるラウラたちに向かって行った。

意図に気が付いたのか、一樹も後ろから迫って来る。

『ボーデヴィッツヒさん！』

「——」

開放回線（オープン・チャンネル）で名前を呼ぶ。こちらを見て一拍置いてから、こちらに駆け出して来た。俺が呼んだ意図を汲み取ってくれたようだ。

AICが解けた筈がラウラに、一樹がさせまいと司に迫る。

『お前の相手は——』

『貴女の相手は——』

奇しくも、二人の声が重なった。

「——私だ」

「——俺ですよ」

ラウラが一樹と、司が箒と対峙した。

トーナメントはまだ始まったばかりだ。

# 1056 隊風見鶏少尉様、リクエスト閑話・喫茶店【クローバー】

ここはIS学園。女の子たちの花園。

やはりと言うべきか女の子は噂などに敏感である。一つの噂がここIS学園に巡っていた。

「ねえ、知ってる？最近話題の喫茶店」

誰かがそう切り出し、場は一気にその話題で持ちきりになった。

「知ってる知ってる！最近新しく出来た奴でしょ？行ってみたくないさ」

女三人寄れば姦しいというがここではしようがないだろう。

「うむ……あー、んん、っ。一夏」

「ん？どうした」

話しかけたのは箒である。喫茶店のことは前々から知っていて一夏のことを誘おうとしていたのだがタイミングが掴めずにいて今になってしまったのだ。

「今週の土曜日、良かったら噂の喫茶店に行ってみないか？」

「おお、良いぞ……」

一夏が『良いぞ』と言った瞬間、乱入者が。

「い、一夏さん今週の土曜日喫茶店に行つて見ませんか？」

「嫁よ、行くぞ」

「ほ、僕も一夏といきたいなあ」

「一夏あ、行くわよ」

セシリアが、ラウラが、シャルロットが、鈴が。箒が誘つたのをかわきりに一斉に一夏を誘つた。

「う、うん？なんだみんな行きたいのか。じゃあ皆で行こうぜ！」

5人は『違うそうじゃない』と言いたかったがぐつとそれを飲み下し嘆息した。デートかな、と少しだけ心をときめかせていたが当の本人は気付いていないのだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ん、喫茶店かあ……初めて行くなあ」

この少年何気に楽しみにしていた。

自室の扉を開けると楯無さんと簪がいた。楯無さんに関してはもう慣れたが簪に至っては意外だった。

だが幾度もの幼馴染みやクラスメイト、先輩が自分の部屋に入ってくるという行為

が多いため驚きはしたが、そのあとは普通にもてなした。

何で部屋に居たのか聞いてみると、ようは『お姉さんたちと噂の喫茶店にいきましょう』とのことだった。別に断ることもないのでOKした。ただ『筈たちも居ますよ』と何気なく言ったら、『またか』たいな顔をされた。……何故？

そんなこんなで7人でその喫茶店に行くことに決まった。

喫茶店「クローバー」へ。

◇  
◇  
◇  
◇  
◇

閑静という訳ではなく、賑やかという訳ではない場所に喫茶店が出来ていた。工事は前々からやってたし（まあ工事と言っても住んでいた所を少々改築しただけだが）、宣伝もしていた。

宣伝のおかげなのか、チラシを配った人が良かったのか初日から人が来てくれた。

それからちらほらと来てくれる人が多くなり、今では口コミでさらに広がっているようだ。

男の人も多く来てくれるがやはり女の子の人、女の子のほうが多い。何故だろう、このような世の中なので当然、最初の頃は女性を優遇してくれると思っていたお客さまが何

人かいたがちゃんと説明して理解してもらった。それでも理解して下さらないお客さまが居たときは困ったが優助と優子が叩き出してしまった。そのときは別の意味で困ったがその後に問題は起きなかった。

そんなことが合ったのに女性客が増えた。うーん、男の人も来て良いんだけどな……喫茶店って男の人は来づらいのかな？

まあでも来てくれないよりは良いか。

「司、もう店を開けるぞ」

「司兄様、お店を開けてしまいますよ？」

ひよこりと黒髪の女の子と銀髪の女の子が顔を覗かせて声をかけてくる。

「あ、うん。今行くよ」

鈴の音が開店を告げた。



一行は今、喫茶店の前に来ていた。

「ここがそうね。うーん、お姉さん楽しみ」

「へー、喫茶店ってこういうところなんだ」

「うむ、良いところだな」

「いい雰囲気のところですね」

「喫茶店かあ、僕初めて行くなあ」

楯無、一夏、ラウラ、セシリア、シャルロットと続き、箒と鈴はそわそわとしていて箒は目を輝かせている。

『じゃあ入りましょ』と楯無を先頭にして店に入る。

丸テーブルが数点あり椅子が囲うように置かれてある。四角いテーブルが数卓端のいい位置に配置されている。

うつすらとこの喫茶店にマッチした音楽が流されていて、不思議と耳を傾けていた。

店員だろう男性、いや一夏と同じくらいの男の子が彼女たちに一礼して来店を祝した。

その少年とは別の店員、黒髪の少女と銀髪の少女が丸テーブルと椅子を数脚座るであろうテーブルの近くに寄せた。

「えつと、そんなことしてもいいんですか?」

と一夏が思ったことを口にし、先程の少年がそれに答えた。

「ええ、大丈夫ですよ。お友達同士で来られて楽しい時を過そうとしているのにテーブルが離れている、なんて理由なのは申し訳ないので」

『では楽しい一刻を』と告げてから少年は奥に引つ込んでいった。

テーブルのほうにラウラ、一夏、楯無、簪で座り、丸テーブルの方は箒、鈴、セシリア、シャルロットの順に座った。

ちなみに言っておくがこの座席は事前にクジをひき一夏の隣はラウラが勝ち取ったものである。なので当初の喜びよりは凄まじかった。勢い余って『よ、嫁よ、やったぞ!』と抱き付いてしまい、それで一悶着あつたのは言うまでもない。

さて、一同は席についたところで注文を頼んだ。

頼んだと言っても呼鈴がある訳もなく、かと言つて声を発した訳でもない。声を発つそうとしたところでスツと来たのである。

頼んだのはコーヒー2つ、カフェエラテ2つ、が紅茶2つ、オレンジジュース2つ。サンドイッチ、ケーキを人数分だ。

一夏、楯無がコーヒー、ラウラとシャルロットがカフェエラテで箒、セシリアが紅茶、鈴と簪がオレンジジュース。

楯無、簪、セシリアがショートケーキ。一夏、鈴、ラウラがチョコレートケーキ。箒とシャルロットがモンブランだ。

「カフェエラテを頼まれますとラテ・アートをやっていますがやりますか?と言つても大したものはありませんが」



折角なので頼むことにした。ラウラ、シャルロットは初めて頼むであろうものにワクワクしていた。

飲み物類は直ぐに来たのだが、運んできた人にびつくりした。

「コーヒーと紅茶」

「そして、オレンジジュースになります」

黒髪少女と銀髪少女が渡しに来たことではない。その顔にだ。似ている、雰囲気はそうでもないがどこことなくそんな風だと感じる。楯無は口元を扇子で隠している。

扇子の文字は『驚愕』。

一夏とラウラに至っては口を開けポカンとしている。というか皆そんな表情しか出来ないでいた。

「……あの、何か?」

困った様子で目を瞑りそう返す銀髪の少女と、隣で目を少し細めた黒髪の少女が居たためハツとなった。

「い、いや…知り合いに似ていたからさ、ハハハ」

一夏が言葉を紡ぎ、何とか誤魔化す。

『はあ…』と返事をした時にヌツと別の少女が出てきた。

「はあい、(ト)は私にまっかせなさあい」

茶髪のポニーテールを揺らしながら銀髪の女の子の肩からひよっこり現れた少女。

「藍、お前はまた変なしやべり方をして」

「とうか、何故藍がここに？」

黒髪の女の子が藍と呼ばれた女の子を睨み、銀髪の女の子が尋ねる。

「ん？私がラテをやるからだよ」

「藍も確かに上手いが司の方が上手いじゃないか」

「確かにそうですね。藍よりも司兄様の方が上手いですもんね」

「え〜！ひどいさ二人とも、確かにそうだけどさ〜……ん、お姉さんたち、今興味が沸いたね？」

いきなり話をふつてきた藍という少女に多少たじろぎながら一夏は答えた。

「そ、そりあ……」

「ふつふつふつ、でははお姉さんたちのをやつてあげましょう、司兄いが！」

そう言い終わった後で誰かが近付いて来た。見ると違うテーブルに座っていた女の子たちの相手をしていたらしい。一人はこちらに背を向けているパンツスーツを着た茶髪のロングヘアアの女の子。一人は女性らしさが出ている大胆なドレスを着ている金髪ロングの女性だ。

「こら、藍。お客さまに失礼だよ。すいません、お騒がせしました」

そうペコリと頭を下げ、隣の藍も『すいませんでした』と頭を下げた。

そんなこともあったが、その後も楽しい刻が過ぎた。サンドイッチを食べ、デザー  
トが来た時に何故かカフェラテと一緒に付いてきた。

「……え？あの、頼んでないんですが…」

「いえ、先程のお詫びです。どうぞ」

ふとカップを見てみると一枚しかない葉が描かれていた。

他のもの見てみると、自分は1つ葉、ラウラは2つ葉、シャルロットは3つ葉、楯無、  
簪は4つ葉、箒、鈴は8つ葉、セシリアは9つ葉とひとによって葉の数が違った。そ  
れと楯無さんと簪のカップを見て気付いたのだが、それは描かれているのが「クロー  
バー」だということだ。

「これは…」

「皆、違うんだね？」

「あ、あたしと箒のは同じのだ」

「む、本当だ」

「私もお姉ちゃんと同じだね」

「あらあら、本当ね」

互に見たりして、葉が多いことに目を丸くしたりしていた。

「あのー、このラテ・アートが皆違うのって何か意味があるんですか？」

とシャルロットがそう聞き、司が『そうですね』と一拍置いてから喋り出した。

「はい、意味ならありますよ。まずーつ葉なら『困難に打ち勝つ』や『始まり』、あと『初恋』何かもありますね」

そう説明していて『初恋』という単語が出てきた時、それまで話を聞いていた面々が一斉に一夏を見た。そんな光景に司は微笑みを浮かべながら、一つ咳払いをして話に戻った。

「コホン、2つ葉なら『平和』、『調和』そして『素敵な出会い』ですね」

ラウラが驚いた顔をして、顔を赤くしながら一夏を見た。

「3つ葉なら『希望』や『信仰』、そして『愛』です」

シャルロットが恥ずかしそうな顔をして一夏を見て、周りの視線が強まった。

「4つ葉なら、『幸福』『幸福』です」

楯無、簪が互いの顔を見て笑い合った。

「8つ葉なら、『縁結び』『家内安全』そして『家庭円満』です」

そう言われた二人は何とも複雑そうな表情をして少し俯いた。

「9つ葉なら『神がかり的な運』や『高貴』、ですね」

セシリアは何か思い付くことがあるかのような顔をしながら『高貴』と言われて満更でもなさそうな顔をした。

「す、凄いですね。正確というかなんというか……」

「そーねえ、お姉ちゃんも びっくり」

一夏が驚きを顔に表しながら、楯無がまたもや『驚愕』と書かれた扇子で口元を隠しながら呟いた。

「ちよつとした特技で…喜んで頂けたのでしたら幸いです」

「どうだどうだ、凄いだろー」

「すつごいでしょ？」

「……凄いでしょ？」

「あ、あの司兄さん……これってどう並べればいいんだっけ？」

まるで先程までの会話を聞いていたようにぴったり登場した子供たち。年は12、3歳くらいもしくは同年代かもしれない。

先の茶髪ポニーテールの藍と呼ばれていた女の子。黒髪ツインテールの少しつり目の女の子。少々短髪な物静かそうな男の子たちが口々に司を褒めていた。最後の黒縁眼鏡をかけた長髪のおっとりした女の子は確認をしに来たようだった。

「藍、風、彼方ちゃんと仕事をしなくちゃだめだよ。それと、突然お客さまの前からいなくなつちやうのはいけないよ。マヤ、それは…うん、俺もキッチンに行くよ」

3人は『はい』と返事をしてから持ち場に戻り、『それではお客さま、ごゆっくりとしていつて下さい』と残し、キッチンの方へ向かつて行った。

そこから一夏たちは談笑したり、ケーキをつついたりしながらこの一時を楽しんだ。



薄暗く辺りが染まり、店内に人が居なくなっていた時間帯。もうそろそろ閉めようとしていた時間帯に鈴が来客を告げた。

その人は頭に機械で出来た兎耳？を付け、青と白のフリルがついたワンピース？、ドレス？を着ていた。

天真爛漫で純粹無垢。そのように感じる笑み。しかし目元には隈が出来ていて、眠れているのか眠れていないのか表情ではわからない人だった。たがお店に入つて来たということはお客さまなので一つお辞儀をして作業に戻る。

「あれあれー、箒ちゃんを追つて来たんだけど居ないなー。うーん、一回修理しようか

なーこれ」

そう言つて頭の兎耳をスポツと外し、手近にあつた椅子へと座つた。兎耳の正体はカチューシャだったようで、それを机の上に置き分解を始めた。

「うむうむ…箒ちゃんリーダーの感度は、良好…壊れてないね。…うん？おーい、その店員さーん来たまえー」

「はい、なんででしょうか？」

ガチャガチャと機械を弄つていた時にチラリとメニュー表に目をやり、作業を中断させてテーブルを拭いていた俺に声をかけてきた。

「何かオススメを頼むよー。あ、飲み物はこのカフェラテで」

「畏まりました。カフェラテ類はラテ・アートをしておりますが試されますか？」

「うーむ…じゃあ頼むよ」

『はい』と言つて裏へ行く。…何となく、こうかな。

「お待たせしました。こちらカフェラテとアップルパイになります」

部品を広げているせいで置くスペースがない。どうしようかと迷っていると、二切れに分けられているアップルパイをぱくぱくと食べてしまった。カフェラテも絵をじつと見てからぐいっと飲んでしまった。

「うんうん、美味しかったよー」

瞬く間の出来事だったので呆気にとられてしまった。がお辞儀をして下がる。

ちなみに先程描いた絵は、12つ葉のクローバーと横に小さな8つ葉のクローバーだ。

意味は12つ葉が『真理』、『宇宙』。8つ葉が『縁結び』、『無限の発展』、『家内安全』、『家庭円満』。

それから暫く、あの人は機械を弄っていたが元のカチューシャに戻して髪に差し込んだ。

「ぼっちしばっちし！さーて箒ちゃんは……おつ、あつちの方角か」

そう言つて店を出ようとする。お金は!?……つて机の上に置いてある……。ほつと息をつき、出ようとしているのを呼び止める。

「うん？何かな何かな？」

首だけをこちらに向けてそう返してきた。

「アロマキャンドルです、良かったらどうぞ」

「くんくん……ラベンダーだねー」

袋の上から当てられたことに驚きながら『そうです』と答えた。

「ラベンダーには安眠や気持ちを落ち着ける効果があるので、オススメです。眠れていないのか分かりませんが、入浴時や睡眠1時間前にお試しく下さい。当店の心ばかりのサービスです」



『どうぞ』と言って袋を差し出すも、じつと袋と自分の顔を見られていたが、やがて「ありがとね」と破顔して店を出ていった。

満足して頂けたのならなによりだ。



「おう、司お疲れ様」

「司、お疲れ様」

優助と優子に声を掛けられた。今までどこにいたんだ？

「優助、優子、今まで何処にいたの？」

「ん？女の子追っかけてた」

「あー、こいつは知らないけど私は色々見てまわっていたのよね」

なるほど、だからいなかっただのか。この店の材料調達は主に優助と優子がやっている。料理とか俺より作るの上手いのに『絶対に私は作らない』と言っている。何でなのかは分からない。

「うん、いつもお疲れ様優子」

「あれ？俺には劳いの言葉はねえの？」

「アンタは遊んでたんでしょ」

「そりやあねえよ!? お兄さんだつて頑張つたんだよ!」

そんないつものやり取りに俺たちが笑みを浮かべる。

「こらこら、優助も騒ぐでない」

「ほら、掃除もしつかりね」

「おう…クリスさんやマリアナさんまでそう言うとは……」

さすがに優助もクリスやマリアナには何も言えないらしく、掃除を行う。

子供たちは机の上を拭いたり、食器を片付けたりしていて、大人たちは食器を洗ったり棚に戻したりしている。

今日も今日とて良い一日だったな。

さて、明日はどんな一日になるんだろうか。

とそんな想いを馳せながら店の扉の札を「クローズ」にし、そつと扉を閉じた。

## 竜羽さんリクエストコラボ閑話・I S 竜討伐部隊

『—お前もI S学園に来てくれ』。と始まりは一本の電話だった。

「……は？ちよつ、ちよつと待て草薙、今お前がどんな出鱈目なこと言ってるか分かってるか？」

I S学園とは神奈川県横浜市金沢区の八景島近隣に位置する超大型人工島だ。場所も分かっているし、行けと言われてもなんら問題はない……今以外は。

俺こと長崎 司（ながさき つかさ）は自身の所属する組織『S・A・U・R・U（サウル）』の仕事によりアメリカへ飛んでいた。魔女（マギ）の調査の為だ。

「草薙、俺は今アメリカだ。今から来い、つてのはむちゃくちゃ過ぎる」

「あー、無理言ってるのは分かっているんだ。だが、こつちも若干想定外のこと起きたんだ。俺一人じゃ対処が難しくなるかも知れないからお前らが居てくれたほうが安心なんだ」

「……晴臣は呼ぶのか？」

「いや、あいつは今手放せない仕事をやっている最中だと」

『寝坊助も連れて来てくれよ』と最後に電話を一方的に切られた。

「俺も仕事中だよ……はあ、どうすつかかな？」

アメリカの街で一人暫く悩んでいたのだった。



『S. A. U. R. U (サウル)』の日本支部へ来た時にはもう疲労困憊だった。

草薙からの電話の後取り合えず近場の支部へ行き、本来俺がやるはずだった仕事を他の奴にまわしてもらって何とか日本へとは行けるようになったのだが、問題は鷺ノ宮だった。

奴は仕事とか外に出るときは凄くしつかりしてる奴なのに自室とかで休憩してるときは本当に鷺ノ宮本人かと疑いたくなるぐらい力が抜けていた。初め見たときはあまりの変わりつぷりに目を疑ったくらいだ。

しかもそうなたら部屋から出たがらない。今回は草薙からの頼みだということと、こんなことあったが今は鷺ノ宮と一緒に船でIS学園に向かっている最中だ。

ゆらゆらと揺れる船で眼前に広がる光景を見て驚く。二人とも、口を開けポカンとしていた。それで最初に口を開いたのは鷺ノ宮だった。

「……でつかいですね。総面積どのくらいなんでしょうか？」

「……あー、資料によると総面積は八丈島の1000倍、720km<sup>2</sup>ってことになるな」

「……島じゃないですよね……もう。維持費とかは」

「……国費や国連とかの寄付金で成り立っているそうだ……つつてもなあ……」

視線をI S 学園へ向ける。視界に収まりきれないほどバカでかい島が鎮座してる。島と呼べるのは些か疑問だが、これを維持しているのだからそっちのほうが疑問である。

と、そんな話をしていたら島に着いたようだ。人工島には見えず、緑、花々が生い茂っている。そんな中で二人は深呼吸と背を延ばす動作を一つつく。

その後手元の資料を頼りにI S 学園に向かう。……どうやら道案内はしてくれないようだ、草薙の奴め。



黙々と歩いて数時間ほど、やっと目的地にたどり着いた。少し疲弊して、顔に出ている。

「……はあ、やっと着いた……」

「……着きましたね。さすがに疲れた……」

IS 学園に辿り着いた二人は近くにあつた芝に腰を下ろしていた。そこに影が4つ向かつて来る。

ひとつは水色の髪をした少女。その隣にいる草薙の腕を抱えている。ひとつは見た顔。水色髪の少女の隣にいて、歩きにくそうな顔をしている。ひとつは黒のパンツスーツを着ている女性。仏頂面でその目は水色髪の少女に向いていた。ひとつは黒縁眼鏡を掛けている気弱そうな表情をした女性。頭一つ分くらい小さく、その顔は仏頂面の女性を不安げに見つめている。

そんな集団が歩いてきた。

「よう、司、一樹遅かったな」

他の三人が訝しげに見つめて来るなか、草薙はそんなの知らないとはかりに声をかけてくる。

歩いた疲れからか少し殴りたいと思つてしまったのは悪くないだろう。

「……ああ、お前こそな。なあ、鷺ノ宮」

「……ええ、そうですね」

一樹も司と同じことを思っているだろう。

「ねえ、リヨウ、この人たちは？」

三人の思っていただろうことを水色髪の少女は凌に聞いた。

「ああ、俺が呼んだんだ。俺と同じだよ。今日呼んだのはこいつらにも『特例』として授業を受けてもらおうと思つてな」

そう言つて二人を見たリヨウはニヤリと笑つた。二人はただただ、いきなりの事態に固まるしかなく、リヨウが教師（の助手）として働くのだと知るのほもう少し後の話になる。



夜。皆が寝静まっている時間帯一室に明かりがまだ点いていた。

「眠い……司、もう寝ませんか」

「俺だつて寝たいよ……だが後任の奴の為に今まで俺がやってきた調査書（レポート）を書かないといけないのだ」

「あと……この魔書みたいに分厚い説明書も読まなきゃいけないんですね……」

「……俺達には読めない魔書を読めって言われるよりはマシだがな…

IS、通称、インフィニット・ストラトスを扱うに当たつてのやらなければならぬこと、やつてはならないこと、知つておかなければならないこと、条約数百。が事細かく書かれている、そんな書である。

本来ならISを扱う少女が読まなくてはならないものだが今年、世界初の男性IS適性者が現れたらしい。大変なニュースになったため俺でも知つている。鷲ノ宮は分からんが。

そんなものを何故司、一樹が読まなければならぬのかというと、間接的にはいえ授業を受けるのだから読んでおいたほうが良いと言われたからだ。

そして『魔書』とは簡単に言えば人とリヴァイアサンとの仲介役である。他にも魔力の補助道具（サポーター）として杖や片眼鏡（モノクル）、魔術師の魔レンズ（ウィッチワーク・レンズ）、時計仕掛けの魔術師（クロックワーク・マジ）などの魔道具などが使われている。

そして、いくらリヴァイアサンが人工的に造つたものとは言え、それには意思があり成長する。リヴァイアサンが発現した時は誰しも『魔書』を使う。慣れてきたりしてくると『魔書』が無くとも意志疎通が取れるようになるが殆どの者が最初の一、二回で



『魔書』は使わなくなる。元々魔女の適性があるものは盟約さえすればいいのはわかるのだ。『魔書』は俺達には難解だが魔女なら自然と分かるらしい。

さて、何故司たちが夜を徹してそんな書を読んでいるのかと言うと自分の為であり、I S 学園の為なのだ。今、人がドラゴンの対抗力としてるのがリヴァイアサンとI Sなのだ。

俺達は知らないがI S 学園はドラゴンの襲撃を受けており、その際狙われたものがI Sに使われている『コア』なんだと草薙、そして織斑先生に言われた。そんなことを聞いてしまつては黙っている訳にはいかない。というか結構重要な情報だ。S・A・U・R・Uでその情報を知っている奴はいないんじゃないか？草薙も情報はまだ弱いと言うことで俺達にも手伝つてほしいとのことだ。別に構わないし、ここは全生徒が乗れるだけのI Sがないので他生徒が危険だろう。また、魔女の適性がある子が居るかもしれないし、放っておけないのだ。

「……頑張るか」

「……そうですね」

閉じそうになる臉をを擦りながら司は調査書を、一樹は説明書を読みふけていた。



ワイワイと人の声で溢れている教室に司たちはいた。教壇に先生が立っているのに殆どの生徒は視線が一番前と一番後ろを行ったり来たり来たりしている。

二人はぐったりしていた。徹夜とこのようなたくさんの視線。疲れるなど言う方が無理である。

「——です。そ、それでは自己紹介をしてもらいましょう。一番の人からどうぞっ！」  
ありや、しまった。担任の名前を聞いてなかった。迂闊だったな、まあ誰かが先生の名前を読んでくれるだろ。

その後次々に紹介が終わっていき、織斑一夏の番に回ってきた。

緊張はしているようだがそこまでは、と言った感じだ。まあ同じ男子がいるからだろう。俺も鷲ノ宮がいなかったらキツかったかもしれない。

「織斑一夏、です」

シン、と場が静まる。と言うよりも次の言葉を待っている感じだ。さて、どうするのか。

「——以上です」

周りの女生徒がずっこけた。『あれ？』と言った織斑一夏の後ろに影が立つ。

「自己紹介すら満足に出来んのかお前は」

「——!?ち、千冬ね……いたっ」

「ここでは織斑先生と呼べ、馬鹿者が」

織斑先生に織斑一夏が叩かれていた。ああ、どうりで名字が一緒な訳だ。姉弟か。

「キヤアアアッ！千冬ねえさまよ」

「織斑先生（ねえさま）よ！かつこいい」

「千冬ねえさまに会うためにこの学園にきました！」

「織斑先生と織斑君って姉弟？いいなあ」

「フヒツ、面白いネタが部長に伝えなくては」

女三人寄れば姦ましい、というが、三人以上寄ればどうなるか。それは賑やかだ、とか騒がしい、とかが当てはまるのではないだろうか。実際今そうだし。

「はあ……静かにしろ」

決して声を大きくした訳ではない。ただそれでも凜とした声が室内に響いた。それだけで騒がしかった教室が静かになった。

「騒ぐのは勝手だがせめて話ぐらいは聞け。お前たちがこれからやることは命の駆引きだ。いくらI Sに乗っていたとて安全ではない、むしろ危険度が高くなる。相手はドラゴンだ。分かったか？私達は化け物どもと戦うことになる。それを頭に入れておけ」

ほう、と織斑先生の言ったことに関心した。確かにドラゴンの登場により世界は制空権は取られた。

そんな世の中でもドラゴンの認知度は決して多いとは言えない。世界中のIS搭乗者が被害を最小限にし、俺達S・A・U・R・Uのような組織が、魔女たちが裏側から食い止めていることで保っている世の中だ。

俺や鷲ノ宮はドラゴンとの戦闘を一度だけ目にしたことがある。現存の兵器がまるで歯がたたなかつたIS、だがそれすらも上回るドラゴンの怪物性。

IS数十単位でやっとな戦えるかどうかの次元の生物。そんなものに女の子たちが戦うしかないというのは何とも言えない気持ちになる。心構えだつて出来ていなくて当然だ。しかし、一人は違ったようである。織斑先生の話が終わったあとパチパチと一人、拍手をしたのだ。まるで先の話に賛美を送るかのよう。

俺と鷲ノ宮は顔を見合せその少女に目を向けた。ブロンド髪にフリルの付いた長いスカートをはき、いかにもお嬢様と言った少女だ。優雅に席に座っていて彼女だけが織斑先生の言葉に目に見える形で反応していた。

のちに知った事だがその少女の名前はセシリア・オルコットと言うISの代表候補生だった。



初日にしては長い授業が終わった。織斑一夏と話して見たかったのだが休み時間などポニーテールの少女に連れ出されたり、放課後は俺達が草薙に呼び出されたりと会えなくなってしまうていた。

「そう言えば草薙、お前今日どこ居たんだけ？」

「確かに、見かけませんでしたね」

「あー、刀奈と一緒に地下に、な」

「地下？そんなものまであんのかここは……」

「刀奈さん、と言いますとあの水色髪の少女ですよ。彼女と何を？」

『隠していても仕方がないか』と呟いてからリヨウはそこであつた事を話した。

「……会えたんだな」

「……良かったですね、会えて」

「……ああ、だがまだ先生には会えてないんだ。あの人が死ぬとは思えないが……」

何か思うことがあるのか思案顔になり黙ってしまった。『先生』と言う人のことは大体、本人から聞かされている。幼い頃その人に見初められ、その人の弟子になったんだと言う。フラリと消え、一年以上も戻らなくそれから先生を探す旅に出たんだそう

だ。

「……で、あの、何でいるんです？」

鷺ノ宮よ、折角気にしないように流してたのに何故口に出したんだ。ほら草薙の奴だつてめんどくさいみたいないな顔してるぞ。

「あら、だつてここ私の部屋だもの」

私の部屋？あれ俺達は草薙の部屋に来たはずだが……。

「………同部屋なんだ。コイツと」

「うふふつ、同棲よ」

マジか。

リヨウは何でこんな事になったのかと嘆き、刀奈はただ微笑むのだった。



「それで、どうだった？」

先程の雰囲気とは打って変わり、真剣な表情で切り出したリヨウ。

「ああ、凄い緊張した」

「ええ、あんなのは初めての体験でしたよ」

「いや、教室の話じゃねえよ」

「分かってます分かってます、ちよつとしたジョークですよ」

「今のところ適性が低い人ばかりだな。ただ——セシリア・オルコットだけは別だが」

リヨウは『へえ』と言つて続きを促した。

「何と言うか、今日見た感じだと意識が高かったな。ドラゴンを見たか、ドラゴンのせいで何か負つたか、だな」

司の言葉を聞いてから『鷲ノ宮は?』と一樹にも確認した。

「そうですね、自分も司と同じですね。ひとクラスと数人しか見ていませんが適性は低いかと」

「そうか、魔女が増えてくれると助かるんだがな」

「日本の魔女率は?」

「ほとんど変わってない。数人は発現したが今だに都市部は一人しかいない」

「……一人、ですか。あと2、3人はいて欲しいんですが…」

「こればかりはどうしようもないしな。気長に待つしかないな、俺は。長崎、鷲ノ宮頑張れよ」

「おう」

「分かってますよ」

仕事の確認をして時計を見た。いつの間にか結構時間が経ってしまっていたようだった。

そこで『ぐー』と誰かのお腹が鳴った。

「んーお腹空いたわね。じゃあ食堂に行きましようか」

刀奈に促され皆が立ち上がった時に着信を告げる音が鳴った。持ち主は司のようだった。

『はい、もしもし』

『あー司ちゃん？』

『あれ、辰巳さん？何か何時ものテンションじゃないような……どうしたんですか』

何時もなら耳に響くような大声量で話してくるはずなんだが、今は全然普通だ。

『あ、あははく、ごめんちゃい！司ちゃんたちの事支部長にばれちゃった』

『——え。……嘘、ですよね』

『本当に嘘って言うてやりたいさ。ただマジに本当なのよね』

血の気が引くとはこのことだろう。支部長にバレたとは他の支部長も知ったと言うことだ。唯でさえそんなに多くない調査員の俺達が仕事を他に回したらどうなるか、それは簡単だ。あとの奴の仕事が増えるか、自分に倍になって帰ってくるか、だ。今の場合は明らかに後者だろう。



しかもバレたのが支部長なのが問題だ。絶対何か言われるし他の支部長も仕事押し付けてくる。

なのに何故リヨウについて来たかと言うとリヨウのそういうことはよく当たるからだ。

『……支部長は何と?』

『取り合えず一回戻って来い、だって。頑張れ司ちゃん』

『ちよつ、辰巳さん!? フォローは……』

『司ちゃんもだけど一樹ちゃんも戻って来いと、リヨウお前も後でな、だって』と言いつつ辰巳さんのほぼ一方的な電話は切れた。

「司、誰からだっただんですか?」

鷺ノ宮がそう聞いてきた。絶対テンション落ちるぞお前でも。俺だだ下がりだもの。

「辰巳さんからだ。なんでも『支部長にバレたから戻って来い』だそうだ」

一気に鷺ノ宮の顔が曇った。当然だ、戻った後の事を想像したのだろう。

「知られることは想定していましたがこんな早くですか……」

「ん? 何だどうした」

「早く行きましようよ、お腹ペコペコだわ」

遅いためか草薙と刀奈さんまで来てしまった。刀奈さん、貴女は腹ペコキャラなんですか。

「草薙、これから俺達は戻らなきやいけなくなつたわ。あと支部長が『お前も後でな』だつてさ」

「…マジか、巻き込みまつて悪いな」

「気にするな、無理に断ろうとすればここに来ないという選択肢もあつたんだ。来た俺にも責任があるさ。それにドラゴンがISのコアに反応することも言わにやあならんかつたしな。そうだな……何か旨いものでいいぞ」

「じゃあ、俺は休みでいいですよ」

「めっちゃ気にしてるじゃねえか……はあわかつた。出来る限りのことはする。ただし鷺ノ宮お前は無理だ」

「えー何ですか！ 司にだけ甘いですよ」

「そう簡単に休み取れるわけねえだろ。つかお前は十分休んでんだろ。休み欲しいのは俺だ」

『休み足りない』とほざいている鷺ノ宮を押し退ける。お前、俺よりも休んでるじゃねえか。

「じゃ、そういうことだ。折角ゆつくり話せると思つたんだが無理みたいだ」

「はあ、じゃあ仕事片付いたらゆっくりしましょう、リョウ」

「そうだな、いつになるか分からんがその時にな」

『刀奈さんも、また』と言ってその部屋を後にした。

いきなりいなくなるのはまずいので大まかな事情を織斑先生に説明してI S学園を出た。

「そう言えばもう春だったか」

月光に照らされている桜や風に舞っている花びらをみてそう呟いた。

「世界のあちこちに行くから季節感なんてもうめちやくちですよ」

「そうだな……桜ってこんなに綺麗だったんだな」

「……そうですね。炎の花よりはずっと」

なんと気無しに空を見上げれば月が空を地を照らしている。

そんな空に幾つかの影が移動している。

——ドラゴン。それは突然現れ、ドラゴンのせいで人は空を失った。

人が空を取り戻せるのはまだ来ない。

## 第十三話・タツグマツチ戦一回戦②

そう言えば、こんな風にまともに戦うのなんて数回しか、いや2回ほど（オルコットさんと一夏と）しかないな、と思いつながら司は箒と斬り結んでいた。

「はああああ!!」

やはりというか、予想通り自分よりも剣術が上手い篠ノ之さんに押されている形になっている。

なんとか防いでいるが精一杯と言った感じだ。

距離を空けようとして斬撃に晒されながらもアサルトライフル「焔備」を呼び出し、苦し紛れにばらまいた。少しでも当たるかな、なんて甘い想像をしていたがきっちり避けていた。

だが、これで俺と篠ノ之さんとの間に空間が出来た。これを利用してこの状況を打破する手を考える。

………あるにはあった、が痛そうだな。って考えてる時間は無さそうだな。

再度、刀を携えて突進してくる篠ノ之さん。また打つ、斬る、突く、薙ぐを繰り返す。

これに俺はタイミングを見計らって仕掛ける。

俺が上段で仕掛け、篠ノ之さんが横上に薙ぐようにして受けた。

——ここだ。

当たった瞬間【水仙】の持つ力を無くした。

すると【葵】が当たった衝撃で手から武器【水仙】が飛んだ。

これで俺は一時的に完全に無防備になる。ここまでは計画通り。後は篠ノ之さんが突っ込んで来てくれるかだが……。

「ふん、武器を無くしたな。これで終わりだ！」

そう言つて刀を振り上げながらこちらに向かつて来た。

——よし、来た！

そこから俺は篠ノ之さんに向かいながらある構えをとる。左足を前に出し、右足を半歩分下がらせる。そして腕を交差させて開手にし、それを頭上までもつていつて構えは完了。開いた手の背拳で刀を挟み込むようにして取るのを意識する。

後手にまわってしまったが十分、半歩下がらせた右足で大きく踏み込む、と同時に開手背拳で来る刃を挟み取る。念のために肩部シールドを腕へ移動させていたのだがやはり痛い。

「いつてえ……！」

「なっ……!」

ISと言えど傷は負わないが衝撃くらいは来る。分かつてはいたがさすがに痛い。だが止められた。

司が行ったこの構えは空手にある『十字受け』にあたる。

すかさず止めた刃を両手の甲でガツチリと挟み、そのまま90°。横に反らす。

「くっ……!」

反らすのと同時に刀自体を自分側に寄せるようにしたので篠ノ之さんは体勢が崩れた。それを利用し、手刀ならぬ足刀を左足で前蹴りの要領で繰り出す。

「ぐはっ……くっ!」

足刀が良い感じに胴に入ったからか篠ノ之さんが飛ぶようにして転がっていった。そんな大きすぎる隙を見逃す訳がない。

【焰備】か【撃墜】、どちらが良いか一瞬だけ悩んだが【撃墜】を呼び出した。

理由は、意外に多くエネルギーを消費してしまっていたこと。なのでこちらで勝負を決めたかった。

起き上がろうとしている篠ノ之さんにそうはさせまいと【撃墜】の照準を合わせ、引き金を引く。

轟音が続けて鳴り響いた。一発は篠ノ之さんに当たり、もう一発は土に当たり地面が

爆ぜた。

打鉄は防御に軸を置いた機体だ。いくら【撃墜】と言えど一発当たった程度でエネルギーがゼロになったか怪しいところだが……。

用心のため、俺は【撃墜】の弾を再装填して構える。

「……うっ……くっ……嘗めるなあ!!」

土煙が晴れ、出てきたのは、激昂した篠ノ之さんだった。

「やっぱり削り切るのは無理だったか」

ボーデヴィツヒさんの下に【蓮】を飛ばす。負けないとは思いますが鷲ノ宮の実力が分からないので何とも……。しかし、ボーデヴィツヒさんの『A I C』は発動させるのに少しだけ間が出来てしまう。そこを突かれたらボーデヴィツヒさんでも対処が難しくなってくるだろう。できるだけ戦闘に専念してもらいたい。

俺は【蓮】を操りながらの戦闘になり、センサーに頼りきりになってしまふ。

そう漏らしながら、再度向かって来る篠ノ之さんに【撃墜】を撃ち込んだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「欲を言えば、2対2で戦いたかったですね。篠ノ之さんも強いですが司君も強い。ですが今の篠ノ之さんでは勝つのは難しい。なので通して頂けませんか？」

「ふん、それは2対2なら私に勝てると言ってるように聞こえるが？それと、通ってたから、通って見せろ」

互いに一言二言言葉を交わし黙る。幾ばくかの沈黙の後、両者共に動いた。

ラウラはレールカノンをぶちかまし、一樹はアサルトカノン【ガルム】を右手に重機関銃【デザート・フォックス】を左手に出し、撃つ。

ラウラの砲撃をシールドを使って防ぎ、避け、空に急上昇することで回避し、急旋回、ジグザグ、様々な方法で砲撃を避け、後に出した6本のワイヤーブレードも全て撃ち落としていった。

一樹の弾幕をレールカノンでかき消し、プラズマブレードで切り裂き、ワイヤーブレードで攻撃を阻害させ、それでも漏れた弾を全て【AIC】で止め無力化する。

一進一退の攻防、それでも僅かにラウラの方が瞬間的に勝っていた。

ジリジリと押されていく一樹は心の中でぼやく。

「くつそー、やつぱりボーデヴィツヒさんは強い。さすが候補生レベルが違うね。隙間を縫って行こうとした度に止められる。というかもう嫌だ。疲れた、寝たい、布団に沈みたい、休みたい」

一樹は若干場違いなことを考えていたりしていた。

そんな間も手を休めることなどしない。そんなことをしたらあつという間に喰われ



てしまうからだ。

両手に「ブレット・スライサー」を展開。近接戦闘に持ち込む。対するラウラも両の手にプラズマブレードを形成させこれを迎撃する。

斬り、裂き、薙ぎ、突き、切り上げし、切り下げし、鏢迫り合い、劍の腹で突きを受け、反らし、空いた手で追撃。

それぞれ斬撃の応酬が繰り広げられる。両者共にギリギリと言ったところで防いでいるが隙が少しでも出来たらそれは崩れる。

そんな中、不意に一樹が後退する。ラウラがそれを追う。プラズマブレードでそこを突こうとしたら大質量の物体が、「フラッカーデイルト・ガル」で跳ね上げられた。

上に弾かれる形になり、多大な隙が出来た。そこに一樹は両手に「レイン・オブ・サタデイ」を展開させラウラにこれでもかとおち込む。至近距離から腹部に。

しかし、その隙間に割り込むようにして「蓮」が入ってきた。

防御パッケージ「蓮」が防いだお陰でダメージはほぼ負わなかったが、撃ち出された量が多かったので衝撃で吹き飛ばされた。

舌打ちをして体勢を直ぐさま戻す。そして一樹の槍、「フラッカーデイルド・ガル」の穂先がこちらに向けていられているのに気が付いた。

ランスが発射の為に爆発。それと同時に紅い円錐型の穂先がラウラに向かって飛ん

でいく。

穂先が当たる直前、巨大な2つの花卉が形成され、ラウラの前に一つの影が立った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

怒っているせい、攻撃が直線的になっているのだから如何せん慣れていない武器のせいでやりにくい。

「くそっ、分かつてはいたが、実戦でここまで扱いづらいとは」

超長距離射撃兵装装備【撃墜】を撃つて地味に削っているが、実体シールドで防がれたりと一手が足りない。どうすっかな、こっちは【撃墜】で近接ブレード【葵】を防いでいるけどなんか壊れそうだ……っっておいおい！ボーデヴィツヒさん危なくねえか？

「くそっ……」

直ぐ様【蓮】を展開させる。弾幕は防いだ。しかし槍の弾丸か……【大輪】じゃ防げないな。今からやって展開間に合うか？

篠ノ之さんの相手をしている時ではない。シールドに当てて吹き飛ばし、距離を稼ぐ。そして俺はボーデヴィツヒさんの前に立った。

◇◇◇◆◇◇◇◇◆

私は焦っていた。何処か冷静な部分の私がこのままでは負けると告げている。

何故かは分からない。攻めているのは私だし、攻撃だつて多く当てている。だか何かが消えない。私は弱いのか？

負けられない。一夏の為にも、何より自分の為にも。

だがそんな私の意気込みとは露知らず相手は適当にあしらつて私に背を向けて行った。

私は相手にもされないのか。ふざけるな。ふざけるなよ。

「……………あああああ！」

吹き飛ばされながらも何とか体制を立て直し、奴に追い縋つた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ボーデヴィツヒさんのところに無事に到着したがまだ【天輪】が不完全だ。にしてもまさか、【天輪】まで使うことになるとは…。これ結構な切り札だよ？これじゃあ【大天輪】まで使わされるかも知れんね。

【天輪】は【大輪】の上位版である。数十の蓮の花があるのが【大輪】であるならばそ

れを二つに集約したのが【天輪】。その【天輪】を一つにしたのが【大天輪】になる。先程出した【天輪】は花卉が四重なっており、防御力も上がっている。

それをボーデヴィツヒさんのところにやっていると、ぎりぎり完成……してない!? 普通は内から形成していくのだが、焦っていたのか外側から【天輪】を創ってしまったのだ。そうなってしまうと本来の防御力は十分には発揮はされなくなる。

鉄の鎌（やじり）とエネルギーの塊が激突して、激しい音が鳴った。

「ぐっ……ううううっ！」

完成していない中心点に撃ち込まれているので【天輪】を無理矢理閉じて防御を行っている。なので衝撃がもろに手に伝わってくる。

「ボ、ボーデヴィツヒさん。お、俺ごと空間を固定してください。もしくは鷲ノ宮の奴を叩いてくれると有り難いです……」

防ぐことに集中力を割いているので中々【蓮】が完成しない。そして手の方も限界に近かった。

『警告！敵機接近感知。方向3時。所持近接ブレード』

打鉄から危機を知らせる電子音。3時と言うと篠ノ之さんか。くそっ、今は手が離せん。

「はあああああっ!!」

雄叫びをあげて突進してくる篠ノ之さん。ボーデヴィツヒさんが舌打ちをして「AIC」を発動させる。空に縫い付けられた篠ノ之さんは抜けようとも藻掻くが抜けられない。その状態でレールカノンを撃ち、着弾と同時に「AIC」を解除して吹き飛ばす。よし、これで……と思った時、カツンと音がした。音がした方向、前を見る。鷲ノ宮が投げたであろう手榴弾が弾かれ地に落ちそうになっていた。

——誘爆か。

そう思った時にはもう遅く、手榴弾は爆発し同じように穂先も爆発した。

爆炎と爆風のなか、鷲ノ宮は司とラウラがまだ健在だと言うのが分かっていた。

「びゅー♪防ぎ切りしましたか」

「ゲホッ！ゴホッ！くそ、やってくれたな、ボーデヴィツヒさん！大丈夫ですか？」

悪態をつきながらボーデヴィツヒさんの元へ駆け寄って行く。

「私は助かったがお前は大丈夫か」

「今ので殆どのエネルギーを持っていかれました。しかしボーデヴィツヒさんが無事で良かったです」

まだ大したダメージも受けていないことにホッとした。

「篠ノ之さんは？」

「そこからへんでダウンしているだろう」

篠ノ之さんは脱落か。しかし火力強いなー。俺もそんな一手が欲しい。

「篠ノ之さんは：やられてしまいましたか。あそこで分断されたのが痛かったなあ。ボーデヴィツヒさんは易々と通してくれないし、長崎君のあのパツケージは防御力強すぎるし、うーん、どうしたものかなあ」

一樹は今後の攻撃の手をどうするか暫し考えてから『まあ、戦いながら考えて行くか』と結論付けて二人に向かって行つた。

「来たか。ボーデヴィツヒさん、俺が防御に廻ります。攻撃面は頼みました」

そう言つて「大輪」をボーデヴィツヒさんと自分の周りに展開。戦闘に入ると防ぐことに専念しなくてはならなくなつてしまうがここでボーデヴィツヒさんがやられてしまったら俺では鷲ノ宮の奴に勝てそうにない。無論、ボーデヴィツヒさんが負けるとは思えないが先程のような攻防では攻めることに手一杯になつてしまつて防ぐことが疎かになるだろう。なので攻撃に専念して欲しいのだ。

「ああ」

そう言つてレールカノンを一発ぶち込んでから、ワイヤーブレードを展開してから駆けて行く。

そこからはまた凄まじかつた。ハイパーセンサーで補い何とか凌げていたものの。【蓮】の弱点を見破られたのか近接戦闘が多くなつた。

【蓮】の弱点、それは近接攻撃にとことん弱いことだ。特に斬られることに弱くブレード類で来られたら装甲は紙同然まで性能が落ちる。そのくらい相性が悪い。

「……あー、ダメだ。こりあ気付かれてるね。となると、遠距離か近接になるが……」

【水仙】のリミッターを一つ外す。帯電率を5%から15%に。すると淡い蒼色を帯びていた刀身がほんのりと黄みを帯び始める。

「まあ、やられる覚悟で行きますか」

淡い蒼黄色をした【水仙】を構え、ボーデヴィツヒさんと鷺ノ宮のところへ向かった。



火花が舞った。何回も、連続で。音が響き、地が爆ぜる。火が散り、地が抉れる。

両者とも拮抗しており、あと一手が欲しかった。しかし一樹にはその一手は残されていなく、必然的にラウラにその一手がまわる。

一樹のISが警告を鳴らす。その後、刃が割り込んできた。

「きつつい。割りととかそんなの以前に2対1はやっぱりきつい！参ったな、負ける気はないんだけど負けそうだ。くうく、対一になった時に強引にでも良いから行けば良かった」

内心では泣き言を漏らしているが、きつちりと応戦して見せている一樹。だが司が混じって来た戦闘から攻撃を受けることが多くなつた。それどころか機体が一拍遅れて動く。そこは全て司に斬られた所なのであの刀が関係しているのはわかる。

「(まだ足りないか。：仕方ない、もう一段外そう)」

そう思い、司は「水仙」の2つ目のリミッターを外した。と同時に「水仙」の色みが増し、大きくバチリと雷が弾ける。リミッターが外れたことにより帯電率が15%から30%に上がったために起こつた現象だ。

刃同士を合わせていたため、一樹はその光に目を焼かれ、数瞬視界が奪われる形となつた。

その状態では動くことは困難。とつさに足を止めてしまった。そしてそれが致命的だった。

「(しまっ……!)」

止まつた敵など格好の的だった。ラウラのAICに捕まり空間に捕らわれ身動き一つ出来なくなる。

手前に出しているモーションから、肩のレールカノンを鷺ノ宮へと向ける。そこで一樹は悟る。

「(ああ……これは負けましたね)」



ラウラは2発、鷺ノ宮に撃ち込んだ。それで鷺ノ宮のシールドエネルギーが無くなり、俺とボーデヴィツヒさんが勝利した。

## 第十四話・戦いの後、2回戦目

「……勝った、のか？」

勝者を告げる声を聞いても実感が沸かなかった。そんな所にボーデヴィツヒさん、鷺ノ宮、篠ノ之さんが来た。

「くあー、負けました。強かったですよ、ラウラさん、司くん」

司くん!? 何だその呼び方は。

「……鷺ノ宮、その司くんってのは何だ？」

おかしいな、こいつは俺のことを名前で呼んでいた記憶は無いんだが…。

「いやー、一夏とちよつと賭け事をしてましてね。一夏と戦う前に負けるとジューズ奢んなきゃなんないんですね。あと自分は $+a$ で、な……司くんのことを名前で呼ぶと」

なるほど、そう言う訳だったわけだ。……え、なにそれ俺知らないんだけど。立案者(織斑)、絶対に許さない。

「……それは分かったが止めてくれ。名前をくん付けで呼ばれたことないから寒気が止

まらん。何時も通りかせめて織斑みたいに呼び捨てで頼む」

「じゃあ、司」

いきなり呼び捨てなんだ：いや、良いけどさ。

「二回戦頑張って下さいね。当たったら一夏たちに勝っちゃってください」

「おう」

「ボーデヴィツヒさんも頑張ってきてくださいね」

頷いたか頷いていないか辛うじてしか分からない肯定をしてからボーデヴィツヒさんは俺たちとは別に別れて行った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

暗闇の部屋で少女が一人、いる。

時刻はもう夜だったが、月の明かりが彼女を照らしている。

長い銀髪をした少女、ラウラ・ボーデヴィツヒは思案顔で月を見つめている。その横顔は普段の雰囲気は成りを潜め、何処と無く幼子のようなだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

胸のモヤモヤに気が付いたのは部屋に戻ってからだった。

部屋に戻っても何となく落ち着かず、気をまぎらわすためにナイフを研いでみたが何も解決しなかった。こんなことは初めてのことだ。

それと同時に私にもこんな感情があるのだなと驚愕した。

薄ボンヤリだが、何故モヤモヤとした感情が私の中で渦巻いているのか、原因はわかる。

——長崎だ。今日の試合にしても、今までではシュヴァルツェ・ハーゼ——通称黒ウサギ隊の面々と共に戦ったことはあった。

その時は何も思わなかったし、感じなかった。しかし、今はどうだ？ 戦い易かった、と思っただけではないだろうか。

私は戦闘時、長崎に何も言っていない。どう攻撃してどう守るかなど何も言っていない。だが、長崎はそんな私に合わせた。手数が足りない時に攻撃を合わせたきたり、度々鷲ノ宮の攻撃を防いでくれたりと、何だかとても戦い易かった。

そう、戦い易かったのだ。今まで一緒に戦う時が合っても、ペアなんて邪魔、居なくてもいい存在だと思っていた。私に合わせられる人（やつ）などいないし、合わせようとも思わなかった。

しかし、今日長崎とペアになって分かったこともある。

——全然そんなことはなかった、と。

「……長崎、司か」

ポツリとそう溢してから、ずっと見つめ続けていた月を視線から外し、明日に備えて布団に潜り込んだのだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

鷺ノ宮と篠ノ之さん、ボーデヴィツヒさんと別れてから司は向かった先があつた。それは来賓やI・S企業が座る場所であつた。

「おーい、長崎くん。こっちこっち」

「司兄い、こっちだよー」

「つか兄ちゃん……こっち」

水面さんが大きな声で大きく手を振っている。その隣には藍に彼方が同じように手を振っている。

「お、来た来た。長崎ー、こっちだよー」

「へえ、あの子が社長が言ってた子ねえ……本当に男の子だったなんて」

「ふむ、社長の言っていたことは本当でしたか。しかし、誠実そうな方ですね」

大葉が司に気付き、ウォーター・リリー社の方へ手招きする。その傍らには見知らぬ女性が二人いた。

「水面さん、三木さん暫くぶりですね。藍と彼方も元気にしてた？」

「うんうん、元気元気。あ、長崎君、さっきの試合良かったよー」

「司兄い、カツコ良かったよー！」

「カツコ良かったよ……つか兄ちゃん」

「ああ、良かったぞ。まさか【水仙】を二段階外すとは思わなかったが、良いものが見れたぜ」

「そうねえ、今まで現場で自分の作ったものが使われてるのは初めて見るから新鮮だったわ」

「水面さん、どうもありがとうございます。藍、彼方、ありがとう、嬉しいよ。……ところで水面さん、三木さんそのお二方はどちら様で？」

「そうだよ、見知らぬ人が二人いるよ。サラッと流してたけど。説明してくれるとありがたい。」

「ん？おっと、そうだった。前に俺が他の二人とジャンケンして勝って司を見送ったってのは知ってるよな」

返事をして、肯定を示す。

「その時に、俺に負けた二人つてのがコイツらだ」

「そうねえ、このバカ（三木）の言いかは兎も角として、初めまして長崎司くん。私はI S 装備開発主任、日比野 花梨（ひびの かりん）よ。よろしくねえ」

茶髪のウェーブがかかったセミロングな髪に三木さんと同じような作業着を着ている女性、日比野さんはそう言つてヒラヒラと手を振つた。

……三木さんと同じ作業着を着ているが、開発主任？ つてことは偉い人なのかな。

顔やしやべり方、雰囲気もおつとりとしているのでそんな風に見えないが……。

どうでもいいと言うか、失礼な補足だが、お胸がおつきい。この中で一番かもしれない。い。

「では、私も。水面社長の秘書をやっている神崎 薄野（かんざき すすきの）と言います。先程の長崎さんたちの試合、良いものを見させて頂きました」

黒いパンツスーツに銀縁眼鏡の女性、神崎さんがそう言つて微笑みを浮かべた。



「しかし、【蓮】の弱点、鷲ノ宮にバレてましたよ？ たぶん……」

「ああ、見ててわかったが、ありや後半からバテてるな」

「そうねえ、改良したいのは山々だけれど【蓮】はこれで一つの完成形なのよねえ……」  
三人で、とうか会話に加わってこないが水面さんや藍、彼方も【蓮】について考え込んでいる。

自己紹介が終わったあと、色々話していたのだがいつの間にか【蓮】や【水仙】のことの話しになっていた。

「うーん……じゃあ今度は切り離しタイプじゃなくて、こう…打鉄に纏うようなパッケージはどうですか？」

「ふむ、纏う……か」

「つて言ううと、鎧とかみたいになっちゃうわねえ……」

「うーん……纏う……鎧……無効化？……」

「……無効化して……爆発……で攻撃を……」

ブツブツと呟きながら考え込んでしまった。

「……うーん？んー、ん！ねえねえ、大葉ちゃん、花梨ちゃん、ちよつとこつち来て」

水面さんが何か思いついたようだ。二人の耳元に口を寄せゴニョゴニョと喋っていたと思つたら三人ともニヤリと笑いながらこちらを見た。な、なんだ？

「いやー、長崎くんのおかげで良い案が浮かんだよ」



「そうだな、このトーナメント中は長崎の試合があるから作れないが、いいものが出来そうだ」

「そうねえ、出来るだけ早く仕上げて長崎くんに試させるわ」

「何だがよく分かりませんが、楽しみにしています」

と、そんな話し合いが終わったと見たのか、藍と彼方が遊ぼうとせがんで来た。

「司兄い折角だから遊ぼうよー、もしくはお話ししようよー」

「つか兄ちゃん…遊ぼう」

水面さんや三木さんに大丈夫かと許可を取り、暫く藍と彼方と話したりしていた。

小さい頃から藍や彼方を知っている為か大きくなつたなあと言う思いだった。

◇◇ ◇◇◇◇◇◇◇◇

俺とボーデヴィツヒさんは第一アリーナに出ていた。2回戦目の戦いがそこで行われるからである。

試合開始の合図（ブザー）を待っているような状態だ。対戦者も同じく待っている。

俺はその対戦者をもう一度見る。

織斑・デュノア、ペア。

そんな俺が見えたのか織斑が通信を寄越して来た。回線はプライベート。

『まさか、2回戦目で当たるとは思わなかったな』

『そうだな、まさかこんなに早く戦うことになるなんてな……何か仕組んだのかねえ』

『あ、あはは……』

対戦相手は完全ランダム性だ。一回戦で勝ったとしてもあみだくじのように上へ上がるのではない。そこから勝ち上がった者たちがシャッフルされ組み込まれる。3回戦も変わらない。真偽が分からず、織斑も笑うしかないようだ。

音と共に空中にカウントダウンが表示された。

『……司、とラウラにも伝えてくれ』

『んっ？』

『絶対、負けないからな』

『ああ、俺だって負けるのは嫌だね』

そこで通信は切れた。織斑の言葉をボーデヴィツヒさんに伝える。

「ボーデヴィツヒさん、織斑が『負けない』って言っていました」

「……ふん」

その言葉に鼻を鳴らして答える。

会話はそこで途切れ、全員が戦闘体勢に移行する。

——5秒前。

一夏は【雪片式型】を構え、シャルルはアサルトカノン【ガラム】を右手に、連装ショットガン【レイン・オブ・サタデイ】を左手に構える。

ラウラは右手のプラズマブレードを展開、レールカノンの照準を相手に合わせる。司は対BT・銃火気兵器【蓮】、【水仙】も加えて起動させて構えた。

——1、0秒。

ブザーが鳴り響いたと同時に4人が同時に動き、土煙が舞った。

ラウラは一夏と。司は一夏を援護しようとしていたシャルルを邪魔するように相対した。

——第2回戦が始まった。

## 第十五話 乱入機（らんにゆうしや）

「長崎くんが相手かあ。因みにだけとそこ通してくれるとかない？」

「……………」冗談を。まあ、ボーデヴィツヒさんの気持ちも汲んでやってください。何だかすごく一夏の奴と戦いたかったみたいで」

「僕にはあまり関係ないね、僕は一夏のパートナーだから。長崎くんが退いてくれないなら、倒していくまでだよ」

「あら、そうなりますか……………」でもこっちも簡単には通せませんがね」

シャルルのアサルトカノン「ガラム」と連装ショットガン「レイン・オブ・サタデイ」が火を吹き、弾幕を形成。司は「蓮」を展開してそれを無力化していく。



司とシャルルが激突している中でラウラと一夏も同じように戦っていた。

一夏はラウラの「AIC」をなんとか掻い潜り、雪片で斬ろうとするが全くと言って

良いほど当たらない。

ラウラはその一夏の攻撃を避けつつ、ワイヤーブレードで牽制し、レールカノンを放つがなかなか当たらない。

「くっ……シヤル、は司が足止めしてるか。……司のアレは一体何なんだ。攻撃は全然通らないし、ラウラの【AIC】とはまったく違うし……」

喋っている余裕は無いが、チラリと漏れてしまった感想。

司たち一回戦の戦いを一夏たちは見ていなかった。ちょうど一夏たちも一回戦で被っていたためだ。なので一夏もシヤルも司の装備は初見だ。

そんな風に思っても戦闘は続いていく。



「……ぐっ、防げては……いるけど、攻撃がっ、まま……ならないなっ……い！」

【蓮】のおかげでデュノアさんの攻撃を殆ど無力化しているが、こちらも迂闊に動けない。

こちらでも当たらないと分かっているが【撃墜】を撃ち込む。砲撃を易々と避け、また弾幕を形成していくデュノアさん。

……このままじゃギリ貧だなあ。近づこうにも、近づけないし……【水仙】じゃ射程が圧倒的に足りない。

「……3つ目外すしかないかな、コレは」

そうぼやいていたら、痺れを切らしたのかデュノアさんが近接ブレード【ブレード・スライサー】に持ち変え、接近戦に持ち込んで来た。

——好都合。近付いて来てくれた。

【蓮】をいつでも「睨かせられる」ように待機させて、【水仙】を呼び出す。そして、ナノマシン生産完了後すぐに2つのリミッターを外すように設定する。

『【Narcissus（水仙） ∴ Nanomachine ∴ 生産率53%】』

まだ生産しきっていない【水仙】を構え、接近戦になった。



「……………ちつ。中々捕まえきれんな。やはり瞬間加速（イグニッション・ブースト）は厄介だな」

「へへっ、捕まっちゃ駄目なんだろう？逃げるのは得意だぜ」

ラウラ、一夏は先程と同じような戦いを繰り広げていた。

ワイヤーブレードを避け、斬り込んでくる一夏に「A I C」をかけようとしますが、横に瞬間加速することで一夏はラウラの「A I C」を回避。しかも横に行くだけでなく体を斜めに傾けて体重をかけて、半回転しているのだから「A I C」を避けただけでなく、すぐラウラに攻撃できるようにしているのだ。ちなみに、この時一夏は無意識下に手を開いたり閉じたりしていた。

「……………」

「はあああああー！」

ラウラの後ろ、今無防備な姿をさらしているラウラに一夏が雪片を振り降ろす。しかし、手応えはなく感触は空を斬っただけでラウラはそこに居なかった。

「なっ!？」

驚き、声をあげると横から声が聞こえた。

「なるほど。織斑一夏、お前は強い。私の想像以上だ。……………だが、そんなものか」

ラウラは『停止結界』を発動させ、一夏を空間に縫い付ける。そして、さらに言葉を続ける。

「お前の太刀筋を見てはつきりした、お前は教官を真似ているが、お前では絶対に教官にはなれん」

言っていて何を、と思った。そんなのは当たり前だ。完璧に物事を真似たところで、人では決して、その『誰か』になることなど出来ないのだから。

そしてラウラの放った言葉は自分にも返って来た。『なら、自分はどうか』と『お前は教官を真似たことはないのか』と。

自問自答。思考の渦に飲まれ、攻撃の手が止まる。そしてそこにつけこまれるようにアリーナの地面が爆発した。

突然のことに、流石のラウラも【AIC】を解除して土煙があがっている方へ視線を向ける。一夏もそうだ。

土煙から現れた『それ』は——2機のISだった。



【Narcissus (水仙) : : Nanomachine : : 生産率92%】  
 あと少し、と思う反面【水仙】を出したとしても勝てないかな、と言った思いがあった。圧倒的に機動力が違うのだ。

——ラファール・リヴァイブ。標準機のデータを参考にして、予測をたてていたが全然違う。機体を改良しているのか速力、機動力や銃器の威力までそのデータよりも高く



なっていたのだ。

加えて、高速切替(ラビット・スイッチ)が本当に厄介だ。ブレードで戦っていたと思っただけの間に銃にか銃に持ち変えているんだよな。おかげで近距離から弾幕喰らいそうになるし。……そう言えば鷲ノ宮の奴も高速切替あるって言っていたな。ちゃんと聞けば良かった。

〔Narcissus (水仙) : Nanomachine : 生産率100%〕

〔水仙〕のナノマシンが生産されきつたことを電子音が告げた。続けて声が聞こえる。

〔 : Narcissus (水仙) : リミッターを解除します : Fir  
 st step : Release (第一段階) : 解除) : 帯電出力15  
 %。続いて、second step : Release (第二段階) : 解除)  
 : 帯電出力 30%〕

2つ目のリミッターが外れ、淡い蒼黄色くの光を帯びた〔水仙〕。そしてそのまま3つ目を外す。

〔 : 命令を確認。Narcissus (水仙) : Third stage  
 : Release (第三段階) : 解除) : 帯電出力45%〕

先ずは第三段階目を解除だ。

蒼黄色がうつすらと色みが強くなると今度は刀身から小さい紫電が【パチパチ】と音をたてながら現れる。

これは【水仙】の帯電されている電気が刀身部に収まりきらず、外に放出しているのからだ。

これにより、一段目・二段目とは違ったベクトルで威力が上がる。

「ふっ！」

第四段階はまだだがその状態でデュノアさんに斬りかかる。が【ブレット・スライサー】でそれを受け止め、反らし、反撃してきた。

だが、動きが少しだけ鈍いと感じる。直接斬らなくても効果が出るのかと思った。それでも段々と俺の方が圧されてきた。デュノアさんはラビット・スイッチで近・遠距離武器を即座に切り替えて戦っているのでどうしても対応に遅れてしまう。

だから焦って誘いに乗ってしまっただけ。がら空きの左脇腹。そこを【水仙】で難いだ。それが愚策だったと気が付いたのはその直後だった。

司から見て左脇腹、シャルルからすると右脇腹になる。【水仙】の軌道上に装甲の分厚い右腕が割り込んで来た。そのまま腕を滑らせ、司の方へ突っ込んで行く。

殴るように司の胸部に拳を持っていき、鉄と鉄のぶつかる音が聞こえた。その一拍置いて激しい打撃音がし、司が吹き飛んだ。

エネルギーを大きく削られ、打撃の衝撃で肺から空気が完全に無くなり一瞬の呼吸困難に陥りながら司はそれを起こした原因を見た。

シャルルの右腕の分厚い装甲は無く、大きな杭とりボルバーのシリンダーのようなものが腕部にあった。

シャルルがこの戦いの半ば切り札としていたのが、今使った六九口径パイルバンカー【灰色の鱗殻（グレー・スケール）】。通称——『盾殺し（イージス・ピアース）』。通常のパイルバンカーとは違い、リボルバー式となっており連射ができる利点がある。

「……………かつ……………は、あ…」

シャルルは呼吸のダメージが抜けきっておらず、地に伏し喘ぎながら息を整えようとしている司の姿を見て良心が痛んだが、その隙を利用し、アサルトカノン【ガラム】を両手に構える。

今まさに引き金を引こうとした時、アリーナの地面が爆発した。驚きはしたが照準を司からその土煙の方へ向ける。

土煙が薄れたところから影が浮かび、そこから熱線光（ブラスタ）が飛んできた。熱線光をスラストターを稼働させ回避する。反射的にアサルトライフル（レッド・バレット）を撃ち込む。だが返ってきた反応は弾が弾かれる音が聞こえただけだった。

煙が晴れ、現れたそれは2機のIS。——『ゴーレム』と呼ばれたISだった。

## 第十六話 VTS (ヴァルキリートレースシステム)

「なっ!? こいつは——」

そこまでしか一夏の言葉は続かなかった。何故なら、腕をこちらに伸ばし熱線光（ブラスター）を放ってきたからである。

「なんだ、あいつは」

一夏と同時に後退したラウラがボソリと呟き、隣にいた一夏が答える。

「あいつは、無人のISだ。前にも学園に入られた。ただ……前の機体とは違うみたいだ」

そう言いながらも視線は離さない一夏。前に飛来した無人IS——通称<sup>ㄥ</sup>ゴーレムは鉄の塊のような機体だった。だが今、目の前の機体は人形により近づき若干スリムになっている。

「——」

全身装甲（フル・スキン）で顔どころか口も見えないがそれでもゴーレムは雄叫びをあげた。相手を威嚇するように全身を鳴らした雄叫びを。

その動作のあと、ゴーレムは両腕を伸ばしラウラ、一夏に向かい熱線光を連射する。

一夏はその攻撃を何とか避け続け、ラウラは余裕を持って回避する。

「……遅いな。ただの熱線光ならいつまでかかっても私を落とすことなど出来ん。ましてや——」

ラウラの動きが極端に早くなり、一瞬で背後を取った。そのまま手を向け【A I C】を発動させる。

空間に縫い付けられたゴーレムはもがこうとするがそれすら許されない。

「殺す気も無いんだ、勝てる訳が無いだろう。機械風情が」

肩のレールカノンがゴーレムに照準を合わせる。そして続け様に爆ぜた。

一発一発を確実に当てていき、どんどん装甲が壊れていく。

四肢が破壊され、体も半壊した。これで終わりとはばかりにラウラはレールカノンを頭に狙いを定める。しかし、I Sの警告音がして、横から衝撃。飛んできた物体をつかんで見るとそれはぐったりした長崎だった。

「——長崎っ」



「……………なんだ？こいつは」

荒い息をしながらも何とか立ち上がり司はそう呟く。

不用意に近づいたりりはしなかったが、それでも不気味なことに変わりはない。それはデュノアさんも同じだったようでジツと睨んでいる。

まさに正体不明。この4人の中で「ゴーレム」の存在を知っているのは一夏だけである。

司とシャルルに至っては何と戦っているのかすら分からない。

「……………長崎君、相手がどんな奴かわからない。まずは出方を——」

シャルルの言葉はそこで途切れた。ゴーレムが手をこちらに向け、熱線光を放つてきたからだ。だがその攻撃を司は「蓮」で防ぐ。

「……………防げないことはないが、何だか反応しづらいな」

攻撃は一定で、予備動作が無いため反応が遅れてしまう。

——まるで。

「……………何だか、このISって機械みたいだよな」

おっと、奇しくも同じことを思っていたらしい。

「…ですね。動作は一定で、考えて行動してる感じがしませんしね」

まるでこちらを観察しているようだ。

「——無人機？」

「……え、無人機、ですか？」

「うん。だけどISは人が乗っているから動かせるんだけど……」

ふむ、デユノアさんの話からすると……つまりあれに人は乗っていない訳だ。幸いなことに。

「丁度良い。これは水面さん達から危ないからあまりやるなって言われてたんだが、今はするときだよな」

攻撃を食らった相手も危ないが、自分も危ないという物だ。

そう言ってからリミッターの“4段階目”を外す。

短く空気が抜ける音がし、放電が始まる。“3段階目”よりも大きく、強く電気が弾ける。発生した電気が空気を弾き、音が伝わる。

【Narcissus (水仙) : : Nanomachine : : 生産率100%

維持 : : リミッター“固定ボルト”解除命令 : : : : 受理 : : : : リミッターを解除し

ます : : : : Fourth stage : : : : Release (第四段階) : : 解

除) : : : : 帯電出力60%。一次規定50%を超えました。13%のフィードバックが発生します】

また、一際大きく電気が弾ける。それと同じで刀身の色も強く、濃くなる。

「……………痛っ……」

フィードバックによつて、手に電気が流れる。そこまで強くないがこれが続けてだと  
敵しいかもしれない。

「……………俺が防いで足止めします。デユノアさんは隙が出来たらアレをぶち込んでください」

コツコツと胸の辺りを叩く。すると分かったのか若干気まずそうな表情をして頷いた。

推進機（スラストスター）を展開して一気に近づく。だが無人機の方も近付けまいとブラスターを連射してくる。密度が高く中々近付けない。デユノアさんも「レイン・オブ・サタデイ」や「デザート・フォックス」で攻撃しているが殆どが弾かれてしまう。装甲が硬すぎるのだ。

一旦攻撃を止め、デユノアさんの元へ寄る。こちらが攻撃しなければ相手も攻撃してこないからそこだけは良かった。

「デユノアさん」

「長崎くん。……………ダメだ。僕の攻撃は全然効いていないよ。こいつ（グレー・スケール）を打とうにも近付けないから打てないし」



そうなんだよな。一番の有効打になりそうなデュノアさんの攻撃だが近付けなければ意味がない。【蓮】もブラスターの数が多すぎてデュノアさんまで手がまわらないのだ。……どうしようか。

「……デュノアさん。それでこいつの柄頭を思いつき叩くことは可能ですか」  
水仙を見せて、どうかと聞く。

「出来ないこともないけど、あのブラスターはどうするの」

「【蓮】で何とか耐えて見せます」

自信は無いが。【蓮】は対B T兵器でもあるのだが、ブラスターとは勝手が違うらしく完全には攻撃を防げないのだ。

「それだと長崎くんの負担が……」

負担か、確かに負担だけなら俺の方が多いただろう。だけど……。

「負担のことなら大丈夫です、慣れてるんで。それにデュノアさんの方が俺よりもI Sのことを知っていますし、操縦だって上手いですから安心できます」

「うー……わかったよ。そこまで言うなら僕も頑張るよ」

よし、と気持ちを落ち着けた時にデュノアさんが声をかけてきた。

「ところで、長崎くん。あの時はありがとう」

あの時？ なんのことだ。

「えーっと、あの時って言うのは……………」

「ほら、僕が女の子だつて一夏が君に言ったときのことだよ」

ああ、その時か。だが俺はお礼を言われるようなことはしちやいないぞ。寧ろ、罵られる覚悟までしていたくらいである。

「長崎くんのおかげで僕たち二人とも冷静になれて、確りどうすればいいのか考えられたんだ」

なるほど。役に立てたんならよかった。

「…答えは見つかりましたか？」

デュノアさんは首を横に振つてそれを否定した。

「いや、ある程度つてぐらいしか……………まだ分かんないや」

まあ、急げとは言わない、まだ時間はあるしな。

「そつ、それに一夏がここに要ろつていつてくれたし……………」

いきなりモジモジしだして顔を真っ赤にするデュノアさん。……………おや？この反応は。

えーっと、篠ノ之さんに鳳さん、そしてオルコットさん。そしてデュノアさんも合わせて4人か。織斑のやつ大丈夫か？どうなるんだろ、頑張れオルコットさん。

ま、まあそんなことはさておいて、行くでしょう。デュノアさんはちゃんと着いてきてくれるだろう。

【水仙】を構えて、スラスタを加速させ一気に突っ込む。

だが敵もそう簡単には近付けさせてくれない。何発もスラスタを撃ち込んでくる。それを【蓮】の『天輪』で防ぐが多すぎる熱量までは防げない。

熱い。

あちちつ。

熱いというより痛い。

強引にスラスタを突破し、【水仙】を無人機に向かって刺突するが両手で止められる。

全力で力を込めるがそれでもあちらの方が強く、少しずつ押し返されていく。

「デュノアさんー！」

「はあああああつー！」

名前を呼んだのと同時に少し下がる。後ろからグレー・スケールで追撃。1発、2発と打ち込んで押し込む。奴の胸部に鋒が刺さり、衝撃で罅が入った。だが、先に耐えきれなかったのか水仙が砕ける。その時刀身に満ちていたナノマシンと電気が一緒に放出されるとシヤルル、無人機を襲う。土煙が巻き起こった。

司は【蓮】を、シヤルルはシールドを咄嗟に出して直撃を回避した。直撃はしなくとも一時的な動作不良が起こる。

少しだけ自分の動作の確認をしていたらいきなり巨大な手で体を捕まれた。

錆びた機械を無理矢理動かしているかのような不快な音をさせながらも動いている無人機。

——うそだろ、直撃したんだぞ。壊れるかは兎も角としても動作が出来なくなるぐらいの威力はあつたはずだ。

万力のような力で締め上げられる。苦しい。痛い。

途端に胸部に熱と衝撃。焦げるんじゃないかってくらいの熱さとデユノアさんにもらった杭の攻撃かそれ以上の衝撃。

当然、意識なんて繋ぎ止めておけるはずもなく、どこか体が宙を舞っているなどという感覚を残して視界は暗転した。



動揺した。何故、動揺した？

動揺している。何故、動揺している？

分からない。分からないが無人機にそこを突かれた。

ゴーレムの熱線光（ブラスター）での攻撃。有ろうことかそれに当たってしまい体勢を大きく崩した。そして腕に抱えていた長崎を離してまった。

焦燥に駆られた。何故？このような感情が私の中で渦巻く？

ぐるぐると思考に囚われそうになったが、ハツとする。今は戦闘中だ、切り替える。だが意識を替えるのが少しだけ遅かった。私の場所に影が落ちた。

不快な鉄の音をたてる無人機が鉄屑同然のゴーレムをこちらへ投げたのだ。それだけなら難なく避けられた。だが投げられたゴーレムの内部から紅い光が漏れた。



ゴーレムと言えど I S だ。しかも国籍不明どころか明らかに世界にあるコアの 487 つの内ものではない。

では、そんな I S を見つけたらどうするか。当然鹵獲して使うほうがいい。使えるコアは 1 つでも多いほうがいいのである。

だがそれを逆手にとり、ゴーレムは自身が危険になったら自爆するようにされている。コアはブラックボックスの塊。そのような処置は適切と言えるだろう。

爆発半径 30 メートル。コアが超高温度になり、臨界点まで達した時、コア、機体の情報すら残さず消すのだ。

そのほぼ中心地に居たラウラ、司の被害は甚大だ。

ラウラは経験則でそれがマズイものと瞬時に理解し眼帯を外す。動体視力、視覚解像度並びに神経系を爆発的に高める『オーデインの瞳（ヴォーダン・オージェ）』を解放し、【AIC】を全開にする。

全開にしたとしても爆発は四方から襲いかかる。ラウラだけで防ぐのは難しい。だが防がないよりはいいと思い、それに備える。

そして今まさに臨界に達しようしていた時、ラウラ、司の周りを【蓮】覆った。

この時司は完全に意識がなかった。しかしISはまだ生きていた。IS独自のネットワークを通してISは状況に、環境に合わせて進化又は最適化されていく。それが【蓮】に起きたのだ。言うなれば、半自立防御型・対BT・銃火器兵器【蓮】。

司たちの周りを舞い動く花が覆い、紅（あか）が弾けた。



爆発の時、シャルルと一夏は近くに居た。咄嗟に気付いたシャルルが一夏を掴み、瞬時加速（イグニッション・ブースト）をして爆発半径から逃れた。

紅く輝く光がドームを形成する。それに二人が完全にの飲み込まれたところだった。

「……………くっ……………司、ラウラ」

離れていたシャルルや一夏までもが爆風、熱風にあおられながら、一夏の口から二人の名前が呟かれた。

暫くしてから、紅いドームは空気が萎むようにして消えていった。

消失した場にいたのは司とラウラだけだった。爆発したゴーレムは跡形も無く、ただ大きく負傷した二人が残った。

所々機体が溶け、壊れているのか小さく紫電が走っていて、共通しているのが二人とも所々火傷に犯されている所だ。

「……………う」

ラウラが苦悶の声をあげ、「A I C」を解く。そのときラウラが膝を崩すのと同時にドシヤリと音をたててレールカノンが落ちた。いや、落ちたと言うより融解して使い物にならなくなったと言ったほうが適当である。

膝をつき、ラウラが苦しそうにしているがそんなものは関係ないといった感じに攻撃をしてくる。

ただの熱線光。しかし今のラウラにとってはただの攻撃ではない。満身創痍。そんな状態では回避も防御もままならない。成す術もなく攻撃を喰らい吹き飛ばされるラウラ。

そうして今度は司とばかりに手を伸ばすゴーレム。それを白刃と数多の銃弾が、一夏

とシャルルがゴーレムを遮った。

「やらせるかつ」

「

チラリとシャルルが司を見る。ピクリとも動かないが微かに息づかいが聴こえる為死んではないだろうと取り合えずほつと胸を撫で下ろす。

次にラウラの方へ視線を向ける。咳き込んだり起き上がろうとしているから命に別状はないだろうと判断し、安堵する。

そうしてシャルル、一夏は目の前のゴーレムを見た。正直勝てるかは分からない。だが教員たちが来る時間稼ぎぐらいいはなると思う。

スラスターを準備させ、武器を構える。そして今まさに仕掛けようとした瞬間、悲鳴が聞こえた。



——私は何をやっているのか。このような体たらくを晒し、パートナーすら守れないとは。

自分を叱咤し、自己嫌悪に駆られていると声が聞こえた。



『——願うか…？ 汝、自らの変革を望むか…？ より強い力を欲するか…？ ……何  
を望む…？』

「…：…力だ。力を望む」

——力が欲しいと思った。絶対的な力が欲しい。それは変わらない。だが守る力も  
欲しいと思った。

何処からかの問いかけに私はそう答える。

「私が私で在るために。私という存在を証明するために。力が、もつと強い力が必要だ。  
そして守れるくらいの力が欲しい」

Damage Level . . . . .D.

Mind Condition . . . . .Uplift.

Certification . . . . .Clear.

《Valkyrie Trace System》 . . . . .boot.

暗闇が私を覆い、闇が意識を遠ざける。

身体に、脳に、眼に痛みが走り私はたまらず悲鳴をあげた。

何処からかした問い掛けの答えに私が欲したのは何処までも憧れたあの人の強さ  
だった。炎のように苛烈で氷のように冷酷で、しかし優しかったあの人を。

どこか私と似ていて、どこまでも優しいやつ。日の光のように暖かく、同じ場所は心地良かった。そんな彼を守るようにと。

私は織斑千冬を思い浮かべ、長崎司を想い、意識が途切れた。

## 第十七話・暗闇から光へ

悲鳴が聞こえ、二人が振り向くとそこには人がいた。

否、人の形をした黒が、居た。

何処までも暗く、深い色をした黒。しかしどこか優しい雰囲気、色合いが出ていた。

そんな突然出現したヒトガタに気が付いていないとばかりに司を、一夏を、シャルルを襲いかかるゴーレム。その途端に纏っていた雰囲気は消え失せた。

熱線光を撃とうと両腕を出したら両腕が斬られた。いつの間にか出した、自身と同じ色をした刀で。両腕の関節部分を正確に斬ったのだ。

「  
」  
ゴーレムがそこでヒトガタに敵意を見せた。だがそれは遅すぎた。ゴーレムが何かしようとする暇もなくヒトガタが首を跳ねたのだ。

一夏、シャルルの両名は啞然とその光景を見ていた。

跳ねた首が音をたてて地面に落ち、それから胴体が思い出したかのように崩れ落ちた。

ヒトガタはゴーレムを一瞥してから一夏、シャルルに顔を、いや、それに顔は無くのつべらぼうのようだがそれには何処か顔がどこに付き、どこに有るのが分かった為、それがこちらを見たのだと気がついた。

ゴクリと喉が鳴った。どちらが鳴らしたのか分からないが緊張が走った。あれは敵なのか味方なのか分からないからだ。だが一夏は緊張とは別のまた違った感情が沸いた。

怒りだ。あのヒトガタの姿、形、風貌は自分の姉、織斑千冬にそっくりなのだからだ。感情が爆発し、仕掛ける一步手前でシャルルに手で制された。そうしてハツと我に返る。隣で心配そうな表情を浮かべているシャルルの顔を見て幾分冷静さを取り戻し、大丈夫だと合図を送ってから前に居るモノを見る。

数秒間の視線の交差、それは数秒には感じられないほど長く感じたが途端にそれは破られた。紅い閃光が激しく光ったのだ。

ヒトガタはその光が何か分かるように反応し、あろうことかゴーレムに覆い被さった。爆発を少しでも弱めようとするように。その数瞬後、紅（あか）が弾けた。

だが、ヒトガタによって殆ど威力は抑えられず、一夏、シャルルの三名には爆風、爆熱の名残しか来なかった。

前と同じように爆発したゴーレムは跡形も残らなかった。では、強力な爆発をそこま

で抑えたヒトガタはどうかと言うと無事ではなかった。

片腕が無くなり、体のあちこちから黒い何かが流れ出ている。だが依然として佇んだ。

何か音が聴こえた。それは何の音だったのか分からない。だがそのあとヒトガタが動いた。残った片手で顔を覆い、何かから逃れるように頭を振り、苦しそうにし出した。

「!!」

そして、おおよそ、人には出せない音域の音で叫んだ。それは不思議な音で悲鳴のようにも、怒号のようにも聴こえ、様々な感情を持つていた。

形成したであろう刀を振るった。それだけで風が薙ぎ、地面が蹂躪された。

「!!」

またヒトガタは叫んだ。どこまでも強く、強く叫んだ。



—— 痛い。 —— 苦しい。

—— 寒い。 —— 寂しい。

暗闇の中に、一人。私はいた。

そこには冷たい雨が降っていた。

雨粒が私にかかる度、私は自身の感情に押し潰されそうになる。

雨粒一つ一つは私だ。私の感情、私の中にあつたものだ

それが時に刃になって私に降りかかる。

私の過去、現在の感情。隠していた、貫いてきた、誰にも話さなideきた、内に秘めていた、知られてはいけなかつた、知りたくなかつた。

私が私に降りかかる。その感情が凶器となつて。

——闇が来る。夜が来た。怖い。どうしようもなく、怖くて辛い。

少し前まで私の隣にも人がいた。その人は強く温かかつた。だが、もういない。私は一人だ。

一人の夜は怖い。一人の夜は寒い。

——誰か。誰か。

私を——。



また、音が聞こえた。今度は何か分からない音ではない。水が一滴だけ水面に垂れたようなそんな音が聞こえた。

「……………いつたい、何なんだ」

「分からない、だけどアレって」

目の前で暴れているモノが何なのかは分からない。だがそんな二人でも一つだけ分かっていることが有った。一夏とシャルルは確認するように声に出す。それは同じ答えだった。

「ラウラ、だよな」

「ボーデヴィツヒさん、だよね」

二人はラウラが何かに取り込まれてしまったのを見ていた。しかし正体が分かっていたとて目の前のモノをどう対処すれば良いのか分からない。二人に沈黙が落ちる。その沈黙に呻き声が聞こえた。

「……………う……………あ……………」

「！。司、気が付いたか」

「……………う……………あ、ああ……………？」

一夏、シャルルは心配そうに司に駆け寄る。司はそれにぼんやりとしながらも答え

た。

「……うえ……ゲホツ、ゲホツ……ああ、絶対防御とやらは完全じゃないらしい。まさか痛みで気絶するとは」

今だ痛そうに胸を押さえる司。

「ああ、鈴が言つてたんだが確か絶対防御が飽和するくらいの攻撃を浴びせれば絶対防御はなくなるらしい」

……何それ怖い。絶対つて言葉の意味ねえじゃねえか。

「……あのよく分からんデカイISはどうなった」

気になったことを尋ねる。あんなにうるさかったこの場所が今は凄く静かなのだ。

「それは二つとも壊れたよ。二つとも殆どボーデヴィツヒさんがやったようなものだけどね」

「そうか……」

あのISがいなくなったことでホツとする司。だがあれつと思ひ辺りを見渡す。

「おい、ボーデヴィツヒさんはどこだ」

二人に向けて放たれたであろう言葉。それには返事ではなく、行動で示した。いつの間にか暴れることを止めていたヒトガタに視線を向けて。

「……冗談だろ」



告げられたことに目を見開いて驚愕を露にする。だが顔は一夏たちの方へ向けず、ヒトガタへ向けていた。

音が聞こえた。滴のような音ではなく、ぽつぽつと何かが降り始めたような音が聞こえた。

司はほぼ無意識に体を動かそうとした。だが打鉄のエネルギーが殆ど無くなっている状態、尚且つ満身創痍の状態では、それはただ無駄な行為でしかなかった。

万全のコンディションの時ですら打鉄を動力無しで動かすのは楽なことではない。加えてシャルルのグレー・スケールとゴレムのブラスターの直撃によって体力は著しく消耗、ダメージは蓄積、そして司は分かっているが二つの攻撃を零距离で受けたことにより、胸骨、つまりあばら骨に罅が入っていた。

音がする。降り始めた雨のような音が。それは先程聞こえた音よりも強さ、激しさを増していた。

声が聞こえた。雨音に混じってだが、微かに。聞き逃してしまいそうな程小さな声

が。その声がどんな声でどんな内容なのかわからない。しかし、それを聞いたとき司は立

ち上がろうと四肢に力を込めた。一夏とシャルルは司を止めようとする。しかし司は苦悶の声をあげながらも立とうとするのを止めない。

体が悲鳴を、激痛をあげたが出来る限り無視した。

骨が、筋肉が軋む音が聞こえた。そんな音を初めて聞いた。神経が、内蔵が歪んでいくような感覚に捕らわれた。錯覚だと思った。

体の危険信号を無視して司は立ち上がった。



立ち上がった友人を見ながら一夏は呟いた。

「……司、どうして。……どうしてそこまで……」

——どうしてそこまでするのか。全ては口に出さなかったが。一夏はそう思った。

確かに一夏自身、ラウラを助けたいと思っている。黒い物体に飲み込まれるラウラを見てしまった。

相手から嫌われていてもそんなことを言っていられる状況ではない。ラウラも危険かも知れないのだ。

だが、司の場合は自身がボロボロになっているのに助けようとしている。そんな状態

で自分より相手を優先するのは何故か、それが分からなかった。

肉親でも無ければ、特別親しい訳でもない。会ってまだそれほど時は経っておらず、仲が良いと言うわけでもない筈なのに。

そんな一夏の問いに司は少し考えてから、笑みを浮かべた。

「うーん……そうだな。織斑の考えてることも分かるさ。他人の為に危険を冒すのは馬鹿げてる、それは俺だって同じだ」

そこで一拍間を置き、『だけどさ』と言葉を続けた。

「俺はボーデヴィツヒさんの相棒（パートナー）だから。パートナーが危険になったら助けるのがパートナー（相棒）なんじゃないのか？」

それが然（さ）も当然だと言わんばかりに口にする司。一夏は何か口にしようとするが二の句が告げなかった。

「ただ、まあ……協力してくれると助かる。俺だけじゃどう考えても厳しいし」

司は目でも訴えかけ、一夏はその目を見た。それは強制はしないと云っているようだった。

しかし、その目を見た瞬間に一夏の答えは決まった。

「ああ、友達の頼みだもんな。やるよ、ラウラを助ける」

一夏に続き、黙っていたシャルルも答えを口にした。

「僕も手伝うよ。長崎くんの言葉を借りるならパートナーだしね。それに僕だってボーデヴィツヒさんのことを助けたいし」

そんな二人にありがとうと伝えてから、前を向く。体のコンディションは最悪だった。しかし気分だけは良く、やけに落ち着いていた。全身が痛いはまだ体は動く。動いてくれる。

自分でも何故ここまでするのかと言う思いはあった。それは先程織斑に言ったことと同じだし、実際そう思っているからだ。

しかし、それだけではない。あの雨の音と不思議な声を聞いたから。

聞こえる。雨はまだ続いている。雨音もどんどん強くなっていく。しかし不思議と声のようなものは聞こえている。

それから助けたい理由がもうひとつある。似ていたからだ。幼い頃に一緒に居た彼女と。容姿が、雰囲気、白銀の少女に。

幼い頃に俺は皆からお兄ちゃんと呼ばれていて、それはその子も例外じゃなかった。まあ、俺の場合はお兄様だったけど。……ああ、そう思うと確かによく似ているよなボーデヴィツヒさんって。姉妹だったのかな？色々落ち着いたら聞いてみよう。

』

また聴こえた。雨音と声が。これは一体何なのだろうか。

「一夏、デュノアさん。俺がアレをなんとかするから二人はどうにかしてボーデヴィツヒさんの元へ行ってくれ」

暴れたりを繰り返しているヒトガタに視線を向ける。すると、何かを感じとったのかピタリと暴れるのを止め、こちらを向いた。

「でも、それじゃ……」

「司くんが……」

「俺のことは気にするな。今はボーデヴィツヒさんを助けることの方が先だ」

一夏とシャルルは司の身を案じた。その思いが分かりクスリと笑ってからそう告げた。

「……分かった。司に任せるぜ」

「……心配だけど、司くんに任せるよ。こっちは大丈夫」

「ああ、こっちも心配はない。しつかり二人とも守るさ。守って二人とも無事にボーデヴィツヒさんの元に行かせてやる」

だから、と力が籠った口調で言った。

「ボーデヴィツヒさんを一夏とデュノアさんとで救ってくれ。俺じゃアレは切り裂けな  
い。俺じゃアレは翻弄出来ない。【水仙】は折れちゃったしな、一夏のそれと剣雪片の腕を、

その機体とデュノアさんの腕を信じる。それだけだ」

前を見据える。残った僅かなエネルギーを打鉄の個々に分配する。全身がギリギリ動ける量、だが有り難い。動けないよりは良いし、だったら攻撃を受けなければいい。……あ、そうだ。

「ちよつとデュノアさんをお願いが」

「ん、何？」

「俺が攻撃を反らしたらアレの手に向かって杭を打ち込んでください。腕ごと吹き飛ばす気持ちで」

理由は織斑が攻撃をするときに刀を持っていたら厄介だろうなと思っただからだ。

若干考えた後、分かったよと返事をするデュノアさん。難しい注文の筈なのに嫌な顔すらしらない。こりあ、絶対成功させないと。まあ、俺が防げるのは精々初手目か、二手目が限界だろうし。けど、今やれることをやるだけだ。

「……ふうー、すー……」

呼吸を整えろ。乱すな。強く息を吸って吐け。

「……すうー、はあー……オー、ハアー……」

丹田を意識して呼吸をする。無駄な力を抜いていき、深く長く呼吸を繰り返す。

数回続いていた呼吸音がピタリと止み、ゆらりと司が構えた。

左手の平を前に出して高く上げ、右手を下げて腰付近まで持つていく。そして右足を下げる。司が行った構えは『天地の構え』と呼ばれるものであり、ちよつとした防御の構えだ。

チラリと後ろにいる二人をみる。織斑は刀をやや正眼よりに構えていて、デユノアさんは【盾殺し（シールド・ピアース）】をいつでも打てるように構えていた。

「織斑、デユノアさん行くぞ」

「おう、任せた」

「うん」

ヒトガタはこちらに歩いて来ていた。残った左手に握っている刀を揺らしながら。体から流れていた闇は止まり、吹き飛んでいた腕は再生が始まっていた。

雨の音が聞こえる。声が聞こえる。声は雨の音が強くて内容は分からないが、悲鳴に聞こえた。

——雨はまだ止まない。



ゴーレムの襲撃を受けた時、教員たちは対応に追われていた。そのなかでも織斑千冬

は迅速に動いていた。

「先生たちは二組、いや三組に別れて生徒、来賓の安全を確保してください。確保出来たのならその半数を残し第一アリーナへ。」

動ける先生はすぐに動いた。しかし、時間は掛かるだろう。今、IS学園の警戒レベルが上がっている状態だ。通路が封鎖されていて、隔壁が下りている。しかも生半可な攻撃では破れない仕様の壁だ。

「山田先生、防壁の中にいる皆（みな）はどうなっていますか」

「はい、現在生徒問わず殆どの皆さんがパニックに陥っています」

山田先生の報告を聞いてやはりか、と予想が当たっていた。

前に一度、ゴーレムの襲撃があった。そのと同じで突然過ぎる。それに生徒たちには徐々にそういう感覚に馴れていってもらいたいと思っあまり言わないでいたのが裏目に出た。

いくらISを操縦出来るといってもまだ15、16の少女だ。その時の心構えなんかできていない筈がない。

苛立ち紛れに舌打ちが出そうになったがその前にアラーム音と山田先生の慌てた声が聞こえた。

「お、織斑先生！ボーデヴィツヒさんのIS共に生体反応が危険域（レッドゾーン）に突



入りました！加えて長崎くんの生体反応も警戒域（イエローゾーン）です!？」

殆ど悲鳴のような声が状況を告げる。それを聞いて弾かれるようにアリーナのディスプレイを見る。

「アレは……」

画面越しに私が居た。黒い、真つ暗な姿をした私が。……いや、あんなもの私ではない。しかし、姿、形を変えるなんてことはISでは出来ない筈だ。『一次移行（ファースト・シフト）』や『二次移行（セカンド・シフト）』で多少ISの形は変わるが姿までは変わらない。では、何故あんなものが現れているのか。

私はそこで暫く考え、答えを見つけた。

「VTシステムか……」

忌々し気にその名を口にし、山田先生が尋ねる。

「VT、システムですか？それは一体……」

「VTシステム。正式名称はヴァルキリー・トレース・システム。第一回、モンドグロツソの優勝者の動きをコピーすることでISの操縦技術向上と強さを目的として造られたシステムで、軍事転用も考えられていたらしいが、リスクが大き過ぎる為に、表には出てこなかったものです」

「そ……そんなものが何故ボーデヴィツヒさんのISにあつたんでしょう」

「意図は分からない。ただ、ドイツの上層部あたりが怪しいだろうかと睨んでいる」

一年間ドイツにいたことを思い出す。あの時、私は一夏の搜索の条件としてドイツで新設されたI S部隊の戦力向上を計ることを言われた。

無事に一夏も見つかり、条件通り、私はドイツへ飛んだ。その後はラウラと出会った。

ただ、出会った当初は酷かった。成績が、などではない。ラウラ本人がだ。私が見つけた時に、己の目を潰そうとしていたのだ。だが、ラウラはそれが出来なかった。当たり前だ、10代そこいらの子供が自分の目を潰せるはずがない。

ラウラは決して『出来損ない』などではなかった。ただ『眼』によつてもたらされた情報があまりに多すぎた為、処理仕切れなかっただけなのだ。

それから焦らず一つずつ教えていったら、すんなりと覚えていった。

『出来損ない』どころか優秀だったくらいだ。その後は、懐かれたようにラウラと一緒にいた。他愛ない話をして笑ったりして、何処にでもいるような女の子のように感じた。

そして1年契約が過ぎ、私は日本に帰った。だからその後、ラウラがどう過ごし、どのように思っていたかなど憶測でしかわからない。だが、私はラウラに間違つた教えを

してしまったのだろうか。

何だか気分が重かった。それに落ち着かなかった。

「……ラウラ、一夏、長崎、デユノア」

ポツリと4人の名前が溢れ、その4人が映っているディスプレイを見つめた。



—— 暗い。

—— 寒い。

—— 恐ろしい。

—— 寂しい。

一人がこんなにも恐ろしいものだとは知らなかった。

一人がこんなにも寂しいものだとは知らなかった。

私は何時からここにいるのだろう。

私は何時までここにいるのだろう。

—— 真っ暗だ。真っ暗闇だ。

私はこんなにも弱かったのか。

私は私（雨）に当たっているためか無意識に押さえていた感情が直接私に流れ込んで来ている。

寒い。いつの間にか膝を抱いて蹲っていた。端から見たら子供のようなのだなと思つた。いや、実際まだ子供なのだろう。教官の言っていた通りだ。私は舞い上がっていた。強いと思つていたのは嘘っぱちで、私は本当は弱かったのだ。

強さとは、一体何なのだろうか。何だったか。……もう、わからなくなつてしまった。織斑千冬なら何なのか知っているだろ。しかし、あの日にした質問をもう一度しても教官は『強さ』とはについて教えてくれないだろう。

私にとつて、教官は母であり姉でもあつた。冷たい機械の中で育つた私にとつて教官の存在は大きかつた。厳しくはあつた、しかし私にとつては嬉しかつた。母とはこのような存在なのかと実感することができたのだから。

この学園に来て教官に再び会えた。そして、もうひとりの別な存在と会つた。

——長崎だ。長崎司。不思議だつた。あいつは私と同じような瞳をしていた。同じなのかと思つた、私と。しかし、奴と私は違つた。根本的に違つた。当たり前だ、同じ人がいてたまるか。

それからふと奴のことが少し気にかかつた。少しだけ話をし、相棒パートナーになつた。訓練を

した時、今になって思えば私は笑っていた。私は楽しかったのだろう、誰かに教えるのが。

ゴーレムが襲って来たとき、長崎がやられた。その時何も考えられなくなった。あの感情は何なのだろうか。その後何かに守る力が欲しいと告げた。私はそれを手に出来たのだろうか？ボロボロだった長崎は無事だろうか？



『どくん、どくん』と自分の心臓の音がハッキリと聞こえる。それほどまでに自分の鼓動が高まっていただけなのか、それとも集中力が高まったのかは定かではないがどちらにしろ稀有な体験だなどどこか客観的にそう思った。

目の前には刀を上段に振りかぶったヒトガタ。後ろには織斑とデユノアがいる。成功させないとヤバイなこりあ。

覚悟は当に決まっていたが、さらに気合いを入れ直して見据える。

ヒトガタの持っている刃が降り降ろされた。瞬きする間の時間アドレナリンの過剰分泌故かそれが数秒のように長くゆっくりに感じる。降り降ろされる刀の軌道に合わせるように上げていた左手を動かす。

緩やかになった刻を修正するかのように時間は動き出す。手刀のようにした左手が刀の側面に当たり、何とかその軌道を反らすことに成功した。

「今だ！やれっ」

「はあああっ！」

攻撃を反らして数秒持ったが、やはり無理をしたのかISのエネルギーが切れてその場にダウンした。打鉄はよく持ってくれたと思っただ。

大きい音が続けざまに2発聞こえた。その後『バシヤリ』と水風船が弾けたような音がし、見るとヒトガタの腕が肘の当たりから弾け飛んでいた。あるのは刀と手の部分である。

『！』

痛覚があるらしいのか、後退し、体を震わせながら激しく叫びだしたヒトガタ。

「うおおおっ!!」

完全な無防備なときに一夏が雪片を解放して斬りかかる。

今まさに斬りかかろうとした瞬間、事は起こった。

打鉄から降りた瞬間、側にあった刀と手を模した闇が形を崩して司に向かった。

「なんっ……がぼっ!?!」

あろうことかそれは司を覆い、体内に入ってきた。

「長崎くん!？」

悲鳴に近いようなシャルル声が響き、続いて一夏がそれに気付く。

「司っ!？」

「ぐっ……何、だこれっ……ぐぼっ!」

溺れるような感覚がする。まるで水の中にいるみたいだ。意識が遠のいていく。

一夏とシャルルはヒトガタを警戒しながら司の方へ急いだ。もう殆ど司にヒトガタの闇が覆っている。

「俺の、事は……いいから、ボーデヴィツヒさんを助ける……」

全身が闇に覆われピクリとも動かなくなった。時折、ボコボコと水中で泡立っているような気泡が出たりした。

「……司」

「……長崎くん」

現状司の事はどうすることも出来ない。だから司の無事を案じることしか出来ない。

「……くそ。司、無事でいろよ」



そこは不思議な場所だった。水の中にいる感じがするのに、まるで雨の中にいるような感じでもあった。

声が届かなくて。それは前から聞こえていた声であった。

——ああ、声の正体は彼女だったのか。

俺は蹲っている彼女の元へ歩いた。距離はあるが、なに、直ぐに近くに行けるだろう。

——暗い。

——寒い。

——恐ろしい。

——寂しい。

これは本当に彼女の声だろうか。だとしたら、少しだけ意外だった。彼女は強い人だと思っていた。力だけでなく、心も強いと思っていた。

『強さ』を求め、『力』を誰よりも求めていた。しかしそれでいて芯のしつかりとした女の子だと思っていた。そんな自分の勝手な想像に思わず笑ってしまった。

目の前の女の子の姿を見てなお、そのようなことが言えるのならそれは最早思い上がりだ。彼女はどこまでも女の子だ。

聞こえてくるこの声は彼女の心の声だろう。降っているこの雨は彼女の心の温度だろう。確かに寒いし、暗い。驚く程真っ暗で、驚く程何も無い。一人でこの空間は耐え



きれないだろう。だから現に彼女はこうして蹲って一人、泣いているのだ。

ラウラの元へ辿り着いた司は何も言葉を発しなかった。何も言わなかった代わりに行動した。

膝を抱えて蹲っているラウラの背中に司の背中を合わせるように座った。司がしたことはそれだけだった。後はその場には雨の音とすすり泣くような音が残った。

『冷たい』。それが背中越しに感じた感覚だった。それに微かに震えていた。

いつまでそうしていただろうか、時間の感覚が分からないが数分位は経つたと思う。すすり泣くような声はすっかり聞こえなくなり、身動きひとつしなかった彼女が体を動かした。頭を上げたようだった。司とラウラは背中越しに会話をする。

「……………司、私は強いか？」

「はい、ボーデヴィツヒさんは強いです」

少なくとも俺なんかよりはよっぽど強いと思う。普段の覇気のあるような声は成りを潜め、声は弱々しかったが俺は即答した。

「……………司、お前は強いか？」

「……………俺は強くなつてない、俺は弱いです。どうしようもなく、弱い奴です」

昔を思い出して思わず苦笑いが漏れる。自身が強いと感じたことなんて全くと言っていいほどにない。弱かった自分に後悔しかない。

「……………司、強さとはなんなんだ」

「それは……俺も分かんないです。分かんないし、俺も探してます」

強さというものが何なのか、そんなもの分からない。俺は何時だつて弱い人だった。それはISに乗ったところで変わらぬ。だからそれで自分が納得できるように行動しているだけだ。自分なりに強いとは何かを考え、行動する。

そうして考えた果てが強さとは無限にあり、一人一人求めるものが違うのではないかということだ。自分にはまだそれが臍氣（おぼろげ）ながらもにしか分からない。

「……………だだ、やっぱり強いっていうのは『優しい』ことでもあるんじゃないかと思うんです。本当の意味で他人の為に、自分じゃない誰かの為に行動出来る奴が俺は『強い』んじゃないかと思えます」

俺のその言葉を聞き、暫く考えた後、ボーデヴィツヒさんはまた質問を投げ掛けて来た。

「……………司、私は強いだろうか？こんな私は強いのだろうか」

「そればかりは俺の口からは何とも。自分でないと分からないし、納得出来ないんじゃないかと。まあ、それを探すことも含めての疑問ですよね、『強い』っていうのは『そうか』と言つてそこで会話が途切れた。

「——司」

声音が変わった。今までの弱々しいものではなく、何かが決まったようなそんな声だった。

俺は振り返る。そこには金色の片目をした女の子がいた。やっぱり綺麗だなと思っ  
た。

「——ありがとう」

立ち上がったラウラがそう口にした。

「——ありがとう、司。お前のおかげで私は進めそうだ。また、歩ける」

そう言つて手を差し出して来た。その手を取つて立ち上がり、ボーデヴィツヒさんの表情を見てふと思つた。

こちらを見上げて笑みを浮かべている顔を見て彼女には笑顔が似合うな、と。

——雨はいつの間にか止んで、暗闇には光が差し込んでいた。



『——』

「二夏っ」

気を取られていてヒトガタの接近に気が付かなかつた。

「——ぐわっ！」

右腕は弾き落とされて無くなったが、再生した左腕をヒトガタは薙ぐように振るつた。攻撃を受け吹き飛んだ一夏は大幅にエネルギーを削られた。

「一夏つ、大丈夫」

「……ああ、大丈夫だ。それよりラウラを助けな。司にも怒られちゃうしな」

「ふふつ、そうだね。それにラウラさんは大事なクラスメイトだし」

シャルルの手を借り、立ち上がって雪片を構えた。構えは「一閃二断の構え」。

「シャル、俺に行かせてくれ。あいつは紛いものとは言え千冬姉を真似た。だったら弟として俺があいつに教えてらなくちゃいけないんだ」

ヒトガタから目を離さないが想いを言葉に乗せてシャルに言う。少しの間沈黙が流れたがため息と共に『分かった』と返事が返って来た。

「ごめん、我が儘言つて後で何か埋め合わせするよ」

「そ、それって……」

「あ、司やラウラも誘つて皆で行こうぜ」

『まあ、分かっていたけどね』という言葉は囁くような声として出され一夏には聞こえなかった。

シャルルと軽口を言い合いながら自分は緊張していたんだと内心自覚した一夏。だが、シャルルとの会話のおかげで体の余分な力が抜け万全になった。一夏に応えるよう

に百式も今の一夏の力に合わせ、それを引き出せるように「零落白夜」を発動していく。溢れ出ていたエネルギーは凝縮していき一振りの刃が形成される。

—ありがとう、白式。じゃあ行こうぜ。

『  
』

一瞬の静寂。先にヒトガタが動いた。刀に模した左腕で一夏に斬りかかった。

奇しくもそれは千冬がするのと同じ速く鋭い袈裟斬り。だが決定的に違うのは意志がないこと。

「——全然なつてねえし、遅え！」

横一閃に薙ぎ、刀を弾く。弾いた後、すぐ上段に構えて振り降ろす。これが「一閃二断の構え」だ。一足目に閃き、二手目に断つ。

ヒトガタの正面が切れ、ラウラが出てきた。落ちてくるといった感じだったので思わず抱き止めてしまった。

主を失ったそれは紫電を上げ、蒸発するようにシユヴァルツエア・レーゲン（黒い雨）を残して消えていった。

駆け寄ったシャルに司は無事かと聞いたら『息もちゃんとしているし、分かる範囲では大丈夫だと思おう』と言っていたので取り合えず安心した。そして再度ラウラを見たら

気が抜けた。

「……まったく、俺たちがこんなに苦労したつてのに安らかな顔で氣い失つてるなあ」  
抱き止めてとつさにみたラウラの顔は今までの険がとれたかのように穏やかだった。

## 第十八話・気持ちの行方

『教官はその弟のことが好きなのですか？』

思い出されるのは昔の記憶。教官との思いでの一つ。昔教官に投げ掛けた言葉の続きだ。

『姉が弟に、家族に惚れるものか、馬鹿者』

ニヤリと微笑みながらそう言われてしまつて、私はますます落ち着かなくモヤモヤした。

しかし、今ならそれが何だったのか分かる。

——羨ましかった。そう、羨ましかったのだ。それが今なら分かる。私にとって母のような存在だった彼女が何となく取られてしまつたと思つたのだ。あのモヤモヤしたものはちよつとしたヤキモチだったのだ。

織斑一夏に会つて自分の間違いに気が付いた。しかしそれを気付かせてくれたきっかけをくれたのは長崎司のおかげだ。



暖かい、何かに包まれているような感触がして私は瞼を開けた。何処かの天井、それが朱に染まっていることからそれなりの時間なんだということがわかった。

「——う、（こ）は……」

「（こ）は保健室だ。気が付いたか」

誰の声かはすぐに分かった。間違うはずがない。

「……教官」

体を起き上がらそうとするが痛みが走り、起き上がれなかった。

「無理はするな。ナノマシンによって体を保護、回復させられたとは言え全身に無理な負荷がかかり、筋肉が疲労を起こしている。火傷などの傷はほぼ完治しているらしいがまだ休んでいろ」

「……何が……起きたのですか？」

両の眼でまっすぐに千冬を見つめる。右目は赤色で左目は金色のオッドアイ。よく見ていた教え子の瞳がまっすぐに問いかける。

「……ふう、これは機密事項だからな、他言はするなよ」

「ここだけの話だと言うことを告げるとゆっくりと言葉を紡いだ。

「VTシステムは知っているな」



「はい……。正式名称はヴァルキリー・トレース・システム。……過去のモンド・グロツソの部門受賞者（ヴァルキリー）の動きを模倣するシステムで、確かあれは……」

「そうだ、IS条約で現在どの国家・組織・企業においても研究・開発・使用すべてが禁止されている代物だ。それがお前のISに積まれていた」

「……………」

「操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意思、いや、願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。現在学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会から強制捜査が入るだろう」

千冬の言葉を聞いてギョツとシーツを握りしめる。たださきの言葉の不審点が思い起こされ、うつむいていた顔をバツと上げた。

「ナノマシン……………」

おかしい。頭の中にあるVTシステムの情報と照らし合わせてもそんなものはないはずだ。

「ああ、たぶんという域を出ないがな。VTシステム自体は事が終わった時、消えていった為本当の意味で調べることは出来なかったがシユヴァルツェア・レーゲンとラウラ、お前を調べて分かった」

——それは、どういふことだろう。本来なら、ない物までが願望によって実現した。

それは私の願望だ。私が教官に、織斑千冬になりたかったから。

しかし、ナノマシンは？ 私はそんなもの望んでは……。

「あ……」

「そうだ、気付いたか。お前は力が欲しいと願い、私になりたいたいと思った。しかし、それと同じように守ることも欲した。力だけが全てじゃないと気が付き、人を守った」

千冬が一步横にずれ、後ろを見た。私もそれを追うようにしてみた。

長崎が眠っていた。死んでいる訳ではない。胸が上下に規則正しく動いているのでただ寝ているだけなのだ。良かった、私は守れたのだ。

「……暫く、お前を見ていてずっと考えていた。お前に教えたことは間違っていたのではないかと」

そんな、そんなことはない。間違ってもそんなことはない。私が貴女から教えて貰ったものは私の宝物だ。

「ただ、今のお前を見てそれは思い違いだと言うことが分かった。良かったよ、ラウラ」  
その言葉を聞いたとき、私の胸を何かがついた。ポタリと何かが落ちる音がした。胸から何かが広がっていく。目尻が熱く、視界がぼやける。それを抑えることが出来ず、  
どんどん溢れ、私は声を上げた。

生まれて初めて、声を上げて泣いた。

千冬は何も言わずただ側に居ただけだった。子供をあやすようにラウラの髪を撫でながら。



「——ん」

うつすらと目を開く。人工の明るい光と平面的な壁が見えた。

「おや、気が付いたかね？」

ぼんやりとした頭を使って、声のした方へ体を動かそうとしたが途端に痛みが走り、呻き声をあげそうになったが何とか声を絞り出した。

「……ソフィア、先生」

「まだ無理はしない方がいい。ナノマシンが体内組織を修復したとは言え重傷なのは変わりない。もつとも、内蔵の傷は殆ど無くなったと言っていいくらいだ。あとは骨折と打撲くらいだろうね」

「……ナノ、マシン」

なんのことだろうか、全く記憶に無いことだ。

「ああ、そう言えば君はずっと寝ていたんだったね。ではまず、君の、長崎くんの体内にはナノマシンが流れている」

「……は」

思わず変な声が漏れた。俺の体の中にナノマシン？

そんなの……ってああ、一回ソフィア先生に入れられたな。あれがまだ残っていたとか。

「言っておくが前に私が君に入れたナノマシンじゃないよ。君の中にあるのはボーデヴィツヒくんのナノマシンだ」

ボーデヴィツヒさんの？ますます分からん。いかん、混乱してきた。

そんな司の様子を察してかソフィアはその先を話した。

「ボーデヴィツヒくんから成った闇のヒトガタ。それは詳しくは機密だから言えないが彼女の願望でそうなった。彼女が織斑先生に成りたいと願ったからあの姿になった。しかし彼女は違うことも思った。守る力が欲しいとね。それが体現されたのがナノマシンという訳だよ。それが君の体内に入り、傷を負った箇所を修復していた、という訳だよ」

「……ボーデヴィツヒさんは？」

ソフィアは右手にあるカーテンに手をかけて引く。それに釣られて顔を左に向ける

とそこにはラウラ・ボーデヴィツヒがいた。

「まだ寝てるよ。疲れたんだろうね、精神的にも肉体的にも」

本人の姿を見たら安堵の息がふと漏れた。

「……………良かったです」

「良かった？」

「ええ、無事で良かった。気になってたんです、あの後ボーデヴィツヒさんがどうなったのか。俺は分かりませんでしたから。だけど今見て、無事だつて分かつてほつとしたんです」

織斑とデユノアさんはちゃんとやってくれたんだな、と思った。その後織斑とデユノアさんは無事なのか聞いたら、『無事だよ。少なくとも怪我は負っていたがね、二人とも。まあ、あれくらいならすぐに治るさ』と言っていた。

「君とボーデヴィツヒくんはここで寝るといい。許可は取つてある」

「あ、はい。どの道あまり動けないので有り難いです」

荷物を手に立ち上がり、ソフィアは振り返つて告げた。

「疲れているだろうからもう休むといい、お休み」

「はい、ソフィア先生もお休みなさい」

電気を暗くしてから保健室を出ていく。足音が遠ざかるのを耳にしながら、暗くなつ

てぼんやりとした輪郭しか分からなくなったボーデヴィツヒさんを一度見た。

静かになった部屋には彼女の規則正しい寝息が聞こえる。

視線を戻し、再度思う。『良かった』と。

そうして司は瞼を閉じて眠りに落ちていった。

◇◇◇

翌日、起きると隣にボーデヴィツヒさんの姿はなかった。まあ起きた時間が以外に遅かったので当然と言えば当然と言えた。

まだ痛む体を労りながら自室に戻って制服に着替えて、教室に向かった。

そこにはもう既にボーデヴィツヒさんがいた。俺と同じように頭や手などに包帯を巻いているが思ったより元気そうなので嬉しかった。

周りの人たちに『おはよう』と挨拶すると怪我のことを聞かれた。『もう殆ど痛くないし大丈夫。心配してくれてありがとう』と返すと、ほっとしながらも挨拶を返してくれた。

「おはよう、ボーデヴィツヒさん」

流石に、いきなり過ぎて挨拶は返されないだろうなと思って席についた。まあ、用は

自己満足だ。

「……………おはよう」

幾分遅く、そしてそっぽを向き、小さい声だったが確かに聞こえた。それを聞き、顔に笑みが生まれた。

「み、みなさーん……………おはようございます」

と、疲れた顔をしながら教室に入つて来た山田先生。皆頭にクエスチョンマークを浮かべながら話を聞く。

「えつとですね……………皆さんに転校生を紹介します。転校生といいますが、すでに紹介は済んでいるといいますが、ええと……………」

へえ転校生か。多いなこのクラス。にしても山田先生の顔が嬉しそうじゃない。どちらかと言えば困惑が強い気がする。何でだ？

「じゃあ、入つてきていいですよ」

「失礼します」

あり？この声つてまさか……………。と思つていたところ、一人の女子が入ってきた。

デュノアさんにすごく似てる女子。つてかあれ、まんまデュノアさんだわ。

「どうも、シャルロット・デュノアです。皆さん、改めて宜しくお願ひします」

そう言つてペコリとお辞儀をしたスカート姿の女の子。シャルル・デュノア改めシャルロット・デュノアらしい。俺だけじゃなくて他の人もポカンとしている。このタイミングで正体明かすの。マジか。

「えー、はい……デュノアくんはデュノアさんでした。……はああ、また寮の部屋割りを組み直す作業の始まりです……」

なるほど山田先生に元気がなかったのはそれが原因か。つてなんだ？ すごく辺りがざわざわとし出したな。あのHR中だよ？

「え？ デュノアくんって女……？」

「おかしいと思つた！ 美少年じゃなくて美少女だつたわけね」

「つて、あれ？ 織斑くん、同室だから知らないつてことは——」

「ちよつと待つて！ 昨日つて確か、男子が大浴場使つたわよね！」

誰かは分からないがそう言つた瞬間、先程までの喧騒は無くなり、しんとつた。

そしてグルンと勢いよく一斉に織斑の方を向いた。そして何故か数人の女子がこちらを見た。何で？ いや、俺大浴場使えるとか知らなかつたんですけど。しかも、昨日はずつと保健室に居たんですけど。

まあ、俺は大丈夫だとしても織斑がヤバイな。状況的に。助けてやるか。

そう思い、早速行動する。ノートを開き『HRが終わつたら全力で走つて逃げろ』と



書く。そして紙飛行機を作る。翼の部分に『開け』と書くのも忘れない。

織斑の方へ向けて、紙飛行機を飛ばす。飛行機は良い起動で織斑の頭に当たり、落ちた。気が付いた織斑が飛行機を拾い、中を読む。よしよし、計画通り。

だれがやったのかすぐに気付いたらしくそつとこちらを見て頷いた。

そんな緊張した空気を裂くようにチャイムは鳴った。皆ピクリと動き、チャイムが鳴り終わるのを今か今かと待っている。そして鳴り止むと一齐に一夏の下へ殺到する。勿論、オルコツトさん、篠ノ之さんもだ。

だが、一夏も甘くはなく、すぐさま廊下に出ていった。捕まらなきや良いけどなあ、捕まったら大変だ。

まあ、俺の所に来た女の子も居たが『俺はその時保健室にいて寝ていたし、知らなかった』と言ったらすごく納得された。布仏さんは当然のように居て、ふんふんと話聞いているし、相川さん、鷹月さんは何かチラチラこつち見てるし……疑われてる？

『一夏ああ!』

うわ、廊下から怒号が。一夏も大変だなあー。

『うわっ、鈴!? ISの部分展開はないだろ!』

部分展開かー、鳳さん大丈夫かな、織斑先生に知られたら大変なんじゃないだろうか。

「……………くっ……………ふふっ」

どこからか笑いを嘯み殺した声が聞こえ、周囲を見てみるとボーデヴィツヒさんが笑っていた。

周囲もビックリだが俺もビックリした。そんな視線に気が付いたのか若干恥ずかしげな表情になる。

「……あ、いや、織斑一夏は大変だと思うと、何だか笑えてきてな……つい」

織斑には悪いが遠巻きに見ている分には、実に面白い。

「良いと思いますよ。自分に素直な方が。その方がボーデヴィツヒさんらしくて」

不思議な場所でボーデヴィツヒさんと話したことを思い出し、ついとそんなことが漏れた。

「……ラウラだ。ラウラでいい」

小さくしかし聞こえる声でそう告げた。

「え、えつと……」

「私はお前のことを司と呼ぶ」

「あ、はい」

ふん、と鼻を鳴らすように言った。しかし、顔は若干反れている。

「あー、えつと、ラウラ……さん」

名前呼び、慣れないな。しかも何だか気恥ずかしい。

「ラウラだ」

しかも、今度は顔を反らさずこつちを見て、ちよつと強い口調で言った。

「ラ、ラウラ、これから宜しく」

「ああ、宜しく、司」

そう言つてボーデヴィツヒさんは微笑んだ。

## 第十九話・レゾナンス

「はい、皆さん。7月は臨海学校なので準備を忘れないで下さいね」

そう山田先生が言ったあと、HR終了の鐘が鳴った。時刻は夕刻、後は帰るなり部活動に勤しんだりするはずだが今、女の子達の関心は臨海学校である。

「臨海学校か、もうちよつと痩せないとなー」

「水着どうしよー。買っちゃおっかな」

「どうするどうする。今年は攻めてみる?」

いやー、さすが女子校。華々しいなー。

と、自室に戻る準備をしながら山田先生に聞く内容を確認していると横からちよんちよんとつつかれた。何だと思ひ、顔を向けてみると先程渡されたプリントを手にしてるポーデヴィツヒさんだった。

「司よ、この一日自由とは何だ?何をするのだ?ISの訓練なのだから訓練をしなくてもよいのか?」

うん、なんの抵抗も無く名前前で呼んでる。俺なんてまだ違和感があんのに……。

「まあ、休息の時間なんじゃないでしょうか？最近は大変な事が多かったですし、そういう意味で俺たちに楽しんで欲しいという学校側の配慮では？」

「ふむ、ならば水着はどうすれば良いだろうか」

え？それ俺に聞くの？同じ女の子に聞こうよ。知ってるよ、デユノアさん達と仲が良くなっているって。俺知ってるよ。まあ周りのクラスメイトたちの話を聞くに……うむ。

「あー、水着は買った方が良いのでは？折角の機会ですし」

俺を言葉を聞いて、数回頷きながら何か考え込む仕草をし、返答した。

「うむ、了解した。では善は急げだ。またな司」

「うん、また明日」

一つの挨拶を終えると、ボーデヴィツヒさんはピューつと何処かに走って行った。織斑先生に注意されなきや良いけどなあ……。

水着か……。まあ俺はいらん。

そんなことを思いながら、山田先生と自習に取り組んだ。



「もうすっかり皆さんの気持ちは臨海学校に向いていますねえ」

山田先生との自習が終わり、片付けをしていたらふと山田先生がそんなことを言った。

「まあ、女子校ですからそれも仕方ないんですがねえ。長崎くんくらいですよ、こうやって授業の終わりに聞きに来るのは」

まあ、そうでしょうな。鷲ノ宮はもう殆ど分かっているようなもので、当てられてもほぼノータイムで答えられるし。織斑はあんまり分かってないんだろうけどそれどころじゃないんだよなあ……大変だ。

「ISのこと、況してや自分の乗ってる機体のことを知っておいて損は全くありませんからね。当然のことですよ」

そんなことを言ったらしみじみと感動して『長崎くんは良いIS搭乗者になれますよ』と言ってくれた。嬉しかった。

「あ、山田先生ちよといいですか」

「はい、なんですか?」

折角だ、ちよつと言ってみよう。

「あの、一日目の自由時間なんですけどISって貸し出していますか? 貸し出しているんですしたら使いたいですか」

「……………え？」

何か、変な空気になった。変なことでも言ってしまったのだろうか。驚きでこつちを向いたまま固まってしまった山田先生。眼鏡がずれている。

「ええつと……………長崎くん、その心意気は先生としてとても嬉しいのですが私個人としても長崎くんに海でリラククスしてほしいんですよ。色々長崎くんは頑張っているの  
で時としては遊ぶことも大事なんですよ」

そう言われて包帯が巻かれた手を見る。

「……………そう、ですね。不粋でした」

「不粋なんてとんでもないです！長崎くんのその取り組む姿勢は立派ですよ。現に何人が感化されたみたいですから」

そう言つてその人たちのことを思い浮かべたのか優しい笑みを山田先生は浮かべた。

そのような時間を過ごしていると突然、山田先生が何かを決心したような顔になった。

「……………あ、あの私と水着を買いに行きましようっ」

ちなみにこの時の山田摩耶の顔は熟れたトマトみたいに真っ赤だった。



「す、すませーん！お待たせしました」

小走りで来たために若干息が荒い山田先生。その為のやはりと言うように頬も朱に染まっている。

あの時、山田先生が言った「水着を買いに行きましよう」と言うのは緊張で中の課程を全てすつ飛ばしてしまったらしい。山田先生は色々と気を使って水着選びに誘ってくれたようだった。正直、嬉しい。

ちなみに山田先生の服装は白の大きめのシャツ、いやワンピースか？

それを着ているからだろうか、普段のほんわかとした山田先生の印象をより優しくしている。……麦わら帽子とか被ったら似合うと思う。

「いや、全然待っていませんよ。というか早いくらいです」

と、そんな小話もそこそこに、司が歩を進めようとしたときにストップがかかった。「あ、長崎くんちよつと待ってください。織斑先生も呼んでるんです」

「織斑先生を？」

「あつ、いえ、深い意味はないんですけど……やつぱり、恥ずかしいので……すみません」朱に染まった頬がさらに赤くなり、俯く山田先生。まあ男と一緒にでは恥ずかしいよ



ね。

そんなこんなでまた山田先生と話をしながら織斑先生を待っていると、直ぐに来た。

「山田先生、待たせました。長崎もな」

「い、いえいえ、大丈夫です」

「全然待つてないので大丈夫ですよ。……つてあれ、ラウラ？」

織斑先生の後ろに誰かいるな、と思つていたらボーデヴィツヒさんがいた。何故？

「む、司か？どうして山田先生と」

取り合えず、山田先生と買い物と一緒に行くことになつたと言うことを簡単に伝える。ボーデヴィツヒさんは織斑先生を誘つて買い物に行こうとしたらしい。おお、すげえな。

そうして、俺たち一行は話しながら目的地、ショッピングモール『レゾナンス』へ向かった。当然水着を買いにである。



「すみません、別の所に行つていいですか」

と喉元まで出かかった言葉を何とか飲み込む。しかも着いてからすぐそう思ったの

で、何ともまあ先が思いやられる。

至るところ、華やかしい水着があつた。水着？と少々疑問視されるような布面積が少ないものから競泳とスクール水着のような水着まで。バラエティーが豊富である。

女性の方々。山田先生、織斑先生、ラウラは水着を選ぶのを楽しんでいたりと、どちらにしようかと悩んでいたりと反応は様々である。

ちなみに俺は直ぐに決まった。黒色で白の線が3本ほど入つてる水着で値段は三千円。

取り合えず、女性の水着売り場に行くのも何となく憚られ、近くにあつたベンチに座っていると山田先生に名前を呼ばれた。

「……………こちらとこちら、どっちが似合っていますか？す、すみません、いきなり。男の人の意見も参考になるかと思ひまして……………」

山田摩耶が手にしていたのは『バンドウ・ビキニ』と『ホルター・ビキニ』だった。

『バンドウ・ビキニ』。首から紐で吊るす三角タイプの水着ではなく、胸を包むような長方形タイプの水着。

ライトグリーン色でブラとパンツに可愛らしいフリルがあしらわれていて、山田先生に大変合つてらっしゃる。

『ホルター・ビキニ』。首から紐で吊るす一般的なタイプの水着。三角ビキニとも呼ば

れている。

こちらは黄色い色をしていて、ブラの部分に花柄のワンポイントがこの水着の良さを際立たせている。

これを選べと?……うーん、どっちも似合うと思うんだが。

「……こつちの黄色い方がいいんじゃないかと俺は思います。でも、どちらも山田先生に似合うと思いますよ」

いや、本当に。でも、ライトグリーンの水着も良いと思うよ。

そんな俺の思いとは別に山田先生は本当に顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「……あ、あう。……わ、わたし、これ買ってきますっ」

そう言つて、俯いたまま『ダッ』と走り出してしまった。当然そんなことをすればコケる確率はあがるのであり、山田先生はコケた。『ぼてっ』という感じでコケたのだが近くにいた織斑先生がフォローしていた。

ボーデヴィツヒさんはどうかと見てみると端末を使つて誰かと連絡を取っていた。後、『ふん、ふん』といった感じで頷いていた。楽しそうだなあ。

とそんな風にボーデヴィツヒさんを見ていたら声をかけられた。

「あれ、司じゃないですか。司も水着を買いに?」

「ん? おお、鷺ノ宮か。まあそんなところだ。あ、おはようございます、ブランケットさ

ん」

「おはようございます、長崎様。お久しぶり、とは言えないですがお久しぶりでございます」

まさか、だ。鷺ノ宮が水着を買いに来ていた。てつきり買いに来る必要なんてないのかと思つてたからな。

ブランケットさんもブランケットさんで通常運転だ。メイド服で来るもんだから目立っている。

ブランケットさんが久しぶりと言つたのは部屋割りが変わったからだ。さすがに女のデュノアと織斑の部屋を一緒にするのはいけないということで織斑と鷺ノ宮が一緒になった。ということは俺がまた一人部屋に戻ると言うわけである。

「ブランケットさんも水着になるんですか？」

「いえ、私はメイドですので、メイド服が正装なのでおいそれとメイド服以外のものを着るわけにはいきらないのです」

メイドの魂つてやつを垣間見た気がした。と言つても流石に長袖のメイド服は暑かろう。えーと、たしか……あ、あつたあつた。

「おい、鷺ノ宮ちよつと」

鷺ノ宮を呼んで、少し離れた所に行きあるものを手渡す。

「これは？」

「ああ、さつき水着コーナーに置いてあったんだがな、日焼け止めだ。『紫外線カット率が高く、肌に優しく、潤いを与える。美容液のような日焼け止め』がコンセプトらしい。もちろん顔や体にも使える。これはお前とブランケットさんの分だ」

「おおー、ありがとうございます。早速買ってくる」

買いに行く鷺ノ宮を見て思う。……何となく、俺も買っていこう、2本くらい。ちなみに一本3,000円だ。……高いね。

鷺ノ宮と同じくレジに向かって順番を待つ。本当になんの気無しに左の方を見たらデュノアさんが織斑の手を引っ張って一緒に試着室に入って行ったのを見てしまった。呆気にとられ、レジが遅れてしまったので慌てて前に行く。

そしてレジを済ませ、先生たちと合流した。

「すいません、遅くなりました」

「いえいえ、急がなくても大丈夫ですよ」

「ああ、そうだな。買うものは買ったのだから……ん？」

織斑先生が喋っていたが言葉が途切れ、視線が後ろの方へ向いた。何だと思ひ俺たちも視線の方へ顔を向けた。

「……あれは、セシリアと鈴、か？何故あんなところに」

皆の気持ちを代弁するようにボーデヴィツヒさんがそう口にした。……確かになにやっつてんだろうねあの二人。あれで隠れているつもり何だろうか。

そう思っていたら試着室から織斑と水着のデュノアさんが出てきた。

「ほう……」

織斑先生の普段の声と比べるとトーンぐらい低い声が聞こえた。怖い。怖いです、織斑先生。

そしてボーデヴィツヒさんが『シャルロットは何をしているのだ……』と若干呆れた声を漏らしていた。うん、そうだよね織斑が進んで入って行くわけないもんね。

「……少し急用を思い出した。山田先生一緒にいきますか？」

「い、いえ……私は遠慮しておきます」

やっぱリデュノアさんが無理矢理？更衣室に連れ込んだことは織斑先生は分かっているようでそれについて怒っていると思う。というか雰囲気がすごく怖い。

「そうですか。お前らも帰るんだったら気を付けるんだぞ」

織斑先生がそう言ってゆつくりと向かって行った。あ、オルコットさんと鳳さんが気付いて顔を青くしている。まあ、そうなるよね。デュノアさん、織斑……南無。骨は拾ってやる。

## 第二十話・買い物。——胎動。

「んー、後はどうします?」

織斑先生と別れ、二人と $\alpha$ の悲鳴を遠くで聞きながらこのあとの予定を確認する。触らぬ神にんんとやら。

目的の水着は買い終えたので、することが無くなったと言えば無くなったのだ。

「私は別段考えていなかったな。水着を買うのが目的だったからな」

と、ラウラがそう言い、山田先生と鷺ノ宮も同じだった。

うーんと考えていると何処からか、可愛らしくお腹が鳴った。それは誰だったかなんて探す気はなかったのだが山田先生がとつても恥ずかしそうに真つ赤になってお腹を押さえていたので誰かはすぐに分かった。

「あ、じ……じゃあ何か食べませんか?」

「そうですね、お腹も空きましたし」

と言うわけでレゾナンスの付近にあった飲食店に足を運んだ。



「で、この後どうします?」

結局、つい先ほどまでしていた会話に戻ったな。そう思いながら食後に注文したコーヒーを啜る。

「そうだなー、俺はもう帰ってもいいかなー」

「そうだな、私も特に予定はない」

「私もです」

上から鷺ノ宮にラウラ、山田先生という順だ。ブランケットさんは言わずもがな。

「なるほど。じゃあここでお別れですね」

「む、どういうことだ司よ」

「いえ、折角なので足りなくなっていたノートとか買って行くかと思いましたが」

「……うむ、そうか」

何だか一瞬考えてたみたいなんだけど、なんだ?

その後会計を済ませ、そこで解散となった。

「さて、行くか。……そう言えば一人で買い物とか何気に初めてだな」

ぼそつとそう呟いて歩き始めた司。どこに行くのか、どこに在るのか分からないまま



フラフラつとし始めた。

「1フロアごとにある程度散策していた時、突然声を掛けられた。

「ちよつとそこの男！これ、重たいから持つて」

ん？と思ひ、声のした方向に顔を向けた。30代位の女の人自分が自分を指差してきた。

「は？私がですか。……何故」

女尊男卑。ISを動かせる女子が偉くて、動かせない男子は下に見られる。そう言う世間だとIS学園で教わつてきた。だがIS学園にはそう言う女の子はいない、と思う。優しい人が多いのとやはり学園に男子がいらないからだろう。

さて、この状況どうしようか？まあ、妥協は必要だろう。こつちが折れないと不利になることしかなくなる。用は我慢してやればいい……理不尽には慣れてるから。

「……………これはもう会計に？」

服が積まれた籠を手に取り、確認する。答えは分かっていたが当然の如く俺持ちだ。しようがないとは言え訳が分からない。

「……………えーと、全品で2万7850円になります」

高つ!?と口から出そうになった言葉を飲み込む。足りつかな。

「……………じゃあ、3万円からで」

「はい、3万円からですね。お釣りは……」

はあー、手痛い出費だ。ウォーター・リリー社でテスターをやっているため、ある程度お金は貰っているがそれを無駄に使わされた気分だ。

「……………」

何処からともなく何かを感じ、振り向く。しかし当然だがただ人が行き交っているだけだ。

何だろ、この感じ……視線？うーむ、居心地悪いなあ。

さて、所で聞き流していたが段々要求がエスカレートしてきたぞ。どうすりかな、逃げるか？

「ごめんごめん、待たせてしまったね」

どうしようか悩んでいるとそんな風な声が聞こえてきた。

「いやー、取材が長引いちやつてきつ。じゃあ、買い物行こうか？」

するりと腕を組んで来て、エスコートしていく女性。凄いわ、こんなことが自然に来るんだから。

因みに買い物女の人は何か喚いていたが、腕を組んで来た女性の顔を見たら固まっ

て動かなくなつてしまった。

『さあ、早く早く』と急かされ彼女とともにその場所を後にした。つか、この金髪の女の  
人誰？



「さつきは大変だったねー、君」

「そうですね。まあ、慣れてるので……」

俺は取り合えず先程の金髪の人と一緒に近くの喫茶店へ入っていた。彼女はオレン  
ジジュース、俺はアイスコーヒーを頼んだ。

「……………」

「……………」

沈黙。いや、沈黙と言うよりは彼女が俺をジツと見ていた。あんまりにもジツと見る  
もんだから気まずい。

居心地が悪くなり、誤魔化すようにアイスコーヒーを口に含んだ。それに気が付き彼  
女もまたオレンジジュースを口に含んだ。

そしてまた沈黙。……………お通夜かつ！何だこれ、この雰囲気。

「……あの、先程は助かりました。ありがとうございます、えつと……」

「おつと、そう言えばそうだったね。私はナターシャ・ファイルス」

そう言つてナターシャはサンングラを取った。なるほど、ナターシャ・ファイルス・さんね。

「先程はありがとうございます、ファイルスさん。正直困ってましたので」

いやー、本当あそこまでしつこいつつーか、面倒臭いのは初めてだったからな、うん。……うん？

ふと顔をファイルスさんの方へ向けたら、何やらポカンとしたような表情をしていた。

「えつと、どうしましたか？」

……本当になんかしてしまっただろうか？

「……ふつ、あはははっ！」

俺が内心おろおろしていたら、何かいきなりファイルスさんが笑い出した。

「君、面白いね……うん、うん、長崎司君か……覚えたよ。………もつとお話していたけれど時間がきてしまった」

時計をチラリと見て立ち上がり、そう言いながら伝票を持って行ってしまう。素早い行動に何も反応が出来ずに此方がポカンとしてしまう。

「ここは私が出すよ。お姉さんからの奢り。じゃあね、長崎君。『See you when I see you』」

と、去り際そんなことを言つて歸つてしまった。

『See you when I see you』……確か意味は、『いずれまた会いましょう』的なニュアンスだった筈だ。

——また、こうやって会つて話をする日が来るのだろうか？

そんな風に思いながら俺も喫茶店をあとにした。



目的のノートとか、小物を買ひ、クッキー等のお菓子が小分けされているのをそれなりに多く買つて店を出た。

……そう言えば店で感じたあの視線は何だったんだろうか？ うーん、ファイルスさんだったのだろうか？……まあ多分そうだろうな。

そんなことを思い出しながら歩いていたら、目的地に着いてしまった。予定していたのと違い、遅くなつてしまったと思う。

何だか緊張なのか動悸が激しくなつてきた。足が震えてしまう。動きづらくなつた

気がした。

数瞬その場で悩んだが、意を決して扉を開ける。

真つ先に目に飛び込んで来たのは懐かしくも子供の頃の面影を残し、大人になった彼女だった。

彼女の周りには自分の知らない子供たちがたくさんいた。そんな中、目が合う。瞳が見開かれるのが分かった。

「…………お帰りなさい、司兄さん」

「…………ただいま、真綾」

見開かれた瞳が涙で濡れていたが、笑顔で言葉を返してくれた。そんな暖かい反応が帰ってきたことがやっぱり嬉しい。

何だか、緊張していたのが馬鹿らしくなるくらいの反応だった。

その後、父さん、母さん、兄さん、姉さんが来て『おかえり』と行ってくれた。血が繋がっていないくとも、やっぱり家族は良いなと安心する。

——自分の無くしてしまったものだから。

皆と話したりしていたら日が落ちるまで居てしまった。山田先生とかラウラとかは遅くなり過ぎたことを心配していたが大丈夫だと言っておいた。

また、帰ろうと思う。まだまだたくさん話たいことがある、ISのこととか日常のこ

ととか。



暗闇で人が一人、話している。

「……おい、そつちの準備は出来てんだろうなババア」

『相変わらず口の悪いことね、『ヘンリー』』

「……俺をその意味のわかんねえ名で呼ぶな、寒気がする」

『はいはい、準備は着々と進んでいるわ。あと10%と少しって所でしようね。予定通

りよ』

「予定通りなら問題ねえな。じゃあな」

『ええ、『Have a nice day』』

そう言つて相手の方から電話は切れた。

「……何が『ご機嫌よう』だくそつたれが」

悪態を吐き、夜の空を見上げ、見つめる。吸い込まれそうなほど深い空。

「——こんな世界……」

そんな眩きは誰にも聞こえず、消えていった。

## 第二十一話・臨海学校

『海だあぁー!!』

眼前に広がる大海原に向かってそう叫んだ大人数の女子生徒たち。そのあと海に向かって走っていく。

「……熱い」

「何言ってるんだ、司。早く泳ごうぜ!なあ鷺ノ宮」

「うおー、海だー」

いつにも増してテンションが高い織斑。そして若干テンションが高い鷺ノ宮。

「……あー、熱い」

皆、海ではしゃいでいる中、司はグロッキー状態だった。理由は少し前まで遡る。



「あー!海!海が見えたあ!?!」



トンネルを抜け、バスの中でわいわいと女子たちが声を上げる。

臨海学校初日、天候にも恵まれて快晴。海の波は穏やかで日光を反射する水面はキラキラと輝いている。

「おー、やっぱり海を見るとテンション上がるなあ」

「う、うん。そうだねっ」

バスで一夏の隣になったシャルロットだったが何処か上の空だった。返事も若干、生返事ですぐに視線を手元に移す。そして頬を緩める。理由は一夏がプレゼントしてくれたプレスレットだった。

「ん？それ、そんなに気に入ったのか？」

「う、うん。まあ、ね……えへへ」

そんなやり取りをしていて幸せオーラを漂わせていると前からむすーつとした顔をセシリアがシートから出した。

「昨日、途中でふたりだけで抜け出していたと思っていたら、まさかプレゼントとは……不公平ですわ」

「あー……その、なんだ。セシリアのプレゼントはまた今度の機会にな？」

『ま、まあ……それなら。や、約束ですわよ』と顔を赤くしながらも一夏と約束を取り付けた。

一夏、シャルロット、セシリアが話している最中、司はそんな精神状態ではなかった。  
「……………」

「だ、大丈夫か司。顔が真つ青だぞ」

吐きそうになっていた。吐いてしまわぬように口を結び、目を固く閉じる。司の隣に座っていたラウラはその様子を見ておろおろしていた。

「……大丈夫、ちよつと具合が悪くなっただけだから。少し休めば良くなるよ……」

実際、海に行くと聞いて若干テンションの上がつっていた司だったが慣れていないバスでの移動で自分でも気付かぬ内にストレスになっていたようだった。

「横になれば少しは良くなるのではないか？」

とラウラはそう提案した。幸い司とラウラの座っている席は最後列の席であつたし、一人分余っていたので横になれる余裕がある。

「……そう、ですね。そうさせて貰います」

そう言つて体を動かし、横になろうとしていた司だったがラウラが司の頭を掴み自身の太ももへ頭を置いた。俗に言う『膝枕』である。

「……ふむ、これがクラリッサの言っていた『膝枕』か。日本人はこれが良いと言つていたがどうなのだろう……むっ、寝てしまったか」

安心したからか、心地良かったかは知らないが司はラウラの膝の上ですぐに寝息を立

てていた。

周りにいたクラスメイトたちも何時もなら『ひ、膝枕……だどっ』などと反応するが司の様子は見て分かつているので静かにしていた。ただ、ラウラの行動力に度肝を抜かれていた。その後、目的地に着くまでラウラが司に膝枕をし、微笑みながら髪を撫でていた光景をクラスメイトたちは何とも言えない表情で見ているのだった。



「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

『よろしくお願いしまーす』

織斑先生の言葉の後、全員で挨拶をする。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

「どうも、長崎司です。三日間よろしくお願いします」

「鷺ノ宮二樹です。同じく三日間よろしくお願いします」

「あらあら、どうもご丁寧に。私は清洲景子です」

俺と鷺ノ宮がそう挨拶すると清洲さんは丁寧なお辞儀をする。その仕草は気品があ

り、想像していた女将さんよりずっと若々しい。

「織斑、挨拶をしろ。馬鹿者」

「いや、今しようとしたんだってっ。えっと……織斑一夏です、よろしくお願いします」  
「不出来の弟でござ迷惑をおかけします」

「うふふっ、弟さんには随分厳しいんですね」

『いつも手を焼かされておりますので』という愚痴？などのやり取りをしながら旅館の説明をされた。何でも別館があるらしい。

「ねえ、ねえ、なつき〜」

「うん？何ですか、布仏さん」

服を引っ張られる感触と呼ばれる声が聞こえ、振り向いたら布仏さんがいた。

「なつきーのお部屋って何処〜？一覽表に書いてなかったよ〜」

「あ、本当だ。……うーん、わからないですね」

「おいおい、まさか部屋無し？いや、外で寝るのは正直勘弁してもらいたい。せめて廊下で寝せてもらえたら有り難いかなー、なんて。」

「織斑、長崎、鷺ノ宮、お前らの部屋はこつちだ。着いて来い」

布仏さんと話していると織斑先生からお呼びが掛かった。なので布仏さんには『またあつて』と言って別れた。

「織斑、お前は私と同部屋だ。長崎は山田先生と鷺ノ宮はブランケットさんと一緒の部屋だ」

説明をされながら暫く歩く。……しかし旅館の外見から歴史のある感じなのかと思つたらエアコンなどの最新設備とが見事に合つた作りになつていた。うむ、すごいな。

「……だ」

と、目的地に着いた。案の定ドアには張り紙で『教員室』と書かれている。何でも初めは個室もしくは3人で部屋を使わせようとしていたのらしいのだがそれだと女子たちが押しかけるだろうから急遽、ということになつたらしい。

「教員の部屋にはおいそれと近づきはしないだろう」

「そりゃ、まあ……そうだろうけど」

それぞれが部屋に入る。部屋の中は想像以上に広く、トイレにバス、洗面所まで個室だ。一応、大浴場も使えるらしいが時間交代性らしい。

「……広いですね」

「そうですねー、景色も良いですし。……あつと、長崎君、泳ぎに行つてもいいですよ。先生はまだ行けません。織斑君や鷺ノ宮君が行つていてと思うので。……それともまだ具合が悪いですか？」

司がバスで体調を崩していたことは同じバスに乗っていた全員が何気に気付いていた。もちろん先生たちでもある。

なので千冬は同部屋になる摩耶に司のフォローを頼んだのだ。

「……あ、いえ、大分マシになったので大丈夫です」

正直なところまだフラフラするが風に当たっていれば大丈夫になるだろう。

さて、水着とタオル、下着をいれた鞆を持っていく。

「じゃあ、行つてきます」

「はい、いつてらっしゃい」



更衣室に来たとき鷺ノ宮しか来ていなかったが織斑は俺の後に来た。何か疲弊して

た。

「……どした？」

「……いや、何でも。やっぱり台風みたいな人だなんて」

俺と鷺ノ宮は頭にクエスチョンマークを浮かべた。

まあいい。さつさと着替えよう。先日買った水着をはき、半袖のパーカーを羽織

る。父親から受けた傷が大小、身体にあるため、あまり肌を晒したくはなかったが数カ月前、ソフィア先生にナノマシンを打ち込まれたことにより傷は小さくなっていた。そしてVTシステムとゴレムと呼ばれる無人機が襲撃してきたときに出来た火傷に傷。その時にもナノマシンと保護フィルムを使ったため殆ど身体にできた傷はさほど気にならないくらいになった。

先に出て待っていたがすぐに織斑と鷺ノ宮は出てきた。

「あ、長崎君に織斑君、鷺ノ宮君だ！」

「ふ、ふうおー！男子が三人で……最高つす」

「わゝ、織斑君に鷺ノ宮君も身体かっこいい。鍛えてるねゝ」

織斑と鷺ノ宮は細マッチョとまではいれないが無駄な脂肪がなく、引き締まった体つきをしている。というか二人とも群がられている。

「い、いや俺たちよりも司のほうが身体すごいぞ」

織斑お前。今そんなこと言ったら……。

「ほほう、良いことを聞いたなあ」

「者共お、であえであえ!!」

ほら、すごい勢いでこっちに来た。何だか目がギラギラしていたので逃げることにした。

「待て待てー!!」

「……つて足はやっ!?!」

はははっ、そう簡単には捕まらんよ。ていうか捕まりたくない、何されるか分かんないから。

「……司、君、はあ、はあ……早いって、言うか……」

「あ、足が、砂で……はあ、はあ、走り、にくいっ」

おおー、流石砂浜。走りづらいことに定評がある。女子たちはすぐに息があがっていた。しかし、そんな中でも一部の女の子たちは違っていた。

「はっはっはっ! 甘いな長崎君。私たち陸上部を舐めないでもらおうか。砂浜など、既に攻略済みだ!」

砂に足も取られず加速してくる陸上部の女子たち。もう追って来られないだろうと気を緩めていたため、ダイブしてくる女子たちをどうにも出来なかった。

「なっ!?!……うおっ」

「よっしやあ!! 捕まえたー」

「ムフフ、ではでは……むけーい」

どうやったのか分からないが一瞬にしてパーカーが取られていた。おかしい……パーカーにはジッパ―が付いている筈なのに。



「…………お、おうふ。…………こ、これは」

「腕を見ていて、筋肉凄いなーと思っていたけどここまでとはっ」

あの、そんな反応されると流石に恥ずかしいんだが……。しかも女の子たちは今にも鼻血を出しそうなのか鼻を押さえている。

ぜえ、はあと息を切らしながら追いついてきた女の子たちは視線をこちらをに向けたら、同じように鼻を押さえていた。

いや、一般の人よりは鍛えてると思うけどそこまでか？

「腕の筋肉すごい」

「うわわっ、腹筋割れてるよー」

それから暫く女子たちに囲まれて触られていた。

やつとのことで解放されたら、織斑は海、ブランケットさんは鷺ノ宮と一緒に。というか鷺ノ宮はパラソルの下で寝ていた。……おい、いいのかお前。写真撮られまくってるぞ。良いんですか、ブランケットさん。

そんな感じでブランケットさんを見ると頷いた。……あ、いいんだ。つてか通じるんだ。

「ここまでついたら後は自分で歩けるから降ろして」

「本当か？無理してるんじゃないか？」

「本当よっ。いいから、降ろしなさいよっ……その、ありがと」

声が聞こえたのでそちらを見てみると織斑が鳳さんをおんぶして浜辺まで来た。何があつたか知らないが皆注目している。

『焦つたよ、鈴が溺れかけていたから。でも間に合つて良かったよ』と言いながらこちらに歩いて来た。

「そだつ、司！どっちが早く泳げるか競争しようぜ。一樹は……えー、寝てるし」  
寝てる鷺ノ宮を見てスゴいものでも見たような顔をする織斑。気持ちは分かる。

「……いや、折角だが遠慮しておく」

「えー、何でだよ、泳ごうぜ。……あ、もしかしてまだ体調悪いのか」

「いや、体調は悪くない。……俺、泳げないんだ」

海見るのも初めてだったしな。しかも皆スイスイ泳いでいるの見ててビックリしたわ。

「ふーん、泳げない……え、泳げない!？」

「ああ、泳いだことないんだ」

ついでに海も初めて見たしな。海つて凄いな。あと本当に青いな。

「…………え？」

織斑が鷲ノ宮にしたような顔をこちらに向ける。おい、その顔やめろ。

だが、暫く考え込んでいた織斑だったが途端にニヤリと笑った。……嫌な予感がする、凄く。

その場で強く後ろに飛んだ。するとさつきまで俺のいた場所に織斑が掴むような格好でいた。

「…………おい、一応何する予定だったか聞いてやる」

「いや、泳げないんなら俺が手伝ってやろうかと……」

そこまで聞き、俺は脱兎のごとく走った。つか逃げた。何が悲しくて男とお手手繋いで泳ぎの練習せにやならんのか。

「あつ、ちよつ……何か待てるー！逃がさんつ」

そうして俺と織斑の砂浜での鬼ごっこが始まった。

暫く俺がぶつちぎってつき離していたが、どんなに逃げてもずっと追いかけてくるので段々とこれは捕まるまで終わらないのでは？と思ひ始めた。そして面倒臭くなって身体を反転し、織斑の方へ向かって走った。

それに織斑は驚いていたが俺は織斑の胴にタツクルをかました。と言ってもそのまま倒れるのではなく、銅体を掴んで持ち上げた。

「……ふんぬっ」

「えっ、ちよっ、おい司!」

いきなりのことにバタバタと暴れる織斑。ふっ、無駄だよ織斑。その程度の抵抗では振り落したりなぞせんよ。

そのまま織斑を抱えたまま海に行く。自分の太ももが海に浸かるくらいの深さまで行き、織斑を投げた。

意外に遠くまで投げることができ、大きい水飛沫が上がった。

ふいっ、いい仕事したなーと思っていると『次私も!』と先程の光景を目撃していたであろう女生徒たちが手を上げて順番待ちをしていた。……何ぞこれ?

仕方がないのでアトラクションの如く放り投げることにした、お姫様抱っこで。やはり女の子だ、軽い。織斑よりも高く放物線を描き、着水した。

それから何人も投げたが全員が楽しんでいたので良かった。あと一夏、何故お前がい。……なに、意外に楽しかったから?よし、投げてやる。けど次は鼻と耳に水が入ればいいのに。



……つ、疲れた。何とか全員が満足してくれたから良かった。海から砂浜に戻るとデュノアさんがいた。何かキョロキョロしている。織斑のこと探してんのかね。

「デュノアさん、織斑ならもうすぐ来ると思えますよ」

そう言つて先ほど投げた辺りを指差したら案の定、織斑がこちらに来ていた。

「つ、そ、そう」

何か気恥ずかしいのか織斑の方をチラチラと向いてはもじもじとしていた。織斑は織斑でその様子を見ながら首を傾げていた。

「む、司。ここに居たのか」

明後日の方からボーデヴィツヒさんの声が聞こえた。先に振り返っていたデュノアさんが驚きで噴き出していた。

「ふっふっふっ、どうだ」

「あれえ、さつき見た水着と違う?! どうしたのさラウラ、僕と一緒に水着に着替えた時はちゃんと可愛い水着着てたじゃないか!？」

今、ラウラの着ている水着は紺を基調とし白のアクセントが入っている色物の水着。そう、スクール水着! しかもご丁寧に『らうら』と名前まで入っている始末。しかし、いつものように髪を下ろしているのではなく、髪を纏めていた。

「なに、早着替えだシャルロット。心配ないぞ、ちゃんと着ている」

そう言ってスクール水着を肩から腕を通して外し、脱いだ。いきなりのことに面食らい、咄嗟に顔を背ける司と一夏。シャルロットは『らっ、ラウラ!?』と声の上擦っている。

「ん？何をしている。ちゃんと着ているぞ」

『ほら、こつちを向け』と言って、見るように促すラウラ。

恐る恐る、視線をそちらに向ける。

先程とは違い今度はちゃんとした水着を着ていた。黒を基調としたホルターネックビキニ。しかし、それだけでなく所々に深い青色のフリルがあしらわれている。銀髪の毛と相まってとても似合っていた。

しかし、そうではない。ラウラに言わなくてはいけないことがある。

「ふむ、どうだ司よ」

自信たつぷりにしかし、ちよつとだけ不安な様子でそう聞いてきた。

「……ラウラ。駄目だよ、人前でそんなことやっちゃ。ラウラだって女の子なんだから」  
そう言われてしゅんと落ち込んでしまうラウラ。水着のことを言われるのではなく怒られてしまったのだから。

「でも、似合っていますよ水着」

これは本音だ。似合っていてびっくりした。

「う、うむ、そうか！」

落ち込んでいるのから一転、喜色満面になりデユノアさんを誘って海に行った。その様子を司は笑みを浮かべながらラウラを見ていた。

## 第二十二話・旅館にて、束の間の

現在時刻19時半。大宴会場と呼ばれる場所で俺たちは夕食を取っている。

因みにあの後、相川さん、鷹月さん、本音さんたちがビーチバレーに誘って来た。俺はルールやらバレーやらがよく分かったので見学と言うことでバレーはやらなかったがデュノアさんやラウラ、遅れてきた織斑先生や山田先生が入って試合を始めると凄い試合になった。何でこんな動きが出来るんだろうと思うことが多々あった。が、とても面白い試合だった。

その後、皆が泳ぎ対決なるものを開催したりしたが、俺は泳げなかったので先生に泳ぎを教えてもらったりした。ラウラは泳げなくはないものの水泳では無く、顔を水に浸けないようにする泳ぎでどちらかと言えば犬掻きのようなものらしく一緒に泳ぎの練習をした。

「うん。やつぱり、おいしいなあ」

そして俺は今、お刺身を食べている。

織斑が言うにはお刺身はカワハギというものらしく、初めて食べたのだが美味しい。



小鍋も付いてきており、白身や椎茸、葱などの野菜もしつかりと煮込まれているようで大変美味しい。

こうのような食事は初めてだったが良いものだと思う。あと、この旅館、花月荘の決まりで『食事中は浴衣着用』らしいのだが存外、浴衣というものは着心地がいいなと思つた。

その後、食事をしていたのでが一騒動あつた。というか織斑が起こした。

正座に慣れていないオルコットさんの為に織斑が食べさせて上げようとしたのだ。まあ、そんなチャンスを見逃す面々ではなく、自分もするようにと催促して騒がしくなる。すると織斑先生が登場した。

「……お前たちは、はあ。どうにも体力が有り余っているようだな。なら食後に砂浜を走つて鍛えて来い。距離は、そうだな。砂浜3往復で十分だろう、どうだ？」

始めは呆れ、次にニヤリと笑いながら言ってくる先生。それに織斑たちは慌てながら答える。

「いえいえ！とんでもないです、明日は早いで食事をしたらすぐに寝ま……」

そこまで織斑が言ったが別に声が上がった。

「分かりました、教官の言う通り食後、20:00（フタマルマルマル）時から始めます」  
「本当ですか織斑先生、走ろうと思つていたので丁度良かったです。では食後に走りま

すね」

ラウラと司が同時に声を上げたのだ。そして互いの顔を見る二人。

「ん？司もか」

「ラウラもですか、気が合いますね。一緒に走りますか」

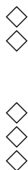
『うむ。そうだな、そうしよう』とラウラが意気込んだところでまた、声が上がった。

「おっと、走りと言ったら陸上部。私たち（陸上部）を舐めてもらっては困るよ。食後に

3往復なんて軽い軽い。つてことで皆、私たちも走るよー！」

『うおーい』や『うえへえー、長崎君と走れるー』、『3往復かー、今日チロツと走ったけどあんま距離なかったし5往復くらいは行けるかなー』と盛り上がっていた。凄いな、陸上部。

因みに織斑たちは『マジか、お前ら』みたいな顔で見ている。いやいや、織斑お前そんな顔してつけどお前も走るんだよな、ん？……それにしても、ここの料理美味しいなあ。



あれから着替えて、本当に砂浜に行き6往復もした。さすが陸上部と軍人という体力

をしていた。自分は後半バテていたが陸上部の面々とラウラはケロッツとしていた。そこから陸上部式柔軟をして解散となった。

汗も掻いたので折角だから温泉に行った。旅館なので当然男湯と女湯に別けられている。変な時間帯に来たせいか人が居らず、実質貸し切りみたいな状態だ。

まあ、IS学園にも最近大浴場なるものが出来たらしいし貸し切りみたいだが俺、入ったことないしな。入ったことのある織斑がちらつと漏らしていたが入浴時間が疎らで女子たちの後になつたり、前になつたりとまちまちらしい。

しかし、ここは凄いな。露天風呂まであるなんて。

眼前に広がる海を一望出来る。今は夜で昼間のような景色は見れないが、星や月明かりが辺りを照らしていて、また違った風情があつた。

「……………」

温泉に浸かりながら目を閉じ、耳を澄ます。海之音、水之音、自分以外の声が小さくしかしハッキリと聴こえる。

目を開け、もう一度外に顔を向ける。満月と満天の星空が広がっていた。キラキラと星は瞬いていて、月は吸い込まれてしまいそうな程、綺麗だった。



「……はあ、いいお湯だった」

温泉から上がって、別段することもないので部屋に戻る。気分は部屋着よりも浴衣だったのでそつちを着ている。良いよね、浴衣。

あれ、まだ山田先生は戻って居ないのか。まあ、先生の分の布団も敷いておこう。

うーむ、しかし本当にすることないな。何時ものようにIS関連の内容を復習しようにもノート類は置いて来てしまったし。

……そう言えばあれを持ってきていたような。……あ、あつたあつた。手作りのアロマキャンドル。自室で作った自分のちよつとした趣味の一種の代物。

皿の上に乗せ、持って来ていたマツチでいざ火を着けようとしたところで待てよと思いつまらなかつた。そうしていたら部屋の襖が叩かれた。

「司、居るか？ 私だ。ラウラだ」

「あれ、こんな時間にどうしました？」

襖を開けて出て見ればラウラだった。時刻は既に10時を回っている。早い人はもう寝ている頃だろう。

「いや、シャルロットが何処かに行ってしまったって暇なのでな、司のところに来たのだ」なるほどな、と関心してからラウラを部屋に入れる。どうしたものか分からないので

取り合えずお茶を出す。

「はい、お茶です。どうぞ」

「うむ、ありがとう」

二人で向き合ってお茶を飲む、そんなゆっくりとした時間が流れた。……あ、そうだが折角ならラウラにも使ってもらおう。

「……ラウラ、これ良かった使ってくれませんか？」

「うん？……蠟燭か？」

「いや、これはアロマキャンドルですね。うーん、まあ、いい香りがする蠟燭みたいな物で、寝るときとかお風呂のときとか気持ち落ち着けたいときなんか。着けるといい物ですね」

まあ、自分が作った物なので市販の物には劣ると思いますが、と言ったがラウラは手元にあるアロマキャンドルを暫く見つめていた。

「……折角なので着けてみます？」

そんなラウラを見て、そう口にした。そしてラウラはコクリと頷いた。

山田先生が部屋に戻って来たときに迷惑と成りそうなのだが、キャンドルをお裾分けするので許して欲しいと思う。

部屋を暗くして、キャンドルに火を着ける。和室が火の明かりによつて光と影に分か

れ、先程とは違った雰囲気となった。

キャンドルの匂いは定番とも言えるラベンダーにした。ラベンダーから抽出した精油を多く入れて匂いを強くするのでは無く、ほんのりと香るくらいの量を入れて蝋の長さも数十分で終わる長さに調整してあるのだ。

「……良い香りだな」

そう一言だけ呟いて、目を閉じた。自分も同意してラウラと同じように目を閉じる。

何分くらいそうしていたか分からないがラウラが居た方から衣擦れのような音が聞こえたので何かと思い目を開け、そちらを見た。そうしたら体勢が崩れ、舟を漕いでいるラウラがいた。

起こすのは可哀想かと思つたがこのままにしておくのもどうかと思ひラウラの部屋まで運ぶことにする。取り合えず、まだ運べないのでラウラを布団の上に横にする。

バックを漁り、渡された一覧表で部屋の位置を確認して数個、種類の違うアロマキャンドルを『良かったらどうぞ』と言う書き置きと一緒に持つていく。

さあ、いざと言つたところでどうやって運べば良いのだろうかと思つた。ラウラは部屋着ではなく、自分と同じように浴衣だ。これではおんぶは難しい。数秒考えてから肩と膝を両手で持つて運ぶことにした。

まあ、『お姫さま抱っこ』という持ち方をしているのだが司にその知識は無い。おんぶ

の他にラウラに負担の少ない持ち方はと思つて出た運び方なのである。

そのままラウラの部屋まで運ぶ。やはり時間が時間なだけに誰とも会わなかった。

部屋までたどり着き、一応ノックして声を掛けてみたがデュノアさんはまだ戻つていなかった。布団が敷かれていたので布団に寝かせて毛布をかける。そして机の上に書き置きとキャンドルを置こうとしたら浴衣に引つ掛かりを感じた。何だと思ひ見るとラウラが袖の部分をつ掴んでいた。

ありや、いつの間に。でもまあ、小さい頃から馴れてるからなあ、こようゆうこと。一人ずつ寝かそうとしたら皆が何か話してや子守唄歌つてや頭撫でてと一斉に言ってきたりしたことがあつたなあ。しかも、俺と一緒に寝かしつける役を担つていた二人も何故か混じつていたし。歌とかは無理だつたけど頭撫でてたらずぐに寝てくれてたっけなあ。……今元気でやつてるかなあ、あの二人は。

そんなことを思い出してたからだろう、無意識の内にラウラの頭を撫でていた。あつ、と気付き頭から手を離す。いつの間にかラウラの手も離れていたので立ち上がった机にキャンドルを置く。

「お休み、ラウラ」

部屋を出る前に聞こえてないと思うがそう口にして部屋を後にした。

自分の部屋に戻つて来たがまだ山田先生は帰つて来ていなかった。なので机の上に

山田先生と織斑先生の分のキャンドルを数個、置き手紙と一緒に置いておく。ラウラと同じく『良かったら』という内容なので使ってくれたら嬉しいが別に人にあげても構わない。

ただ、眠りに落ちる前に何だか山田先生は凄く喜んで使ってくれそうで、織斑先生は表情には出さないけど喜んでそうなそんな風景が思い浮かんだ。



## 第二十三話・邂逅し、再会する二人

臨海学校二日目。その日の予定はつつがなく始まっていた。

因みに起きた時に山田先生にお礼を言われた。有り難く使わせてもらおうそうだ。こちらとしてもそのほうが嬉しい。

二日目は午前から夜までびっちりやることが決まっております、それを消化していくことになる。専用機持ちは専用機持ち用のカリキュラムで、他は訓練機の打鉄、ラファール・リヴァイブを使いI Sの稼働・装備・模擬訓練を行う。

当然俺は稼働訓練などを行う方に行こうとしていたのだが織斑先生に止められた。というか打鉄を持ってこちらに来てと言われた。なんぞ？

織斑先生に付いて行ったら予想外の人がそこに居た。

「おー、長崎くん、久し振り〜。元気にして良かったかい？」

「おつ、来たか。久し振りだな、長崎。」

「来ましたね。お久し振りです、長崎くん」

なんと水面さん、三木さん、神崎さんの三人が居たのだ。……何故？

他の皆はパッケージだけ送られて来ているが水面さんたちは俺が臨海学校で訓練することを知り、どうせならということでも来たらしい。まあ、それは建前で完成した新装備を生で着けてみて感想を聞かせて欲しいと言っていた。

皆が訓練する砂浜から更に離れた岩場に俺達は集まっていた。面子としては織斑先生に山田先生、織斑、鷲ノ宮、ブランケットさん、篠ノ之さん、オルコットさん、鳳さん、デュノアさん、ラウラに俺と水面さん、神崎さん、三木さんといった顔ぶれになっている。因みに先程、織斑先生が言っていたのだが本来ならここにもう一人専用機持ちが加わる予定だったのだが機体が完成しておらず、参加出来ないということになったらしい。

「さーて、長崎くんこっち来て。……ではでは、お披露目しよう。タッグマッチ戦からアイディアをもらって考えた新装備！その名を『白百合』!!」

「この『白百合』ですが、長崎くんの案と私たちの考えをまとめ形にしたものとなります。名は『白百合』。正式名称は『爆発反射装甲甲冑』と言います」

「デザインは俺たち開発班の皆で決めたんだ。まあ、中々決まらなかつたんだが、最終的には今の形だったので落ち着いたんだ。大変だったぜー、特に日比野の奴と藍と彼方が気合い入りまくりでなあ。あーでもないこーでもないってずっと議論しつぱなしだつ

たよ」

「……………」

高らかに宣言した水面さんとは違い、淡々と名前を述べていく神崎さん。三木さんは製作のちよつとした小話を話してくれた。

「つて、皆テンションおかしいでしょ!?!折角完成した装備だよ、もつとこう……なんかあるでしょ!」

「いやいや、そういうのは社長だけで十分ですから。あと、何で今日に限ってスイッチ入れてないんですか、普通逆でしょう?」

「あれ知らない内に疲れるんだよー。それにしたつて……」

水面さんと三木さんとで言い合いが始まってしまった。チラリと他のところの状況を見てみると何とも言えない表情でこちらを見ていた。何だか恥ずかしいので見ないでくれ。

どうしたらいいか分からないしていると神崎さんが申し訳なきさそうにして謝ってきた。全く神崎さんは悪くないので『こちらこそすいません』と言った。

暫く待っていたがまだ続きそうだというところで神崎さんが【白百合】をセットしてくれるそうだ。その合間に話してくれたが、なんでもこの【白百合】と本来俺の専用機の【黒牡丹】とのどちらを持って行くか凄く悩んだそうだ。そして協議の結果、新装備の

「白百合」になった。初めのように乗れないということはないと思うが、他の専用機持ちたちのように十全には扱えないと思うし、テスターをやらせてもらっている身としては申し訳ないと思う。

「……………これでよし。出来ましたよ長崎くん」

セットしてもらった「白百合」をディスプレイを押し呼び出す。

眩い光が一瞬だけ溢れ、形が形成される。全身装甲（フルスキン）の純白で染められた外装。右手の籠手は五指タイプの「ガントレット」。左手の籠手は二股タイプの「ミトン」で構成。頭部・胸部は前面がひし形のように尖っていて、左目側、心臓側に一輪、百合の装飾が施されている。頭頂部にはこちらにも装飾なのか銀色の長い毛が一房、風でなびいていた。

感覚を確かめる為に動作確認をする。

「……………ん？」

ちよつとした違和感を腰に感じ、見てみると、前開きのスカートのようなものが付いていた。よくよく見れば盾のような装甲にも見えなくもない。っていうか、完全に打鉄を覆ってるな、どうなってるんだ？本当に。

つか頭の前から足の先まで……………まさに全身装甲（フルプレートメイル）って感じだ。

「この装甲の一番の特長は反射して攻撃を弾いた時に装甲の一部が剥離するのですがそ

の様が百合の花弁に似ているから「白百合」と名付けられた点です」

なるほど。しかし、甲冑だから動きにくいんじゃないかと思つたが全くそんなことはない。動きに支障は無いな。

「ただ、やはり欠点があります。【白百合】の装甲は爆発の為に何層も重なっているんですが、攻撃が爆発するよりも早く装甲の深部に達してしまふと爆発が搭乗者を襲つてしまふということなんです。その例としては一点集中型の攻撃や装甲が削り切られてしまふ広範囲圧殺型の質量が多い攻撃などが挙げられます」

なるほど、そんな欠点があつたとは。頭に入れておこうと思つていたら水面さんと三木さんが来た。

「おう、やつぱりかつこいいねー」

「創るのもいいが、こうして自分達が創つたものを見るのも良いもんだなあ」

睡蓮は目をキラキラとさせて、大葉は司の姿を見て沁々という。

何だかこつちが何とも言えない感じになり、視線を逸らすと皆こつち見てた。なんでさ。

「すげえな……なんか、騎士つて感じた」

「すげえな……なんか、騎士つて感じた」

織斑、鷲ノ宮お前らに言つてんだ。ハモるなハモるな。ステレオで聞こえつから。

「……なんか、なんか白騎士みたい」

誰かがそんなことを言った。皆の視線が一層強まった気がした。何でやねん、授業でやったじゃん。いや、粗かったけど映像で見たでしょ？君たち。何言ってるの？姿形、全然違うじゃない。

甲冑で見えないけど、苦笑する。何となく居心地が悪かったので【百合】を解除して水面さんたちの方を見ると三人も苦笑してた。

「ちーちゃ〜ん!!」

すると、遠くの方から砂煙と共に声が聞こえてきた。なんだ、ちーちゃん？

「……束か」

織斑先生がぼそりと呟いたのが聞こえ、納得する。千冬だからちーちゃんか。

「やあやあ、お久し振りだねちーちゃん！会いたかったよ、さあギユツとハグしよう。久しぶりに友情を確かめようじゃないか！友情以外のものを確立させようぜ！……あいたっ」

両手を広げて近付いてくる束に千冬は手を上げ、軽くチョップする。

「……少し落ち着け束。それよりもいきなり来るな。来るなら連絡なんなりしてから来いと言っただろうが」

「えへへ、忘れてたよー。あれ、箒ちゃんは？」

「篠ノ之ならあつちで訓練中だ。用があるならお前が連れてくるなりしろよ。私はそこまで手はまわらん」

「うん、いいよー。むしろ好都合だよ。箒ちゃんの訓練風景をこの目で見られるんだよー、自分から行つちやう行つちやう」

そう言つて、また砂煙を立てながら反対方向の篠ノ之さんたちがいる場所へ向かつて行つた。

「……嵐みたいだな」

去つて行つた方を向きながらそう呟く。しかし、凄く変わった服装だとも思う。……いや、どうなんだろ。あの人ののだろうか。

唐突に二年前に起こつたことを思い出しながらそう考える。すると、横から砂を踏む音が聞こえた。

「……追い付いた、と思つたら束様は居ないのですね。はあ、流石に疲れました」

ドクンと心臓が跳ねた。彼女が何故ここに居るのか、という疑問はあつたが今はい。間違える筈もない、小さい頃から幾度も聞き、言葉を交わした。綺麗な声だ。確信を持つて声の方へ向いた。

「……クロエ、久しぶり」

少女、クロエは閉じていた目を見開き、金色の瞳を露にしてこちらを見つめた。

「……司兄様」

やっぱり、その金色の瞳は小さい頃見た時から変わらず綺麗だなとそんな事を思った。

幼少期に別れてから二人、司とクロエは不意に邂逅した。



## 三周年記念閑話・冬とお鍋

季節は冬。IS学園にも冬は来る。寒くないように温かい格好をしていも、どうしたって寒いものは寒い。どうしたものかと考え、ふとちらりと見えた物に目が行く。

「そうだ。鍋にしよう」

そう思い立った司は早速準備に取りかかった。何気なく決めた事だったが、それは良い判断だと司は知る由もない。



ぐつぐつと鍋が煮える音が聞こえる。

鍋の具材は無難に白菜に豆腐、椎茸、豚肉、薬味に刻み葱といったものだ。湯豆腐というのも考えたが気分では何となくこちらにした。

「んー、そろそろかな」

蓋のすき間から出てくる湯気と音でそろそろ食べ頃だろうと思い、火を止め机に持つ

て行く。机といっても学習机ではなく、炬燵だ。

つい先週の休日、さすがに寒かったので家電屋に行き炬燵を買った。それのおかげで大部、部屋の中でも過ごしやすくなった。

取り皿に適量取った具材をいれる。ご飯も炊いていたので茶碗によそう。

「ただき……」

と言ったところでドアがノックされた。時計を見ると、現在時刻19時05分。大抵の生徒は学食にいつて夕飯を食べているはずだが？誰だろうと思いつながら出てみた。

「司よ、一緒に学食に……む？」

誰かと思ったらラウラが訪ねて来た。どうやら一緒に学食に行こうと誘いに来てくれたらしい。だがこちらが今食事中だということに気付き、何とも言えない表情になった。

何だか悪いことをした気分になった。どうしたものかと考え、ふと思いついた。

「ラウラはご飯まだですよね？」

「……え？」

「良かったら、一緒に食べますか？」

そう問われたラウラは表情を明るくして答えた。

「頂こう！」



ぐつぐつと煮えている鍋から取り皿に具材をよそう。ラウラとは対面に座っており、よそつた取り皿を手渡す。

それにしても、食器類をお徳用のセットで買っていて良かった。こういった事態を見越した訳ではなく、自分が壊してしまった時や食器は多くあってもそんなに困らないだろうと思っただけなのだが、それが項を奏したようだ。

「はい、熱いので気を付けてくださいね」

「うむ」

準備が出来たので手を合わせる。やはりこれは大事だと思う。

「いただきます」

「む？……いただきます、ます」

ラウラも食べようとしていたのを制し、自分と同じように手を合わせた。やはり文化が違くと、不馴れな感じではあるがしてくれただけで何だか嬉しく感じた。

「美味しいですか？」

ラウラが一口食べたのを見計らって、そう疑問を投げ掛けてみた。味見などはしてみたが、味覚の違いでというのもあるかもしれない。美味しくないなどと言われてしまつたらどうしようかと少しだけ困つた。

「……私がドイツにいたとき、食事はレーションのようなものを口にしていた」

ほつりほつりとラウラがドイツでの出来事を話始める。

「乾パンのようなものだったり、チーズ、スープだったりといったものだ」

箸を置き、時々相づちをしながら聞くことに徹する。

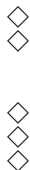
「だが、この学園に来て自国には無いものを食べた。驚きもたくさんあった。しかし、この辺りが暖かくなったのはこれが初めてだ。……だから、美味しいのだと思う」

自分の胸のあたりに手を当てながら、ラウラはそう言った。その表情は自分の今の感情が何なのか不思議に感じているような顔をしている。

「……まだありますから、どんどん食べてください」

「うむー」

俺はそんなラウラの様子に微笑みながらそう言い、ラウラは笑みを浮かべて再び食べ始めた。



食事が終わってゆったりとした空気が流れる。ラウラは炬燵で寛いでおり、俺はちよつとした飲み物の準備中だ。

色々あつて、鷺ノ宮もといブランケットさんの持ってきていたコーヒーミル一式を貸してもらつたのだ。「豆とかは自分で買ったが、やり方はブランケットさんにレクチャーしてもらいブランケットさんも美味しいと言つてくれるくらいには上手く淹れられるようになった。」

「炬燵で寝ると風邪引きますよ。はい、コーヒーです」

炬燵に入つて、うとうとしていたラウラに声をかけてコーヒーを置く。目を擦りながら、おぼろ気ながら頷く。

「……うむ、わかつた」

そう言つてコーヒーを一口飲むと目が見開かれた。

「……不思議だ。とても美味しい」

「そう言つてもらえて良かったです。誰かに振る舞うなんてしたことが無かつたので不安だつたんですよ」

そしてまた、ゆつたりとした時間が流れた。静かな室内で時計の音がやけに大きく聞

こえる。しかし嫌な静けさではない。寧ろ、心地よい時間だ。だからだろう、臉が重く感じる。ボーデヴィツヒさんが居るので寝てはダメだと分かつてはいるのだがどうしても抗えない。意識が途切れる前に見たのはボーデヴィツヒさんもうつらうつらしていたということだった。

◇◇◇◇◇

「おーい、司あ。ちよつと遅いけど皆で一緒に夕食に行かないかー」

現在時刻は20時10分。食堂が閉まるまで、まだ少し時間がある。だからさつきまで一緒にいた筈に鈴、セシリア、シャルロットを夕飯に誘ったのだ。途中で会ったブラケットさんと一樹も行くことに。

ラウラも誘おうとしたのだが何処かに出掛けているとシャルから言われた。だから誘えないし、最後に司のところによったのだが……。

「……居ないのか？」

返事は返って来ない。何処かに出掛けているのだらうと思い、諦めようとして何の気なしにドアノブに手を掛けてみた。すると、抵抗も無く開いたのだ。

悪いと思いながらも中の様子が気になって、入ってしまった。

「……司？」

再度、呼び掛けてみるがやはり返事はない。だがそれも納得の光景が目の前にあった。皆、俺に釣られて中に入ってきてしまったがその光景を見て、頬を緩める者、『あらあら』と言って口元に手を持っていく者がいたりと三者三様の反応をしていた。

俺達が見た光景。それは机に突っ伏して寝てしまっている司とラウラがいたということだ。頭を合わせるようにして、傍らにマグカップがあり飲んでる途中だったのだろう、まだ中身が残っていた。それに毛布すらかけていない。

皆で顔を見合わせて、司とラウラを起こさないように静かに移動して二人に毛布をかける。

電気を消して、『おやすみ』と声を掛けてから部屋を出た。何だか頬が緩むので誤魔化すように皆の方を向くと皆も笑顔になっていた。

こうして、IS学園の冬の一日が過ぎていく。

## 第二十四話・二人の距離、未開花の蕾

向かい合っていた二人は示し合わせたように互いに歩き出す。司はクロエを、クロエは閉じた瞳で司の方を向きながら歩く。

「……大きくなつたな」

「……はい」

司とクロエは互いに言葉を交わしながら一歩ずつ近付いていく。

「最近、やっと帰ることが出来てさ……自分の中でも心の整理がついたから。それで結構な人数が出掛けて行つたことを知つたんだ。……クロエ、今のところで幸せ？」

「はい、東様には良くして頂いています」

開いていた互いの距離が埋まるまであと数歩。

「……司兄様、お姉様とは会えましたか？」

「いや、まだ会えてないよ。これも切れてないから」

そう言つて司は手首に巻いてあるミサンガを見せる。それを見たクロエは微笑を浮かべた。



「していてくれていたんですね」

「これも、四つ葉の葉も俺にとつては大切な宝物だから」

距離がなくなり、二人は互いを見つめる。少年だった彼は彼女よりも大きくなり、少女だった彼女はもう少女ではなくなっていた。ふたりとも互いに知らない内に大きくなっていた。

「……変わらないなあ、クロエは」

「……司兄様も変わらないですね」

小さい頃に一緒にいて、暫くしたら別れてしまったクロエを今の姿と重ねる。そして変わっていないと安心して、昔のように頭を撫でた。



小さい頃に別れてしまった、別れるしかなかった当時も私にとつては大きかった兄を見る。昔とは少しだけ違ったが間違いなく兄だった、私の大好きな。だから昔と同じように頭を撫でてくれたことを嬉しく感じた。チラリと目を開いて、兄を見ると優しく笑みを浮かべていた。だから私も嬉しくなって自然と笑顔が溢れた。



その光景を見ていた者は驚きを隠せなかった。だが一番驚きを露にしたのはラウラだった。

「……その髪、その瞳の色」

そのラウラはブツブツと驚きながら考え込むという器用なことをしていた。

一番早く立ち直ったのは一夏だった。皆の気持ちを代弁するように疑問を口にする。

「……えーつと……つ、司その人は一体……」

「——彼女は」

言いよどみ、口を開いては閉じることを数回繰り返してから何処か言いづらそうに言葉の口にした司。それを遮るようにして悲鳴のような声が響いた。

「お、織斑先生っ！ た、たた……大変です!？」

「どうしました、山田先生？」

俺は勿論、その場にいた全員がそちらを向いた。離れた位置にいた山田先生だったが飛ぶようにして織斑先生の場所に走っていく。織斑先生もその様子がおかしいと気が付き、真剣な眼差しになる。

「っ、っこれを見てくださいっ」

持っていた小型端末を織斑先生に手渡す。その端末を見て行くうちに織斑先生の表情が険しくなっていた。

「……何だこれは。特命任務レベルAだと」

「そ、それが……」

一言二言、言葉を交わした後、織斑先生と山田先生は小さな声で手話を交えながらやり取りをしていた。

「それでは私は他の先生方と生徒たちに伝えて来ますっ」

「ええ、頼みます。——全員、注目」

駆け出した山田先生を見送ってから手を叩き、自分を見るように促す。その場にいる者が織斑先生の方を向く。

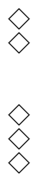
「現時刻より私たち教員は特殊任務行動に移ることになった。今日のテスト稼働は中止だ。織斑、長崎、鷺ノ宮、鳳、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒお前たちは私たちと同じように特殊任務行動に移ってもらう」

有無を言わせないような迫力にただ頷くしかない。

「詳しくは機密事項なので申せませんが水面さんと神崎さん、三木さん、ブランケットさんは旅館で待機をされていて頂きたい。折角のテスト稼働でしたのに申し訳ありません」  
『気にしないでください』と水面さんたちはそう言ってから旅館に戻って行った。その

時、水面と神崎は頑張つてと声を司にかけ、三木は肩をポンポンと叩いてから戻って行った。

そして、いつの間にかクロエは何処かに行ってしまった。



あれから千冬と別れ、束は妹の箒に会っていた。他の皆は訓練機で稼働・装備の訓練を行っていたが箒だけは他とは外れて一人でいた。まるで誰かを待っているかのよう。そんな妹を見て、ほんの一瞬寂しそうにしたがすぐに笑顔になって箒に話しかけた。

「お久しぶりだね、箒ちゃん。暫く見ないうちに色んなところがおつきくなっちゃつて。まあ、何処がとはいわないけどねっ」

「……姉さん」

「姉さんなんて堅苦しいなあ。昔みたいにお姉ちゃんでもいいんだよん」

「姉さん、頼んでいたものは出来上がりしましたか？」

「うんうん、もうとっくに出来上がっているよ」

箒はその答えに喜色を露にした。ただ、束は笑顔のまま続けた。

「箒ちゃん、ＩＳって箒ちゃんにとって何？」

「……何ですか、突然。そんなもの決まっているでしょう？姉さんが生み出したモノですよ」

その問いに箒は顔を歪めながら答える。東は笑顔で続ける。

「箒ちゃんはＩＳに何を求めるの？」

「力です。隣に立つために私には力がある」

その答えを聞いて、『そっか』と呟いてから告げた。

「じゃあ、これが今の箒ちゃんに相応しいＩＳだよ」

空中にデイスプレイを一つ出し、それを下にスクロールする。すると空から何かが砂浜に着弾した。

「これが箒ちゃんのＩＳ『鵪鶉（ときつぼみ）』だよ」

砂煙が晴れ、姿が露になった。鉄に覆われたそれだったが、東がパチンと指を鳴らすとデータ化して消えた。

現れたそれは白かった。いや、完全に白ではない。薄い黄色と淡く桃色のカラーリングが施されたそれ。箒はそれ見て、体を震わせながら声を荒げた。

「……何ですかこれは!?!これが私の専用機?こんなものただ色が違う打鉄じゃないですか!」

「いいや、違うよ。この子は箒ちゃん専用のI S。箒ちゃんから頼まれたから私がその子を生み出した。正真正銘の専用機だよ」

激昂している箒に微笑を浮かべ束はただそう告げる。

「確かに、側（がわ）だけ見れば打鉄だよ。私が敢えてそうしたから。……じゃあ、重ねて問うよ箒ちゃん。箒ちゃんはI S学園でどのくらいI Sに乗ったのかな」

ぐつと言葉を詰まらせた箒。当然だ、毛嫌いしていた姉が作ったモノだ。I Sには殆どと言つていいほど乗つてはいなかった。一夏が来てからは多少マシにはなったがそれでもだ。その箒の反応を見て『やっぱり』と告げる。

「だからだよ。だから箒ちゃんには『鴉蕾』にしたんだ。私の本当に思い描いたI S（こ）を今の箒ちゃんが乗つても絶対に全ての性能を發揮できないからね」

それでも納得がいかに箒は食い下がる。そんな様子を見て、僅かに息を吐いて言葉を告げる。

「……じゃあ、こう言えば乗つてくれるかな？ 『鴉蕾』は『白式』の姉妹機だつて」  
「……何ですつて。これが？」

訝しげに『鴉蕾』の方を見る箒。そんな妹を見ている束は笑顔のままだ。しかし、突然勢い良く海の方を見た。

「束様」

「何か問題が起こったようだね、くーちゃん」

何時の間にか束の元へ来ていたクロエは、先の事情を束へ説明した。

「そっかそっか。……じゃあ行くうか、くーちゃん、箒ちゃん」

「どこへ？……私ですか」

クロエの手を引いて歩いていた束は箒の問いに振り向いて答えた。

「専用機持ち（みんな）のところだよ。私はISの問題に関しては積極的に動くよ？……それに箒ちゃんだってもう無関係じゃないんだ」

『専用機があるんだから』と告げ、鴉を待機状態にして箒に渡す。それは少し変わった形のプレスレットとなった。

一際強い風が吹き、髪を揺らす。夏なのに嫌にその風は冷たく感じた。

## 特別閑話・温泉旅館と月

「更識さん、すいません待ちましたか？」

「いや、大丈夫。私も君とほぼ同じにここに着いたから」

授業終わり、携帯にメールが来たと思つたら、待ち合わせ場所と時間だけが書いてあつた。差出人は更識さん。

『時間は明日の放課後、待ち合わせ場所は生徒会室』。つてなんです。

「さあ、入つて入つて。紅茶でもいれましょう」

そう言つてぐいぐいの中に入れようとしてくる更識さん。……正直、何かありそうでちよつと怖いわ。



何か高そうなティーカップを目の前に出され、紅茶を入れてくれた。……本当に紅茶を出すとは。



「……あ、美味しいですねこの紅茶」

「でしょ、何と言つても私が淹れたからね」

得意顔でいう更識さん。紅茶の詳しいことは分からないが、美味しく飲んで欲しいと思つて淹れたら美味しくなると思う。その様な所作が先程見ていたら感じ取れたので、更識さんの言葉に『そうですね』と肯定したらちよつと戸惑つていた。

多少の時間が経ち、カップの中が空になった。……あれ、紅茶飲んだだけなんだから何か用事があつたんじゃないのだろうか。

俺とほとんど同じにカップをソーサーに置いた更識さんは指を組み、その上に顎を乗せてこちらを見た。

「私と温泉に行かない？」

「につこりと微笑みながら彼女はそんなことを口にした。



「もう、そんな怒らないでつて」

「別に怒っていませんが」

温泉行かないかと言われ、結局肯定も否定もせず、なーなーでその日は終わり明日の

休日は何をしようと思っていたら拉致られていた。気がついたらというか寝て起きたら知らない所だった。

状況が分からず思考が固まったが、ふと隣に目をやると更識さんが布団で気持ち良さそうに寝ていた。

再度思考が固まりかけたが、『ああ……これは更識さんのせいかな』と悟った。なので焦っても仕方ないと思い、もう一度眠りにつく。幸い今日は休日だ、大丈夫だろう。

そうして、毛布を掛け直して更識さんとは反対の方向へ体を向けて目を瞑る。すると、後ろでもぞもぞと布の音が聞こえ胸の辺りに手がまわされた。

「……何してるんですか更識さん。というか、起きてたんですね」

「今起きたところよ。それで貴方がまた寝るところだったから一緒に寝ようと思ったのよ」

まわされた腕や密着した感触などがいやでも意識してしまうので離してもらおうように言おうして、振り向いたら予想よりもずっと顔の位置が近くにあった。鼻先が当たるか当たらないかくらいの距離だったので慌てて顔を戻した。

ドキリとしたが後ろからくすくすと笑い声が聞こえたのでからかわれていたのだと気付いた。

眠気は更識さんのお陰で完全に飛んでしまったので、腕を離してもらい布団を畳ん

だ。

そして冒頭の会話となる。別に怒ってなどいないのだが、行くなら行くで説明して欲しかった。……つていうか何で俺を連れて来たんだ？ 気になったので更識さんに聞いてみた。

「うーん、色々あるけどお礼の意味合いが強いかな？」

「お礼、ですか？」

何だろ。正直、更識さんにお礼を言われる事なんかやっていないと思うんだが。暫く、考えていたが全く思い浮かばない。すると更識さんが笑い出した。

「……うふふつ、だから私は貴方に感謝してるのよ」

そう一言微笑んでから、ささと眩き、扇子を開いた。

「折角の温泉よ。思う存分楽しみましょう」

相変わらず、扇子を持った姿は様になっているなと思った。



それから更識さんに連れられて色々な所をまわった。お食事処に甘味処、お土産屋、服屋。

食事処でうどんを食べたり、甘味処でぜんざいを食べたり、お土産屋で髪止めと簪を選ばされ買ったり、服屋に連れて行かれ浴衣を見繕われ、現在進行形で着させられている。

とうか、いつの間に更識さんは浴衣に着替えていたのだろうか。外に出た段階で既に浴衣だったので、少しだけ席を外した時に着替えでもしたのだろうか？……しかし。

「……な、なにかしら？」

そんな姿の更識さんを見してみる。何とうか、似合ってるな！。

「いえ、似合ってるなと思ひまして」

「ふふっ……褒めたって何も出ないわよ」

扇子を開き口元を隠してはいるが、絶対に笑顔になってるよ。

「さて、次は何処をまわろうかしら」

そう言うってから楯無は司の手を取り、先に歩き出す。そんな楯無に連れられて司は歩幅を合わせて、並ぶように一緒に歩く。



温泉。それは気持ちの良いものだ。お風呂然り温泉然り、それは一人で入ってこそ。

……おかしい。この状況はおかしい。

「折角、広い露天風呂を貸しきりにしたのにそんな隅っこにいないでお姉さんと洗いつこしましよう?」

「おかしいな。俺は男湯に入ったはずなんだが。何故さも平然と更識さんがいるのだろうか。」

「きつと今絶対にニヤニヤしているだろうけど、耳をかしてはいけない。目を固く閉じて髪を洗うことに集中する。意識してはいけない。」

「あら、無視かしら。お姉さん寂しいわ」

泡を流して、次は体を洗う。……うっ!

「……更識さん」

「うふふっ、何かしら?」

「後生ですので、離して頂けませんでしょうか」

「がつつり抱きつかれてしまっている現状、自分は離してもらうように願うしかするところがない。……柔らかな膨らみがあ。」

「うーん、じゃあこつちを向いてくれたら離すわよ」

「……それだと今朝の布団での距離と同じかそれ以上に近くなる訳でして、とつても恥ずかしいんですが。更識さんは羞恥とは無縁なのだろうか。だけど、何時までもこのま

までいるわけにはいかない訳でして。腹を括って更識さんの方を向く。少なくとも顔だけを見ていれば体を見なくていいだろう。

だが顔を向きかけたとき、ちよつとしたアクシデントが起こった。バランスが崩れたのだ。俺が崩れたのか更識さんが崩れたのか分からないが、顔と顔との距離が無くなった。唇が触れてしまった訳ではないが額同士が合わさって殆ど触れてしまいそうな距離にある。

いきなりのことに固まっていると更識さんの方から勢いよく離れた。顔は俯いていて表情は分からないが口元に手を当てていた。こんな反応の更識さんを見るのは初めてなので新鮮だなあと何処か客観的に感じてしまう。あと何で水着を着ているんですか？

「……あ、あははは。ちよつと悪ふざけが過ぎたわね、ごめんなさい」

「……い、いえ。俺の方もなんか、すみません」

その後、若干ギクシャクしながら温泉に入った。更識さんとの距離は人2人分、離れている。あと、当然だが水着は脱いで入浴したようだった。



部屋に戻ってまったりとお茶を飲む。

「……お茶、飲みますか？」

「……………うん」

暫く間があつた後、小さく肯定する声が聞こえた。

温泉でアクシデントがあつてから更識さんはずっとこんな感じだ。借りてきた猫のようになつてしまった。正直、調子が狂つてしまう。ただ、こういう時どうしたらいいのか分からないのでどうすることも出来ない。

どうぞ、と言つてから湯呑みを手渡す。おずおずと手を伸ばしてそれを受け取る更識さん。しかし更識さんは指が自分の指に触れた時にパツと離れてしまった。その時、更識さんに湯呑みが渡るものだと思い、自分も手を離していたので湯呑みは自重で落下していく。

あつと思ひながらも反射的にその湯呑みを掴みにかかる。それは更識さんもおなじだつたらしく殆ど同じタイミングで湯呑みを掴んだ。中身は溢れてはいなかったのだが、更識さんの手を包むような感じで湯呑みを握つてしまつている。

視線を上げて見ると、更識さんは顔を朱に染めていた。暫くお互いにそのままだつたが『もうっ！』と言つて湯呑みを引つたくるように取り、そのまま一息にお茶を飲んで

しまった。

「……調子が狂いつぱなしよ。本当は私がリードするはずだったのに。……あのアクショントさえ無ければ」

飲み終わった湯呑みを机に置いて、そのまま俯くようにして突っ伏してしまふ。何か囁いていたようだったが声が小さすぎて聞こえなかつた。

何だかまた、気まずくなり視線を泳がせた。すると何だか外が明るいことに気が付いた。

「……あつ、見てください更識さん。満月ですよ、満月」

外の様子を伺つて見ると月が出ていた。その事を更識さんに伝えると、いつの間にか側に来ていて、自分と同じようにその月を見上げていた。

「……綺麗ですね」

「……それ、意味分かつて言ってる？」

更識さんが微かに吹き出すように笑顔を見せる。何か、更識さんを笑わせるような事をいつただろうか？

「ねえ、司。私の名前、呼んで」

コロコロとした笑顔でそんな事を言ってきた更識さん。突然名前を呼ばれたので



ビックリした。

「……楯無さん」

「うふふふつ。不正解」

ふるふると首を振ってそれを否定する更識さん。どゆこと？楯無って名前だよな。そんな更識さんの反応に首を捻っていると顔を耳元に近付けて来て言葉を発した。

「——刀奈」

「……え？」

「私の本当の名前。更識刀奈って言うの」

ということとは更識楯無というは偽名で更識刀奈というのが本来の名前だということになるのだが、本当だろうか。……まあ、どっちにしろ更識さんは更識さんだ。

「——刀奈」

「うふふふつ。何かしら司？」

「いえ、ただ呼んでみただけです」

呼び慣れていない名前を呼ぶのも何だか違和感がある。そして名前を言っただけなのに一層楽しそうにしている更識さんがいる。

「何だか、恋人みたいね」

「……何を言っているんですか、更識さん」

気恥ずかしくなつて顔を逸らす。隣では更識さんがニコニコしているように思える。間が持たなくなり、『もう寝ますか』と言つて二人分の布団を敷き、電気を消す。返答を待たずに布団に入つて目を閉じる。少しの間を置いて、隣に敷いた布団に入るような布が擦れる音が静かな室内で聞こえた。

「——お休みなさい、刀奈」

「——お休み、司」

そんな挨拶を交わし合つて二人は眠りに就いた。

## 第二十五話・ミッションブリーフィング

織斑先生に連れられて、専用機持ちは宴会用の大座敷に集められた。

「時間がないので端的に行くぞ。今から二時間ほど前、ハワイ沖で試験稼働中であったアメリカ・イスラエル共同開発の第三代型の軍用IS『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』、以降本機体名は『福音』と称する。そしてその福音が何らかの形で暴走。空域より離脱したとの連絡があった」

空中にデイスプレイを投影し、銀の福音と呼ばれたISの画像を映し出す。

「衛星による追跡で予測を立て、おおよそ二時間でIS学園へ到着すると思っていたのだが福音は突然進路を大幅に変更した。そして再度進路計算をした結果、福音は花月荘（マナ）を指しているということが弾き出された。時間にして約四十分後」

「（マナ）を指していると言われ、場がザワリと騒がしくなるがラウラが冷静に切り出す。」

「教官、その福音の詳細なスペックデータの提示を要請します」

「ああ。ただし分かっていると思うが本機体そのものに機密性が多い。口外した場合は

数年の監視、査問委員会の召還が予想されるぞ」

『了解しました』と返事を返し、各々が投影されたディスプレイを見る。

「……広域殲滅を目的とした特殊射撃型」

「攻撃、機動力の両方を特化した機体ね。……厄介だわ」

「この特殊武装が強力そうだね。リヴァイヴ用の防御パッケージが送られて来てるけど、連続での防御は難しいと思うよ」

「スペックが段違いに高いな。しかも、このデータには格闘性能が載っていない。近接戦闘でどんな行動を起こすか、予測が立てられん」

「この情報量じゃ、相手がどんな特殊技能を持っているかも分からないですね」

オルコットさんに鳳さん、デュノアさん、ラウラ、鷲ノ宮たちが情報を元に意見を交わし合う。話しについていけない俺と織斑はポカーンとしているか、その会話を聞いていることしか出来ない。

「……ん？」

ふと突然端末に連絡が入った。何かと思って見てみたが掛け先人は非通知（アンノウ）と出ている。何時もは極力、そういったものには出ないようにしているのだがその時は何故だか自然に出てしまった。

『—————』

ノイズと共にメロディのような甲高い音が聞こえ、暫くそれが続き相手側から一方的に切れた。何だったんだろうと思っていたら、織斑が話し掛けてきた。

「……なあ、皆が何話しているか分かるか」

「ん？……まあ、何となくは分かるくらいだが」

「……そ、そうか。俺は全然ついて行けない」

俺達が少しだけ話をしている間にも話しはどんどんと進んで行った。その最中、突然襖が大きな音をたてて開いた。

「やあやあ、お久しぶり！何か問題が起こったんだって？作戦会議ほどの程度進んでいるのかな？かな？」

篠ノ之束博士が唐突に登場した。クロエとは手を繋ぎ、篠ノ之さんは一歩下がるようにその後ろにいた。

「……篠ノ之とその子を何故連れてきたんだ、束」

「ん？だって私が専用機（資格）を与えたからね。まあ、でもお試してやつだよ。獅子は我が子を千尋の谷になんちやらってね。クーちゃんも大丈夫だよ。まあまあ、細かいことはいいから混ぜてくれたまえよー」

「……はあ、分かった。専用機があるなら篠ノ之もその子も対象だ。しかし、情報が漏洩した場合の罰は重いぞ。漏らさぬように気をつけろ」

箒は若干上擦った声で『はい』と返事をして一夏の隣に座り、クロエはこくりと頷いて束の側にいた。

そんな乱入もあつたが話は進んでいき、福音の迎撃はオルコットさんが運び、織斑が零落白夜で機能を停止させるといつた作戦で決まった。

その後、部屋を出て砂浜で準備が行われた。セシリアは本国から送られてきた強襲用高感度・高機動パッケージ〔ストライク・ガンナー〕をセットアップ。送られてきたばかりだったが、臨海学校前日には既に量子変換（インストール）は何とか終えていた為、少しの調整をするだけで準備が完了した。

対する一夏は白式を束に調整されていた。

「……………んー、んー？……………んー」

投影されたコンソールを打ち、数十におよぶ白式の情報が並んだディスプレイを見ながら唸る束。そして暫くした後、動作を止めディスプレイを消した。

「……………束さん？」

「んー、どうやら必要ないみたいだね。すでに殆どがいつくんに適した再最適化（フツティング）がされている、というよりも半分自律思考してる（……………）と言った方がいいんじゃないかね」

前半は一夏に聞こえるように、後半は呟くように言葉をこぼした。一夏は疑問に思

い、追及しようとしたが大丈夫だと束に押しきられた。その後、迎撃準備を終えたセシリアと一夏は福音の元に飛び立って行った。

その二人の様子を無線でモニターしていたが聞こえてきたのは二人の悲鳴と着水音。  
——つまりは、任務が失敗したという事実だった。

## 第二十六話・理解の涙

ノイズしか聞こえない室内で、一番先に行動に出たのは箒だった。真つ先に部屋を飛び出して行く。その後鈴、シャルロット、鷲ノ宮が続いていた。

そんな中、部屋に残ったのは千冬に真耶、束にクロエ。そしてラウラに司だった。

千冬と真耶は彼女たちのように動けるような立場ではないため。束は何を考えているか分からず終始笑顔のまま。クロエは束と同じく微動だにしておらず、ラウラはそのまま行っても二人と同じ轍を踏むと思いい情報をさらに集めるために残った。——そして司は。

「——」  
司は目を閉じて腕を組んでいた。殆ど普段と変わらない様子。だけど、ラウラは何となく司の様子が違うように思い声をかけた。

「……どうしたのだ、司？」

「——いや、何でもないよ。大したことじゃ、ないんだ。……ただ、自分の方で納得出来なかったことがあったただだから」



「納得?」

司の言葉に首を傾げるラウラ。

「……うん。ISを戦争の道具にするつてのは理に叶っていると思う。既存の兵器では歯が立たず誰も止められない。だから対抗するためにそれぞれがISを抑止力として持つ。……理解は出来るよ?ただ、そう言うのは何だか違う気がするんだ。例えそれがどんなものでも」

ISの創造主、篠ノ之東博士はどんな思いでISを創り、そして今どんな思いなんだろう?そう思わずにはいられなかった。

「——ふむ、ねえそんな少年」

そんな感情を吐露した司に東は言葉をかけてきた。

「君はその子達（IS）に乗ってどう感じた?」

「そうですね。……楽しさでしょうか」

少しだけ考えて、初めて乗って、動かした時のことを思い出す。

「——楽しさ?」

「はい、楽しさです。今までで経験したことのないことでしたから。風を感じて、広いただ広い空を普段よりも近くで見れた。それだけで楽しく嬉しかったんです。また、一つ自分に出ることが増えて」

司はその時に感じたものをまだ覚えていた。いや、忘れることはないと思った。忘れられるはずがなかった。

出来なかったことが少しずつ出来ていったときの記憶は今でも覚えている。そして I S を動かして今日に至るまで苦になつたことなどなかった。大変だつたことが多かったがそれを上回るように楽しさや嬉しいことが多くあつた。それこそ前とは（：）考えられないくらいに。

「———そつかそつか」

束はそう眩き、クロエを伴つて部屋から出ていった。

襖が閉じる一瞬、司のことを一瞥していたのを千冬は見ていた。長く共に過ごして居なければ分からない程の微かな笑みを彼女は浮かべていた。

———良かったな、束。

誰にも聞こえないよう、声に出さず言葉を口の中で囁んだ。

◇◇◇◇◇

束が出ていった後、司たちも4人を追いかけるように出て、準備をする。

I S を展開して、不備がないかを出来る限り確認し武装もあるもので福音に対応でき

るように揃えていく。

「……司」

今、出来る限りの準備をし終えて再度、確認しているとボーデヴィツヒさんが話しかけてきた。

「ん、どうしました？ラウラ」

「……司は戦うことが嫌いか？」

躊躇いがちに、そう問うてきたラウラ。そうだなあと言葉を置いて、思ったことを司は口にした。

「よく、分からないんだ。自分にそんな経験なんてないから。でも学園でISで戦うことは楽しかった。……だけど、それは競い合うことが楽しかっただけで傷付けることを楽しんだことはないよ。一度もね」

「……シユヴァルツェア・ハーゼ（黒ウサギ隊）。私は軍事施設でISを学んだ。私は、ISで人を傷付けることしか知らない。楽しんだことはなかったが、それが当たり前だと思っていた。……司はこんな私をどう思う？」

酷く、辛そうな表情で語りかけてきたラウラを見て司は悟った。大広間で口にした自身の考えはラウラを少なからず傷付けてしまっていたのだと。

「——ラウラ」

「……ん」

俯いてしまったラウラに優しく語りかける。

「俺は過去の君を知らない。知っているのは、今のラウラだけだよ。だから俺には何も言えないし、言うことが出来ない。……それはラウラをよく知ってくれている人、織斑先生やラウラの部隊の人達くらいしか、そういう深い部分の助言を言えないと思う」

下を向いているラウラに合わせるようにしやがみ込む。

「——だけどね、ラウラ。俺が知ってる君は優しい女の子だよ」

あの雨の中で見た、蹲って体を震わせていた女の子。けれども、意識せず自分を心配してくれた心優しい女の子だ。

顔を上げたラウラ。その瞳には涙が貯まっていた。

「これからだって大丈夫だよ。だってラウラはあの時、俺を守ってくれたじゃないか。傷付けることだけじゃない、人を守ることも出来るんだ。ラウラにもそういう戦い方だってできるし、シュヴァルツエア・レーゲン（その子）も分かっていると思うよ。ラウラが優しい子だって」

両手で顔を覆い、何度も頷くラウラ。司は慰めるように頭に手を置き、子供にするように頭を撫でた。

手の間から溢れて落ちた涙が数滴、砂浜を濡らした。



あれから暫くは泣いていたボーデヴィツヒさんだったが泣き止んだ時、途端に真っ赤になつて肩に顔を埋めてきた。とても小さな声で「……忘れてくれ」と言つたので決して言いふらしたりししないと約束した。

「……し、しかし司はよく篠ノ之博士にあんな風に堂々と意見を言うことが出来たな。ISの生みの親にして生粋の天才、そんな人にISのこと問われたら、思っていることはあつても言葉が出てこなくなつてしまう」

司自身、束の凄さを理解している。けれど皆がするような畏まったりする感情は何故だか出てこない。出てくるのは年上を敬うような感覚、そしてもしかしたら彼女があつた時の人なのかもしれないという疑問と恩義だけだ。

司はよく分からないんだと苦笑しながら、でもと言葉を続けた。

「でも、俺は思うんだ。天才だつて人だよ。考え方が違つていて、知識が飛び抜けていて、実行できる行動力がある。それでも、どこまで行つても結局人は人なんだ。篠ノ之束博士も天才とか色々言われているけど同じ人だと俺は思うよ。今、天才なだけでいつか人に戻るんだと思うんだ。戻り方は人それぞれで歳をとつたり、恋をしたりして少し

「ずつ戻つて、天才という枠から自分になるんだと思う」

「そう言つてから『恥ずかしいし、篠ノ之博士に失礼だから言わないでね。内緒だよ』と口元に人差し指を持っていつてそんなジェスチャーをする。そんな司を見て、ラウラは『私も同じだ。秘密を共有してしまつたな』と朗らかに笑つた。司もラウラを見て釣られて笑みを浮かべた。

「ラウラ、準備できました？」

「司、準備は終わりました？」

「デュノアさんと鷺ノ宮が確認しながらこちらへ寄つてきた。準備は既に出来ていたので、その旨を伝える。

「ラウラも司の後に続いた。

「ああ、万全かは分からないが今できるだけは出来たよ」

「私も出来ている。行けるぞ」

「4人とも行けるようだが、篠ノ之さんはどうなんだろうと居る方向を向いたら既に完了しているらしく機体を纏つてこちらをみていた。

「——来てくれ、打鉄」

「——往くぞ、シュヴァルツエア・レーゲン」

「——起きろ、レフィール・リノ」

「——おいで、ラファール・リヴァイブ」

一足先に飛び立った箒を追うように、4人はISを纏って後に続いた。